上駿府城火

於て廩米をたまふべしと令せらる。(日記。)〇二日傳奏館にて老臣會議あり。前月廿九日駿府市街失火し城中にうつり。天守殿閣櫓塀ことごとくこの災にかゝり。民屋過半燒失たるよし注進しければ。日付兼松彌五左衞門正直をかの地におもむかしめ。駿府町奉行土屋市之丞勝正昨夜駿府より參りしかば。是も今夜速に馳の登らしめらる。また常陸國牛久領主山口修理亮重政が子但馬守弘隆に。遺領一万石賜はり。二子備前守重恒に五千石分たしめらる。此重政は平兵衞尉盛政が子にて。はじめは織田殿につかへ。佐久間右衞門尉信盛が手に屬し。羽柴筑前守秀吉伊勢國に發向ありしとき。重政は佐久間駿河守正勝とともにさんくにたゝかひ。一方を打やぶり長島の城にこもり。又大平の城を守。九鬼が兵船數十艘を燒うちたり。其時神祖は北島の加勢として御出陣あり。これをたすけられ。本多平八郎忠勝をもて重政をめし。むかし佐久間に從てより今に志を改めず。又羽柴に與せざる事感じ給ふ事斜ならず。御馬を賜はりぬ。天正十八年信雄が配所にしたがひ。同十五月十一日めし出され采地五千石賜ひ。その七月より　台德院殿につかへ奉り。慶長六年十一月十七日叙爵して但馬守になり。後に修理亮に改め。五千石まし賜り。十一年大番頭命ぜられ。奏者の事をかれ。十四年伏見の　城をまもり。十六年八月十五日五千石加へられ。都て一万五千石となる。しかるに十八年正月六日忽に薨ぜり。所領とゞこほりなく沒收せられ。剃髮して宗盛と號す。これは大久保相摸守忠隣が。わが妻の姪石川　長門守康通が女を養ひ。重政が嫡男伊豆守重信に嫁せし事によれりといふ說あれどさだかならず。その十五日重政封事を奉り。罪なきよし愁訴すといへどもゆるされず。武藏國入間郡長松山龍穩守に蟄居したり。あくれば十九年冬大坂の軍おこりしとき。重政重信父子郎等少し召ぐして海道なのぼりしが。箱根の關にてとゞめられ。引きかへして山道にさしかゝりしに。東西御和睦ありしかば空くかへり。元和元年軍復びおこりしとき。父子共に山道よりひそかに忍びのぼり。井伊掃部頭直孝が手に屬して。河內路よりむかひ。五月六日若江口の戰に。重信は馬武者五騎切て落し。六騎にあたる敵と引くみ。さしちがへて死したり。重政ながらへて寛永五年九月十二日召返され。この時ふたゝび束髮して修理亮になり。六年六月九日遠江常陸の內にて一万五千石餘賜り。同國牛久に住し奏者番となり。この九月十九日七十二歲にて終をとれり。この日酒井讃岐守忠勝土井大炊頭利勝して。評定の席に令せらるゝは。寄合の式日毎月二日十二日廿二日たるべし。もし官事ありて延滯せば。翌日會議すべし。評定の席卯牌の半に出坐し。申牌にまかづべし。其席へ有司のほか一切會すべからず。音物うくる事かたく停禁す。訴人は老幼病者のほか。介添のものとゞむべし。訴人

下評定所之制

下族下諸法度

たとへ御家人たりといふ共。刀脇指帶すべからず。訴人の親戚知音たりとも。偏頗の沙汰あるべからず。遠地よりの訴人は在府の長短をはかり。其次第に聞べし。府內訴人は當日澁面の順たるべし。されどすてゝきがたき事あるか。または急遽の事はこの限にあらず。詰問はその筋の有司つとむべし。會議の席もはばかりなく所思を申のぶべし。裁斷の後あづかりの有司。その事を注記すべし。松平伊豆守信綱。阿部豐後守忠秋。堀田加賀守正盛その日の公事をしるさしむべし。訴訟當日に決せざるは。翌日裁斷すべし。猶決せざるは老臣にはかり合。其上聞えあぐべし。有司の宅にて裁斷せしも。評定所へ出すべき訴訟は證人證據をそろへ出し。滯らざるやうにすべし。過怠繫獄のもの有司商議して日數を定め。定期にてなば出獄すべし。預けもの長くすてをかず。速に査捡し事を決すべし。裏判井に召狀を受ながら遲參せし者は。其地の遠近を考定し。その日數により罪の輕重にしたがひ。あるは繫獄あるは過料たるべしとなり。(日記。寛永系圖。寛政重修諸。藩翰譜。大成令。)〇三日駿城火災により。諸大名まう登り御けしき伺ふ。又松平伊豆守信綱をかしこにおもむかしめらる。又傳奏の館をもて老臣評定の地たらしめらる。(日記。)〇五日先年小田原の城築かれし時。撿地のさた齟齬する旨。土人等うたへ出し事あるをもて。今度かされて査撿せしめられしに。齟齬のさたうたがひなきをもて。

な勵し禮法を正し。常に文武の藝を心がけ。義理を專とし。風俗を亂すべからざる事。軍役定のごとく。旗弓鑓炮鎗甲冑馬皆具諸色兵具と人積相違なく可レ嗜事。兵具の外不レ入道具好。私の奢致べからず。萬儉約を用べし。知行水損旱損風損虫附或舟破損或は火事。この外人も存たる大なる失墜は各別。件の子細なくして身躰ならず。奉公難レ勤罷は。可レ爲二曲事一。屋作小身の族に至迄。近年分に過美麗に及。自今以後身躰に相應し。其例を承合。輕く可レ致こと。嫁取の規式。近年は小身の輩に至迄。はなはだ美麗に及ぶ。向後諸道具以下。分に過たる結構いたさず儉約を用べし。たとひ大身たり共。長柄釣臭三十丁。長持五十棹に過べからず。惣てこの數品を以。分限に應じ沙汰すべきと。振舞の膳木具並盛臺金銀彩色停止之。但高貴の人新客には木具苦しからず。或時の會合或嫁取のとき。金銀器數足其定次第たるべし。惣て振舞之義。輕くいたすべき事。酒亂醉に及べからず。音信禮義太刀馬或黃金一枚。隨分この内を以て減少すべし。或銀一枚青銅三百疋禮物百疋に至りて可レ用レ之。幷小袖十左の如く可レ減二少之一。大身たりといへ共。不レ可レ過レ之。惣て諸色此秩を以て可レ用レ之。國大名と禮義にて出合の時も。此上の美麗いたすべからず。勿論酒肴等も輕少たるべき事。死罪に行はるゝ者有レ之刻は。仰付らるゝ輩の外。一切其場へ懸集るべからず。喧嘩口論堅制禁畢。若有レ之時は。其荷擔者その

答本人より重かるべし。惣て喧嘩口論の刻一切懸集るべからざる事。殿中に於て萬一喧嘩口論有レ之節は。番切に相計はしめ。猥に他番より寄集るべからず。番是なき座席ならば。其所へ近き輩可レ計レ之事。事に成まじき義を見ながら。惡事いたさしむべからざる事。火事若出來せしめば。役人幷免許の輩のほか。懸集るべからず。たゞし役人差圖の者罷出べき事。本主の撰有レ之者。相抱べからず。叛逆殺害盜賊人の屆これあらば。急度返すべし。其外輕き咎の者に至まで。侍は屆次第追放べし。小者中間は可レ返レ之。雖レ然に於ては番頭組頭相談せしめますべし。當番頭無レ之者は。其並の輩談合致すべし。若滯あらば役人へ達し。差圖うくべき事。諸國中に於て大犯人これあらば。たとへ親類緣者たりとも。直參之輩相抱べからざる事。知行所務諸色相定候年貢所高。其外に非法を糺し。領地亡所に致すべからざる事。知行境山水論幷屋敷境於二何事一も。私の評論致べからず。若申分有レ之ば。番頭組頭に相談せしむべし。番頭無レ之ものは。その並の輩に談合に及び。これを濟しむべし。滯の義は役者に達し。其旨を受べきこと。組中幷與力同心他の組と申分これある時。其組に荷擔いたさず。番頭組頭互に相談に及び可レ濟レ之。若滯發これあらば。役者に達し差圖を受べき事。百姓公事双方自分の地行所たるに於ては。その地頭是を計ふべし。相地頭の百姓と公事いたさば。其類の番頭組頭相談を

以てさばくべし。番頭なき者は。其並の輩寄合濟すべし。滯發これあらば役者に達し。差圖受べき事。役目の義は。養子は存生の內言上致べし。未期に及び忘却之刻申といふとも用ふべからず。勿論無筋の者申立べからず。たとひ實子たりといへども。筋目違たる遺言立間敷事。徒黨をむすび荷擔し。或妨なし。落書張紙博奕。不行義の好色。其外侍に似合ざる事業仕べからざる事。大身小身共に自分用所の外買置て寶。利潤の據不レ可レ致事。歩行若黨衣類。紗綾縮緬平絹羽二重絲糖水綿の外。一切停止之事。附弓鐵炮之者。絲細水綿用ふべき事。物頭諸役人万事に付て。依怙致べからず。幷諸役者その外品々常に吟味致し。油斷あるべからざること。上意の趣。たとひ如何樣の者申渡といふ共違背すべからざること。右此旨を相守るべし。若違犯の族に於ては。其咎の輕重を糺し。急度罪科に處すべき所なりとぞ。此日說岐守忠勝が桑勅御けしきにかなひ。御刀賜はりしといふ。(日記。紀年錄。)〇十三日土非遠江守利隆御前にめし。父大炊頭利勝に馬を賜ふむね面命せらる。是就封するによりてなり。百人組の頭丹羽式部少輔氏信書院番頭になる。さきに駿府につけられたる士百四人。めし返されし者に原祿を下し給ふ。(日記。)〇十四日水戸中納言賴房卿參覲せらる。よて家司等拜謁す。此日大番頭松平外記忠實。松平縫殿助眞次四千石づゝ。書院番頭稻垣若狹守重太。池田帶刀長堅に三千石づつ。小姓組番頭中根傳七郎正盛に二千石。目付馬場三郎左郎門利重。能松彌五左衞門正直。使番川口茂右衞門宗重に千石づゝ加恩ありて。外記忠實は六千石。縫殿助眞次は七千石。若狹守重太帶刀長堅は共に六千石。傳七郎正成は五千石。三郎左衞門利重は二千六百石。彌五左衞門正直に千五百石。茂右衞門宗重は二千石になる。(日記。家譜。)〇十五日月次拜賀例の如し。幷伊兵部少輔直好。細川支藩頭興昌參覲す。內藏伊賀守忠重。花房志摩守幸次は伊勢より。曾我又左衞門古祐は大坂より。仙石大和守久隆。榊原飛驒守職直は長崎より。前田玄蕃頭定正。大河內平十郎正勝は豐後より。書院番小姓九郎兵衞正十は多賀より歸謁す。大番頭松平外記忠實三子六郎右衞門元成。植村出羽守家政四子大膳政春。先手頭久永源兵衞重知二子源六郎重行初見し參る。(日記。)〇十七日紅葉山　御宮參あり。還御の後大僧正天海白水書院に召て齋飯を賜ひ。伴僧四五人にも同じく賜ふ。僧正はしば〳〵御前に參り。御物語仕ふまつりて退く。(日記。)〇十八日上野のほとりへ御狩あり。(日記。)〇十九日高家吉良若狹守義冬上洛の暇賜ふ。是　仙洞こたび日光山御緣起宸翰を染らるゝによりて。其御料紙を持參するが爲とぞ。(日記。)〇廿日煤拂例の如し。けふ葛西の邊にならせ給ひ。新宿にて晝餉奉る。かへらせ給ひて後。酒井阿波守忠行御覲の御膳奉る。御けしきなゝめならず。阿波守忠行に御盃を賜

ふ。(日記。)○廿一日黒木書院に出ましし。稻葉淡路守紀通。加藤出羽守泰興。山崎甲斐守家治。内藤豊前守信照參觀す。細川越中守忠利。毛利甲斐守秀元。立花飛驒守宗茂。有馬玄蕃頭豊氏を更に召れ談伴に候す。諸國巡視の輩歸謁す。此日板倉伊賀守勝重三子十三郎重大。内田平左衛門正世が子權九郎正信と共に奥小姓命ぜられ。重大は御膳のことを司どらしめらる。新庄與五左衛門直與初見して大番に入番す。松平下總守忠明鷹を賜はる。又小網町の漁夫網引て。得たる鰹を生ながら奉る。(日記。寛永系圖。)○廿二日赤坂の虎口を御覽のためならせられ。井伊掃部頭直孝の家によぎらせ給ひ直孝饗し奉る。饗はてゝ邸内の馬場にて黒馬にめされ。其馬を直孝に賜はり。さて濱邊の御鷹をつかはせながらかへらせ給ふ。(日記。)○廿三日諸老臣評定所に會集す。此日本多下總守俊次が弟内藏助俊之小姓組に入番す。(日記。家譜。)○廿四日三緑山　台德院殿靈廟に詣給ひ。　崇源院殿靈牌所にも詣給ふ。在府の諸大名國持はじめ。山にまかりて拜謁す。還御の後方丈智童まう登り齋飯賜はり。關東檜林の僧等拜謁す。(日記。)○廿五日花畑番山本忠兵衛正義が子與九郎正勝。二子平九郎正直に。遺領を分て百石づゝ賜ふ。(日記。)○廿六日大道寺内藏助直次先手頭命ぜらる。この直次ははじめ小田原の北條氏直につかへ。氏直より一字を賜はり直次となのり。しばゝく戰功ありて。後福島左衛門大夫正則がもとにあり。關原の戰のときも正則が手にありて物見にいで神祖の御前にまいり敵軍のさま言上し。正則國除かれて後世をすてゝ。府下馬喰町本覺寺に禪遲してありしを。去年五月廿一日めし出され。けふかく抜擢せられしなり。小姓組村越七郎左衛門正頭は横目役。納戸番横山孫左衛門一重。大番間宮忠左衛門重信は拂方納戸の大頭を仰付らる。この日芝浦のあたりへ御しまひ。黄昏ふかく二丸に還御し給ふ。(日記。家譜。)○廿七日祝の餅を奉る。(日記。)○廿八日歳暮拜賀例の如し。烏丸大納言光廣卿參向ありて拜謁せらる。次に松平能登守定政。本多縫殿助康長參觀す。岡田將監善政。知久伊左衛門直政。小笠原孫左衛門廣信。座光寺喜兵衛爲眞も同下。小笠原壹岐守忠知二子山羽長敦。松平伊豆守信綱が三子内記信定。秋山修理亮正重が三子十郎左衛門方賴。四子十兵衛正勝井日根野源左衛門高當。久世權之助重利。小島久左衛門重俊。山田小兵衛信治。齋田角左衛門元勝初見し奉る。薩藩中納言家久卿家士北鄕式部少輔久直拜謁をゆさる。これ黄門の庶子にて兼て。叙爵せし故とぞ聞えし。此日内藤甚太郎忠政叙爵して飛彈守と稱し。攝河の郡代須田次郎大夫康庄が子次郎太郎祇寛家をつぎ大番にいる(日記。寛永系圖。寛政重修諸。)○廿九日森大内記長繼從四位下に登つ。藤堂平右衛門嘉次書院番にいる。(寛永系圖。寛政重修諸。)○晦日叙爵十人松平伊豆守信

綱が子主殿輝綱は甲斐守。大久保主馬正朝は宮内少輔。松平孫四郎光重は丹波守。龜井大力亟政は能登守。鍋島千熊丸直澄は甲斐守。中川瀨兵衛久清は山城守。水野采女忠職は出羽守。齋藤右近三友は攝津守。小出右馬助尹貞は越中守。山口忠三郎直治は出雲守と稱し。と更二百石加へられ。采邑にかへ都て七百石になされ。内田平左衛門正世は采邑八百石なり。その子權九郎正信につがしめ。平左衛門正世には品川離館の邊にて。別に五百石賜はり。大橋龍慶重保は廩米三百俵を。高田にて采邑にかへ給ふ。(日記。寛永系圖。)◎この月松浦源三郎鎭信叙爵して肥前守と稱す。稻葉佐渡守正成が養ひし八左衛門正能。弟治左衛門正定共に召出され。美濃守正則願の如く。正能へ三千石。正定へ二千石分地せしめらる。鎭目忠次郎惟正。河野伊右衛門通成書院番にいり。竹村丹後守道清が子藤兵衛方嘉家をつぎ。山本九兵衛正重召出され。御側支配國廻役になる。是は武田家にて名を得たる山本勘助晴幸が四代の孫なりといへり。(寛永系圖。家譜。寛政重修諸。斷家譜。)◎此年松平下總守忠明が子鶴松忠行五歳にて初見し。御手づから御印籠下され。乳母へも銀賜ふ。酒井和泉守忠吉子長次郎忠時。渡邊囚獄長子源之丞盛。小四助右衛門正次子彦助正治。櫻井市右衛門利子市十郎信義。大岡傳左衛門清政子甚五右衛門清泰。太田善大夫吉正子十左衛門吉次初見の禮をとり。松浦壹岐守隆信弟主殿信辰。六鄕兵庫頭政乘三子藤十郎政直。山岡主計頭景以三子左兵衛景清。坪内數馬定長。松平内記清信。松浦猪右衛門信貞。志村加兵衛資長。池田久左衛門重長。戸川權左衛門令安。細井金五郎勝武。加藤彦右衛門正之。小幡勘兵衛景憲養子又兵衛範松。松浦左内信生。小倉忠右衛門正次二子安右衛門正直。三宅内藏助廉永は共に書院番に入。服部源兵衛保次。戸田半右衛門直真。山田太郎右衛門直久。藤川勝次郎重之。小島孫右衛門正期。松平戸一郎正信。坪内山三郎定信。覺權左衛門正職は大番に入。駿府より召返されたる高井市右衛門貞清も同下。小十人齋藤善右衛門幸泰は納戸番にうつる。太田十左衛門吉次。小野長左衛門貞正。河野庄右衛門照辰。間宮藤左衛門正次。水野太郎作清氏。中島孫兵衛盛直。肥田與左衛門定勝。小田切庄七郎昌勝。石巻八郎左衛門康元。筒井次左衛門重政。中山六大夫時忠。蜂屋甚之助正仍めし出されて奉仕し。もと駿府につけられし紅林助六郎吉直召かへされて大番にいり。小姓組本多長次郎好房采邑にかへて。廩米四百俵賜はり。大番本多小平次光勝。秋山伊兵衛正勝も新に采邑賜はり。渥美九郎兵衛正勝には采邑五百石賜はり。馬を預られ。小姓組與頭安藤四郎右衛門重元は廩米にかへ。千石加へられて采邑千五百石になり。植村帶刀泰勝が子寄合長門守泰朝。吉田與助正定が子手廩師與助正之。高木藤兵衛貞友が孫二郎兵衛貞元。松井與兵衛宗利が三子小兵衛

幸宗。松浦吉右衞門吉成が子長左衞門正吉。鈴木近江が子修理長常。森川久右衞門重成が子久右衞門重次。平井新三郎重次が子新三郎重吉。川村善次郎重久が子善八郎重正。加藤八十郎保次が子伊兵衞保貞。篠山理兵衞資俊が子理兵衞資良。家をつぐ。大手下乘橋升形井二丸石壘藤堂大學頭高次是をきづき。二丸の泉石は有馬玄蕃頭豐氏。本丸二丸三階櫓。平川誠木。城溝の浚利は酒井雅樂頭忠世。古田兵部少輔重恒は城垣修築命ぜられ。京極若狹守忠高石見國二万郡邑知郡并銀山をあづけられ。新庄越前守直好は駿府加番仰付られ。三枝土佐守惠始め書院番頭に。與力十騎同心廿人づゝあづけ賜ほり。與力同心の給地二千六百石下さる。小納戸安西甚兵衞元宣納戸番頭となり。進部傳右衞門昌與三子甚右衞門貴豐召出され右筆となり。松平清左衞門親正は三州代官となり。五味金右衞門豐直は江州國廻攝河兩國代官承り。書院番佐々權兵衞長次。神田橋雉子橋修理の普請奉行になる。又日根野織部正吉明は普第衆と同じく金賜ふ。甲府城あづかりし伊丹藏人勝長大病により。城をかへして病を養ひ。永井監物白元は駿城の火災に。財貨多く燒しによて遁察せしめられ。松平采女正忠節惣堀浚利せるによて。家士二人銀時服羽織賜ひ。松平能登守定政封地長濱洪水の跡を修理せしにより。銀二万枚下され。又町奉行島田彈正忠利正衰老し禿頭なればとて。こひて剃髮し幽也入道と號して。猶職事をつとむる事もとの如し。また神無月の始にや。二丸階前の紅葉いろよく染しかば。賞翫せさせ給ひ御遊あり。禪利澤庵狂歌を詠じければ。御みづから書せられて。永井信濃守尚政に賜ふ。長崎奉行兩人に老臣連署して下知狀を下さるゝこと。去年五月廿八日の令に同じ。(寛永系圖。家譜。紀年錄。寛政重修譜。斷家譜。條令。)

下 定伊勢內外宮神官之座班

大猷院殿御實紀卷三十

寛永十三年正月に始り四月に終る御齡三十三

寛永十三年丙子正月元日拜賀例のごとし。此日日蝕なり。紀伊大納言賴宣卿去年勢州狩場にありて。喪制にかゝられければ。小姓組水野小十郎元吉御使として。御內書をつかはさる。(日記。)〇二日拜賀例のごとし。烏丸大納言光廣卿も在府ありければ。まうのぼり拜賀あり。謠曲は下ゝ例のごとし。(日記。)〇三日拜賀例におなじ。高家吉良若狹守義冬京より歸謁す。(日記。)〇四日評定所にて諸老臣會議始あり。(日記。)〇六日出家社人拜賀例のごとし。この日伊勢內外宮の神官等座班を爭てやまず。よて內宮を前とし外宮を後とさだめらる。(日記。紀年錄。)〇七日若葉御祝規のごとし。儀はてゝ岩淵の邊に狩し給ひ。鵠鷹鵰あまた狩せ給ひ。また烏銃にて鵠を打留給ふ。(日

上 造營江戶城惣廓課其費于諸大名

記。)〇八日江城惣郭の營造この日よりはじめらるゝ所。天氣快晴にて天意人望に應ずるとて。ともに御氣色うるはしき旨。此事奉る國持大名に奉書を下さる。この經營といふは。惣郭の石壘四國四國中國の諸大名。城溝惣堤は關東并奧羽の大名に課せらる。大目付柳生但馬守宗矩。作事奉行佐久間伊豫守實勝。町奉行加々爪民部少輔忠澄。堀式部少輔直之。普請奉行朝比奈源六泰勝。書院番駒井次郎左衞門昌保。これを奉行す。先石壘經營を奉はる雜を六隊に分つ。第一は加賀中納言利常卿一家にてこれを掌る。第二は松平伊豫守忠昌を惣督として。松平長門守秀就。松平大和守直基。松平土佐守直良。本多飛驒守成重。九鬼式部少輔隆季。これに屬す。第三は細川越中守忠利を惣督として。松平阿波守忠英。森內記長繼。有馬左衞門佐直純。立花飛驒守宗茂。立花民部少輔種長。木下右衞門大夫延俊。稻葉民部少輔一通。稻葉淡路守紀通を屬せらる。第四は松平新太郎光政を惣督として。松平勝五郎。松平石見守輝澄。松平右近大夫輝興。池田出雲守長常。池田內藏助重政。平岡石見守重勝。建部三十郎政長。九鬼大和守久隆。中川內膳正久盛。山崎甲斐守家治。戶川土佐守正安。桑山左衞門佐一直。毛利市三郎高直を屬せられ。第五は松平右衞門佐忠之を惣督とし。寺澤兵庫頭堅高。松倉長門守勝家。松浦肥前守鎭信。大村松千代純信。谷大學衞政。蒔田權佐廣定。土方平助雄高。小出大和守吉英。小出對馬守吉親。杉原吉兵衞重長。伊東若狹守長昌。宮城主膳豐詮。加藤出羽守泰興。黑田甲斐守長興。黑田市正高政を屬せられ。第六は鍋島信濃守勝茂を惣督として。生駒壹岐守高俊。伊達遠江守秀宗。織田出雲守高長。織田辰之助信勝。秋月長門守種春。島津右馬頭忠興。遠藤但馬守慶利。一柳監物直盛。京極丹後守高廣。京極修理大夫高三。青木甲斐守重兼。織田大和守尙長。小出大隅守三尹。古田兵部少輔重恒。久留島丹波守通春を屬せらる。升形を奉る雜には虎門鍋島信濃守勝茂。御成橋は細川越中守忠利。喰違は生駒壹岐守高俊。赤坂は松平右衞門佐忠之。外麴町口は松平長門守秀就。市谷は森內記長繼。牛込口は松平阿波守忠英。小石川口は松平新太郎光政。筋違橋は加賀中納言利常卿。淺草口は松平伊豫守忠昌。溜池橋臺は松平勝五郎是を築く。城溝疏鑿の事奉る雜を七隊に分つ。第一は仙臺中納言政宗卿一家にて他家を交へず。第二は越後少將光長を隊長として織田伊豆守信之。同熊之助信利。同內記信政。同筆人信重。溝口出雲守宣直。同又十郎宣秋。同內記宣俊。同左京宣知。同金十郎政勝。同權佐助勝。同孫左衞門安勝。佐久間源六郎勝盛。織田百助信昌。本多主稅政顯。戶田因幡守忠能。北條久太郎氏宗屬し。第三は上杉彈正大弼定勝を隊首として。松平丹波守光重。松平因幡守忠憲。水谷伊勢守勝隆。仙石越前守政俊屬し。第四は佐竹修理大夫義隆を隊首として。鳥居左京亮忠恒。土岐山城守

上城廉書作朱印

賴行。岩城但馬守宣隆。六郷長五郎政勝屬し。第五は加藤式部少輔明成を隊首とし。南部山城守重直。加藤民部大輔明利。松下左助長綱屬し。第六は松平式部大輔忠次隊首として。牧野右馬允忠成。同内藤康成。同播磨定成。内藤帶刀忠興。同兵部少輔政晴。安藤右京進重長。井上河内守正利。相馬虎之助發胤。成瀬藤藏之成。内郷若狹守正員。山口修理亮弘隆。高木善次郎正弘屬し。第七は酒井宮内大輔忠勝隊首として。丹羽宰相長重。堀丹後守直寄。戸澤右京亮政盛。井伊兵部少輔直好。前田大和守利孝。土方彦三郎雄次。堀淡路守直升。酒井長門守忠重屬す。よて朱印の條約を下さる。其文にいふ。喧嘩口論かたく停禁す。若違犯のものあらば。理非を論ぜず。双方斬に處せらるべし。荷擔せしめば其罪本人よりおもかるべし。何事によらず申旨あらば。惣築成功の後沙汰に及ぶべし。たとへ申旨ことはりありとも。發言せしもの曲事たるべし。もし鬪爭あるは火災のとき。一切其地へ會集すべからず。惣築の隊頭所屬のものに對し。偏頗の沙汰あるべからず。他組どものあらがひあらんときも荷擔なし。あるは組中藏をむすび不屆のふるまひなすべからず。石垣を論ずべからず。みだりに山林竹木きりとり。井田圃をそこなふべからず。押買押買諸事狼藉すべからず。從者を郷里に返事これを禁ず。もし申旨あらば。落成後沙汰に及ぶべし。されど重科のものは普請奉行に告て指揮にまかすべし。万事私の評論なすべからず。此旨守るべしとなり。◎此日　禁裏　仙洞へ高家大澤右京亮基重歲首の御使奉はる暇給ふ。又昨日御狩の鵠一隻づゝを。　内　院　大宮の御方へ驒送せらる。又水郎へ三浦志摩守正次御使し。加賀黄門へは阿部對馬守重次御使して。これも同じく鵠をつかはされ。越後少將光長をはじめ。國持十八人へは使番もて脇をたまはる。（日記。紀年錄。條令。武家嚴制錄。）〇十日高田の地に馬塲をつくらしむ。小姓組書院番大番の輩。二百石に一人づゝの夫役を出さしめらる。（日記。）〇十一日井伊掃部頭直孝。松平下總守忠明。土井大炊頭利勝。酒井讃岐守忠勝。阿部豐後守忠秋。堀田加賀守正盛。明日より外郭經營巡察すべしと命ぜられ。加加爪民部少輔直澄。堀式部少輔直之は市井の事を奉行すれば。一人づゝ匠作塲を監督すべき旨仰付らる。さきに賴宣卿存問の御使命ぜられし水野小十郎元吉歸謁す。（日記。）〇十二日井伊掃部頭直孝。松平下總守忠明井諸老臣經營所を巡察す。松平伊豆守信綱は其地に御使せり。（日記。）〇十四日書院番要木楯左衛門賴利。多賀造營奉行命ぜられ。遠山藤四郎長景。設樂甚三郎貞代。甲府の城番仰付られ。小姓組與頭保々石見守貞廣の二子兵九郎貞季召出され。廩米二百俵給はる。竹腰山城守正信。安藤飛驒守直治に鷹を下さる。細川玄蕃頭興昌より山かへりの大鷹を献ず。（日記。）〇十五日月次拜賀例のごとし。今朝嘉例の赤小豆粥を供御す。此日闕入入賀す。地震三度。（日記。吉良日記。）〇十六日地震兩度。（日記。）〇十七日紅葉山　御宮參あり。御簾酒井讃岐守忠勝。御太刀井伊靱負佐直滋。御刀松平式部大輔忠次。御奉三浦志摩守正次役し。水戸中納言賴房卿并在府の諸大名悉く供奉し奉る。花畑の亭にて大僧正天海并に伴僧に齋飯を給ふ。此日地震三度。（日記。）〇十九日今年は日光山御參あるにより。一年期の奴婢そのまゝ召つかふべき旨ふれらる。（日記。）〇廿日具足御祝あり。連歌興行又同じ。陰高し千代をかさねむ松の春。（支仲。）かすめる庭にすむ鵺の聲。（御句。）あたゝかに日のさす白洲霜解て。（昌琢。日記。）〇廿一日外郭經營親巡し給ふべき旨仰出されしかど。夜前より大風暴雨によりて延引し給ふ。昨夜の大雨によりて。細川越中守忠利があづかる所の石壘。多半崩頽すといふ。（日記。）〇廿二日井伊掃部頭直孝。土井大炊頭利勝。酒井讃岐守忠勝。松平伊豆守信綱。阿部豐後守忠秋して。昨日崩頽せし石壘を監閱せしめらる。（日記。）〇廿三日昨夜より大雨暴風。午後晴に隕す。（日記。）〇廿四日三緣山に賜給ふ。御直垂御襲なり。御簾は吉良上野介義彌。御太刀は井伊靱負佐直滋。御刀は松平式部大輔忠次。御奉は三浦志摩守正次役す。水戸黄門はじめ在府の諸侯供奉例のごとし。還御の後白木書院にて僧上寺方丈智童に齋飯を給ふ。伴僧もおなし。（日記。）〇廿五日諸老臣と政事を討論したまふ。此日酒井讃岐守忠勝に在府の料とて一万石下さる。（日記。）〇廿七日神田橋より櫻田口までの内郭石壘成功のよし聞し召。御みづからならせ給ひ。御覽ありて御けしき大かたならず。よてその事にあつる侯伯登營して謝し奉る。（日記。）〇廿九日土井大炊頭利勝のもとに。諸老臣會議あり。（日記。）〇三十日酒井讃岐守忠勝が亭に會議す。（日記。）〇二月朔日台宗僧綱拜賀あり。三山御符錄をうけたまふ。京極丹後守高廣三子左近高勝初見の禮をとる。甲府城番寄合設樂甚三郎貞代。遠山藤四郎長景赴任の暇たまはり。松平能登守定政就封の暇給はり。小堀遠江守政一參り謁す。（日記。）〇二日阿部豐後守忠秋宅に諸老臣會集す。山田十大夫重利死して。その子十大夫重恒家をつぐ。（日記。家譜。）〇五日加賀薩摩兩黄門はじめ。御使もて菓子給はるもの十三人。（日記。）〇六日豐代の禮拜謁す。使番本郷勝右衛門勝吉二子傳四郎勝乘。小姓組山岡十兵衛景次子愛藏泉助。服部惣左衛門直次子權八郎直盛初見の禮をとる。本栖口番渡邊囚獄長。同く宇右衛門盛甲府より暇謁す。阿部對馬守重次上洛の暇を給ふ。（日記。）〇七日土井大炊頭利勝のもとに。諸老臣會議あり。（日記。）〇八日葛西の逸御鷹狩あり。鵠雁鴨御得物すくなからず。又鵠一隻鐃炮にて打留給ふ。この日酒井讃岐守忠勝の亭に會議あり。（日記。）〇十日御前に諸有司

下林道春撰　述和漢荒政恤民法制進覽之

なめして。御政務を聞し召る。(日記。)○十一日井伊掃部頭直孝。松平下總守忠明。土井大炊頭利勝。酒井讃岐守忠勝。松平伊豆守信綱。阿部豐後守忠秋經營所を巡視にまかる。(日記。)○十二日松平伊豆守信綱宅に會讌あり。(日記。)○十三日諸老臣及び近習の輩に。鶴の料理をもて饗膳給ふ。小姓組竹村藤兵衛万嘉死す。子なくして家絕ぬ。この万嘉が父は丹後道清とて。竹内峠より三河へ御潛行の日御供して。明智藏万材藤太郎を討取しもの、子なり。さる故にや承應三年にいたり一族彌九郎嘉廣をもて。名跡をたてらる。(日記。寛永系圖。家譜。)○十五日小普請伊吹市右衛門重次大番にいる。(日記。)○十六日今年日光山御詣あるにより。大目付秋山修理亮正重。宮城越前守和甫をして。今市御旅館并に小屋以下破損の所を巡察せしめらる。(日記。)○十七日御微恙により紅葉山御參なし。この日地震す。(日記。)○廿日御灸あそばさる。尾紀兩世子をはじめ。國持十三人へ御使もて菓子給ふ。(日記。)○廿二日阿部豐後守忠秋宅に諸老臣會集す。(日記。)○廿三日小十人組八人を納戸番に轉ぜしめらる。この四月日光山　御遷宮。公卿門跡木曾路參向により。木曾路所領の輩にその事をふれらる。(日記。)○廿四日三緑山に土井大炊頭利勝代參す。增上寺方丈智童に齋飯を給ふ。(日記。)○廿五日　大宮御不豫の聞えあるにより。目付石谷十藏貞清京にのぼらしめらる。又醫員岡本啓迪院諸品をも急ぎ上洛せしめ。御脉を伺はしめらる。また岡谷佐左衛門泰重子與五兵衛重信初見し奉る。(日記。)○廿六日加賀中納言利常卿。松平伊豫守忠昌。松平新太郎光政には松平伊豆守信綱御使し。細川越中守忠利。鍋島信濃守勝茂。生駒雅楽守高俊。松平勝五郎には阿部豐後守忠秋御使し。松平長門守秀就。松平右衛門佐忠之。松平阿波守忠英。森内記長繼には堀田加賀守正盛御使し。各樽肴をたまふ。これ外郭石垣新築の勞を慰せらるるとぞ聞えし。又　大宮御不豫により。速に上洛すべしと仰付らる。(日記。)○廿九日京極修理大夫高三始め三十四人を。禁中に召て石垣搆造の勞を慰せられ。御饗のとりし鴈を給ふ。京極丹後守高廣。立花飛驒守宗茂。伊達遠江守秀宗へは御使もて。鴈一雙づゝ下さる。(日記。)◎此月板橋勝三郎政郡中奥小姓となる。また儒臣林道春信勝仰をうけて。和漢荒政恤民法制を撰述し進覽す。(家譜。)○三月二日堀田加賀守正盛がもとに宰臣會集ぜり。(日記。)○三日上巳例のごとし。諏訪因幡守頼水就封の暇をたまふ。傳通院門悦住職命ぜられしを謝し奉る。(日記。)○五日諸門經營所に渡御ありて。その事奉る家々の老臣ども。召出され御組詞を給ひ。高力攝津守忠房役して。道服を纏頭す。はて、水戸黄門の邸に成らせられ。御膳を献ぜしめらる。この日目付石谷十藏貞清京より歸謁す。(日記。)○六日高

下酒井忠世卒

田新馬場に於て。土井遠江守利隆隊下の小姓組番士に乘馬せしめらる。(日記。)○八日品川の邊に御狩ありて。雁鶩など若干からせらる。(日記。)○九日薩摩黄門はじめ在府の侯伯に御使して。昨日御狩の雁を給ふ者廿一人。(日記。)○十日日光山御參あるにより。この日供奉の人々を命ぜらる。井伊掃部頭直孝。松平下總守忠明は御先にまかり。永井信濃守尚政。内藤伊賀守忠重。高力攝津守忠房。稻葉美濃守正則は今市迄御先にまかり。松平右衛門大夫正綱。伏見奉行小堀遠江守政一。山田奉行花房志摩守幸次。長崎奉行曾我又左衛門古祐。榊原飛驒守職直供奉し。松平出雲守勝隆。堀市正利重は御先にまかるべしと命ぜらる。(日記。)○十一日納戸番大澤助十郎勝重。河内長助正國その組頭になる。(日記。)○十二日一柳監物直盛參府すべき旨奉書を下さる。此日阿部豐後守忠秋が亭に會讌あり。(日記。)○十三日歩行目付二人を木曾路につかはし。京の官人驛路の事を沙汰せしめらる。又酒井雅樂頭忠世所勞により。太田備中守資宗もてとはせ給ふ。(日記。)○十四日三浦志摩守正次もて。雅樂頭忠世が病を尋らる。(日記。)○十五日月次拜賀例のごとし。烏丸大納言光廣卿は宅地給ひしを謝し。中院大納言通村卿并に長子宰相通純卿も去年御勘氣ゆりしを謝し拜謁す。次に一身田門跡堯朝拜謁して寺領御朱印を謝し奉る。加賀備前の證人もおがみ奉る。次に長崎奉行榊原飛驒守職直次子八左衛門職員。使番城織部佑信茂三子玉虫七之助高茂。玉虫助大夫重茂二子助十郎清茂。鉄奉行富永主膳重吉が五子源左衛門吉時。使番大久保右衛門八忠政が四子助左衛門忠重。使番青山善四郎重長養子新九郎利政。先手頭渡邊彌之助勝二子彌七郎吉。小姓組島田庄五郎重利子藤十郎重頼。鉄奉行松田六郎左衛門定勝二子傳左衛門定郷。松平助十郎重信子半之丞信吉。書官久志本式部常尹子彌四郎常其。與十郎常依初見の禮をとる。松平主殿頭忠房就封の暇給ふ。(日記。吉良日記。)○十七日紅葉山御參あり。大僧正天海に齋飯を饗せらる。(日記。)○十八日三浦志摩守正次もて。酒井雅樂頭忠世が病をとはせらる。一身田新門に御暇つかはされ。銀五十枚綿百把給ふ。家司賜物差あり。(日記。吉良日記。)○廿日酒井雅樂頭忠世病遂に愈ずして。昨夜戌刻易簀に及ぶよし聞召。堀田加賀守正盛もて阿波守忠英行。西尾丹後守忠照に就封の暇たまひ。阿波守忠行には堀田加賀守正盛もて。父雅樂頭忠世が香火料銀三百枚給ふ。この日阿部對馬守重次京より歸謁す。先に日光御參のとき。供奉命ぜられし松平右衛門大夫正綱。小堀遠江守政一。花房志摩守幸次。榊原飛驒守職直。曾我又左衛門古祐。天野豐前守長信。儒臣林永喜信澄は御先へまかり。松平出雲守勝隆は御道すがら奉る事あるにより。御供すべしと仰付らる。(日記。)○廿二日堀田

加賀守正盛亭にて老臣會議あり。(日記。)〇廿三日尾老竹腰山城守正信に暇給ふ。(家譜。)〇廿四日三條山御詣あり。增上寺方丈智鸞に齋飯を賜ふ。此日多羅尾久八郎光雅長子左兵衛光重病者なりければ。二子內記光房に其家つがしめらる。又横山土佐守興知死して子なし。その弟內記知清加州にあるよし聞えければ。いそぎ參府すべしと。加州の家司に傳へしめらる。この興知慶長五年より八歲にて加州の證人に參りしを。台德院殿大坂兩度の陣に召具せられ。元和二年より采地五千石賜はり。去年十二月廿一日に死せり。(日記。家譜。)〇廿五日臨時朝會あり。石川主殿頭忠總が季子半太郎總氏。大番頭大久保主膳正幸信子宗四郎忠時。松田市兵衛直長子源三郎長重はじめ。大番の子初見廿九人。永田勝左衛門重眞。松平甚三郎行隆豐後萩原領目命ぜられいとまたまふ。(日記。)〇廿六日品川東海寺にならせ給ふ。堀田加賀守正盛かしこにて御茶を獻ず。(日記。)〇廿七日阿部豐後守忠秋就封のいとま給ふ。花畑番頭柴田筑後守康長。書院番組頭中根傳七郎正成書院番頭になる。石見國銀山并に山麓の地四万石を。京極若狹守忠高にあづけらる。又　勅　院使參向ありければ。土井大炊頭利勝もて獻勞せらる。高家吉良上野介義彌これに添たり。又高倉中納言永慶卿も參向により。使番前田玄番頭定正もて勞せらる。(日記。)〇廿八日月次例のごとし。松平伊豆守信綱日光山御參の間。御留守して內外郭構造の事惣督すべしと仰付らる。大番頭渡邊山城守茂采邑を。嫡孫小姓組久左衛門善に讓らん事を。請まゝにゆるされしを謝し奉る。又入貢の關人御覽あり。貢物品品奉つる。(日記。)〇廿九日加賀黃門就封の辭見して。中堂來の御脇差并に御馬を給ふ。(日記。)◎此月旗奉行太田善大夫吉政の子十左衛門吉次小姓組に入番す。(家譜。)〇四月朔日月次拜賀あり。佐竹修理大夫義隆。岩城伯馬守宣隆。松平右近大夫輝興參覲す。(日記。)〇二日參向の公卿引見あり。勅使は三條前內府實條公。日野大納言資勝卿。　院使は姉小路宰相公景卿なり。餽物例のごとし。日光山御繰起なり兩傳奏持參して奉る。御みづからうけさせたまふ。攝籙竹園の進物例のごとし。高倉中納言永慶卿。同右衛門佐永嗣。日野右少弁弘資も拜し奉る。次に烏丸大納言光廣卿もまうのぼり拜謁せらる。(日記。吉良日記。)〇三日　大宮御平快を賀し給ひ。高家吉良若狹守義冬御使命ぜられ。　大宮に銀三百枚。綿貳百把。鵞一雙。酒三荷進せたまふ。若狹守義冬はけふいとま給ふ。又內外郭石壘擣造の諸大名家司并下奉行を。御前に召て謁を給はり。土井大炊頭利勝。酒井讃岐守忠勝。松平伊豆守信綱。堀田加賀守正盛仰をつたへ。銀時服若干纏頭せらる。ことはて、品川東海寺へならせられ。永井信濃守尚政御茶を獻ず。(日記。)〇四日井伊擣部頭直孝。松平下總守忠明。土井大炊頭利勝。酒井讃岐守忠勝。松平伊豆守信綱。堀田加賀守正盛外郭經營の地巡察せしめらる。(日記。)〇五日三條前內府實條公。日野大納言資弘卿を殊更に召れ。黑木書院にて御對面あり。大僧正天海日光山にまかるにより辭見す。(日記。)〇七日土井大炊頭利勝。阿部對馬守重次は日光山御詣あるにより。まづ就封のいとまたまふ。これはその居城御旅館にあてらるゝがゆへなるべし。(日記。)〇九日日光山御參の間。府城の勤番を命ぜらる。二丸は植村出羽守家政。大番頭松平外記忠實。二の門は松平伊賀守忠晴。松平縫殿助直次。大番頭大久保主膳正幸信。三の門井蓮池門は持弓頭內藤外記正重。安藤傳十郎定智。紅葉山佛殿及本城は步行頭近藤五左衛門用行。石谷友之助清正。下田三浦は船手頭向井將監忠勝。下田奉行今村傳四郎正長。河口は船手頭石川八左衛門政次。同六左衛門重勝。小濱綱十郎安隆。深川口は船手頭向井右衛門忠宗。小笠原安藝信盛。間宮虎之助長澄。小濱久太郎嘉隆。赤坂門は鍋島孫平太正茂勤番すべし。また城邊火災あらば。書院番頭酒井壹岐守忠重。丹羽式部少輔氏信。中根傳七郎正成并組頭番士二三人。富士見櫓に勤番すべしと命ぜらる。日光山　御宮きのふ上棟の注進あり。(日記。家譜。)〇十日水戸中納言賴房卿日光山に先立てまかりらるにより。いとまたまふ。小姓組與頭仙石大和守久隆。大久保源左衛門忠知その番頭命ぜらる。けふ日光山御宮遷宮の式行はる。導師天海大僧正。

供奉は松平右衛門大夫正綱。板倉內膳正重昌。秋元但馬守泰朝。着座の公卿は烏丸大納言光廣卿。廣橋大納言兼賢卿。高倉中納言永慶卿。飛鳥井中納言雅宣卿。小川坊城左大辨宰相俊完卿。使は左中將隆量とぞ。抑大社二十年に一度。造替遷宮の事は。伊勢內外宮をはじめ天下の宗廟大宮。かならず行はるべしといへども。應仁以來古例ことごとく廢し。神祇も次第に散逸して。禮奠久しく絕たりしに。今や昇平年をかさね。絕たるをつぎ廢たるを興し給ふときなれば。當社すでに垂跡以來二十年にあたるをもて。造替の事仰出され。但馬守泰朝惣奉行として。海內の瓦工をえらび。斧斤の功日月をかさねて成就す。すべて山口祭以下古例を追てあやまらず。　天朝特に御尊崇の事なれば。この端生二日　大內にて日時定の陣儀行はる。上卿は轉法輪大納言實秀卿。奉行職事は葛尾頭中將隆量にて。陰陽頭友景日時をえらびて奉る。神服神器等は大外記師生。官務忠利。出納職在奉り。先遣て調進し日光山に納む。(日記。日光御神事記。)〇十一日金森出雲守重賴始參覲十五人。小姓小出越中守尹貞。齋藤攝津守三友步行の頭を命ぜらる。知樂院忠高。寺領二百石その所望の地にて下されしを謝し奉る。(日記。)〇十二日明日御發輿により。諸大名まうのぼり拜謁す。午刻三緣山に詣給ひ。　台德院殿靈廟に明日の御首途をつげ給ひ。御かへさは御船にて。神田橋より二丸に還御なる。この

上家光爲日光社參發江戸

日日光山奉幣使姉小路宰相公景卿。　主上よりさゝげ給ふ御太刀は日野大納言資勝卿持參。　仙洞の御太刀は烏丸大納言光廣卿。　大宮よりは御鏡二面納め給ふ。廣橋大納言兼賢卿これを奉る。さて堀川宰相康胤卿宣命をよみ。馬三疋ひかせらる。なべて御劔以下みな奉幣使一人にてつかふまつるべきを。こたびと更なる　叡慮なれば。かくその人々をわかち。みことのらせらるゝ事。曩古の盛典なり。(日記。日光御神事記。)〇十三日御發輿辰下刻より。松平伊豆守信綱は御留守にあり。尾紀水三卿は御先にまかられ。井伊掃部頭直孝。松平下總守忠明。松平出羽守直政。毛利甲斐守秀元。立花飛驒守宗茂。有馬玄蕃頭豐氏は先にまかり。土井大炊頭利勝。酒井讃岐守忠勝。堀田加賀守正盛。阿部豐後守忠秋。永井信濃守尚政。稻葉美濃守正則。三浦志摩守正次。朽木民部少輔稙綱。阿部對馬守重次。太田備中守資宗。一柳丹後守直重。有馬出雲守豐長。山内豐前守一唯。新庄右近直綱。大久保宮内少輔正朝。遠野内匠頭長直。小姓土岐市右衛門頼久。右筆飯高七兵衛貞勝。鉄炮役井上外記正繼。千人頭志村勘左衛門貞昌。その外儒役林道春信勝。醫員今大路道三親昌。熊谷伯安慶傳等をはじめ。すべて諸物頭諸番士走衆力者の末に至るまで。行裝をかいつくろひ。壯觀耳目を驚かす。　松田善右衛門勝政。多賀外記常勝は宿割。大岡次郎兵衛直成は諸道具奉行。土屋民部少輔利直は參向公卿勅使。三條前内府實條公。日野大納言資勝卿。

烏丸大納言光廣卿。四辻大納言季継卿。廣橋大納言兼賢卿。柳原中納言茂光卿。飛鳥井中納言雅宣卿。烏丸中納言光賢卿。高倉中納言永慶卿。六炊御門中納言經孝卿。水無瀬中納言氏成卿。姉小路宰相公景卿。堀川宰相康胤卿。小川坊城宰相俊完卿。井天海大僧正(は吉良若狭守義冬御使しともに慰勞せらる。(神廟寺會記。吉良日記。)〇十七日つとめて山に登らせ給ふ。御祭禮まづ延年の舞ありて。神輿を導き奉る。獅子田樂をはじめ綺羅をはり花を折る。　神輿は榊原越中守照清護送し。松平右衛門大夫正綱。板倉内膳正重昌。秋元但馬守泰朝供奉し。辻々の警固には譜代大名人數を出す。酒井讃岐守忠勝今度齋戒して。神祭法會の事惣督すべきよしの特旨を奉りて諸事を沙汰す。これよりさき辰刻に。御棧敷にならせ給ふ。尾紀兩卿。松平出羽守直政。毛利甲斐守秀元。立花飛驒守宗茂。有馬玄蕃頭豐氏井井伊掃部頭直孝。松平下總守忠明及諸老臣陪從す。水戸黄門は所勞によりてまかられず。御旅館にかへらせ給ひて。御束帯に改られ御轝にめさる。吉良上野介義彌御廐をかゝげ。井伊親眞佐直滋御太刀をもち。大澤右京亮基重御刀をもち。三浦志摩守正次御沓を奉り。阿部豐後守忠秋獨身のよそひして。弓に御袋をかけてもつ。殿上にては上野介義彌御袋をとり。高倉中納言永慶卿及今川主膳正直房。吉良若狭守義冬御衣紋をかいつくろふ。御遷獻の御太刀は。讃岐守忠勝これを持いづる。御馬は高麗より獻ぜし駿毛なりとぞ。御帶鉾は上野介義彌

上東照宮祭禮

持參り大僧正天海奉る。かくて奥に參らせ給ひ。御拜殿に御着座あれば。尾張大納言義直卿。紀伊大納言賴宣卿その末につかれ。西三條前内府實條公。日野大納言資勝卿も同じく着せられる。　御廟塔のうちには戒師大僧正天海。證明梶井門跡最胤法親王并新門慈胤。【註親王誤歟】　毘沙門堂門跡幡僧正公海。其外僧綱十四人ありて。戒壇の作目尤嚴なり。天海が着する衣を脱すれば。寂頂院これをうく。左方右方の伶人三十二相の舞をかなづ。樂曲は打毬樂と鳥急を奏す。抑三十二相のこの舞。年久しく絶たりしを。梶井門跡ふかくなげき給ひて。この年ごろ伯耆守猶近弘にはかりて。古きあとを再興せられたるが。こと更けふの折にあひてめでたし。寂教院見海四智の讃をよみ。羯皷は慈胤法親王つかふまつり。鉦皷は本實成院胤海。大皷は北坊良政。鏡は二尊院賢降。鉢は蓮華院憲海役す。次に散手貴德。次に慶德。はて〻還御あれば公卿はじめ綱紫みなまかでゝ。かされて御旅館にて門跡公卿だち御對面あり。御長袴めさる。此時傳奏衆は庇に侍座あり。竹門。姉門。梶兩門。竹新門。青門對面せられ各花びらを奉らる。この次に尊勝院慈性。養源院　拜謁す。次に烏丸大納言光廣卿。四辻大納言季継卿。廣橋大納言兼賢卿。柳原中納言茂光卿。烏丸中納言光賢卿。高倉中納言永慶卿。飛鳥井中納言雅宣卿。大炊御門中納言經孝卿。水無瀬中納言氏成

廟。姉小路宰相公景卿。烟川宰相康胤卿。小川坊城宰相俊完卿拜謁し。次に殿上人拜し奉る。次に天海はじめ僧綱等拜し奉る。天海には殊更御登山の御慶賀として賜物あり。天海薄器迄御前にありて。御談話に侍し奉る。此日三家よりも太刀馬代を神前に捧げらる。（神廟齋會記。日光御神事記。吉良日記。）

○十八日御經供養法花曼陀羅供なり。　勅會なれば職事廣橋左少弁綏光奉行して出納諸司を催す。掃部寮座を設け進道を敷渡す。承仕法眼道以。法橋以後道場の化儀をつくらふ。瑞垣左右權門の内舞臺前後に十二の雜舞をたて。幄前より權門の外迄。綉旛百流二行にたて。供花机二脚。華筥机二脚階下の左右に置。又瑞垣の左右に案を置。三寶の布施綿千把白絹千疋を置れ置。殿内に金花氈廿六。綉旛五十二流をたて。中央の少し北に高座をかまへ。大紋の錦金襴の打敷をしきて佛壇とし。こゝに今度大佛師法眼康吉に雕ぜられし釋尊文殊普賢の三像を置。蓮華獅子象の座。瓔珞繒綱風鈴みな金をもて造る。前机脇机に錦金襴を敷て香花を供し。御染筆の妙典一部。開結二經。心阿兩經すべて三十二卷を置。次に撮錄をはじめ門跡公卿の納經共は。柳箱にのせて高机の上に供ふ。着座公卿の上首鷹司右府さはる事有とて。罷られざるにより。三條前内府上首にて一日晴の裝束を着す。出居の次將は正面簀子の左右につき。左右の樂行事は舞臺の前にて。伶人に樂目錄をさづく。權門左右の通廊を樂屋とし幔幕をはり。舞臺破紅の蜚。草墊代は木工寮より設く。殿上人は花筵被物のため。緤て左の簀子に伺候す。裝束どもすでに成ぬと聞えければ御旅館を出給ふ。けふも御束帶なり。中納言永慶卿。右兵衛佐永敦。今川主膳正直房御衣紋をかいつくろひ。土御門權臨泰廣御身固の役し。御太刀は井伊掃部佐直滋。御刀は吉良若狹守義冬。御沓は大澤右京亮基重。御弓は阿部豐後守忠秋これをとり。堂上の御弓井御箙及び御奉納の御太刀等は。吉良上野介義弼つかふまつる。御座は御拜殿左方に。緤て錦の御圓をしき。北上四面に着座し給ふ。尾紀の兩大納言御末に侍座せられ。井伊掃部頭直孝。松平下總守忠明。土井大炊頭利勝。酒井雅樂頭守忠勝は階下に伺公し。上野介義弼は花筵。若狹守義冬は御太刀をもつ。其外殿上人諸大夫の衆。各位次を守て着座すれば。やがて大僧正天海綱代輿にのり。權門の下まで參りこゝにて降る。これより先左右の幄屋より伶人迎へて陞德樂を奏して導く。執綱執蓋及上中大童子十弟子に玉る迄。行裝をとゝのへ參堂し。大僧正禮盤にのぼれば衆僧惣禮。次に高座にのぼれば。伶人老君子を奏す。次に供華。十天樂。普蕤。加陵頻。胡蝶次第に舞。次に唄。次に散花。次に裟白神分法則。次に紺紙金泥の經を讀誦二十口。次に諷誦願文。次舞三番。振鉾三節。萬歲樂。延喜樂。次に錫杖。次に伽陀。畢て大僧正高座をくだる時。三禮急。泰平樂。納鉾。退出長慶子

なり。けふ着座は三條前内府。日野廣橋兩亞相。柳原。烏丸。大炊御門三黄門。姉小路宰相。出居次將は樋口中將信孝。櫛笥中將隆朝。堂童子は綾小路中將高有。山科中將言總。六條中將有純。河鰭中將基季。四條中將隆衛。四洞院小納言時慶。飛鳥井中將雅章。持明院中將基定。舟橋少納言秀相。油小路中將隆基。裏辻中將季福。阿野中將公業。高倉右衛門佐永敦。七條少將隆脩。千種少將有能。土御門極臈泰榮。關藏人某。被物は籠て出納御藏小舍人等勤仕して。導師下樂のときこれを催す。導師には織物。紅梅縫箔。唐織白綾。縫箔白綾内府これをひかれ。曼殊院。梶井妙法院。竹新門。梶新門井青門。毘門被物は。大中納言これをひき。喜多院。尊勝院。上乘院。寂靜院。寂敎院。本實成院の院家等は白綾一疋づゝ。題名附十口も同じ。被物殿上人これをひく。飛僧百口。山門五十口。東關五十口は中奥の踏大夫等これをつとめ。被物拜而各下蔦より退く。はてゝ内陣にまいらせ給ひて。御太刀をすゝめ給ひ御幸館あり。公海これを役し。神酒いたゞき給ひ。三廻も同く太刀進覽幸館神酒いたゞき。退きてのちふたゝび大僧正天海前導し。内陣へいらせ給ひ。　宸翰の御縁起をすゝめ給ひて還御なる。かくて上野介義弼もて竹門へ酒菓。新門へ酒。妙門梶門へ酒菓。梶新門へ酒。青門へ酒菓。鷹司右府へも同く進らせ給ひ。若狹守義冬もて三條前内府。日野亞相。姉小路宰相并天海へ酒菓つかはされ。又阿部對馬守重次御使にて。別に天海へ銀三百枚時服二十つかはさる。次に瀧尾權現に詣給ふ。黄昏に及んで天海御祝の饗奉る。此夜護摩堂にて五壇の修法。また　神前にて神道護摩執行あり。（日光御神事記。吉良日記。）○十九日御本地藥師堂供養。法華曼供執行はる。奉行職事日野右少弁弘資前一日より莊嚴を沙汰し。兩局出納諸司の官人を催し。承仕道場をかざり。掃部寮筵道をしき。式部彈正の官人座につき。舊王等逝日光月光十二神將を安置す。辰一點威儀師集會の鐘なりてば。僧綱凡僧各法席に群集す。鷹司右府はじめ公卿着座。出居次將等はすべて昨日にかはらず。堂童子は南の簀子に列座して候す。やゝありてならせ給ふ。供奉の行粧等昨日に同じ。道場の左に四上南面に大紋の疊を敷。其上に錦の御圓を設て御座とし。こゝに導き奉る。（ママ）けふは樂行事左少將嗣。右少將有能。雅樂寮代の官人二員伶人をひきつれ。治部代二員主殿代二員は名寮衆僧をひきつれ前行す。此時伶倫鳥向樂を奏す。導師。咒願師禮盤につき。衆僧惣禮。この時酒胡子あり。兩師高座にのぼる。樂行事舞臺の邊にすゝみ。伶人を召て樂目錄をわたす。かくて圖書寮の官人金鼓をうちて。十天樂はじまり供花を儲す。菩薩迦陵頻胡蝶二行に舞出て。舞臺をへ供花をさゝげ。兩師十弟子にさづく。禮盤の十弟子佛前にそなへ。次に所司二人布施の机をもち殿上人にさゝげ佛前に安置す。迦陵頻胡蝶等は舞臺の草墊代に着

す。次に菩薩舞畢にのぼり。舞畢て迦陵頻胡蝶次第にまふ。時りて。神事法會の事を沙汰し。寶殿諸堂舍火をいましむべき旨說文のつかさ花筥を儲す。堂童子これを執て綱衆に供す。說頭命ぜられ。また吉良若狹守義冬もて。知門實門圓門其外傳奏はゞ鉢音を發し花をふらし。威儀師從儀師御願文咒願文を兩師にめ公卿殿上人につかはされ。やがて江戶へ參らるべき旨傳さづく。御導師は大僧正天海。咒願師は青蓮院門跡尊純法親へらる。　御宮御造營奉行但馬守泰朝には御刀。御普請奉行王。證誦は曼殊院門跡良恕法親王つかふまつられ。讚衆。唄。散島四郎左衞門三安。庄田小左衞門安照には金を給はる。高力攝花。この時振鉾三節。左右樂三番。對揚等次第に舉て。表白願文津守忠房。內藤伊賀守忠重。秋山修理亮正重はしばらく山中を咒文咒願文をとなへ。兩師高座を下るとき。武德樂を奏す。御警衞し。松平右衞門大夫正綱。板倉內膳正重昌は。但馬守泰朝導師はじめ諸門跡の被物三重。その外僧綱は一重。凡僧并威儀と共に。山のとを沙汰すべしと命ぜらる。（日光御神事記。紀師從儀師一づゝかづけらる。此事は太田備中守資宗。阿部對馬年錄。）〇廿日鹿沼驛御豊やすみあり。井上河內守正利饗し奉守重次奉行する所なり。さて退出長慶子はじまり。僧徒みな下る。けふ阿部豐後守忠秋むかへ奉り。壬生城にとまらせ給ふ。臈より引退く。各座の公卿もおなじ。これより先供奏の間。左忠秋がこたび新封の地なり。（神廣寶會記。）〇廿一日壬生を出右の樂人賀殿。林哥。打毬樂。陪臚。陵王。納蘇利を舞。しばしあ給ふ。土井大炊頭利勝道のかたはらに新築せし茶寮にむかへりて還御ならせ給へば。上遠部傳奏のともがら。透墻のほとり奉りて御やすみあり。此夜阿部對馬守重次むかへ奉り。岩槻の にすゝみより。敬屈して罷り申す。御旅館にかへりいらせたま城に暫をとゞめらる。山にてはけふ法華萬部讀誦あり。金鍍玉ひて。天海まうのぼり拜謁す。御法會どもとゞこふりなくはて軸の新刻經。　御神前に進薦し給ふ。別に御本地堂に百貳十しもて。悅思召させ給ふ旨御詞を賜ばる。天海も大法會連日部そなへ給ふ。（神廣寶會記。日光御神支記。）〇廿二日午刻雨期時和風にして。天意人望にかなはせ給ひ。至孝の盛德神佛感いさゝかふりしに。江戶城に還御ならせ給ふ。普第大名大手門應うたがひなき旨。唱え上て退く。この夕山の御旅館を首途し迄むかへ拜し奉る。供奉の人々へ春日の局より饗行ふ。山にて給ひ。今市驛までおはします。　御道より吉良上野介義弼を。天はけふも讀經ありて。導師へ銀貳萬兩。毘門へ五千兩。院家。僧海のもとに御使して。慰勞の御旨を傳へられ。廳司右府その外正。綸素。役者へ銀貳千兩。千兩。五百兩。貳百兩たまふこと差諸門跡へもおなじ。秋元但馬守泰朝には。此のち彌天海にはかあり。總山衆中へ五萬兩施行あり。（神廣寶會記。日記。日光御

神事記。）〇廿三日黑木書院にて諸大名拜謁し。御歸城を賀し相を御座所にて饗せられ。その家司成瀨正人正正虎。安藤飛驒奉る。山にてはこの夜實前にて。大僧正天海讀經をひらく。烏守直治は黑木書院にて饗給ひ。その以下の輩は白木書院にて丸中納言光賢卿。小川坊城左大弁俊完卿着座。陪者正儀は天饗膳をくだされる。（日記。）〇廿九日仙臺黃門きのふ參府有し海。精雛は南部與福寺法勢。喜多院大僧正空慶之。甲冑をよそが。所勞のよし聞し召て松平伊豆守信綱をつかはされる。かれてひし武士三十人警衞に伺候す。古制による所とぞ聞えし。（日封地へ御使下され。御尋有べしと思召たるに。病をつとめて參記。日光御神事記。）〇廿四日三緣山　曙朔に詣給ふ。方丈智府す。と更御心もとなく思召。信綱よく見て參るべしとの御旨童白木書院にめして齋飯を給ふ。伴僧もおなじ。日光山にては なりき。ゆる〳〵保護して心まゝにまうのぼるべしとつたふ。けふ神事猿樂行はれ。　勅使をはじめ上達部殿上人みな棧敷（日記。貞享書上。明語集。）〇廿日公卿門跡だち。日光山より參たかまへ。諸門跡及一山の衆徒ことゞく見物す。在山の諸有府ありしかば。　勅　院使へ高家大澤右京亮基重。實相圓滿兩司は饗應の事をつかさどり。大河內金兵衞久綱は膳部の事を門跡へ吉良若狹守義冬。東本願寺門跡光從へ太田備中守資宗惣督せり。樂は翁。三番叟。高砂。田村。芭蕉。舟辨慶。天鼓。立御使して慰勞せらる。（日記。）◎此月遠山平右衞門正次死し田。祝言。狂言五番。鍋八撥。入間川。鐘物師。比丘定。清水。（日て。子新八郎當家をつぐ。又花房五郎左衞門職利弟平左衞門記。）〇廿五日尾紀兩亞相拜謁あり。御歸城を賀せられ太刀目錄時服五十銀五百枚づゝ獻ぜらる。家司各拜謁職休初見す。（寛永系圖。）し物奉る。はて〻品川の邊へ成ぜらる。日光山にはけふも猿樂あり。翁。三番叟。西王母。江口。紅葉狩。葵上。自然居士。熊坂。祝言。狂言五番。末廣がり。止動方角。薩摩守。梟鴟。宗論法師。此日猿樂へは登眼十萬疋づけらる。門主大僧正よりも。四座の猿樂へ太刀金馬代をかづけ。其以下へ銀五万疋をほどこす。（日記。日光御神事記。）〇廿七日水戶黃門のもとへ。阿部對馬守重次御使して鮮魚をつかはさる。（日記。）〇廿八日尾紀兩亞

大猷院殿御實紀卷三十一　寛永十三年五月に始り六月に終る

〇五月朔日月次拜賀例のごとし。仙臺中納言政宗始め參觀七人。織田左衞門佐長政宇治橋造營の奉行たりしが。成功せしかば猿樂し矢百本獻ず。太下淡路守利當は老母を府に呼迎しかば謝し奉る。勘定頭伊丹播磨守康勝二子內藏助武勝。殿地役井上

外記正繩子半十郎正長。勘定武藤理兵衛安信弟庄五郎安之。三州代官鈴木八右衛門隆次子權三郎隆政初見の謁をとる。加賀の藩士横山山城守長知四男内記知清は。土佐守與知が家つぐべきよし命ぜられしをもて謝し奉る。中納言政宗のもとへ。阿部豐後守忠秋御使し。鵜七雲雀十五くだされ。かれて所勞の事聞召れしに。東西の諸大名參府の制度を仰くだされしその期をたがへずまいりて。今朝速にまうのぼり拜謁し。御悦大方ならず。かつ政宗が家醫は醫官半井驢庵成近が弟子の由聞召せば。驢庵をつかはさるべければ。家醫と治療の事はからはしむべしとの懇命をつたふ。(日記。貞享書上。明語集。)〇二日梶井門跡井新門青蓮院門跡着府ありければ。吉良若狹守義冬もて慰勞せられ。四辻大納言。大炊御門。高倉兩中納言。堀川宰相へは。使番酒田玄蕃頭定正をつかはさる。(日記。)〇三日三家は下り例の家々より。端午を賀して時服を献ず。(日記。)〇五日端午佳節例のごとし。阿部豐後守忠秋もて。仙蓼黄門の病をとはせ給ふ。小納戸遠山十右衛門景重に尻掛則長の御刀を下さる。(日記。家譜。)〇六日公卿井諸門跡引見あり。御直垂をめさる。三條前内府。日野亞相先拜謁ありて。次に竹内。妙法院。梶井。青蓮院の門跡井に梶井竹内の新門跡拜謁せられ。各太刀目錄時服十さゝげられ。次に知恩院門跡は太刀目錄卷物五。實相院圓滿院は太刀目錄時服十献ぜられ。喜多院尊勝院兩僧正は三束一卷づゝ。廣橋四辻兩亞相。大炊御門柳原兩黄門。は。太刀目錄もて拜謁あり。次に殿上人鷲尾。樋口。櫛笥。綾小路。油小路五中將。舟橋少將。廣橋左少弁も。太刀目錄もて拜謁し。次に烏丸亞相。高倉黄門。姉小路宰相。高倉右衛門佐。日野右少弁太刀目錄もて拜謁し。次に竹内。妙法院。梶井。青蓮院。知恩院。實相院。圓滿院門跡の坊官家司拜し。次に東本願寺門跡時服十銀百枚太刀目錄をもて拜謁し。次に西本願寺門跡使者。次に東門の坊官家司拜し。大外記官務をはじめ。官人等皆拜し奉る。(日記。)〇七日諸老臣造作場を巡視す。(日記。)〇八日公卿門跡逢饗應行はる。大廣間中段中央に御座を設らる。御左に竹門。知門。竹新門。實門。御右に妙門。梶門。青門。御門つかれ。下段左に三條前内府。烏丸亞相。姉小路宰相。右に日野廣橋亞相つかる。初献の御盃は　御所めしあげられて。竹門につかはされ。妙知梶竹青實圓門一人ごとに御盃つかはされ。各かへし奉られ御肴つかはさる。次には御盃臺にのせて内府に給ふ。この時魚味の屋物并數の御盃まはる。はじめの御盃は内府にて納め。次に數の御盃にて日野。烏丸。廣橋。姉小路に給はり。御肴つかはされ。御加わりて。

宴終る。其外は白木書院にて。尾張紀伊水戸の三卿をあるじがたとせられ。四辻大納言。高倉。烏丸。水無瀨三中納言。小川坊城宰相。鷲尾頭中將は左につき。柳原。飛鳥井。大炊御門三中納言。堀川宰相は右につき。饗客は北の大廣下にて。左は櫛笥中將を上首とし。山科内藏頭。川鯉中將。平松少納言。持明院。油小路。阿野三中將。廣橋左少弁。七條。高倉兩少將つき。右は櫛笥中將を上首とし。綾小路。六條。四條。飛鳥井。裏辻五中將。船橋少納言。高倉右衛門佐。日野右少弁。千種。滋野井。梅園三少將。柳蔭兼歳人着て。各七五三の饗膳を給ふ。月卿の座は永井信濃守尚政。高力攝津守忠房。松平伊賀守忠晴。本多豐前守正貫奉行し。饗客の座には内藤伊賀守忠重。松平出雲守勝隆。稻垣若狹守重太。使番堀市正利重奉行し。御前の御酌は太田備中守資宗。朽木民部少輔植綱。御加は書院番頭池田帶刀長賢。步行頭佐野左京亮正直役せり。けふ鷹司右府は日光山中より所勞なるによてまうのぼられず。又大僧正天海も病臥によて大番頭大久保主膳正幸信井醫官久志本式部常尹を遣はさる。(日記。)〇九日國持はじめ大名小名を饗應せらる。國持の席は白木書院なり。宴たけなはの頃出まして。御みづから肴をたまふ。其外は大廣下にて饗せらる。國持の座は奏者番永井信濃守尚政。高力攝津守忠房。大番頭松平外記忠實。書院番頭本多美作守忠相。小姓組番頭仙石大和守久隆奉行して饗應し。其外の座は内藤伊賀守忠重。稻垣若狹守重太奉行す。(日記。)〇十日三丸舞臺にて猿樂行はれ。門跡井月卿雲客及大小名をめしてみせしめ給ふ。之もこたび　還宮勅會とゝこふりなくはてしを祝はせ給ふとぞ聞えし。樂は高砂。經政。東北。飛雲。是界。唐船。張良。獅子。猩々なり。この中に酒井宮内大輔忠勝。猿樂等に時服并裘脚を纏頭す。(日記。)〇十一日けふも猿樂あり。竹生島。實盛。千手。道成寺。三輪。紅葉狩。老松なり。旗本の輩井增上寺。傳通院。金地院。江月玉室。知足院。圓覺寺。文殊院みな見る事をゆるさる。けふ阿部對馬守重次もて。仙蓼黄門の病をとはせ給ふ。(日記。)〇十二日薩摩中納言はじめ就封の暇給ふもの三十六人。中納言には國行の御刀。松平長門守秀就に來國光。細川越中守忠利に二字國俊。京極若狹守忠高に國宗。鍋島信濃守勝茂に來國行。松平阿波守忠英に行光。松平土佐守忠義に兼光。京極丹後守高廣に來國光。松平右衛門佐忠行に高木貞宗。生駒雲岐守高俊に則長の御刀を給はる。相良左兵衛佐長每は所勞によりてまうのぼらず。(日記。)〇十三日日光山勅會にあづかり。參向ありし門跡公卿殿上人其他官人等に暇給ふ。御使は高家吉良上野介義冬。同若狹守義冬なり。梶井門主に銀一万兩。綿五百把。竹内。妙法。青蓮三門主に銀一万兩づゝ。梶井竹内兩新門へ銀三千兩づゝをくらせられ。坊官家司等銀時服若干かづけらる。四三條前内府。日野亞相へ各銀五千

上酒井忠世

兩。綿五百把つかはされ。又例年の銀二千兩。綿百把をば。ことさらにつかはさる。其外は亞相に銀三千兩。參議三位に二千兩。殿上人に千兩。極臈藏人に五百兩。兩局。左右史。諸官人にも銀時服若干かづけられ。又高辻大内記。東坊城式部大輔。五條大藏卿は砂金五枚づゝ。日光山にて給はる。これは宣命。諷誦願文。咒願文の事によてなり。左大史忠利は　正遷宮宣旨砂金十兩。奉幣宣旨十兩。知實圓三門は御法會にあづからざるゆへ。餘伴を命ぜられざるゆへ。廣米二百俵づゝつかはされしとぞ。又南部喜多院大僧正空慶に銀二千兩。尊勝院僧正慈性に千兩かづけらる。此日上野國厩橋城主酒井雅樂頭忠世が遺領十二万二千五百石を。その子阿波守忠行に賜はしめられ。忠世が鹿隈料三万石を合せて。十五万二千五百石を領せしめらる。此忠世は故河内守重忠が子にて。　神祖につかへ奉り三千石たまひ。天正十六年四月二日豐臣家の聚樂第行幸のとき。侍從にゆりて。右兵衛大夫と稱し。十八年正月　台德院殿豐臣家へならせ給ひし時御刀の役を勤め。殿下より金時服たまふ。同年八月十六日二千石加恩有て五千石となり。此とし　台德院殿に附させられ。御家老の職に昇せらる。ときにとしわづか十九。慶長五年上杉御追討の御供し。六年上州那波にて。加恩の地たまはり一万石餘になり。九年七月十七日今の　御所生れさせたまひしとき。御筥刀の役し。十年四月廿四日　台德院殿將軍宣下のとき。在京料としてことさら五千石たまはり。十二年七月三日　神祖駿府へうつらせたまふとき。御使をつとめしに。雅樂頭にあらたむべきむね仰つけられ。十四年二月十二日上州善養寺にて五千石くはへられ。合て二万石領し。十五年十月十四日　神祖その筋にわたらせ給ひ。文字の御刀たまはる。十九年十月大阪の軍に供奉し。元和元年夏陣には兜首三十切て奉る。あくれば二年　神祖御不豫やゝつのらせたまひければ。　台德院殿御宥侍のため。駿河に赴かせ給ひしとき供奉して。　神祖より醯醬の茶入をたまふ。その八月上州大胡伊勢崎にて三萬二千石くはへたまはり五万石となり。三年四月十二日光山に供奉し。七月二十一日家つぎ。忠世が領せし地をあはせて八万五千石となり。のち國政にあづかり公武の事を沙汰し。異國の事をも奉る。五年十月二十日上州里見にて一万石加恩有て九万五千石となり。六年六月十八日　女御入内の供奉し。　大内よりも賜物數々あり。八年十二月三日加恩あり。新墾田を合て十二万二千五百石餘を領す。九年二月より今の　御所に傳たり。七月二十七日將軍宣下御參内の時。騎馬にて御太刀の役し。寛永三年御上洛にしたがひ。八月十九日從四位下にのぼり。九月二條の城行幸の時供奉行をつとめ。その十九日御參内のとき先驅し。　別勅によつて侍從に任ず。四年四城の後溝ならびに山王土手をきづき。五年四月日光山御參のとき。御飯の役に參り。七年正月廿六日　兩御所を私第にむかへ奉り。數々の献物し。賜り物も又少からず。その晦日屏風茶器を下され。四月十五日山里にて御茶給はり。九月十二日御即位の賀使にのぼり。八年三月二日河越御狩のとき。　大御所の御使にまいり。九年　台德院殿昇天の後。御遺物銀二千枚給はる。五月に四城の留守にさだめられ。家眷を引つれ四城にうつり。このとし三緣山に五重塔を建立し。七月廿四日所勞のよし聞召。烏犀圓を下され。十二月十三日にはまた四城にならせたまひ。かずくの賜物あり。その後西城にならせ給ふ度々。恩賞の品々枚擧に暇あらず。四月十七日東叡山　御宮に石の華表を献じ。十二月鶴姫君御婚禮のとき御輿渡の役し。十一年六月御上洛の時。四城の留守してありながら。閏七月廿三日みくりやより失火して。城中悉く回祿せしかもて。忠世其罪をおそれ。東叡山に入て蟄居し勅を待し參動算慮に暇ぜず。職弊はれて。その後は金銀の奉行してありしが。十二年本丸。二丸。三丸。三階櫓。平川冠木門溝渠淺利の事をつとめ。五月廿二日もとの如く四城に勤番すべしと命ぜられ。その九月廿日松平安藝守光晟がもとに。御養女君御入輿の時。御輿渡をつとめ。もし三月の初より病にそみしかば。しばく御使を給はりとはせられしかど遂に癒す。おなじ十九日六十五歳にて終りをとりぬ。此日又仙臺黄門の病を

とはせたまひ。酒井讃岐守忠勝に。柳生但馬守宗矩そへてつかはされ。病體を問せたまひ。かつ御旨を傳へしは。この程醫官牛井駒庵成近。武田道安信眞力をつくすと雖ども。驗ありとも聞召れねば。江戸中の醫どもめしあつめ。治療を議せしむべしとなり。この日また品川へならせらる。（日記。紀年錄。吉眞日記。家譜。寛政重修譜。貞享書上。明語集。）〇十四日白木書院にいてたまひ。　勅使　院使門跡月輪雲客。その以下の官人も拜謁して。歸洛の賜物を謝す。立花左近將監忠茂。織田出雲守高長就封のいとま給はる。この日知恩院門跡に銀三千兩。時服廿。實相院圓滿院兩門跡へ銀三千兩つかはされ歸洛せしめる。御使は高家吉良若狹守義冬なり。この三門は　勅會にあづからずといへども。　神忌により參拜の爲登山せしとぞ。東本願寺門跡へも松平伊豆守信綱御使して。銀三千兩。綿二百把つかはさる。又竹内妙法兩門はすでに辭見せられしかど。近日所勞の聞えあれば。しばらく滯府して治療せらるべき旨。高家吉良上野介義周をして仰つかはさる。（日記。紀年錄。）〇十五日月次拜賀例のごとし。飛鳥井中納言雅宣卿鞠井其裝束を献ず。丹羽左相長重參覲す。有馬玄番頭豐氏就封の暇給ふ。（日記。）〇十六日太田備中守資宗御使して。仙臺黄門をとはせ給ふ。（日記。）〇十七日紅葉山　御宮參あり。（日記。）〇十八日酒井阿波守忠行より。亡父雅樂頭忠世が遺物とて。皇宗の

上授下知狀于長崎奉行
下家光臨伊達正宗邸問病

刀。行光の脇差。文倫の茶入を献ず。茶入はすぐに忠行に秘藏すべしとてかへし下さる。三宅大膳亮康盛は願のまゝに。龜山の所領を關東に轉ず。旗本の卒公を命ぜらる。此日尾紀兩邸に集鷹を賜らせらる。(日記。)〇十九日黒木書院にて。

大内の事を面命せらる。土屋民部少輔利直大阪の加番長崎の事を命ぜられいとまたまふ。よて老臣連署の下知狀を授けらる。その文にいふ。異國に我船を遣す事堅く禁ぜらる。邦人ひそかに乘渡るものあらば。死罪に處せられ。その船主どもは留て府にうたふべし。異國に渡りし後。かしこに永住するもの歸り來らば。斬に處せらるべし。切支丹宗ある所兩人にて寺壇を遂げ。邪教のこと訴出ば。其品によりあるは銀三百枚。又は貳百枚褒賜あるべし。其他は前制の如くはからふべし。南蠻人の子孫殘らず彼國に追やるべし。もし違犯しのこしおく徒あらば斬に處せられ。親戚までも輕重のとがめあるべし。崎港にて出生せし蠻人の子を養子とせし父母。悉く斬罪たるべしといへども。助命せられ蠻人につかはさるべければ。もし彼徒かされて歸來。または書翰往復するにおいては。本人死罪。親屬は科の輕重に隨ひとがめらるべしとなり。その他去年の下知狀におなじ。(日記。憲教類典。)〇廿日徒目付二人を大津につかはし。高札を建しむ。鍵階のごとくにてなり。大番美濃部權兵衛某亡命せるにより。其父市郎左衛門茂正を大阪城より召下さしむ。使番彌豐前利政子書院番七郎右衛門利光病死するをもて。その跡料貳百俵は其子七郎右衛門利房につがしめらる。又このほど竹門新門妙門病臥により。高家吉良若狹守義冬御使してとはせらる。(日記。家譜。)〇廿一日黒木書院にて兩傳奏衆御對面御密談有てしりぞかる。次に松平右衛門佐忠之いでゝ。天守下石垣構造命ぜられしを謝し奉る。はてゝ品川東海寺へならせ給ふ。其ついで仙臺中納言政宗卿のしもとによぎらせらる。これ黄門兼日大病によてなり。政宗卿も世にありがたくかたけなきことゝかしこみ。身のくるしさをもわすれ眉衣袴な着し。右の手を土井大炊頭利勝。左の手を柳生但馬守宗矩にひかれ。酒井讃岐守忠勝は後ろより腰を抱きて。御前にまいりければ。側近く立よらせ給ひて。中納言よ病氣聞しよりは一段よくて滿足せり。只今が養生第一の時分ぞ。努々油斷すべからずと仰あり。さて家司等めせ。小十はなきかとの御諚により。片倉小十郎。石毋田大膳。中島監物。佐々若狹はるかの次よりすゝみ出て拜し奉れば。黄門の病今こそ肝要なれ。汝等看侍怠るべからずとの玉音かたまはり。各拜謝して退く。その後は政宗卿にむかはせ給ひ。しば〳〵御密言あり。政宗もくるしげなる息の下にて。何となか聞え上しかど。外に聞傳ふる者なし。さて返〳〵自愛怠るまじ。頓て快復すべければ。そ

の時は城にまれき。目出たく一ぷくまいらせなん。何にもせよ用あらば。遠慮なく承はるべしと仰ありて其座をたゝせ給ひ。はるか椽をへだて給ひて。越前〳〵とめしければ。越前守忠宗御前にかしこまる。時に中納言の病氣聞しよりも見て肝を消したり。中納言にはよき椽に言て力を添けれど。實はかゝる病氣にて。とても本復の期みあるべからず。汝が心中察し入たり。しかし中納言卒せられたりとも。家光かくてあれば。心安かるべしと宣せたまひて還御なれば。忠宗感涙を流して拜送し。政宗は合掌して。聲さへたてずふしおがみつるとぞ。(日記。貞享書上。明語集。)世につたふる所政宗は天正慶長の遺老にして。官位封國ともならびなき名望の宿將なれば。この人うせなんには。天下の兵威强弱にもあづかるべき事と。上にもことさら御おしみ淺からず。もし病をつとめて參覲の期をたがへずまいりしを。あつくれぎらはせたまひ。その後は土井酒井の兩大老をしはく〳〵つかはされ。典藥醫官はいふまでもなし。諸藩市中にないても。名のしられたるほどの醫師は。とく〳〵召集めて治療を諮せしめられ。猶も念脚をはせて。京西國の名醫どもをもめしよばせたまひ。藥をほどこさしめ。府内諸寺諸山へも御祈仰付られ。丹精を抽んでしめらる。政宗もかゝる榮寵をありがたく。身の苦しさをも思はず。病牀より袴付て上使に對面し。政宗年といひ官祿といひ。おもひ置事もなき身

紅葉山に詣給ひ。かへらせ給ひて增上寺方丈齋飯を下さる。また井伊掃部頭直孝所勞により。歩行頭齋藤振津守三友してとはせらる。仙臺中納言政宗殉逝にこの曉卒去したり。よて長子越前守忠宗がもとに。土井大炊頭利勝。酒井讃岐守忠勝もて慰問せられ。かつ外郭搆造の助役免許の御旨をつたふ。(日記。貞享書上。)○廿五日妙法院門跡尭然法親王のもとへ。高家吉良若狹守義冬をつかはさる。これ病いえて上洛せらるゝよし聞召たり。もし少しも不例の心地あらば。はやからず歸府せられ。療養あるべしとの御旨とぞ聞えし。(日記。)○廿六日陸奥國仙臺城主中納言政宗卿の遺領六十一万五千石を。長子越前守忠宗に襲しめたまふ。これ政宗卿三朝に歴事し。二心なく勤勞せるがゆへなり。忠宗すみやかに政宗が本邸にうつり住べきとの御旨を。土井大炊頭利勝。酒井讃岐守忠勝もて傳へしめられ。かつ香火料銀五百枚給ふ。この政宗卿は阿部左大臣魚名公の支孫中納言山陰卿の末葉にて。鎌倉室町の代々につかへて陸奥國伊達郡を領しけり。父を左京大夫輝宗といふ。政宗天正十三年閏八月美作守と稱し。十月八日同國二本松の城主芦名右京亮義継がために。父輝宗うたれしかば。政宗父の仇をうつて。終に芦名が家をほろぼし。黒川の城にうつり住て威を東北にふるふ。豊臣關白相摸國小田原北條を責亡し。やがて陸奥出羽の地に攻下らるべしと聞えしかば。始て家人遠藤不入齋を使とし。關白のもとにまいらせ。十八年六月みづから百餘騎をしたがへ。はるばるの路をへて小田原に至りしが。眼かたかたなる男の。髪は短くおしきつて打かぶり。其だあやしげなる振なりしかば。關白久しくとゞめて。對面もせられざりしが。推問にこたふる條々よく理にあたりしかば。すぐに東征先手を命ぜられ。先本國にかへさる。幀て御迎として下野國宇都宮までまいりしかば。關白うたがひとけて對面あり。政宗を先立て陸奥の國にぞ下向ありける。關白令津仙道の地悉く召上られ。蒲生木村等にたまはりし。政宗をば黒川に住せしめらる。そのゝちふたゝび葛西大崎の地に逆徒蜂起しけるを。政宗が結撻なるべきよし疑を蒙り。その不審を陳謝せんとて都にのぼり。十九年三月侍從にのぼせられ越前守と改め。羽柴の御名をさづけられ。その六月暇たまはりて奥に下り。大崎葛西の一揆等が簡れる宮崎の城を當平らげしかば。その功を賞せられ感狀をたまひ。　神祖よりも御書を下さる。このとし九戸の賊徒御追討の爲。　神祖奥州に御發向有て。岩手澤に御逗留のとき。此地をもつて居城とすべきむね仰下され。御繩張ありて城を築かしめたまひ。こゝにうつり住す。程なく賊徒等誅に伏せしかば。五十八万石餘を領せしめらる。朝鮮の軍起りしときは名護屋に陣し。文祿二年朝鮮におしわたり戰功すくなからず。四年二月歸國して。七月秀次關白の事に連座のよしきこえ

上伊達政宗卒

上伊達政宗

ければ。大坂にのぼりじに。其子秀宗に家ゆづり。其身は遠島にうつるべしと命ぜられたり。この時政宗が郎等が京中を燒はらつて。切死せんとはからふよしの風說にて。洛中外騷動大方ならず。又政宗が謀反のよしを傍にかきて。　台德院殿御館の前に立るものあり。太閤かれこれを見聞ありて。却て疑ひを散ず給ひ。はじめより政宗をにくむ者の所爲にて。秀次に組せしなんど申ふらしたるを。疑べくもなしとて。歸國のことをゆるされたりとぞ。政宗がこたびかく何事もなくゆるし蒙りし事實は。　神祖の其家人等に曉諭せしめられ。さて太閤には政宗が家人等悉く誅せられんを。何のかたき事も候はず。さりながら東國の家人等は。理非をわきまへざろ荒爽なれば。累世の主従れたりときかば。いなるひが事なしいださんもしらず。朝鮮の軍いまだ定まらざるに。また東夷たちまち兵革おこらんと。しかるべしとも存ぜずなど。懇にいさめ給ひし故とぞ聞えし。これ政宗が終に。　當家に心服して。永く君臣の御ちなみをせし事のおこりなり。慶長二年の冬從四位下に叙少將に任じ。五年には上杉征伐の先手にされ。まづ白石の城を攻めおとし。關が原の軍終て後も。なを景勝と地を爭ってやまず。これ無ての命にたがひしかば。このたびの勳賞にはわづかに白石の地のみを賜ひたり。このとし十二月廿四日先に御ゆるし蒙り。舊城郡千代城を再興し仙臺と改め住す。十一年二月八日政宗が家にならせたまひ。父子に御刀給はり。三月三日常陸の國龍が崎の地一万石下さる。明れば十二年姫君生れ給ひしかば。忠宗に聟嫁の事仰下されしが。ほどなく姫君うせさせ給ひしかば。池田宰相輝政の女子御外孫なれば。御猶子とせられ忠宗にあはせられ。又政宗が女子を上總介忠輝朝臣の北方になされたり。十三年正月政宗に御家號をゆるさる。此時陸奥守に改む。大坂の軍おこりし時は。　台德院殿の先陣うつて登る。此十二月廿八日長子遠江守秀宗伊豫國宇和島城十万石を給はり。翌年の夏五月六日道明寺合戰に後藤又兵衛以下宗徒の敵をうちとり。七日には首五百廿五切て獻る。閏六月十九日このたびの勳賞とて。正四位下の參議にのぼり。寛永三年八月十九日從三位權中納言にのぼり。すべて御優待きはとなる事多し。十一年八月二日近江國にて五千石加恩あり。四日陸奥の内にて六十万石に。常陸近江の地を合せて六十二万石の御判物を下さる。こたびも病をおして參府しければ。なみ〳〵ならぬ恩遇のみならず。御みづからその病をとはせたまひ。その家にならせ給ふ。いとありがたきなるべし。かくて此廿四日遂に卒しさ。齢つもりて七十二歳なり。(日記。藩翰譜。寛政重修譜。政宗戰國の間に生立て。數世富家の餘勇を振ひ。遂に声名を亡し東奥に割據し。城を貰め地を合せし勳功は數るにいとまあらず。ひとり元和以來干戈を袋にする時におよんで。

自若として世を憚り時を恨る聲動いさゝかもなし。天命の歸する所をしつて人臣の禮を失はず。其家國を全くして光榮を子孫に傳へし始終の進退。これ當時老宿の英傑あまたありし中にも。と更すぐれたるとて傳へけり。その一二をこゝにあげていはゞ。元和のはじめ御放鷹場ちかきほとりにて。政宗にも鷹場賜はりしが。あるとき政宗御鷹場へひそかにかくれ入て。鳥三つ四つあはせ鵠をとりかひたる所へ。神祖はひきちがへて御供あまためし具せられ。鷹つかひながら急にならせ給ひしをみて。政宗あはてふためき。鷹も鳥もとりかくし。やう〳〵とにげさり。竹藪のかげにひそまりてある間に。神祖は御馬をいそがせ過させ給ひけり。その後　御所にまうのぼりしとき。　神祖の御詫に。先日は其方の鷹場へ。鳥をぬすみに入こみたる所。其方に見付られ。ほう〳〵に逃んとせしに。其方竹藪のかげにうづくまりゐたれば。わざと見ぬふりしたると思ひ。息をかぎりに逃たりと仰げれば。政宗承り。さては左樣の事に候や。それがしもその日は。御鷹場へぬすみ狩にまいりしに。御成の樣子をみて。息をこらしかくれ居たりと申上ければ。　神祖大にわらはせ給ひ。その時たがひにかくとしらば。逃ながらも少しは息をやすむべきものを。双方笞入なれば。その外にあばてたりと。君も臣も大聲を發してわらはせ給へば。御前伺公の輩もみなみな腹をかゝへたりとぞ。又

寛永の頃にいたり。　歴世の遺老なればとて。御優待なみなみならず。恩遇しきりにて。しばしば召れて御茶を給はり。又は御酒宴にあづかりけるが。政宗は老年に似合しからざる大脇差を好みけるが。御前へはいつもその脇差を脱して進みける。御覽ず。老年の事ゆへくるしかられば。この後は脇差を帶したるまゝ進むべし。汝はいかやうなる心あるやらんしろしめされざれど。上にては政宗が事少しも御氣遣には思召れず。脇差さしていてずば御盃をば下さるべからずと。御たはぶれありしかば。政宗感涙をとゞめあへず。是迄兩代の間。政宗不肖ながら身命を抛て。汗馬の勞をいたせし事は身に覺えあれど。今の　公方樣には何もさせる忠勤がましき事少しも申上ず。しかるを御代々の御餘恩と。老臣が殘喘の哀態をあはれませ給ひて。かくまでありがたき御恩遇を蒙る事。死すとも忘るべからずとて。その日は殊更大に酩酊し。前後もしらず御前にて解かきて熟睡したる間。側に脫置しかの大脇差を。御近習の輩ひそかにぬきてみれば。中身を木刀にてつくりしとぞ。神聖英主當時時に將たる御寛洪の御所致は申までもなし。政宗が時に隨ひ世に應じて擧動たるさま。實に千古の卓然たりといふべきものか。この政宗さる豪傑の武夫なりしかど。かたわら時を賦し歌を詠じ。風月の間に老境を樂しむ心。又たぐひなかりしが。いかなるときかつくりけん。馬上少年過。世平白髮

多。殘軀天所レ救。不レ樂亦如何といへる詩あり。いと殊勝にぞおもひやらる。明語集。）この日日光山御緣起の御副儀を京に進らせたまふ。　大内へ銀三百枚。曝布百疋。　院に五百枚。綿五百把。蠟燭千挺。　大宮に二百枚。錺珍五十卷。并に櫃四。鵞二箱まいらせ給ふ。御使は高家吉良上野介義弼なり。（吉良日記。）〇廿七日　今宮御不豫の聞えあれば。手水番大岡兵蔵忠尊をしてとはせ給ふ。此の日井伊掃部頭直孝に巢鶴二賜ふ。（日記。）〇廿八日月次拜賀例のごし。中院大納言通村卿。宰相通純卿拜謁ありて。銀時服かづけ給ふ。久留島吉松通清初見し奉る。毛利和泉守光廣。京極下總守高治就封の暇下さる。（日記。）〇廿九日日向國飫肥城主伊東修理大夫祐慶死しければ。その子大和守祐久して。原封五万七千石の内五万四千石賜はり。三千石は二子主膳正祐豐に分たしめらる。この祐慶はもとの豐後守祐兵が子なかりしが。關原の時父祐兵病にふしければ。祐慶十一歳にて本國にくだり。ありあふ家子郎等をはじめ。いそぎ軍勢を催し。慶長五年九月晦日飫肥の城を立て宮崎の城を攻落し。佐土原城を責て。こゝかしこの戰に一度の不覺なく。飫原の城に引かへす。かくて祐慶が攻し地は皆本主にかへしけり。そのとし十月十一日祐兵病終にたゝずなりしかば。祐慶本領をたまはつて。七年四月十日叙爵して修理大夫と稱し。（これ迄左京亮と稱しけるは私に稱せしにや。）四十八

下一柳直盛之加封

下貨幣之制

上伊東祐慶卒

歳にて卒したり。またさきに亡命せし大番美濃部權兵衛を。その番頭松平伊賀守忠晴にあづけらる。（寛永系圖。藩輪譜。）〇六月朔日月次の拜賀例の如し。松平淡路守利次。飛驒守利治就封のいとま給ふ。大村松千代純信が證人參府して拜謁す。妙法院門跡堯然法親王上洛の道。小田原の驛にて病臥の聞えあれば。高家畠山長門守義眞もてとはせられ。醫員久志本右馬之助常氏をもつかはさる。一柳監物直盛に一万八千石加恩たまひ。六万八千石になさる。但し勢州神戸を轉下伊豫國西條にて五万八千石。播磨國にて一万石給ひ。加恩の内にて五千石を二子美作守直家に給ふ。直盛は六万三千石を領す。けふ命ぜらるゝは。こたび新鑄の錢井に古錢とも。金一兩に四貫文。壹分に壹貫文にうりひさぐべし。もしそむきて高低の賣買せば。双方より賣買せし價の一倍過料出さしめ。其地の里正より二百疋。每家より十疋づゝ贖出さしむべし。大缺。割錢。無形。ころ錢。なまり錢。新惡錢のほかゑらぶべからず。もし撰ぶもの。これ等の錢をしいてつかふものあらば。あるは其地に三日さらし。又は十日が中獄につなぎ。其地のものは過料前のごとく命ずべし。新錢は府下并に近江國坂本にて鑄造せしむるにより。兩所のほか惡錢に至るまで。一切鑄造すべからず。もし違犯の徒あらば曲事たるべし。こたび新鑄命ぜられしうへは。たとひ古來より通用する惡錢たりとも。謝物賽錢等にも用ゆべからず。公

濃部權兵衛以下の輩。法令違犯の罪に處せられし事を少老傳へ。又權兵衛以下の輩一族近縁のやからをめして。各異儀なく奉仕すべき旨をつたふ。又今田源太郎は天主教の徒をやどしたる罪により切腹せしめられ。其子三人は斬に處せらる。檢使は目付村越七郎左衛門正直なり。(日記。)〇七日大僧正天海參府により。阿部對馬守重次して慇勞せらる。(日記。)〇八日腹物率行山田兵右衛門重勝死して。其子書院番六兵衛勝房家をつぐ。(寛永系圖。寛政重修譜。)〇九日御牙痛のよし聞えければ。家門井踏大名まうのぼり御けしきをうかゞふ。(日記。)〇十日昨日に同じ。(日記。)〇十一日三家に御牙痛おこたらせ給ふ旨仰つかはされしかば。各使して賀し奉らる。諸大名もまうのぼる。竹内門跡眞超法親王所勞により。高家吉良若狹守義冬してとはせらる。醫官武田道安信重暇給はりて上洛す。(日記。寛永系圖。)〇十二日御牙痛ふたゝびおこらせ給ふ。家門井踏大名まうのぼり御けしきをうかゞふ。(日記。)〇十三日踏大名群集昨日のごとし。この日肥後國人吉城主相良左兵衛佐長每卒す。よて後に遺領二万二千石余。その子壹岐守賴寛に譲しめらる。此長每が家は武知藏呂左府の四男乙丸の七世遠江助爲嚴に出たり。鎌倉室町の家人として數世をかさね。父を修理大夫義陽といふ。兄四郎太郎忠房子なかりしかば養子となり。長每十一歳にて家つぎ。天正十五年の夏豐臣關白鎭四を平らげ

られし日本領を安堵し。文祿元年十八歳にて。朝鮮の光陣率りておしわたり。かしこにあること七年にてかへり。慶長五年の秋大阪の命をうけ。美濃國大垣の城を守りしが。大阪にありしときより。大童吉助といふ郎等を關東にたてまつり。御進發あらば裏切すべきよしを申。關ヶ原の戰最中に。秋月高橋などかたらひて。大垣にこもれる敵の大將垣見。熊谷。木村等の首切て獻り。御感にあづかり。本領を安堵し。二万二千石餘を領す。七年にはなのが母を人質として關東に參らす。これ鎭西の大名人質まいらせしはじめとぞ聞えし。八年三月(家譜四年正月十一日とす。)從五位下に叙し左兵衛佐と稱し。大阪の戰には大御所の御陣にしたがひ。元和五年には命をうけて。推葉山の一揆を誅し。ことし六十三歳にて卒せしなり。(日記。寛永系圖。藩翰譜。寛政重修譜。)〇十四日踏大名まうのぼる事昨日の如し。(日記。)〇十五日月次朝會なし。今大路道三親昌。牛井駿庵成近。久志本式部常尹御脉をうかゞふ。(日記。)〇十六日嘉定御祝舊規のごとし。御牙痛によてその所にのぞみ給はず。(日記。)〇十七日　御宮參なし。(日記。)〇十九日尾紀兩邸へ阿部對馬守重次御使して菓子をくらせ給ふ。大僧正天海のもとへ太田備中守資宗御使して。御緣起の事を催促し給ふ。(日記。)〇廿日松平筑前守光高まうのぼり御けしきうかゞふ。(日記。)〇廿一日二丸御移徙あり。井伊掃部頭直孝。土井大炊頭利勝。酒井讃岐守忠勝。松平伊豆守信綱。阿部豐後守忠秋伺公す。(吉良日記。)〇廿二日三家まうのぼり御けしき伺はる。(日記。)〇廿三日御座所にて三家拜謁せらる。この日本多下總守後次一万五千石加へられ。三河の四尾より伊勢の龜山にうつり。五万石になされ。岡部美濃守宣勝は播磨國龍野より。播津國高槻にうつさる。龜山へは內藤伊賀守忠重。山田奉行花房志摩守幸次。使番曾根源左衛門吉次引渡命ぜられ暇給ひ。勘定頭伊丹播磨守康勝は佐渡へ。の暇給ふ。(日記。)〇廿四日紅葉山台德院殿靈廟に土井大炊頭利勝代參す。增上寺方丈智童白木書院にて齋飯をたまふ。伴僧も同じ。高木善之丞正好死す。子なくして家斷たり。(日記。寛永系圖。)〇廿六日大僧正天海病平愈せしかば。まうのぼり拜謁す。二丸にて饗膳を給ふ。松平玄蕃頭清昌。松平庄右衛門清直吉良在番命ぜられ暇たまひ。使番大河內平十郎正勝は同所の御使にさゝれ暇下され。目付石谷十藏貞清。小姓組興頭島田五郎兵衛直次は寛永通寶新鑄の事にて。上方につかはさるゝによりいとま下さる。又大炊御門中納言經孝廻所勞をとはせたまひ。使番能勢治左衛門賴重をつかはさる。(日記。)〇廿八日月次例のとし。宗對馬守義成は參覲し。金森出雲守重賴子左京重利。使番牧野傳藏成純。子伊織成勝初見し奉る。伊織成勝が本生父將監成信は松平新太郎光政が家人なるゆへ。光政も出て謝し奉る。成勝此日書院

番に入る。伊東主膳正祐豐は分封を謝し奉る。使番多賀左近常長。石川彌左衞門貴成は豐後萩原より歸謁す。　大宮よりの御使河原彈正某拜謁す。(日記。寛政重修譜。)○廿九日名越の祓例のごとし。松平新太郎光政就封の辭見し奉る。(日記。)

大猷院殿御實紀卷三十二　寛永十三年七月より始まり九月に終る

○七月朔日拜賀例のごとし。出納大藏豐後將監。御藏因幡。調子筑後井大佛師大經師等日光山より參り謁す。松平越後守光長。上杉彈正大弼定勝。丹羽宰相長重。佐竹修理大夫義隆。加藤式部少輔明成。酒井宮內大輔忠勝。松倉長門守勝家はかれて奉る搆造の功すでに成しかば。かされてまた請ひ申により。別に經營の地を分ち命ぜらる。今切關所番服部坐助政次采邑よりまいり謁す。(日記。)○五日尾紀兩邸へ阿部對馬守重次御使して菓子つかはさる。水戶黃門賴房卿より。新鮭を獻ぜられければ　大內へ驛遞せらる。(日記。)○六日水戶中納言賴房卿長子千代松丸首服加へられ。御名の一字給はり左衞門督光圀朝臣と改らる。よて國宗の太刀。馬代銀三百枚獻ぜられ御盃給はり。行光の御差添をさづけたまふ。父の卿も拜謁し謝せらる。この日鰯料獻ずる例のごとし。高家吉良上野介義弼は京よりかへり謁す。　大宮の御使河原彈正某歸洛の暇たまふ。(日記。)○七日星夕例のごとし。非伊掃部頭直孝所勞により。太田備中守資宗してとはせらる。(日記。)○八日春日局より生御魂の御膳をさゝぐ。(日記。)○十日尾紀水の三卿を二丸茶寮に招きたまひ。御茶給はる。毛利甲斐守秀元。立花飛驒守宗茂も伴食せしめられ。丹羽宰相長重。加藤式部少輔明成。堀丹後守直寄。本多甲斐守政朝は勝手の間に伺公す。永井信濃守尙政御名代として。點茶つかふまつるにより。御衣井上下を給はる。(日記。貞享書上。)○十一日松平筑前守光高始十三人の禦に。使番もて御鷹の雲雀を給ふ。(日記。)○十三日黑木書院にて眞田內記信政二子又八郎某初見の禮をとり。秋田河內守俊季。土屋民部少輔利直は大坂加番。使番眞田長兵衞幸政。堀三右衞門直景は同所目付。使番朝倉仁左衞門在重。大久保甚右衞門長重は因幡目付にさゝれいとま給ふ。(日記。)○十五日三緣山　台德院殿靈廟。　崇源院殿靈牌所に詣給ひ。事畢て方丈へならせられ。方丈智童井役僧に銀時服かづけられ。又法問開召る。其間茶菓を供御す。松平出羽守直政井普第大名も聽聞をゆるされ。これも茶菓をたまふ。僧徒には金地院元良。文殊院應昌左右に侍して同じく下さる。歸御の後方丈智童まうのぼり謝し奉る。(日記。)○十七日紅葉山　御宮御參あり。還御の後大僧正天海齋飯を給ふ。(日記。)○十九日黑木書院に出給ひ。鷹を御覽じ給ふ。(日記。)○廿日紀伊大納言賴宣卿就封辭

上水戶光圀元服

上保科正之轉封

下爲忠恒卒以無嗣除封而特賜信州高遠三万石于弟忠春今襲記

見あり。襲せられ懸あまたつかはされ。安藤飛驒守直治以下の家司等も。襲せられ賜物若干なり。(日記。)○廿一日松平越前守忠宗襲封を謝して。左文字の太刀。時服五十。銀五百枚。黑毛馬一疋獻上。一族井家司等も拜し奉る。故中納言政宗卿の遺物とて。正宗の刀。淺薄四郎の脇差。樋口肩衝。牧溪筆。虛堂贊の三幅を獻ず。この日保科肥後守正之に。信濃國高遠を轉じて羽州寒上山形の城主とせられ。二十万石に封ぜらる。(世に傳ふる所は。これより先御鷹狩のため。目黑のほとりにならせ給ひ。御供四五人めしぐせられ。成就院と聞えし寺に入らせ給ひし。住僧頭巾引かつぎ垣根を補ひて居たり。こゝかりて休まんと仰られしかば。住僧あやしみ。人々はいづくより渡らせ給ふといへば。　公方樣御供の者なりと仰らる。住僧そはさこそ勞し給ひつらん。心やすくやすみ給へといひすてゝ。庭室に入らんとせしかば。お僧こゝにありて物語せられよと仰られながら。客殿の壁に給かきし菊の繪扣からざるを御覽じ。かゝる片田舍の寺にはめづらしき堂殿の結構さよ。いかなる擅越かあるぞと仰ければ。住僧こたへて申けるは。仰の如く片田舍なれば。しかるべき擅越も候はず。たゞ保科肥後守殿と申御方の母うへが。常に祈禱のと賴給へども。保科殿も家貧しければ。布施もゆたかならず。御方々には　公方樣へ宮仕し給ふ人々と承れば。か樣のと申もいかゞなれど。肥後守殿と申は正しく今の　公方の御弟と承るに。いかなれば玉躰の御うへにては御情うすく。御兄弟の御むつみもおはせぬものかなと申けるを聞召。御顏の色少し變じ給ひ。いざ參らんとてたゝせ給へば。御供四五人住僧に向ひ。御僧の情にてつかれし足をやすめたり。重て參り謝すべしといひすてゝ出ぬ。しばしありて御供の人々あまたむれ來り。　上樣はいづくへならせられしぞととふ。住僧　上樣の御事はいかでしるべき。たゞ今まで御供の人とて。四五人此寺に休息せられしといふ。それこそ　上樣なれといはれ住僧大におどろき。はしたなき言申。いかなる罪にか處せらるべきとて。一月ばかりがほどは門より外にも出ずありしが。ほどなく正之朝臣あまたの地加へられ。山形の城給はり。またその寺にもなにとなく寺領御寄附あり。すべて此　御代には御鷹野にとよせ給ひ。いやしきものゝうれへなげきの事しろしめし。惠みほどこさせ給ふ事。いくらもありしと。古き人のものがたりしといへり。まことにや。)放羽州寒上山形の城主鳥居左京亮忠恒卒して子なかりしかば。封地二十二万石を收公ありて。弟鶴千代忠春に信濃國高遠の城給はり。三万二百石領して。祖父彦右衞門元忠が祭を奉せしめらる。この忠恒は故左京亮忠政が子にて。寛永五年九月五日家をつぎ。はじめ級爵して伊賀守と稱し。後左京亮にあらため。この七月七日三十三歲にてうせぬるが。始終多病にて公

のつとめもせず。病にのぞみ後の事も聞え上さりしとぞ。(世に傳ふる所は。忠恒子なかりしかば。弟の忠春して家つがせんと思ふのみならず。忠春が生母は父の妾なりけれど。忠恒が母は既にうせしかば。忠春が生母を我母の如く常につかへしかど。この忠春が母は極めて心すかしき性にて。忠春が家つぐ事の遲きをうれひて。天德寺にはしり入住僧を賴み。此事うたへんとせしかば。忠恒大きにおどろき。みづからかの寺に赴き。色々いひ慰めて。忠春が母をばともなひ歸りしが。此後はかの婦人のこゝろをさすが快とも思はざりしにや。忠春をよつぎに立ん事を願ひもせず。遂に病おもくうせぬるまでも。その事聞えあげずして卒しぬ。このとき　上には鳥居が累世の功を思召て。忠春に封つがせらるべしと仰られしを。井伊掃部頭直孝忠恒が身を終るまで。出てつかふまつる事もせて。よつぎの事をも望請申さざる條。憲法にそむき公なないがしろにするといふべし。かゝる罪をこらさずんば。向後何を以て天下の法制をばたゞさるべきと申ければ。忠恒が封地はのぞかれしといへり。或說に。こは直孝が兄兵部少輔直勝が妻は。故左京亮忠政が女なりしが。直勝は天性おろかなる人にて。その妻にたはむれて顏に疵付しを。父忠政憤り彼妻をうばひかへしたるより。井伊鳥居が家この年頃不快なりしかば。事によせて直孝その讐怨をむくひたるなりといへど。直孝は當時の名臣にて。その言行古人にも恥ざるほどの人なり。いかで私の恨をさしはさみ。公の事をはかるべき。全く太平ほとんど百年。天下の禮制をさだめらるべき時にあたり。普第の家より先憲法をたゞし。外藩の輩をして改觀せしめたるものなるべし。さればこそ　上にもその旨にしたがはせ給ひしものなるべし。日記。貞享書上。寛永系圖。藩翰譜。家譜。)〇廿三日城溝没利功なりしにより。その事にあづかりたる家々の家司下奉行等に。銀時服かづけらる。(日記。)〇廿四日紅葉山　靈廟に詣給ふ。遵御の後增上寺方丈智童齋飯を下さる。伴僧五人もおなじ。使番齋藤左源太利政。大番組頭天野孫左衞門重房信州高遠城引渡命ぜらる。(日記。)〇廿五日黒木書院に渡御ありて。ありあふ雜拜謁す。この日　仙洞(新鮭を驛進し給ふ。(日記。)〇廿六日中院父子暇給ひ。亞相に銀百枚。雌子十。宰相に三十枚六たまふ。(吉良日記。)〇廿七日外郭石垣井城溝成功せしにより。其事つかさどりたる大目付柳生但馬守宗矩。普請奉行佐久間將監實勝。町奉行加々爪民部少輔忠澄。細式部少輔直之金廿枚づゝ。普請奉行朝比奈源六正重。書院番駒井次良左衞門昌保金五枚づゝ給ふ。尾張大納言義直卿のもとに太田備中守資宗御使して。雲雀をつかはさる。井伊掃部頭直孝は御前にめして給ふ。松平阿波守忠英妻大病によて。使番駒木根長次郎政次してとはせらる。寂上の地五万五千石井延澤銀山の代官

外郭石垣及城溝成

下港灣之制

上箱根關法度

を。小林十郎左衞門時喬に命ぜらる。(日記。)〇廿八日松平越前守忠宗初使番して。雲雀下さるゝ者九人。(日記。)〇廿九日相應院(尾張義直卿生母。)に林檎。養珠院(紀伊賴宣卿生母。)英勝院。(水戸賴房卿養母。)一位の尼。清雲院尼。及び尾紀兩世子の生母良雲院。清涼院(松平伊豫守忠昌母。)に雲雀。松平越前守忠宗。松平新太郎光政。松平阿波守忠英。生駒壹岐守高俊の母。加賀黄門女子。越前守忠宗。松平長門守秀就。新太郎光政。細川越中守忠利。鍋島信濃守勝茂。毛利甲斐守秀元。松平安藝守光晟妻へも同じく給ふ。(日記。)〇晦日松平右衞門大夫正綱。松平出雲守勝隆。出羽寂上山形の御使命ぜられ。使番牧野傳藏成純は同所の目付にさゝれ。大番組頭笈新太郎正成。小姓組武藤理兵衞安信。長谷川太郎兵衞正清は上方筋公料の國廻り。大番組頭市岡左大夫正次。國廻役米原甚左衞門重正。鵜岡與右衞門茱は。關東國廻りにさゝれ暇下さる。(日記。)〇是月中澤甲六郎吉潤大番に入る。(家譜。)〇八朔拜賀例のごとし。夕方御船にて海岸納涼したまふ。(日記。)〇二日けふ相摸國箱根の關に條約を下さる。その文にいふ。往來の旅人關所前にて笠頭巾を脱せしむべし。もし轎にのらば戸をひらかせ通すべし。女乘物は婦女をして改めしむべし。公家門跡その他大名高家等は。あらかじめその沙汰あるべければ査檢に及ばず。されどいぶかしげなるさまあらば。制の限にあらず。此旨守るべしとなり。又各浦に高札を建らる。其文にいふ。官船はいふ迄もなし。諸船とも風雜にかゝるときは。其地より船を出して救ふべし。磯近き地はなるべき程心いれ。破損せざらんやうすべし。船破壞のとき船主請托するにおいては。その油のもの荷物心いれてとりあぐべし。さあらんにはとりあげし中浮荷は二十分一。沈荷は十分一。川船は浮荷三十分一。沈荷は二十分一遣すべし。洋中にて難船荷物を投ずるときは。その船着せる地の湊にて。代官幷に庄屋出合し査檢を加へ。殘りし荷物を註記し。證狀を出すべし。されど水主土人とはかりあひ。盜とりし荷物を海に投ぜしよし申偽るにおいては。後日に聞ゆるとも。船頭はさらなりはかりあひし徒も。ともく斬に處せられ。一艘の土人等も每家過料錢千疋づゝ出すべし。すべて不其のふるまひあらば。其地のものはいふ迄もなし。他所のものたりとも。うたへ出ば褒賜あるべし。且犯科の徒は罪の輕重にしたがひ。とがめらるべしとなり。(德敎類典。武家嚴制錄。)〇三日寂上山形の代官小林十郎左衞門時喬隊千俵たまひ。その子彦五郎重定。これまで十郎左衞門時喬にたまはりし三百俵を給ふ。(書院番松田善右衞門勝政淺草門作事奉行命ぜらる。(日記。家譜。)〇四日明年正月五日後本城搆造あるべきにより。その期に先立て。人夫參着せしむべき旨。助役の輩に仰出らる。(日記。)〇五日昨夜より大風。寅刻地震によて。諸大名ま

上朽木蒔綱列諸侯　上柳生宗矩列諸侯

のぼり御けしき伺ふ。躰て二丸にて申樂命ぜられしが。これも大風によりて停めらる。(日記。)○六日高家土岐左馬助頼勝二子大學頭成。三子藏人頼長初見し奉る。美濃衆高木二郎兵衛貞元。同權右衛門貞勝參謁す。(日記。)○七日二丸にて猿樂あり。白髭。朝長。夕顏。葵上。蘆刈。櫻川。祝言。養老。家門諸大名にみせしめらる。(日記。)○八日二丸より品川へならせ給ひ。同じ浦傳ひ御船もて還御なる。(日記。)○九日水邨より新鮭をさゝげらる。この日小姓組に入番二十二人。(日記。)○十日白木書院に出給ふ。御直垂なり。九條前關白幸家公井息松殿大夫道昭御對面あり。この日朽木民部少輔稙綱六千石加へて一万石になさる。又諸物頭御前に召て面命の旨あり。(日記。)○十一日松平越前守忠宗。伊達遠江守秀宗就封の辭見す。未後大橋龍慶重保が高田の隱居にならせ給ひ御宴あり。(日記。)○十二日水戸中納言頼房卿病快くてまう登り拜謁せらる。けふ尾張大納言義直卿のもとに。松平伊豆守信綱御使し。大僧正天海のもとに三浦志摩守正次御使して。ともに菓子つかはさる。(日記。)○十四日尾張大納言義直卿のもとに。阿部對馬守重次もて新鴨をつかはさる。この日柳生但馬守宗矩に。四千石の加恩ありて一万石になされ。大目付の職をゆるさる。(日記。)○十五日月次の拜賀例のごとし。保科肥後守正之新封の地にまかるにより。辭見して行光の御刀を給ふ。寂上仙德丸義智初見し奉る。酒井左京亮忠次死して。子なく家たゆ。間宮彦次郎忠次蒲原代官を命ぜらる。此度保科肥後守正之信濃國高遠より。出羽國山形城へ轉封により。彼地に高札を建らる。喧嘩口論停禁のうへ。もし遠犯の徒あらば。双方とも誅戮せらるべし。與黨のものは其咎本人より重かるべし。竹木一切伐とるべからず。押買狼藉すべからず。山形を立除盤從者を鄉里に返す事。其他何事によらず申旨あらば其主に告。なほ決せざる事あらば。御使の部につけて指揮うくべし。もし遠犯し道途にないて無を儘し。ものあらがひせば曲事たるべし。奴僕の事高遠にまかる輩召具すべし。當代にあらざるものは。主從はかりあふまいたるべし。租稅の未進にめしつかふ男女は。高遠迄護送し本國にかへすべし。されど二十年過ば。高遠に赴かざるものたりとも當代たるべし。はた當代に抱へおく男女。まぎらはしからざらんには其儘たるべし。租稅の未進は糞捐たるべし。こたび高遠に移る部は。百石に馬一疋。人夫一人是を出し。二日路をくるべし。種貸の事城廓より出し。借興へたる事分明なるにをいては。辨濟せしむべし。かり物は證狀のまゝたるべし。このむれ遠犯すべからずとなり。(日記。寛永系圖。條令。)○十六日水戸黄門まうのぼり。朽木民部少輔稙綱御使せられしを謝せらる。(日記。)○十七日東叡山にならせらる。　御宮に參らせ給ひ。大僧正天海が坊にて御膳を献ず。尾水兩卿御相伴にまいらる。酒井左京亮忠久死して。子なく家たゆ。間宮彦次郎忠次蒲原代官を命ぜらる。此度保科肥後守正之信濃國高遠より。出羽國山形城へ轉封により。彼地に高札を建らる。喧嘩口論停禁のうへ。もし遠犯の徒あらば。双方とも誅戮せらるべし。與黨のものは其咎本人より重かるべし。竹木一切伐とるべからず。押買狼藉すべからず。山形を立除盤從者を鄉里に返す事。其他何事によらず申旨あらば其主に告。なほ決せざる事あらば。御使の部につけて指揮うくべし。もし遠犯し道途にないて無を儘し。ものあらがひせば曲事たるべし。奴僕の事高遠にまかる輩召具すべし。當代にあらざるものは。主從はかりあふまいたるべし。租稅の未進にめしつかふ男女は。高遠迄護送し本國にかへすべし。されど二十年過ば。高遠に赴かざるものたりとも當代たるべし。はた當代に抱へおく男女。まぎらはしからざらんには其儘たるべし。租稅の未進は糞捐たるべし。こたび高遠に移る部は。百石に馬一疋。人夫一人是を出し。二日路をくるべし。種貸の事城廓より出し。借興へたる事分明なるにをいては。辨濟せしむべし。かり物は證狀のまゝたるべし。このむれ遠犯すべからずとなり。(日記。寛永系圖。條令。)○十六日水戸黄門まうのぼり。朽木民部少輔稙綱御使せられしを謝せらる。(日記。)○十七日東叡山にならせらる。　御宮に參らせ給ひ。大僧正天海が坊にて御膳を献ず。尾水兩卿御相伴にまいら

下諏田廣定卒　上桑山一直卒

れ。普第衆仰によりて供奉すといふ。(日記。紀年錄。)○十九日高田馬場にならせ給ひ。諸士の馬藝を試給ひ。大橋龍慶重保がもとに過らせられ。御膳を召上らる。(日記。)○廿日老臣評定所に會して。津輕土佐守信義が家士等訴訟を聽斷す。(日記。)○廿一日黒木書院にて御談伴井普第の罷臨時に拜謁す。本多下總守俊次神戸の城の諸士井健兒が屋舍のまゝ給はりしを謝し奉る。大番頭松平伊賀守忠晴が子刑部少輔忠俊初見す。番士の子十余人も同じ。井伊直孝佐直滋就封により志津の御刀を下さる。此日九條前關白幸家公の旅館に。高家吉良若狹守義冬御使して。鮭一隻樽一荷をくらせ給ひ。松殿大夫道昭には鮭貳隻つかはさる。又土井大炊頭利勝。松平伊豆守信綱。阿部豊後守忠秋。堀田伊賀守正盛仰うけて惣郎虎口を巡視す。(日記。)○廿二日袁四へならせ給ひ。銃にて眞鴈。鴻にて鴻白鳳鴨鸛を得給ひ。眞鴈は　大内。鴻は　仙洞に驛進せられ。又尾水兩邨へ鴻一隻づゝ。松平伊豫守忠昌へ鴈を給ふ。大和國布施領主桑山左衛門佐一直卒しければ。その子修理亮一玄して。遺領一万六千石をつがしむ。この一直は九郎五郎一重が二男にて。兄修理亮一晴がゆづりをうけたり。一直十九歳より　當家につかへ奉り。關原の戰に本多中務大輔忠勝が手に屬し。大谷刑部少輔吉隆が鐵炮頭一人を打取て献る。兄が家つぎ慶長九年八月十二日叙爵して左衛門佐と稱し。十九年大阪の軍おこりしとき。一直大和國より馳向ひ。河内國磐田に於てみづから敵二騎が首取て献る。元和元年ふたゝび兵起りしとき。道明寺の戰に首十七切て献り。城落し日又首百十九切て奉る。其後駿府につかへしが。　神祖御大病にのぞみ。仰をうけて江府に參り。寛永十年北陸山陰兩道を巡檢し。この日五十九歳にて卒しけるなり。(日記。家譜。寛永系圖。藩翰譜。)○廿三日昨日は今年はじめて御狩有しをもて。狩場にあづかるともがら。銀たまふ事差あり。關東郡代伊奈半十郎忠治は御狩場にて饗し奉りしにより。時服羽織を下さる。諏田左衛門權佐廣定死しければ。遺領一万石を分ち。長子玄蕃頭定正に陸料千三百石を合して。八千三百十石餘を給ひ。二子數馬長房に三千石下さる。この廣定が先は諏田民部少輔維昌が後胤にして。陸奥國諏田に住しければ家號とす。後尾張にうつりて。父相摸守廣光は織田豊臣兩家につかへ。廣定が時に至り一万石を領し。關原の軍破れて御家人にめしかゝへられ。備中河内山城等の國々にて一万石餘賜はり。大坂兩城の役にもしたがひ奉り。けふ六十六歳にて卒せしなり。(日記。家譜。寛政重修譜。)○廿四日三緣山にならせたまふ。增上寺方丈智童齋飯を給ふ。この日鈴木佐兵衛重泰。梶川甚五兵衛正次。梶川金彌重昌。野口兵左衛門成次。酒井作兵衛重行。鈴木友之助重氏。牧野八大夫尹成。長谷川半右衛門重治。坂部左五右衛門正重。佐久間久七郎某の十人御

勘氣を蒙さる。(日記。)〇廿五日黒木書院に出給ひ。御暇伴並ふ。其鴻は直に　大宮の御かたへ歸參し給ふ。(日記。)〇七に暫第のともがら拜謁す。花房五郎左衛門職利弟平左衛門職日松平越後守光長。松平筑前守光高。上杉彈正大弼定勝に。銃休。畠山長門守義直子式部義里。天野對馬守康宗二子源右衛門もてとらせ給ふ脇を下さる。(日記。)〇八日黒木書院へならせ康信。村上次郎左衛門三正子孫八郎正尚。殿樂市左衛門貞信二給ひ。稻葉美濃守正則參覲す。三家はじめ重陽時服獻ぜし家々子甚之助貞正。山崎權八郎正信子四郎左衛門重政。(日記には の使者拜謁す。目付石谷十藏貞清。小姓組島田五郎兵衛直次上子とのみしるして名なし。寛永譜には重政寛永四年よりつか方より歸謁し。使番齋藤左源太利政。大番組頭天野孫左衛門重へ奉るとあれども。重修譜に重政が弟の初見年月を誤りて日房。信濃の高遠より歸謁す。(日記。)〇九日重陽例のごとし。記に合せず。且弟の初見みな後年なれば。止事を得ずしばら(日記。)〇十日安部摂津守信盛加恩四千石たまひ。九千二百く。重政をもて此日の初見とす。)長田喜兵衛吉廣子大學吉正。五十石餘となる。この日森川金右衛門氏信は百人組頭となり。赤井六兵衛公雄養子庄之助公久初見の禮をとる。土屋權十郎永見新右衛門重成は持弓頭となり。新庄美作守直房は書院番重政養子權十郎頁吉家つがしめらる。又酒井讃岐守忠勝就封頭となる。秋元但馬守泰朝日光山　御宮代參命ぜらる。尾張のいとまたまはり。寛光の御刀並歷を下さる。この日上杉彈正大納言義直卿まうのぼり。この廿一日臨覲の事。仰出されしを大弼定勝のもとに。書院番頭三枝土佐守守恵御使して菓子を謝せらる。(日記。寛政重修譜。)〇十二日御船にて海邊へならたまふ。(日記。)〇廿七日各所の訴訟ども聞召る。この日せられ。銃にて白雁その外數多御得物あり。御膳さに永井信太后の御もとへ御消息をつかはさる。(日記。)〇廿九日九條前濃守尚政が深川の別墅によぎらせ給ひ御膳を獻ず。(日記。)〇關白並松殿大夫の旅館に。高家大澤右京亮基重御使して。魚物十三日九條前關白井松殿大夫を饗せられ。二丸にて猿樂あり。菓子つかはさる。(日記。)〇九月朔日拜賀例のごとし。鳥居鵜皇帝。忠度。采女。道成寺。鵜飼。羅城門。親盲。三番過て饗行はる。丹羽宰相長重。毛利甲斐守秀元。立花飛驒守宗茂。加藤式部千代忠春初見し奉る。けふ紀伊亞相のもとへ御内書をつかはさる。丹羽宰相長重。毛利甲斐守秀元。立花飛驒守宗茂。加藤式部さる。(日記。)〇五日大僧正天海御座の間にめして拜謁せら少輔明成。堀丹後守直寄井普第衆および大僧正天海。增上寺る。けふ尾邸に阿部對馬守重次御使して菓子つかはさる。(日智嚴。金地院元良澤庵。知樂院忠尊。文珠院應昌。知足院。國記。)〇六日海づらに御船にてならせ給ひ。銃もて鵰鷹を得給福寺俊賀伺候す。傳陸より楠打來。松殿より薬物さゝげらる。

又昨日銃にて打留給ひし鴻を。松平安藝守光晟。佐竹修理大夫義隆に給ふ。丹後國田邊城主京極修理大夫高三が遺領三万五千石を。其子六丸高直につがしめらる。この高三は故丹後守高知が三男なり。慶長十六年三月二條城にて。　雨御所に初見す。時に五歳。元和八年父卒せしとき。沒前の願にて三人の子に所領わかち給はりし時。高三田邊の城主となり。三万五千石を領し。叙爵して修理大夫と稱し。この日三十歳にて卒せしなり。(日記。寛永系圖。藩翰譜。寛政重修譜。)〇十四日さきに紀老安藤飛驒守直治死しければ。亞相頼宣卿御内書をつかはされ弔せらる。(日記。)〇十五日二丸より三條山にならせられ。遺御の後增上寺智童に齋飯をたまふ。伴僧もおなじ。この日阿部對馬守重次を。日光山につかはさる。(日記。)〇十七日紅葉山　御宮に參らせ給ふ。水戸中納言頼房卿病臥により。太田備中守資宗御使してとはせらる。遠山小右衛門景次死す。其子七郎左衛門景直に家つがしめらる。されど景直幼稚なれば。先に給はりし加恩二百石は收公せられ。本領五百石たまふ。けふ上野國五科の關守に。條約を下さるゝ事。前月二日箱根の關に給はりし令におなじ。(日記。家譜。大成令。)〇十八日先に駿河大納言忠長卿につかへし島居淡路守忠房。(忠房は翌年七月十四日卒す。其弟内膳十六年に至り召出さる。)屋代越中守忠正。三枝伊豆守守昌。日向半兵衛政成。門奈傳八郎勝重。小林左次兵衛重勝。松崎權左衛門吉次。三枝喜之助守盛。宮城半助貞正。木村三郎左衛門某召かへさる。(日記。)〇十九日水戸黄門病愈てまうのぼられ。先に御使つかはされしを謝せらる。(日記。)〇廿日松平五左衛門正吉老衰せしかば。進物番をゆるさる。(日記。)〇廿一日尾張大納言義直卿の邸に臨駕あり。まづ茶室にならせ給ひ御茶奉らる。御相伴は水戸黄門。越後加賀の兩少將。毛利甲斐守秀元。立花飛驒守宗茂なり。御茶はてゝ長袴めされ。書院にわたらせ給ひ。こゝにて大納言みづからのしをもち出らるゝを。太田備中守資宗うけとりて御前に奉れば。御手ふれ給ひ。のしは御右におく。この時大納言のかたへ賜物定利の御太刀一振。銀三千枚。小袖二百。八丈袖三百反。長子右兵衛督光友朝臣へ眞守の御太刀一振。銀千枚。小袖五十つかはされ。はてゝ三獻の御祝。亞相黄門右兵衛督御相伴あり。初獻の御盃亞相へつかはされ。返盃ありて黄門給はり。又かへし奉りて右兵衛督給はらる。二獻も是に同じ。三獻の御盃つかはさるゝ時。亞相に正宗の御刀。和泉吉光の御脇差を給ふ。その御盃かへし進せらるゝとき。鍋島郷の刀。來國光の脇差を奉られ。この御盃黄門につかはされ。黄門返盃せられ。かさねて其御盃右兵衛督に給はるとき。正宗の御脇差をつかはされ。右兵衛督に酬奉らるゝ時。眞宗の刀をさゝげらる。次に廣間にならせらる。此とき家司はじめ家士等。廊下に並ゐて拜

し奉る。廣間にて亞相より久國の太刀。鍍馬。(黒。)金三百枚。小紬二百。綿千把。紅糸二百斤。白糸百斤。金襴三十間。金入綸珍百卷。金吾より國綱の太刀。銀三百枚。(一に千枚につくる。)猩々緋十間。羅紗十間獻ぜらる。次に成瀬筆人正正虎。竹腰山城守正信はじめ。家司共太刀目錄もて拜し奉る。正虎正信は銀三百枚。小袖十。竹腰出雲守成方は銀二百枚。小袖五獻ず。次に猿樂あり。この間亞相の生母相應尼には。銀三百枚。綿三百把。北方は銀三百枚。緋綸子三十卷。息女へ緋さあや五十卷。白紗綾五十卷つかはされ。畢て正虎。山城守正信時服十。銀二百枚づゝ。出雲守成方時服五。銀百枚。志水藏人忠政時服十。銀百枚。其外賜物差あり。次に常陸介光貞朝臣。左衞門督光圀朝臣拜謁ありて臨觴を謝せられ。直に御次に伺候せらる。猿樂へは亞相より時服要脚たまはり。山城守正信繩頭の事をつとむ。かさねて奈良晒の御盃いでゝ。七五三の御膳奉られ。又三獻の御盃ありて。亞相黄門金吾御盃給はらる。この時相應院より貪籠。北方より杉重箱さゝげられ。猿樂はてゝかへらせ給へば。亞相父子並黄門まうのぼり謝せらる。御相伴の罷もおなじ。この日普第の衆供奉するといふ。(日記。紀年錄。)〇廿二日高田へならせ給ひ。銃にて鵠胚鷺を打取たまふ。大橋龍慶重保が宅にて御宴あり。(日記。)〇廿四日三條山に詣給ひ。還御の後增上寺智童齋飯を給ふ。伴僧もおなじ。齋はてゝ御前にめさる。

この日松平下總守忠明就封の辭見し。志津の御刀並鷹馬を下さる。又川副六兵衞重次死しければ。その子六兵衞重勝に家つがしめらる。(日記。寛永系圖。)〇廿五日葛西に御鷹あり。鵠鴻鴈等あまた得たまふ。(日記。)〇廿六日昨日御狩の鵠を。仙洞に驛進し給ふ。又尾張亞相に鵠をくらせ給ひ。薩摩黄門並森内記長繼には。銃にて打留給ひし菱喰を給はり。又鵠を紀伊亞相に驛贈せらる。この日戸田左門氏鐵。水野監物忠善。本多伊勢守忠利。遠山刑部少輔秀友參覲し。松平右衞門大夫正綱。松平出雲守勝隆。牧野傳藏成純。勘定組頭壺井金大夫永重。出羽の寂上よりかへり。野一色外記義重伊豫よりかへり。伊丹播磨守康勝は佐渡よりかへりともに拜謁す。能勢次左衞門賴重駿府目付にさゝれ暇給ふ。毛利甲斐守秀元。丹羽宰相長重。立花飛驒守宗茂には。使番して鷹を下され。井伊掃部頭直孝は御前に召て給ふ。又佐竹修理大夫義隆は黄鷹。土井大炊頭利勝。阿部備中守正次は鷲を獻ず。昨日の御狩に鵠を得給ひしもて。鷹師頭小栗長右衞門政次。戸田久助貞吉に金一枚。小袖一づゝ。所圀にも銀を給ふ。(日記。)〇廿七日小姓組島田五郎兵衞直次。安部平三郎信孝は小姓組の與頭となり。荒川右馬助定安は書院番組頭となり。中澤瀬兵衞吉實。深澤彦兵衞正俊は小十人組頭となる。又書院番頭柴田筑後守康長が遺領を分て。三千石は長子小姓組七九郎康久。七百石は二子小姓組新兵衞康

上授黒印及下知狀于駿府城役之士

明にくだされる。この日　女院附天野黔前守長信上洛のいとまたまふ。けふ駿府戍役の輩に御黒印を下さる。其文にいふ。萬事法令を守り。番頭の指揮いさゝかも違犯すべからず。喧嘩口論是を停禁す。もしさる事あらば。其所に在合輩とりをさむべし。鬪論にも及ぶまじき程の事をみながら。事に及ばしむべからず。もし荷擔せしめば。そのつみ本人より重かるべし。たとひ何等の故ありとも。城中を出べからず。此旨を守るべしとなり。また老臣連署の下知狀には。戍役の番士自餘の輩と出會すべからず。直所に兵械を置べし。番士のともがら五に警應すべからず。されど番頭の宅に於て饗するとき。二汁三菜の外。肴吸物以下無用たるべし。酒は三盃に限り。大盃は用ゆべからず。此旨守るべしとぞ。(日記。柳營禁令。)〇廿八日月次なり。大關土佐守高增。植村長門守泰朝駿府加番にさゝれいとまたまふ。先手鋭炮頭植村五郎右衞門正次。二子三四郎正信。駒井清左衞門長成子孫七郎長治。歩行頭堀田權右衞門一純子權六郎一幸。小十人頭落合小平次道次。二子左平太某。逸見市之丞某記子左源太義元。書院番鵜殿新七郎氏信子大學某。秋山伊兵衞正勝子七郎兵衞朝正。大番組頭筧新太郎正成二子源大夫正近。松下與兵衞重綱養子甚三郎直綱。齋藤久右衞門信正二子友之助利實。佐橋甚兵衞吉次二子甚三郎吉命。大番清水平三郎恒豐が子牛之助照豐。内藤金左衞門忠次子八郎左衞門忠正。高林又十郎直重子左之助某。神谷傳十郎政成子左門政久。河野庄大夫照真子熊之助通長。大久保久六郎忠重子作十郎忠於。窪永喜左衞門正義二子三九郎守時初見の禮をとる。作十郎忠於はのち大番にいる。(日記。寛政重修譜。寛永系圖。)〇廿九日大番島長兵衞元利組頭になる。(寛政重修譜。)〇晦日地震午刻より酉下刻に至る。(日記。)

大猷院殿御實紀卷三十三　寛永十三年十月に始り十二月に終る

〇十月朔日拜賀例のごとし。三宅大膳亮康盛參觀す。使番拓植平右衞門正時。書院番喜多見五郎左衞門重俊。豐後府内目付にさゝれ暇たまふ。宗對馬守義成より黄鷹。阿部對馬守重次鷂を獻ず。又伊東大和守祐久。相真壹岐守賴寛就封の暇給ふ。けふ地震猶やまず。(日記。)〇二日九條前關白旅館に。高家吉良若狹守義冬御使して。鵜井酒樽をおくらせ給ふ。(日記。)〇三日地震。(日記。)〇四日亥猪御祝あり。(日記。)〇五日葛西へ御鷹狩にならせ給ひ。島根にて雲鵬奉る。御得物は眞鵠。白鵠。玄鵠なり。又鐵炮にて眞鵠白鳥を打留たまふ。(日記。)〇六日昨日銃にて打取給ひし白鳥を。大内へ驛進し給ふ。又水戸黄門へ鵠をつかはされ。薩摩黄門へも鵠を驛賜せらる。此日二丸に普第

の數をめして。鶴の料理をたまふ。(日記。)〇八日加賀黄門井
細川忠興入道三齋。峰須賀家政入道蓬庵へ鶴を贈賜せらる。本
多甲斐守政朝始。就封のいとま給ふもの九人。甲斐守政朝には
弘行の御刀を下さる。隣壁黄門所勞の聞えあるにより。御内書
を下され。また醫官久志本式部常尹を薩州につかはされ。治療
せしめらる。此日書院に入番六人。又今年韓人來聘により。府
内の館伴を安藤右京進重長。脇坂淡路守安元に命ぜらる。(日
記。)〇九日春日局が大久保の住居へ。尾水兩卿を招請するに
より。太田備中守資宗御使して菓子を下さる。(日記。)〇十日
諸有司をめして政事を議せらる。(日記。)〇十一日海邊より角
田河のほとりへ御狩あり。白鳥眞鶴鴈鴨あまた得給ふ。又銃に
て白鳥を打留給ひ。御舟にて還御なる。(日記。)〇十二日青山
大藏少輔幸成。松平主稅助忠昭。木下左近利三參覲す。市橋下
總守長政上方國廻りにて。歸謁す。昨日御鷹のとりし鶴もて。
諸老臣諸物頭を饗せらる。又鶴とりし鷹をすえたる鷹匠へ銀
十枚給ふ。(日記。)〇十四日樞大納言局へ御みづから御消息つ
かはさる。これは　院のうへより。律令の事仰つかはされし
によりてなり。武藏國金澤の文庫に。鎌倉將軍家の時より律令
の古本收納あるよし　院聞召て。仰進られし旨をもて。松平
伊豆守信綱奉り。鎌倉建長寺圓覺寺の四堂をはじめ。僧徒二十
余人をめし。海禪寺に於て影寫せしめ。傭役林道春信勝。永喜
信澄これを挍正し。廿一日の間に成功して京に進らせ給ふ。こ
のとき書物奉行屋合伊左衛門具枚。三雲内記定氏。關兵三郎正
成。四尾加右衛門正保も。その事を沙汰せしとぞ。(日記。寛永
系圖。)〇十五日增上寺智童に齋飯を給ふ。また大僧正天海の
もとに太田備中守資宗御使せり。(日記。)〇十七日御感冒によ
り　御宮參なし。土井大炊頭利勝代參す。この日諸寺諸山の
僧徒社人等御朱印を給ふ。三河國大樹寺は白木書院。其外は
大廣間に老臣列座して。高力攝津守忠房各通をさづく。其文は
みな儒役林道春信勝が議し定むる所とぞ。この日地震やゝ久
し。(日記。)〇十八日高家吉良若狹守義冬。大澤右京亮基重御
使して。九條前關白幸家公井松殿大夫道昭に菓子をつかはさ
る。(日記。)〇十九日前關白の旅館へ。土井大炊頭利勝御使す。
けふ青山大膳亮幸利就封の暇給ふ。(日記。)〇廿日酒井讃岐守
忠勝在封により鶴を驛賜せらる。博陸の旅館へ土井大炊頭利
勝御使して歸洛の事仰遣はされ。博陸へ銀五百枚。越前綿五百
把。松殿大夫に銀二百枚。小袖十賜らせられ。陪從せし樋口中
將信孝銀二十枚。小袖三給はり。井殿下の家司四人銀十枚づゝ
下さる。又松殿大夫道昭に新恩千石給はる旨をつたへらる。甚
副の高家吉良上野介義弼なり。(日記。)〇廿一日水戸黄門へ太
田備中守資宗御使せり。(日記。)〇廿二日九條前關白幸家公井
松殿大夫道昭辭見せらる。松平隱岐守定行參覲す。けふも寺社

上關人入貢

人へ御朱印をたまふ。(日記。)〇廿四日三緣山へ土井大炊頭利
勝代參す。增上寺智童は白木書院にて齋飯を給ふ。伴僧もおな
じ。(日記。)〇廿七日寺社の御朱印を頒布せらる。(日記。)〇廿
八日中奥番命ぜらるゝ者六人。進物番命ぜらるゝもの十七人。
(日記。)〇十一月朔日拜賀例のごとし。牧野内膳康成。同播磨定
成參覲す。宇治の猿年稅の半をゆるされしを謝し奉る。入貢の
關人御覽あり。又寺社人に御朱印を下さる。(日記。)〇四日海
邊にならせ給ひ。鴈鴨あまた狩得たまふ。(日記。)〇五日花畑
番安藤一郎兵衛忠次紀伊國の御使奉る。これ鶴をくらせ給ふ
によりてなり。この十二日水戸中納言賴房卿の邸に。臨駕の事
仰出さる。又寺社の御朱印を頒布せらる。(日記。)〇六日中納
言賴房卿まうのぼり。臨駕の命を謝せらる。水野淡路守重長就
封の暇たまふ。有馬兵部大輔忠賴參覲す。又大樹寺寺領御判を
謝し。傳通院參内并歸寺を謝す。又三宅大膳亮康盛が子隼人康
勝初見の禮をとる。使番石川六左衛門重勝。能勢小十郎賴隆は
湖々よりかへり。大番組頭覺新太郎正成。小姓組武藤理兵衛
安信。勘定長谷川太郎兵衛正淸は上方巡見にてゝかへり。大番
組頭市岡左大夫正次。勘定組頭糸原甚左衛門重正。鵜岡與右衛
門某關東國廻りにてゝかへり謁す。松平美作守定房より弟憑
兒憑を獻ず。また御談伴并普第衆拜謁す。(日記。)〇八日岩淵
に御狩あり。鶴。白鳥。鴈。鴨。鷲を得給ふ。憑匠頭戸田久助良吉
子七郎左衛門吉成。三子樞之助吉眷。久松彦左衛門定佳子喜三
郎定延。峰屋作内榮知子樞三郎榮之。稻田喜藏正信御狩場にて
初て見え奉る。(日記。)〇九日昨日御狩の白鳥を尾張亞相。鶴
を水戸黄門へつかはさる。御使は太田備中守資宗なり。松平伊
豫守忠昌には使番もて鶴を給ふ。又井伊掃部頭直孝は御前に
於て鶴を下され。松平出羽守直政はじめ十六人の輩は。黒木書
院にて高力攝津守忠房もて下さる。昨日鶴とりたる鷹據たる
ものへは銀をたまふ。(日記。)〇十日黒木書院に出ます。藤堂
大學頭高次。永井日向守直淸參覲す。榊原飛驒守職直井に馬場
三郎左衛門利重長崎より參謁す。井上筑後守政重は韓使來聘
によりて。岡崎の驛まで慰勞の御使仰付らる。(日記。)〇十一
日水戸黄門賴房卿まうのぼられ。昨日の臨駕を謝せらる。(日
記。)〇十二日水戸の邸にならせ給ふ。先數寄屋に迎へ奉り。御
茶奉らる。尾張大納言義直卿。越後加賀の兩少將。毛利甲斐守
秀元。立花飛驒守宗茂御相伴たり。御茶畢て長袴めされ書院に
わたらせ給ひ。中納言賴房卿めし奉らる。賴房卿へ恒次の御太
刀。銀二千枚。八丈綿紬二百反。小袖百。長子左衛門督光圀朝臣
へ雲生の御太刀。銀五百枚。小袖三十遣はさる。御三獻ありて
御盃を黄門へ還はされ。黄門かへし奉られ。又其御盃を亞相に
つかはされ。亞相返し進らせられ。かさねて金吾につかはさ
る。二獻の御盃始に亞相につかはされ。次に黄門。次に金吾。三

獻の御盃黄門につかはさるゝ時。光忠の御刀。正宗の御脇差を引せられ。黄門より御盃かへし奉らるゝとき。義弘の刀。來國次の脇差をさゝげらる。次に金吾にその盃つかはさるゝとて。貞宗の御脇差を引せられ。金吾より返盃のとき。新藤五の脇差をさゝげられ。その盃を亞相給はり。酬奉りて納めらる。次に齋間へならせ給ひて。黄門より來國行の太刀。金二百枚。小袖百。綿千把。糊稻二十卷。(紀年錄縞珍五十卷につくる。)糸二百斤。鞍馬一疋。(黑毛。)金吾より助守の太刀。銀二百枚。猩々緋十間。羅紗十間獻ぜらる。次に中山備前守信吉。東市正信正はゝ め家司等十九人。太刀目錄并時服さゝげ拜し奉る。山野邊彌八郎義堅は初見す。次に猿樂始る。難波。經政。千壽。熊坂。祝言。此間に英勝院へも銀二百枚。卷物三十つかはされ。備前守信吉。東市正信正に銀百枚。時服十。山野邊右衞門大夫義忠銀五十枚。時服六。其以下の輩へも。時服銀若干かづけ給ふ。次に右兵衞督光友朝臣。常陸介光貞朝臣拜謁せられ。御次に伺候せらる。猿樂に時服裝脚纏頭の事は。黄門より沙汰せられて。東市正信正これを役す。次に書院に奈良盞を出し。七五三の御膳を饗せられ。また御三献ありて還御なれば。亞相黄門父子まうのぼり謝せらる。御相伴の輩も同じ。(日記。家譜。)〇十三日城溝のほとりより鷹つかはせ給ひ。高田にならせられ。鴈鴨あまたからせ給ふ。(日記。)〇十五日增上寺方丈智童白木書院にて齋飯をたまふ。伴僧もおなじ。(日記。)〇十七日御咳氣によて紅葉山御參なし。大僧正天海二丸にて齋飯をたまふ。(日記。)〇十九日紀伊亞相賴宣卿の封地へ。書院番水野下總守忠重御使して。御内書を給ふ。これは二子修理某うせられたるによてなり。櫻井忠左御門政茂死しければ。子伊兵衞政良して。家をつがしめらる。(日記。寛永系圖。)〇廿日諸老臣を御座間に召て大政を議し給ふ。(日記。)〇廿一日二丸より平川口大手橋の邊に鷹をならし給ふ。この日津輕土佐守信義が家司等訴論聽斷ありて。乾四郎兵衞。船橋半左衞門は松平隱岐守定行に預られ。津輕美作。津輕伊豆は毛利甲斐守秀元にあづけられ。打越主殿。沼田八郎右衞門は追放たる。(日記。)〇廿二日三浦志摩守正次五千石加恩ありて一万五千石になる。(日記。)〇廿三日内藤伊賀守忠重參覲す。(日記。)〇廿四日三緣山　霊廟に士井大炊頭利勝代參す。增上寺智童伴僧ともに。白木書院にて齋飯を給ふ。この日持弓頭安藤傳十郎定智は遺領千七百石の内。千石は長子書院番九右衞門定勝。七百石は二子傳右衞門定次に分給はる。その外父死して子家をつぐもの三十六人。大番組頭島次左衞門元政が子同組頭長兵衞元利は。庶陰料四百石に。父の遺祿五百石を合せて九百石になり。神尾伊兵衞幸政の遺祿四百石は二子勘兵衞幸綱に給ひ。長子猪左衞門幸布には別に五百石くだされる。又伊豫國四條城主一柳監物直盛は新封の

下三浦正次之加封

下一柳直盛卒

地に赴く路次にて卒しければ。遺領の内同國四條三万石は長子丹後守直重。二万三千石は二子美作守直家。一万石は三子歲人直賴に分ちたまふ。直家は已が領せし地を合せて二万八千石餘となり。播磨國小野に住し。直賴は伊豫國小松に住す。この直盛が家は　孝靈天皇の御子伊豫皇子。その御子小千御子より出て。伊豫の河野四郎越智通信が末葉なりしが。のちに美濃國に來り。土岐が家につかへ一柳と號せしとぞ。父を亦右衞門尉直高といふ。兄伊豆守直末は父につぎて織田殿につかへ。後に豐臣家の旗下に屬し。小田原の城實に討死せしかば。直盛に家つがしめられ。尾張國黑田の城にうつり三万石を領す。天正十九年十一月廿八日叙爵して監物と稱し。文祿元年五千石の加恩有て三万五千石になり。慶長五年の秋　神祖の御供して奥にくだり。引かへして上方に攻のぼる。軍功少からざりしかば。六年其勳賞として一万五千石加へて。伊勢國神戸の城をたまひ五万石になさる。十年二子直家を人質として江戸に進らせ。御惡黨りて八十四人扶持賜ひしとぞ。十四年長子直重。二子直家みな爵たまはり。大坂の軍には父子馳むかひ。首四十切て奉る。　當代に至りて伊豫國は先祖代々領したる國なればとて望請しかば。とし六月朔日請ふ所をかなへられ。一万八千石を加へ封をうつされ。六万八千石となり。程なく就封の道にて。此八月十九日卒しき。歲は七十三歲なりとぞ。(日記。寛永系圖。寛政重修譜。藩翰譜。)〇廿六日二丸より高田へ御放鷹にならせられ。鴈鴨をかすく得給ひ。大橋龍慶重保が隱居によぎらせ給ひ御宴あり。(日記。)〇廿八日月次なり。堀淡路守直升子大學直輝。森川出羽守重俊三子金三郎重賴。先手頭布施孫兵衞重直子新次郎重成初見の禮をとる。榊原内記照久駿河より。花房志摩守幸次伊勢より參り謁す。此日阿媽港人貢物を奉り拜し奉る。(日記。)〇廿九日諸有司をめして。政事を議したまふ。(日記。)◎此月南條小兵衞隆友大番にいる。(家譜。)〇十二月朔日月次拜賀例のごとし。松殿大夫道昭使して卷物を獻ず。家領給はりしを謝せらる。松平越前守忠宗。伊達兵部宗勝。同治部宗實。松平下總守忠明。井伊掃部佐直滋。松平美作守定房。日根野織部正吉明參覲す。酒井讃岐守忠勝も封地よりかへり謁す。紀伊亞相より使もて。韓人大坂に湊到着の事聞えあげらる。この日午刻城外にて鷹をつかはせ給ひ。鴨を得たまふ。(日記。)〇三日葛西に御鷹狩あり。鶴鴈鷹をからせたまひ。銃もて白鳥を打とり給ひ。新宿にて晝餉奉り。角田川より御船にて還御なる。大番佐々庄左衞門正次二子傳右衞門正信召出されて大番にいる。(日記。家譜。)〇四日きのふ御狩の鶴を。使番もて松平越前守忠宗につかはさる。(日記。)〇五日納戸番後藤六右衞門正次子清九郎正俊初見し奉る。又明日韓使府に入るにより。宮城越前守和甫石谷十藏貞清をつかはし。

上一柳直家同直賴之分封

下阿媽港人入貢

道路の事を沙汰せしめらる。又尾水兩卿のもとへ。酒井讃岐守忠勝御使して。韓聘の禮を議せらる。(寛政重修譜。日記。)〇六日黒木書院にて御咄の衆拜謁す。普第のともがらも同じ。つぎに書院番跡部九郎左衛門幸次子平大夫昌直。大番國領七郎右衛門吉次子万吉重次。寛三郎左衛門正重子九郎二郎正次。朝隼人正忠清。荒井は服部權大夫政信。服部半助政次。濵松は高力攝津守忠房。見附は井上河内守正利。懸川金谷は松平大膳亮忠重。藤枝は水野監物忠善。駿府は榊原與右衛門政景。土屋市之丞勝正。江尻は大岡土佐守高増。細井金兵衛勝吉。吉原は戸澤右京亮政盛。松倉長門守勝家。三島は溝口出雲守宣直。土岐山城守頼行。箱根井小田原は稲葉美濃守正則。大磯は淺野內匠頭長直。遠藤伊勢守慶利。藤澤は仙石越前守政俊。小出對馬守吉親。神奈川は加藤民部少輔明利。松下左助長綱。品川は相馬虎之助義胤。織田左衛門佐長政なり。又竹中左京重常は美濃小熊川船橋掛渡の事を奉り。大番組頭榊原一郎右衛門元義は東海道中の奉行をつとめ。目付村越七郎左衛門正重上洛して。京坂旅館の事を沙汰せしとぞ。(日記。紀年錄。家譜。寛永系圖。)〇七日韓使の旅館へ。土井大炊頭利勝。酒井讃岐守忠勝衣冠して慰勞の御使せり。(日記。)〇八日黒木書院にて宗對馬守義成拜謁す。こは韓使を引つれ來りしがゆへなり。古長老璃西堂もおなじ。仙石越前守政俊。淺野內匠頭長直。遠藤伊勢守慶利。小出對馬守吉親韓使旅中の館伴にてゝかへり謁し。安藤右京進重長。脇坂淡路守安元は韓使在府の饗給奉りて拜謁す。この日井上筑後守政重。本城普請造の奉行を命ぜらる。又未後溝邊に出給ひ饗を放ちたまふ。(日記。)〇九日女二の宮降嫁の事により。これに陪られし今井小兵衛信盛加恩百六十石給ひ三百石になさる。(日記。)〇十日廐生に御饗がりあり。御かへさに柳生但馬守宗矩が別墅に過らせ給ひ御膳を献ず。此日もと駿河亞相につかへし中根五兵衛正次。曾山源右衛門重勝。富永彌次右衛門直信。牛込傳左衛門俊重。長谷川伊兵衛宣元。森川助右衛門長俊。荒木八郎兵衛元政。朝比奈吉兵衛眞昭。天野勘兵衛正勝。山中市郎右衛門元吉。三枝平六郎守知。山田三十郎重棟。河野庄右衛門照盛。進藤三左衛門正成。官城平右衛門正次。遠山源右衛門助直。(重修譜彌一郎とし。又十二年の事とす。今は日記にしたがふ。)松崎善右衛門吉久。長田喜平重政。川合善兵衛政信。大井新右衛門政景。伴野主馬貞政。三枝清右衛門吉勝。依田友之助信弘。河內長三郎信弘。原藤藏親治。伊奈半之助忠雪。有馬加賀守頼次。水野內記勝信。諏訪左門頼長。一色內匠定堅。山岡四郎右衛門景巖。土岐次大夫頼泰。佐野半左衛門政一。玉虫次郎右衛門俊茂。多門權九郎重仲。諏訪部源六郎定之。伊藤七兵衛重昌。石川觀阿彌猶次。其他小人五人被さる。(日記。)〇十一日宗對馬守義成。安藤右京進重長。脇坂淡路守安元御前にめして。明後日の聘禮を議せらる。又韓使をして。日光

下朝鮮信使登城

山　御宮を拜せしめらるゝにより。先達て登山し。その事を沙汰すべき旨。松平右衛門大夫正綱。秋元但馬守泰朝。板倉內膳正重昌に命ぜらる。又太田備中守資宗を大僧正天海がもとにつかはして。その事を仰下さる。(日記。)〇十二日尾水兩卿拜謁せられ。韓聘の禮を議せらる。また御みづから大廣間に出まし。明日聘禮の儀注を指揮し給ふ。又韓使日光山にのぼるにより。かしこに松平伊豆守信綱をつかはされ。その禮を惣督せしめらる。(日記。)〇十三日朝鮮聘禮行はる。正使は任絖。副使は金世濂。從事官黃屋。上々官二人。判事三人。上官四十六人。中官百五十七人。下官二百六十七人。巳刻本誓寺の旅館をいでて。朝鮮國王李倧の書簡を眞先にもたらし音樂を奏し。大手門に至りて上官みな馬を下り。旗鉾等の器械をとゞめ。上々官二人は橋際にて轎を下る。中門に至りて三使輿を下る。中門より玄關前まで甃道をしく。宗對馬守義成。安藤右京進重長。脇坂淡路守安元並兩長老は大手に出むかへて導き。秋山修理亮正重。井上筑後守政重は玄關に出向へて。三使並上々官を殿上間に導き。上官次官をば二行に次間に着座せしめ。中官は緣上に侍せしめ。下官は庭上に侍らしむ。大廣間上段には三重の疊の上に蒲團をしき。其上に茵を敷。左に御刀架を置。床上に香爐を置て空燒を薫ず。午時に白の御直衣に風折烏帽子をめされ出給ふ。御太刀は土屋兵部少輔之直。御刀は水野右京進勝忠

奉る。朝鮮よりの獻物は大卷物十一。黃照布卅疋。白照布卅疋。油布卅疋。虎皮十五枚。豹皮廿枚。縞子十卷。人參五十斤。花席廿枚。雜五十捆。墨五十挺。青皮卅枚。蜜蠟百斤。蜜薑十。緋鮫百本。色紙卅卷。騰廿聯。四南の緣に並置く。栗毛駿骨駿二疋の馬は。諏訪部源次郎定吉布衣を着して白洲に引立。繖兩人は白張きてこれにそふ。朝鮮國王の書簡は對馬守義成もちいて〻緣に侍へば。高家吉良上野介義弼下段の中央に出てうけとり御前に參り。御左の方に置。此とき三使に義成つきそひ。中段の圖際まで參れば。井伊掃部頭直孝。松平下總守忠明。土井大炊頭利勝。酒井讃岐守忠勝四緣に退く。かされて直孝。忠明。利勝。忠勝を御前にめして。三使への御詞を仰含らる。直孝はじめ四人の祗下段にまかり。義成に仰をつたへ。義成通事をしてこれを三使につたへしめ。三使拜答の詞を通事より義成につたへ。義成より直孝はじめ四人の祗に申。四人御前に參りて聞えあぐる。次に御盃を三方にのせて。大澤右京亮基重もちいて。御引渡ならびに御捨土器は。井伊靱負佐直滋もちいて。御酌は右京亮基重。御加は吉良若狹守義冬役し。御盃を銚子にのせ中段に侍へば。義成中段の下にすゝみ指揮し。正使中段に參る時基重御盃をとりてさづく。正使拜飲す。この時は加なし。三使同ト樣に拜戴はて〻引退く。但し三使の給仕は佐野左京亮正直。加々爪甲斐守忠澄。朝倉織部正豐明これをつとむ。この後貢物みな徹し。重て三使の獻物入參十斤。照布十疋。虎皮六枚南緣に置。酒井宮內大輔忠勝披露し。三使下段にいて〻拜禮し。畢て座につく。次に上々官は下段。上官は緣上。次官は落緣。中官は庭上に出て拜し。三使かされて拜し。退きて後兎にいらせ給ひ。上中段の間の簾をたれ。四に尾水兩卿。東に三使を着座せしめ饗行はれ。七五三の膳を供せらる。酌は太田備中守資宗。朽木民部少輔稙綱役し。初獻の盃尼張亞相。次に正使。次に水戶黃門。次に副使二人。二獻は黃門。次に正使。次に亞相。次に副使二人。三獻は初獻に同ト。畢て膳を徹し菓子を供し。兩方一揖し退く。三使は孔雀間にて義成指揮し。直孝。忠明。利勝。忠勝に謁して饗禮を謝せしめ。三使退く時書院番所前まで直孝はじめ四人これを送り。三使立かへり謝して退く。義成兩長老並重長安元は三使を導く事今朝に同ト。聽禮終りてのち大膳尺に盛り。この日直孝。忠明。利勝。忠勝は束帶。其外諸大夫以上は衣冠帶劍。孔雀間北方。宰相。中少將。侍從次間。關內までは諸大夫。その外は布衣の侍臣身の張伺公し。大番士は裝束きて鷺の間に並居。書院番士是も裝束きてその番所に伺公し。大手門は久世三四郎廣當。內藤外記正重。下馬は森川金右衛門氏信。大道寺內藏助直次。二丸門は渡邊圖書助宗綱。庖所口は小栗又市政信。塀重門は大森半七郎好長。立關前門は本多美作守忠相。本多豐前守正貫警衛す。又大手門より本曆寺までの警衛は坂部三十郎房利。井上左衛門重成。神谷與七郎清正。阿部四郎兵衛重信。並町奉行所臨の與力同心これをつとむ。この日もとの駿河大納言家に附られし紅林助六郎吉直めしかへされ。あらたに采邑三百石たまふ。(日記。寛政重修譜。)○十五日拜賀例のごとし。使番堀豐前利政子兵四郎忠重。先手頭大道寺內藏助直次子權平直數。小納戶宮崎備前守時重二子長三郎時令。右筆久保吉右衛門正元子求之助正信。神尾勝左衛門保重子小左衛門高久。廣敷番頭橫地半右衛門安信子左門安次。納戶組頭橫山半左衛門一政子市平一豐。松永太郎右衛門正重子太郎八某。大澤助十郎勝重子又七郎重利。納戶番速見七兵衛吉忠子十助吉次。戶田忠右衛門之光子清四郎之信。大番八木庄兵衛正信子五郎八某。後藤九兵衛正次子猪之助正俊。鈴木兵左衛門重之子甚九郎重宣。淺羽次大夫貞次子次郎九郎貞昌。腰物奉行武島市郎兵衛茂正子市十郎茂次。服部半右衛門保信子竹之助保重初見し奉る。また先に御勘氣蒙りし佐野小吉久綱並弟喜三郎公當もめし出され初見の禮をとる。この日增上寺智童齋飯を賜ふ。(日記。寛政重修譜。)○十七日紅葉山　御宮參。尾水兩卿陪拜あり。韓使日光山　御宮參拜の事請ふまゝにゆるされければ。けふ府を發して登山す。(日記。)○十八日このゝち紅葉山　御宮供奉の定制を仰出さる。十七日は正月四月直垂大紋。五月九月十二月長裃。廿四日三緣山供奉は正月直垂大紋。五月九月十二月長裃着し。各怠慢なく供奉すべき旨。松平越後守光長。松平筑前守光高。松平伊豫守忠昌。松平越前守忠宗。佐竹修理大夫義隆。上杉彈正大弼定勝。松平安藝守光晟。藤堂大學頭高次。加藤式部少輔明成。丹羽宰相長重。松平薩摩守家久。細川肥後守光尙。毛利甲斐守秀元。立花飛驒守宗茂。松平土佐守忠義。堀丹後守直寄。松平大和守直基。松平右近大夫輝興。森內記長繼。松平對馬守忠豐。京極山城守高國にふれらる。女二宮附今井小兵衛信盛上洛のいとま給ふ。(日記。)○廿日煤拂。酒井宮內大輔忠勝これを役す。この日柳生但馬守宗矩就封の暇下され馬をたまふ。又韓使けふ日光山に參拜せりとぞ。(日記。紀年錄。)○廿一日保科肥後守正之新封の地よりの參覲し。銀百枚。蠟燭二千挺。漆廿桶さゝぐ。伊達兵部宗勝。治部宗實いとまたまふ。森內記長繼が弟關式部長政證人として參府し初見し奉る。次に御談伴拜謁し。榊原內記照久暇給ひ。松平甚三郎行隆豐後府內目付はてゝかへり謁し。大番の子二人初見す。又父の家つぎ初見するもの廿五人。この日松平出雲守勝隆。水野備後守元綱褒者の事をあやまりしをもて。御いましめを蒙る。又本目權十郎正次大番にいる。(日記。寛政重修譜。)○廿二日高田のほとり追鳥狩せさせ給ひ。大橋龍慶重保

の宅にて御膳を召上らる。また北方の原にて御供の鞭打せさせて御覽じたまふ。(この頃世に捶打鞭打といふは。しなひ打して刀法を試るなり。)この日日光山より。韓使拜禮ほてしよし注進あり。大番遠山四郎兵衛景綱子平三郎景憲大番に入る。(日記。家譜。)○廿三日淸井加右衛門某勘當ゆるされ。召出されて舊職に復し廩米を下さる。又口科鹽金保安寮芝泰廩米百俵下さる。(日記。)○廿四日三緣山　古德院殿靈廟。崇源院殿靈牌所に詣たまふ。尾水兩卿陪參せられ。國持の鞭供奉す。この日增上寺方丈智童井傳通院。　誓願寺。　本覺寺。

そのほか伴僧みな齋飯をたまふ。松平伊豆守信綱。阿部對馬守重次。松平右衛門大夫正綱。秋元但馬守泰朝。板倉內膳正重昌日光山よりかへり。韓使もまた同じく府に詣る。(日記。)○廿五日尾邸に酒井讃岐守忠勝御使し。水戸黃門をもかしこにむかへて。仰の旨をつたふ。(日記。)○廿六日海邊へならせ給ひ鵜をからせらる。この日內藤伊賀守忠重病臥により。太田備中守資宗してとはせらる。(日記。)○廿七日朝鮮國への御返簡を。土井大炊頭利勝酒井讃岐守忠勝本誓寺に持參して三使へさづく。兩使衣冠帶劍なり。この御返簡は林道春信勝。永喜信澄井金地院元佶が謄定して。元亘淨寫せしとぞ。國王へは屛風二十雙。銀壺子。風呂釜一對。縫箔小袖五十領。三使へ銀五百枚。綿三百把づゝ。上々官通事二人へ銀二百枚づゝ。判事官二人へ銀五十枚づゝ。上官四十六人へ銀五百枚。中官下官四百二十三人へ銀千枚たまふ。宗對守義成井古長老禪四室まうのぼり辭見し。義成へ光忠の御刀。銀五百枚。小袖二十給ひ。兩僧へ銀百枚。小袖十づゝ下さる。この日書院番へ入番廿七人。大番に入者七十七人。(日記。)○廿八日歲暮拜賀例のごとし。松平右衛門佐忠之參覲す。使番朝倉仁左衛門在重。大久保甚右衛門長重。因幡目付はてゝ歸り。使番眞田長兵衛幸政。堀三右衛門直景大坂よりかへり共に拜謁す。宗對馬守義成就封の辭見し奉る。この日家門始歲暮の時服獻ずるも例のごとし。烏丸大納言光廣卿に合力米二百俵たまひ。板倉十三郎重大は廩米五百俵給はり。步行頭齋藤瑞津守三友。小出越中守尹貞。神尾宮內少輔守勝。朽木與五郎友綱。柳生刑部少輔友矩。牧野佐渡守親成。所勞新增の組頭一人づゝ。同僚とひとしく加恩を給ふ。小笠原丹齋經治三子權六郎直經父の家をつぎ。剃髮して丹齋と稱す。納戶番永井六兵衛重勝子六兵衛重政家つぎて。小十人組番士となり拜謁す。(日記。寛政重修譜。)○廿九日尾水兩卿まうのぼり歲暮を賀せらる。この日高家今川主膳正直房侍從にのぼりて。刑部大輔と改む。諸大夫になるもの十二人。內藤萬菊丸泰は左京亮。板倉新十郎重鄕は長門守。松平左門利綱は佐渡守。植村右衛門家貞は佐となり。相馬虎之助義胤は大膳亮。本多主稅助政遂は大隅守。松下左助長綱は石見守。靑院番

頭中根傳七郎正成は大隅守。小姓組番頭大久保源左衛門忠知は左馬允。小姓組與頭安藤四郎右衛門重元は伊賀守。步行頭久世三之丞廣之は大和守。紀老三浦將監爲時は長門守と改む。長綱は韓客饗應使命ぜられ。直に神奈川驛におもむかしめ。夜中に踏り參るべしと命ぜらる。これ韓使今朝府を發して。歸國におもむくによてなり。又宮城越前守和甫。石谷十藏貞清は品川驛に到り。洛途の非常を警しむ。又小姓組與頭島田五郎兵衛直次。安倍平三郎信孝。書院番組頭荒川右馬助定安。使番眞田長兵衛幸政。堀三右衛門直景。目付村越七郎左衛門正重。先手頭坂部三十郎廣利。大道寺內藏助直次。船手頭石川六左衛門重勝。向井右衛門直宗。小濱久太郎嘉隆。間宮虎之助長澄。小濱彌十郎安隆。小笠原安誠信盛布衣着する事をゆるさる。(日記。)○是年一色內匠定堅。大番朝比奈彌左衛門資重子加兵衛資勝。森川善大夫重次子兵左衛門重勝。久留善四郎次正第三十郎盼正。金奉行小河惣左衛門賴勝子勝市郎賴清。石奉行石野六右衛門廣吉三子三左衛門廣茂。小普請山上長兵衛忠勝子源五左衛門吉勝初見の禮をとる。山崎主計頭景以。江州水口定番命ぜられ。曾根源左衛門吉次は惣勘定頭となり。醫員久志本式部常尹御側醫となる。又手水番佐藤外記信成小姓組にいり。安藤喜兵衛次重書院番にいり。杉浦忠太郎近成。大番加々美金右衛門正吉子才兵衛正次。納戶番內田勘右衛門正弘子六之丞弘綱。中川市助忠宗。佐野十三郎政成。加藤市左衛門正勝子傳三郎正長大番になり。小十人岡部喜兵衛正次子庄兵衛吉澄は小十人組にいり。書院番山口左平太光正子小傳次光俊は小姓組になり。佐脇傳右衛門安雅は奥方番をつとめ。御手鷹師遠藤角左衛門泰信弟兵三郎康之。大番羽太十大夫正成子勘十郎正忠。伴野主馬貞政小姓組にいる。御手鷹師加藤四郎兵衛成次子權右衛門成久。大番田村庄左衛門直久子太郎兵衛直光。鈴木八兵衛信吉子三郎右衛門信照。宮原新右衛門石利子新右衛門石次。久留善四郎正次子善四郎次正は。父死して家をつぐ。多喜六藏資元子十右衛門資勝もおなじ。この春惣曲輪擇造のとき。多賀外記常勝は和田倉門の奉行。大島度兵衛義唯は日比谷門櫓の奉行。菅沼織部正定芳は石垣の助役。淺野內匠頭長直は四城の助役をつとむ。酒井紀伊守忠吉は煙を煩ひければ。中根壹岐守正盛御使して。慰勞の御詞をたまひ。平愈して年男を一つとむ。寶舟の給を獻ト權弁井鳥目貳貫文たまはる。松平能登守定政は所領去年の水害にかゝりければ。堤防修築の料銀二百貫目たまふ。京極丹後守高廣は就封のいとま賜はるとき。來國光の御刀くだされ。醫官野間玄琢成宰は　太后へ御藥を奉り。御平愈ありしをもて。御前にめし紲の御詞をたまはり。薗工狩野采女守信は日光山御樣起を畫きし賞として。法眼に叙し。剃髮して探幽と稱す。朝鮮國より藥草數種を奉る。こは

上　曾根吉次　任勘定頭
下　狩野守信　法眼剃髮　探幽

府内及び京師に藥苑をひらき給ふよしを傳聞し故とぞ聞えける。(寛永系圖。寛政重修譜。家譜。宗家譜。)

大猷院殿御實紀卷三十四

寛永十四年正月に始り六月に終る御齡三十四

寛永十四年丁丑正月元日拜賀例のごとし。鎭日長四郎惟清大番にいる。この日日蝕。(水戸記。寛永系圖。大内日記。)○二日謠曲始例のごとし(水戸記。)○三日拜賀例のごとく。ほてゝ高田へならせられ御鷹狩あり。銃にて雁を得給ふ。(水戸記。)○四日上野國厩橋城主酒井阿波守忠行遺領十万石。其子雅樂頭忠清に給はり。二万二千五百石を二子万千代忠能に分たしめ。忠行が嫡子たりし時給はりし三万石は收公せらる。この忠行は故雅樂頭忠世が子にて。幼より　台德院殿につかへ奉り。慶長十九年大坂の戰の時供奉す。時に十六歲。元和元年正月廿七日叙爵して阿波守と稱し。五月七日安部野の戰に首二級切て奉る。九年より宿老のつとめにあづかり。寛永二年九月二日上野國板鼻にて。鹿薩料二万石賜り。三年二條城　行幸の時。中宮の御迎にまいり。　台德院殿四城御隱退後は。老臣の首座命ぜられ。五年四月　寶樹院殿御贈位のとき。駿州龍泉寺に代參し。八年九年兩度日光山代參し。二月廿六日　台德院殿御遺銀百枚賜ばり。十年四月十四日一万石加て三万石になされ。十一年七月十六日上洛の御供し。　參內して從四位下にのぼり。十八日　御參內の先驅し。閏七月廿三日四城災にかゝりし時より。父とゝもに職をゆるされしが。十二年六月朔日元職に復せしめられ。十三年五月十三日家つぎ庇蔭料を合せて。十五万二千五百石を領せしが。いく程なく去年十一月十七日三十八歲にて卒せしなり。(家譜。藩翰譜。寛政重修譜。)○七日高家吉良若狹守義冬　大内へ(への御使にさゝれ暇給ふ。(大内日記により推考してこゝにくはふ。)去年院より仰せられし律令の書を持參す。(吉良日記。)○八日葛四の邊に御放鷹あり。(水戸記。)○十日いさゝか御なやみあり。兼てはけふ葛四にてからせ給ひし白鳥もて。三家を饗せらるべき旨仰出されしが。御不豫によてその事なし。(水戸記。)○十四日御なやみさはやがせ給ふにより。御座を四城にうつさせ給ふ。これ本城改造せらるゝによてなり。その間本城は松平式部大輔忠次。二丸は保科肥後守正之。裏門は松平紀伊守家信警衛す。作事の奉行は牧野內匠頭信成。井上筑後守政重。佐久間將監實勝。神尾備前守元勝。酒井因幡守忠知奉行し。柳生但馬守宗矩も是にあづかる。去年越畑の事にあづからざる輩十一人助役奉り。石垣は本多甲斐守政朝。小笠原右近大夫忠政奉り。天守臺は松平右衛門佐忠之。松平安藝守光晟奉り。酒井讃岐守忠勝は中仕切鐵門樞。小笠原信濃守長次は御座間。小笠原左衛門佐政信。本多下總守俊次は御守殿をつとむ。大工頭木原李允義久これを奉る。また本城にこれまでいつき登られし　神祖の御宮なば。二丸にうつし給ふ。その事は右近大夫忠政奉る。高家吉良上野介義彌日光山代參にさゝれいとま給ふ。(水戸記。紀年錄。慶延年記。寛永系圖。吉良日記。)○十五日月次拜賀停廢あり。(水戸記。)○十六日尾水兩卿まうのぼり。四城御移徙を賀せられ。御手づから熨斗鮑を給ふ。群臣も各拜謁す。これ本城搆造あるによりてなり(水戸記。吉良日記。)○十七日紅葉山　御宮にまうて給ふ。尾水兩卿陪拜せらる。御簾酒井讃岐守忠勝。御太刀井伊靱負佐直滋。御刀は阿部豊後守忠秋。御宮は三浦志摩守正次役す。(水戸記。吉良日記。)○十八日四城御座間にて。尾水兩卿を白鳥もて饗せられ御三獻あり。一位の尼所勞により。酒井讃岐守忠勝を御使としてとはせ給ひ。思ふ事あらばつゝまず聞し上べき旨の仰をつたふ。尼ぜ忠勝に對面し。盛儀の忝を拜し。慶長六年　神祖にこゝろざしふかくさせ給ひしときも。駿府賀庫の御調度どもは尾紀水の三卿の母君に分ち給はりしに。この局も同じなみに給はりし。金二千兩をそへられける。その後は府にまいり。竹橋の內に宅地給はり。中野村にて賄料三百石を下されぬ。元和六年の

上酒井忠能
上酒井忠行
下酒井忠之
下依本城改造家光移城而課其役于諸大名

六月　台徳院殿の　姫君御入内ましくけるとき。かたくなくも御母代として。御車にともなひまいらせ。本院中守資宗御使して。御悩いさゝかはやがせ給ふ旨をつげらる。御けしき伺ふ翌昨日のごとし。(水戸記。)〇五日また同じ。(水戸記。)〇三日尾邸へ阿部對馬守重次。水邸へ太田備降誕のときは。を更の仰ごと奉り。　女御につきそひけれ　後水尾院より從一位を賜ばり。世には神尾一位殿とぞ　けふは供御もきこしめされければ。放盧あるべき旨を。三家に　申ける。寛永三年二條の城に　行幸のとき。御迎の事より御　土井大炊頭利勝つとふ。(水戸記。)〇六日松平下總守忠明にあ　饗のともおづからざる方なし。　台徳院殿かくれさせ給ひ　づけられ。大和國郡山に籠居せし朝倉筑後守宣正卒しぬ。長子　し時より。かしらおろして雲光院となのり。けふ終りをとりし　越後守宣親は先立てうせ。二子圭勝正世は別に召出され。今香　かば。みづから發願して建立せし寺にて。後のわざしけるにも　院番をつとむ。この宣正は故の六兵衛在正が子にて。天正十八　香火料銀千枚を給ひ。又遺物とて　宸翰の屏風を獻ず。この　年より大番となり。采邑二百石賜り。　台徳院殿薨長五年上　尼の腹に設たる五兵衛守世六歳より召出され。　台徳院殿　方へ打てのぼらせ給ふ時。武田安房守昌幸が信州上田の城を　につかへ。所領三千石給ひ。しきりに登庸し刑部少輔に任じ　せめられしに。先がけせし七本鑓の一人と。されども御軍法を　又松平周防守康親が家人岡田竹右衛門元次が子内記元勝といひしも。尼ぜの養子としてこれも登庸せられ。その支族今に多　やぶりしとて御勘當を蒙り。やがてめしかへされ故采邑を給　しといふ。(水戸記。家譜。以貴小傳。)〇廿三日尾水兩卿并尾紀　ひ大番に復し。七年百石加恩有て三百石になり。九年その組　水三世子まうのぼり。御氣色うかゞはる。(水戸記。)〇廿四日　頭になり。二百石加へたまひ五百石になり。十年使番に轉ず。　御不豫によて三條山御詣なし。兩卿まうのぼられ御けしき伺　二百石加へて七百石になり。十六年又三百石加恩ありて千石　はる。(水戸記。)〇廿五日御けしきうかゞはるゝ事昨日に同　となり。十八年加恩千石たまはり二千石となり。後堺の政所命　ず。(水戸記。)〇廿六日また同じ。(水戸記。)◎この月新にめし　ぜられ。のち千石加へられ三千石となり。元和三年十二月叙爵　出れし植村市丞政春書院番にいる。醫員坂壽三齡玄御前に伺　して筑後守と稱し。五年三千石。七年又四千石加恩有て。すべ　候すべしと命ぜらる。(寛永系圖。)〇二月朔日御不例をもて。　て一万石になされ。駿河亞相につけられ。八年六千石寛永二　尾水兩卿まうのぼり御氣色をうかゞはる。(水戸記。)〇二日又　年一万石の加恩にて二万六千石になり。遠江國懸川の城主に　せらる。亞相甲府に蟄居のとき。駿府の城をあづかり。亞相ふ

下朝倉宣正卒

下本多正純死

下伊勢貞衡被召出

たゝび上野國高崎にうつされ給ひし時。宣正も郡山に籠居せ　る。御けしきうかゞひ晦日にいたるまて同じ樣なり。(水戸　記。)〇三月朔日尾水兩卿本日を賀してまうのぼらる。(水戸記。)〇七日御灸をあそばさる。(水戸記。)〇八日尾水兩卿家　しめられしが。この日六十五歳にて死したりとぞ。(寛永系圖。家譜。)〇七日御灸をあそばさる。(水戸記。)〇八日尾水兩卿家　司を出して。昨日御灸後の御けしきをうかゞはる。この日本城　七日御灸あり。(水戸記。)〇九日女三宮御痘瘡の聞えあれば。　構造の鉄初手斧始あり。松平安藝守光晟。松平右衛門佐忠之よ　驛次して御尊問したまふ。(大内日記。)〇十日佐竹修理大夫義　り。三種一荷獻上祝し奉る。(水戸記。)〇九日この夕また御灸　隆にあづけられ。出羽國由利に配流ありし本多上野介正純死　あり。(水戸記。)〇十日尾水兩卿まうのぼりうかゞはる。(水戸　せしよし注進す。齢七十三なりとぞ。(寛永系圖。　濟輪譜備考。　記。)〇十一日山里にて中樂を御覽ぜらる。けふも御灸あり。　系圖。)〇十六日　腰物奉行大河原源五右衛門正真　昵近せしめ　(水戸記。)〇十二日尾水兩卿御けしきうかゞはる。(水戸記。)　らる。(寛永系圖。)〇十八日清水門外にならせられ。鷹つかは　〇十三日兩卿使してうかゞはる。御灸あり。(水戸記。)〇十四　させ給ひ鴨を得給ふ。(水戸記。)〇廿一日高田のほとりへなら　日尾水兩卿へ御使して。御鷹の鵠をつかはさる。御けしきうか　せ給ひ。御かへさに酒井讃岐守忠勝が別墅によぎらせらる。　がひ昨日のごとし。(水戸記。)〇十五日はじめて外殿に渡御あ　(水戸記。)〇廿二日麻布に御放鷹あり。(水戸記。)〇廿三日書　り。山里へもならせらる。御けしきうかゞひ連日のごとし。(水　院番甲斐庄喜右衛門正述宿所より失火して。連燒五六十軒に　戸記。)〇十六日又同じ。(水戸記。)〇十七日紅葉山　御宮詣　及ぶ。(水戸記。)〇廿四日具足奉行伴作左衛門重正死して。養　なし。(水戸記。)〇十八日御灸をあそばさる。女二宮御定婚を　子五郎大夫重長つぐ。(寛永系圖。)〇廿五日尾水兩卿まうのぼ　賀せられ。天樹院御方より宮へ時服十。　大宮へ　らる。(水戸記。)〇廿六日水戸中納言賴房卿の邸にならせ給　銀五十枚。紅花十斤。高田御方より宮へ時服十。大宮へ金五　ひ。園中にて鷹をならし給ふ。(水戸記。)〇廿七日尾水兩卿ま　枚。越後晒三十匹進らせらる。(水戸記。大内日記。)〇十九日尾　うのぼらる。(水戸記。)〇廿八日尾水兩卿を山里にめして御對　水兩邸へ御使して。枝柿一箱づゝつかはさる。御氣色伺ひ。廿　面あり。伊勢兵庫貞衡召出され鷹米千俵を給ふ。こは足利將　三日まて連日同じ樣なり。(水戸記。)〇廿四日三綴山　鷹廟　軍家のとき。内外の事專らとり行ひし伊勢が子孫にて。兵庫　に土井大炊頭利勝代參す。(水戸記。)〇廿五日御灸あそばさ　頭貞爲といひしが子なり。室町滅亡の後織田殿につかへ。のち

上千代姫生

に病をもて京に蟄居し。豐臣家よりしばゝゝめされしかどもいてずして。女子を大坂にいれて淀殿にみやづかへせしめしが。これも大坂の城陷の時に節に死しぬ。貞衛幼にして大坂につかへしかば。天樹院御御かたさるゆへを思召て。後閤にめされればごくませ給ひ。　神祖にも内々拜謁せしめられしが。貞衛が母は春日局が妹なりければ。局よりも深く願ひて召出されしとぞ。又この日松前の城失火し燔燼藏に入て四方に飛ちりしかば。城主松前志摩守公廣これにふれ。數か所の疵を蒙りしとぞ。(水戸記。寛永系圖。)○廿九日尾水兩卿まうのぼらる。(水戸記。)○閏三月朔日家門まうぼられしかど。御なやみにより御對面なし。(水戸記。)○二日尾水兩卿まうのぼり御けしきうかゞはる(水戸記。)○五日二日よりこの日まで。御けしき伺ふ事同ト樣なり。この日申刻姫君生れ給ふ。御母は岡氏。ふりの局といふ。後に千代姫君と申はこれなり。この時御產目は石川主殿頭忠總。矢取はその子上野八郎左衛門貞當。筥刀は井伊掃部頭直孝役す。又姫君には越後の藩醫吉田機庵宗活を召て御藥を奉らしむ。(水戸記。紀年錄。寛永系圖。)○六日昨日姫君生れ給ふを賀して。尾張大納言義直卿。水戸中納言賴房卿。尾張右兵衛督光友朝臣。紀伊常陸介光貞朝臣。水戸左衛門督光圀朝臣まうのぼり賀せらる。(水戸記。)○七日尾水兩卿まうのぼり御けしき伺はる。(水戸記。)○廿日尾水兩卿まうのぼらる。(水戸記。)○廿一日尾水兩卿まうのぼり御對面なし。(水戸記。)○二日尾水兩卿まうのぼり御けしきうかゞはる(水戸記。)○五日二日よりこの日まで。御けしき伺ふ事同ト樣なり。この日申刻姫君生れ給ふ。御母は岡氏。ふりの局といふ。後に千代姫君と申はこれなり。この時御產目は石川主殿頭忠總。矢取はその子上野八郎左衛門貞當。筥刀は井伊掃部頭直孝役す。又姫君には越後の藩醫吉田機庵宗活を召て御藥を奉らしむ。(水戸記。紀年錄。寛永系圖。)○六日昨日姫君生れ給ふを賀して。尾張大納言義直卿。水戸中納言賴房卿。尾張右兵衛督光友朝臣。紀伊常陸介光貞朝臣。水戸左衛門督光圀朝臣まうのぼり賀せらる。(水戸記。)○七日尾水兩卿まうのぼり御けしき伺はる。(水戸記。)○八日より十四日まで同ト樣なり。(水戸記。)○十一日姫君御七夜を賀して。諸大名出仕し老臣に謁す。また諸家より時服樽肴諸調度を獻ず。三万石以上一種一荷を獻じ。姫君へ三万石以上產衣二襲。樽代五百疋。万石以上樽代千疋をさゝぐ。(大内日記。天享東鑑。吉良日記。)○十五日堀田加賀守正盛二丸にて晩餐を獻ず。(水戸記。)○十七日紅葉山　御宮へ酒井讃岐守忠勝代參す。(水戸記。)○十八日酒井讃岐守忠勝が別墅にならせ給ひて。狼藥并相撲を御覽あり。(水戸記。)○十九日水戸中納言賴房卿の邸前にならせられ。鷹をつかはせ給ふ。(水戸記。)○廿日高田の邊に御鷹狩あり。(水戸記。)○廿三日尾水兩卿このほど日々まうのぼり。御けしきをうかゞはれしが。御なやみも忘らせ給ふにより。連日の登營をとゞめらるゝ旨老臣仰を傳ふ。(水戸記。)○廿四日三綠山羅刹に土井大炊頭利勝代參す。この日使番牧野傳藏成純。書院番林丹波勝正は豐後目付。使番駒木根長次郎政次。書院番松田善左衛門勝政は大坂目付。使番齋藤左源太利政。書院番市岡多左衛門定次は因幡目付。使番本郷勝左衛門勝吉は駿府目付仰付らる。又山岡主計頭景以は水口の御使命ぜらる。(水戸記。)○廿八日さきに生れ給ひし姫君。けふはじめて對面したまふ。(水戸記。)○◎この月九條關白は松殿御朱印を謝し。太刀目錄。松殿大夫は太刀馬物奉られ。九條政所紙五十帖。綿十献ぜらる。實相院。圓滿院。本願寺は歲首の賀物奉る。御不例に

より其使拜謁なし。(吉良日記。)○四月朔日尾水兩卿まうのぼり當日を賀せらる。紀伊大納言賴宣卿參觀の道にて。所勞の聞えありければ。小姓組與頭安藤伊賀守重元を御使としてとはせらる。(水戸記。)○五日二丸の　御宮經營せらるゝ地にならせ給ひしに。雙鶴雲中より舞降り。その地にとゞまり。しばらくして東をさして飛さりしかば。御感斜めならず。大僧正天海祝詞を奉り。澤庵は頌幷序を献ト。烏丸大納言光廣卿も折ふし在府ありければ。國字の記幷和歌二首を詠ト奉らる。また儒臣林道春信勝に命ぜられその記をつくらしめらる。(水戸記。紀年錄。　世に傳ふる所は。この朔日經營すとて諸司衆會集し。工人雲霞のとくつどひたる中に。鶴一來りて下りけれども。小笠原右近大夫忠政が家司これをとらへんとせしが。その鶴は御庭にかけ給ふ所のものと聞て。とらへず追立しに。かされて双鶴相從て空より舞下り。縞衣玄裳羽儀端正にして。いかにも神の使者と見えたれば。衆人手をこまぬいてこれをみるに。しばらくして東南に飛行しとぞ。希代の祥瑞なりと聞え上しかば。御感なゝめならず。幸臣近習の輩に宴を給はり。樂歌を奏し。天海をはじめ僧俗美服を纏頭せらる。光廣卿は宮作り嬉しき神の御心と千年や告て鶴も立まふ。更にまた千年はしろし友鶴の雲ならぶる神の廣前とよみて奉られ。また大橘龍慶も崇ます神の誓も白鶴の齡を君が世に重ねつゝ。事だらしけふに奠の諧かづらかけてぞ祝ふ君が御けしきと。このうたによれば朔日なるべし。武德編年集成。)○六日紀伊大納言賴宣卿旅中の病をとはせられ。太田備中守資宗をつかはさる。(水戸記。)○七日尾張亞相まうのぼり御けしきうかゞはる。(水戸記。)○十日板倉內膳正重昌を日光山に御使としてつかはさる。(水戸記。)○十一日紀伊大納言賴宣卿昨日參着ありければ。酒井讃岐守忠勝御使して。病快くて參府有しか賀せられ。且保護せらるべき旨の懇詞をつたへらる。よて常陸介光貞朝臣まうのぼり謝せらる。(紀伊記。)○十三日阿部豐後守忠秋日光山　御宮に代參せしめらる。この日尾水兩卿山里に御對面あり。紀伊亞相のもとへは豐後守忠秋して。蜜柑一箱つかはされ。病後の起居をとはせらる。よて光貞朝臣まうのぼり謝せらる。(水戸記。紀伊記。)○十五日尾水兩卿まうのぼり當日を賀せらる。(水戸記。)○十六日二丸にならせらる。(紀伊記。)○十七日紅葉山　御宮に酒井讃岐守忠勝代參す。けふも二丸にならせたまひ狼藥十三番あり。紀邸へは松平伊豆守信綱御使し。懇ろず保護して醫をもろちみ。治療せらるべしと御旨をつたへ。また其家臣等には。亞相病後いまだ全快ならぬよし聞ゆれば。このほど何人來るとも客を謝して。保護あらん樣はからふべしとの御旨をもつたふ。又常陸介光貞朝臣これを謝し。まうのぼられければ。この後朝臣登營の時は。尾邸

丹羽長重

門前より直に西城にのぼらるべし。各門を開き通行せしむべしと仰出さる。(水戸記。紀伊記。)〇十八日尾水兩卿まうのぼらる。(水戸記。)〇廿一日紀邸の老水野淡路守重長をめして。亞相の病いよ〳〵快ば。御寢所にて御對面あるべけれど。もしかく聞えばつとめてまうのぼられ。病のさはりとならんもしるべからず。いかにも保護ありて彌平癒せられば。いつにても聞えあげらるべし。速に御對面あるべしとの御旨を。酒井讃岐守忠勝傳ふ。けふ御灸あり。(紀伊記。)〇廿三日松平伊豫守忠昌はじめ。就封の暇たまふもの三十二人。けふ尾張亞相の北方うせらる。(水戸記。紀伊記。)〇廿四日三條山　甍崩に土非大炊頭利勝代參す。(紀伊記。)〇廿五日紀伊亞相は醫員野間玄琢成寧の藥を服しやゝ快ければ。拜謁の事願はるゝ旨水野淡路守重長もて老臣のもとへ告らる。(紀伊記。)〇廿八日水戸黄門まうのぼり當日を賀せらる。金森飛騨守重近就封のいとまたまふ。けふは朝山里より西城にわたらせたまひ。御灸あり御かゆまいる。(水戸記。紀伊記。)〇廿九日二丸にならせられ乘馬御強あり。(紀伊記。)〇晦日山里にて御かゆまいり御灸あり。けふ二十三日就封命ぜられしとゝもがら拜謁す。又二丸へならせらる。杉原吉兵衛重長就封のいとまくださる。坪内玄蕃家定水口在番はてゝかへり。もとのとく先手頭命ぜらる。姫君御誕生を賀して。九條前關白樽代五百匹。松殿大夫井政所は干疋づゝ奉られ。姫君へ前關白より產衣三襲。大夫は三重。政所は五襲に羅一對そへ奉らる。(紀伊記。家譜。吉良日記。)◎此月陸奥國白川城主丹羽宰相長重が遺領十万石を。その子左京大夫光重にたまふ。この長重は故越前守長秀が子なり。その家もとは武藏兒玉黨にて。中頃尾張國丹羽郡にうつりしかば。家號を丹羽と稱し。斯波武衛が家につかへたり。長秀織田殿につかへて。柴田と同く武勇一二をあらそふ宿老なり。(斯波が世臣を織田朝倉といふ。丹羽はじめは斯波が臣たりしが。斯波家衰るに及んで。おのづから織田の家人とはなりたるらめ。)長秀始終豐臣家の方人せしかば。秀吉また怨に待遇有しに。長重天正十三年父につき越前北庄に住す。十四年從四位下侍從に叙任し。其後軍法を誤りし事有て。越前加賀若狹等の領地をけづられ。本領なればとて加賀國松任にて四万石たまはり。のち近江の國にて三千石を加へらる。十六年三月　神祖御上洛のとき。はじめて拜謁し奉り。文祿四年加賀國小松城をたまはり。十二万五千四石領し參議にのぼり。從三位の昇階し。加賀守と稱す。慶長四年加賀中納言利長謀叛の企ありとて。神祖御征伐に御發行あるべしと聞えしに。長重このころ加賀小松の城主たりしかば。所領まぢかきをもて先陣の事奉るべしと申す。長重が父長秀も利長も共に。織田殿の御婿をむかへ。むすばれたる中なるに。公儀を重じ私の慮をかへりみ

ず。先陣を望し事御感ないめならず。吉光の御脇差をたまふ。されど利長が叛逆はあとかたもなき空言にてやみぬ。五年大坂の奉行等軍起せしとき。利長より長重がもとへ使たてゝ。利長今度　内府の方人して。上方に攻のぼる。わどのにも心を同くしたまはゞ。ともく打のぼるべしと申つかはしけるに。長重我身は故太閤のために。父が國々か押うばゝれ。恩祿りし事もあらず。又　内府のためしたしみある身にもあられど。此度の勳賞に父が領せし越前の國たまはらんとあらば。内府のため一方を打やぶりなん。あはれこの事推擧してたまはれかしと申す。利長是に同意せしかば。味方となりて兩家の家人出あひ。人質を論しけるより事やぶれ。兩家終に戰爭に及びしが。　神祖　台德院殿上方にはせのぼらせ給ふと聞て。利長もいそぎのぼらては叶ふべからずと思ひ。長重と中なをりし人質をとりかはし。利長はいそぎ立て近江の國にて　神祖に拜謁す。關原軍終ての後。諸將の功罪を糺明ありしに。長重陳ずけれど。重き罪にも行はるべしと聞えたり。時に利長この事を聞。かくては吾こそ長重をたばかつて誅せしめしなど。人の評論うけん事弓矢とつての恥辱ならめとおもひ。かれが罪御免あらん事を。しば〳〵なげき申せしかば。遂に聞召ひらかれしかど。加賀の國をば既に利長にたまはりしゆへに。長重は所領失て江戸にまいり。芝浦の邊に籠居して。五郎左衛門と稱したり。　台德院殿むかしより御親しくわたらせたまへば。ちかくめして御談話の御相手となされ。八年十一月常陸國古渡の庄一万石たまはり。大坂前後の戰に敵の首十四切て奉り。元和五年又一万石くはへられ。八年正月十一日陸奥國棚倉にて三万石くはへられ。五万石になされ。いまの御代將軍宣下のとき。參議に還任し。寛永四年二月十日いまの城たまはり。十万石を領し。ことし閏三月六日六十七歳にて薨りをとりしとぞ。(吉良日記。藩翰譜。寛政重修譜。)〇五月朔日御不豫いさゝか快くならせたまひ。供御聞召れたるよし三家につたへらる。(紀伊記。)〇二日けふより醫員坂謙三幽玄御脉を伺ふ。二丸にならせたまひ。諸老臣も仰を受て御跡よりまかる。(紀伊記。)〇三日醫官半井驢庵成近。武田道安信重。今大路道三親昌御藥を奉る。今朝いさゝか御熱氣あるよし聞ゆ。(紀伊記。)〇四日熱氣さめさせ給ふ。(紀伊記。)〇五日端午を賀して。家門はじめ諸大名老臣に謁す。(紀伊記。)〇六日二丸へならせらる。(紀伊記。)〇八日紀伊大納言賴宣卿所勞こゝろよからんには。近日拜謁あるべき旨つたへらる。(紀伊記。)〇九日紀邸に三浦志摩守正次御使し。楊梅一籠つかはさる。けふ雨中ゆへ。一きは病眛御心元なく思召とはせ給ふ旨を傳ふ。(紀伊記。)〇十一日御快ならせ給ひ表へ出たまふ。紀伊大納言賴宣卿參府せられて後。はじめて拜謁せられ。水戸中納言賴房

卿もまうのぼらる。賴宣卿病後ゆへ。ことさら早く御對面して退出せしめらる。(紀伊記。)○十三日尾張大納言義直卿薨制はてゝまうのぼらる。よて水戸中納言賴房卿ものぼらる。(紀伊記。)○十五日月次拜賀あり。三卿まうのぼらる。(紀伊記。)○十六日二丸へならせ給ふ。このころとかくに御心地例ならずまします事。日をへてやまず。よて御辭氣をなぐさめ奉らんとて。酒井讃岐守忠勝。土井大炊頭利勝をはじめ。宿老少老とりどり風流の囃子物を興行し。御覽にそなへけるが。けふは松平伊豆守信綱。阿部豐後守忠秋の兩人より。一對の風流を奉る。忠秋は緣て思ひまへ。猿樂狂言のやからのこりなくかり催して出しけるに。信綱が方はさるまうけもなく。漸く生駒壹岐守高俊が狂言の者をかりて出しければ。双方鼓吹の調打あはで。一度は興にいらせ給ふ。舞童はみな兩人が近侍の兒輩のみにて他人交へず。風流五番はてゝまた御所望あり。さらに二番つかふまつる。一番ごとに衣服帶物をあらため。各錦繡をかざり美麗をつくせり。舞童十六人。みな一樣の假面をかけたり。一番はてゝ假面を脫すべき旨仰出され。みな假面をぬきければ。御座の御簾をかゝげられ。近臣等にも聲を發して讃美せしめらる。信綱忠秋はこの間橋懸の脇に伺公せしを御前にめし。今日の躍りをにめづらしく御覽ぜられ。日頃の鬱滯を散ぜられたりとて御盃を給ふ。その後此事大に行れ。三家井加賀等

卜明正院慰問家光病

よりも張行し御覽に備ふ。都下又これにならひ。市街までも風流張行を風尙とせりとぞ。(紀伊記。天享東鑑。)○十七日紅葉山　御宮へ(酒井讃岐守忠勝代參す。この日山里より二丸へならせ給ひ。猿樂御覽ぜらる。(紀伊記。)○十八日尾水兩卿まうのぼらる。戸澤越中守定盛就封の暇給ふ。この日山里へならせらる。　大内より女房奉書に權大納言の消息をへて。春日局まで此ほど御所勞の事聞召おどろき。御けしきうかゞはせ給ふ。(紀伊記。大内日記。)○十九日山里にならせらる。(紀伊記。)○廿日松平伊豆守信綱を紀邸に御使して。大納言賴宣卿に氷餅一匣つかはされ。攝生の事怠慢あるまじき旨をつたふ。(紀伊記。)○廿一日高田にならせられ。御かへさ酒井讃岐守忠勝が別墅へならせられ。御供の犇額打猿樂など御覽ぜられ。又諸老臣御前にて銃技を試みなどし日暮にかへらせ給ふ。(紀伊記。)○廿二日二丸にて御灸後猿樂あり。乘馬も御覽じ給ふ。けふの能。翁は靑院番頭本多美作守忠相。大坡は中奥小姓森川三左衛門氏時。清經は稻葉七三郎某。源氏供養は小姓組與頭中山勘解由直定。鞆繪は小納戸星合伊左衛門具枚。百万は靑院番駒井次郎左衛門昌保。自然居士は蒔山數馬助長廣。善知鳥は靑院番頭田中主殿頭吉官。三井寺は使番多賀左近常長。藤戸は靑院番組頭土屋長三郎政直。海士は靑院番曾我太郎右衛門包助。祝言も同下。狂言四番。口まねは鐵炮大筒奉行榊原兵左衛門

上無人身實

忠直。犬山伏は書院番中川左平太重良。朝比奈は細工頭矢部助之進定成。清水は小姓組西尾小左衛門重長これをつとむ。(紀伊記。)○廿四日尾水兩卿まうのぼらる。　この日三緣山　台德院殿靈廟に土井大炊頭利勝代參す。(紀伊記。)○廿五日二丸にて松平伊豆守信綱御膳を獻ず。弓の御覽あり。大姬のかた痘瘡愈給ひしを賀せられ。加賀邸に樽肴つかはさる。御使は酒井讃岐守忠勝なり。(紀伊記。)　○廿六日尾水兩卿まうのぼらる。(水戸記。)○廿八日月次の拜賀とて。尾水兩卿並諸大名まうのぼる。けふも山里にならせらる。(水戸記。)　◎この月令せらるは。人賣買の禁札。元和五年十二月廿六日大橋に建られたれば。其前の事は上裁あるべからず。其後の出訴は定制のごとく裁斷あるべしとなり。(條令。)○六月朔日月次拜賀の雜三家は卜め老臣に謁す。(紀伊記。)　○二日いさゝか御熱のよし聞ゆ。夕かけて山里にならせられ御灸あり。(紀伊記。)○三日二丸へならせらる。代官宮崎藤左衛門景次死す。子小納戸備前守時重は。これより先剋に召出されし故其家をつがず。(紀伊記。寛永系圖。)　○四日山里にて諸隊の與力が射藝を試らる。(紀伊記。)○六日松平伊豆守信綱を紀邸につかはされ。大納言賴宣卿署中を更保護せらるべき旨仰下さる。(紀伊記。)○九日御灸あり。(紀伊記。)　○十日女二宮祉田まいらせられしを謝せられ。雛子三龍。姬君へ肴人。御生母へくゝしぞめ織物の帶遣らせられ。春日の局へも帶三筋參る。(大内日記。)　○十一日松平伊豆守信綱をもて。紀伊亞相薨中別て養生あるべき旨仰下さる。しばく御使とにかしこみ奉る旨。亞相の生母養珠院尼より。使もて琥勝院春日局に謝せらる。　醫員武田道安信重。

大宮御藥のため上洛せしが歸り謁す。(紀伊記。家譜。)　○十二日二丸にならせらる。京極若狹守忠高卒しければ。香火銀五百枚たまふ。(紀伊記。寛永系圖。)○十四日靑蠅を御睹に供す。(紀伊記。)○十六日嘉定例のごとし。たゞし其筵にはのぞませ給はず。二丸にならせらる。(紀伊記。)　○十七日紅葉山　御宮に酒井讃岐守忠勝代參す。(紀伊記。)○十八日山里にならせらる。(紀伊記。)　○十九日本城の石垣搆造のさま親巡し給ふ。(紀伊記。)　○廿日このほど御不豫のよし京に聞えければ。十四日より清涼殿にて賀相院門跡御修法。　院にても竹内門跡御祈の事行はる。大宮も方々にて御祈仰付らるゝよし聞ゆ。(大内日記。)○廿一日山里にならせらる。御灸あり。三家まうのぼり老臣に謁せらる。(紀伊記。)　○廿三日山里にならせらる。　大宮より姬君御色直を賀せられて。時服三襲進らせらる。(紀伊記。大内日記。)　○廿四日三緣山　羅願に土井大炊頭利勝代參す。姬君御なやみのよし聞えければ。三家まうのぼらる。市井雪太田治兵衛宗勝にはかにめし。姬君に御藥を奉らしめしに。速に御心地さはやかせ給ふ。(紀伊記。家譜。)○廿五

日姫君の御けしきうかゞはれ。三家まうのぼらる。(紀伊記。)
○廿六日山里にならせられ御灸あり。紀伊亞相の邸に太田備中守資宗御使して。美濃瓜二籠つかはさる。亞相よりは東叡山にて。姫君の御所ありとて。符錄を春日局までまいらせらる。(紀伊記。)○廿七日尾水兩卿井常陸介光貞朝臣まうのぼられしかば。姫君彌御快ましますの旨つたへらる。けふも山里へならせらる。(紀伊記。)○廿八日尾水兩卿井光貞朝臣まうのぼらるゝ事昨日に同じ。この日山里にならせられ。堀田加賀守正盛御膳を献ず。二丸にて猿樂十一番あり。近日土井大炊頭利勝の別墅にわたらせ給ふべき旨仰出さる。(紀伊記。)○廿九日山里にて御灸あり。夜中姫君いさゝか御なやみありければ。尾水兩卿井光貞朝臣まうのぼらる。醫員澁江長喜氏胤は。姫君御病の間久しく夙夜勤仕しければ。御手づから御紋の團扇井に銀を給ふ。又瑞家。親王。門跡。清華。傳奏井near近の衆より。消息もて御不豫をうかゞひ奉る。(紀伊記。家譜。寛政重修譜。吉眞日記。)

是年正月より六月まで日記かくるなもて。紀州の記。水戸の視疆日錄。榊原家の紀年錄。井大内日記。寛永系圖。藩翰譜。慶延略記。天享東鑑。吉眞日記。及び諸家の譜よりとりあつめ綴りて其欠を補ふ。定めて遺脫多かるべし。

大猷院殿御實記卷三十五　寛永十四年七月に始り九月に終る

○七月朔日三家はじめ。諸大名拜賀のためまうのぼるといへども。御不豫により老臣に謁して退く。烏丸大納言光廣卿も同じ。水戸中納言賴房卿より鮭を献ぜられければ。大内へ獻進あり。水府よりこの夕また鮭を献ぜらる。この日大雨。(日記。)○二日尾張大納言義直卿。水戸中納言賴房卿。常陸介光貞朝臣まうのぼり御氣色伺はる。尾邸へ阿部豐後守忠秋。水邸へ三浦志摩守正次御使して菓子つかはさる。近日　勅使　院使參向により。戸川土佐守正安館作を仰付らる。京に驛傳して仙洞に鮭をまいらせらる。(日記。)○三日尾水兩卿井諸大名まうのぼり御けしきうかゞふ。(日記。)○四日官醫半非醺庵成近。今大路道三親正さきに御勘氣を蒙るといへども。かねて其藥相應せさせたまへば。御勘をゆるされ藥を献ぜしめらるべきよし。尾紀水三卿まうのぼり聞えあげらる。大小名もともにまうのぼる。この日御灸あり。(日記。)○五日姫君御心地さはやがせ給ひて御湯めさる。春日局の方にて祝宴催し。醫員等にかづけものす。尾紀水三郎へ松平伊豆守信綱御使し。加賀藩醫兩黃門はじめ七人の大名へは。使番して雲雀をたまふ。諸大名登營昨日のごとし。大阪長崎井因幡より蠻夷商船若干長崎へ入津の注進あり。(大内日記。日記。)○六日越後少將光長はじめ十三

人に。使番もて雲雀を下さる。大小名出仕連日のごとし。小笠原右近大夫忠眞こたびの構造成功によて。家司等銀時服羽織をたまふ。　大宮より例の御使ありて。星夕の御祝物進らせられ。かつ姫君の御けしきうかゞはる。三家井加賀黃門。越前宰相。越後少將をはじめ。家門に列るともがら十二人より。生身魂の賀物奉る。けふ二丸にならせたまふ。(日記。)○七日御不豫により星夕の拜賀なし。三家諸大名老臣に謁して退く。烏丸大納言光廣卿もおなじ。(日記。)○八日三卿登營せらる。(日記。)○九日三卿及諸大名出仕す。この日春日局生身魂の御膳を献ず。また御灸あり。(日記。)○十日諸大名登營す。この日　御宮をも拜させたまひ。銀五十枚そなへたまひ。御神前にて大僧正天海御名を奉り。千代姫君と稱し進らす。僧正はじめ衆僧かず〳〵賜物あり。やがて山王へまうでたまひ。御かへさに春日局がもとに立よらせ給ひ魚味始あり。三家諸大名登營して賀し奉る。(日記。大内日記。)○十七日紅葉山　御宮に酒井讃岐守忠勝代參す。この日御誕辰によて御宴あり。奥にて猿樂御覽ぜられ。其徒に時服羃頭ぜらる。けふ營中伺候のともがら酒を賜はる。(日記。)○十八日仙石越前守政俊。四尾丹後守忠昭。戸田因幡守忠能大阪加番の暇たまふ。　大宮へ鮭を驛遞せらる。奥にて巢鴨御覽あり。(日記。)○十九日土井大炊頭利勝四城に於て御茶を献ず。白木書院かり舞臺にて猿樂を催す。竹生島。八島。野々宮。黑塚。柏崎。自然居士。亂曹なり。

重て御所望により國祐道成寺を加ふ。この日諸大名は奏者番に謁し退く。代官万年七郎右衛門久粗死しければ。その子三左衛門粗高とて。もと駿府につけられしを召かへし。家つぎて遠江國の代官たらしむ。(日記。家譜。)○廿日尾水兩卿諸大名登營す。(日記。)○廿一日烏丸大納言光廣卿旅館へ。使番永井監物白元もて雲雀遊はさる。けふ奥にて猿樂あり。翁は書院番頭本多美作守忠相。三番叟は使番小幡勘兵衛景憲。天鼓は中奥小姓森川三左衛門氏時。清經稻葉長三郎某。源氏供養小姓組與頭中山勘解由直定。鞨鼓は小納戸星合伊左衛門貞枚。百萬は書院番駒井次郎左衛門昌保。自然居士は蒔田數馬助長房。善知鳥は書院番頭田中主殿頭吉官。三井寺は使番多賀左近常長。藤戸は書院番組頭土屋長三郎政直。蟹は書院番曾我太郎右衛門包助。狂言五番。口眞似は銃炮大筒等奉行榊原兵左衛門忠直。犬山伏は書院番中川左平重真。清水は小姓組西尾小左衛門重長。萩大名は細工頭矢部助之進定成。朝比奈は勘兵衛景憲つとむ。けふ京使者參着せり。(日記。)○廿二日尾水兩卿并諸大名登營し御氣色を伺ふ。土井大炊頭利勝。高家吉良若狹守義冬京使の旅館に慰勞の御使す。加州の相撲をめして御座の御庭にて角力せしめらる。(日記。)○廿三日諸大名登營す。烏丸大納言光廣卿歸洛の暇をたまふ。(日記。)○廿四日三條山　靈廟に土井大炊頭利勝代參す。方丈智童に齋飯を下さる。この日堀田加賀守正盛がもとへならせられ。御かへさに本城の構造を親巡したまふ。酒暮より奥にて幸若舞御覽ぜらる。(日記。)○廿五日諸大名登營す。白木書院の庭上にて。弓組與力同心の射藝を御覽ぜらる。又奥にて拍子の御遊あり。(日記。)○廿六日阿部豐後守忠秋が邸に臨駕あり。(日記。)○廿七日二丸にて御遊かずかずあり。この日京使の旅館へ高家吉良若狹守義冬なつかはさる。夜中大雨雷電地震。(日記。)○廿八日三家諸大名老臣に謁して退く。鑄員狩野采女守信。右京安信。主馬尙信御前にめして給を御らんぜらる。(日記。)○廿九日　勅使清閑寺頭弁共綱。　院使野々宮兵部大輔定逸。　大宮使樋口中將信孝まうのぼり。御不豫をとはせたまひ。かつ御祈禱の卷數進らせらる。　內より匂袋。　院より薫物をそへらる。　大宮よりは御撫物に袷帷そへてまいる。これは　內　院にて一七日の御修法行はれ。　大宮にては比叡山松禪院にて。一七日の護摩行はれしとぞ。井伊掃部頭直孝。土井大炊頭利勝大廣間にてこれを拜受し。白木書院にて御覽にそなへ。かさねて大廣間にまかり。御氣色うるはしくうけさせ給ふ旨をつたへて三使退く。次に一條攝政をはじめ。攝家。親王。清華。諸門跡より。　とりぐ〳〵巻數薫物進らせらる。直孝利勝これをうけ納む。この日大手より櫻田門をいでたまひ。八重洲河岸より二丸にかへらせ給ひ。又鑄工狩野采女守信。右京安信。主馬尙信を

めして給を御覽あり。(日記。大內日記。)○晦日鑄工をめさるる事昨日のごとし。(日記。)◎此月市井醫太田次兵衛宗勝姫君に御藥奉らしめられしに。速に御心地さはやかせ給ひければ。褒銀給ひ御方につけさせらる。(寛政重修譜。)○八朔三家諸侯伯各太刀目錄を老臣に呈して退く。兼て酒井讃岐守忠勝御膳獻すべしと仰下されしが。所勞により名代として。長子備後守忠朝これを獻ず。よて猿樂催さる。高砂。實盛。熊野。鞨鼓。櫻川。葵上。羅城門。祝言。御所望により鵜。海士二番を加ふ。はてゝまた風流あり。(日記。)○三日地震甚し。諸大名まうのぼりて御氣色伺ふ。この日御灸あり。(日記。)○四日尾水兩卿まへ新鵜を驛進したまふ。(日記。)○六日諸大名まうのぼりて御けしきうかゞふ。この日御灸あそばさる。又拍子の御遊あり。(日記。)○七日松平伊豆守信綱御膳を獻ず。よて猿樂あり。白樂天。朝長。誓願寺。土蜘。檀風。自然居士。百万。鐘道。盛久。猩猩。畢て風流數番奉る。この日尾紀兩邸へ阿部豐後守忠秋御使して新鵜を遣はさる。この日頃御不豫にて何事も沙汰し給はねば。其際に乘ず不敬のふるまひする族は。常よりも嚴にいましめられ。改易に當る罪は切腹命ぜらるべし。番頭組頭より番士の可否を糺し。聞えあぐるにより。日付の罪は各隊徵細の事まで。糺察するに及ばずといへども。御不豫にましますの間は。瑣末の事まてゝ。目付糺察して建白すべし。もし此後も無作法の擧動あらば。番頭組頭物頭はいふ迄もなし。目付の罪をもいましめらるべき旨仰出さる。此日大風雨。(日記。大見日記。)○八日尾水兩卿并諸大名登營す。太田備中守資宗御使して。水戸黄門に靡一隻遣はさる。(日記。)○九日諸大名まうのぼる。先日大風雨により惣曲輪の石垣土居崩頽せし各所。松平伊豆守信綱。阿部豐後守忠秋して巡視せしめらる。城東淺草邊洪水。荒川利根川秋漲さかんなるよし。郡代伊奈半十郎忠治注進し。駿府よりは七日の大風にて。城中の塀并民屋百三十軒余吹倒したるよし注進す。この日未後西城坂下邊に出遊し給ふ。(日

下本城搆造成

記。)〇十日地震す。けふ御灸あり。又猿樂催さる。三輪は書院まいのぼる。本城搆造成功せしにより。助役したる松平安藝守光晟。松平右衛門佐忠之の家司等。銀時服羽織たまふ事差あり。又增上寺方丈智童に齋飯を下さる。夕かけて風流御覽ぜらる。太田備中守資宗が催す所なり。(日記。)〇十六日松平伊豆守御使して。尾紀兩邸へ葡萄一籠づゝ遣はさる。けふも三浦志摩守正次より風流を奉る。(日記。)〇十七日加賀中納言利常卿。細川越中守忠利。松平新太郎光政。松平安藝守光晟。松平長門守秀就に使番して菓子をたまふ。末後猿樂御覽ぜらる。源氏供養は柳生但馬守宗矩。海士は永井日向守直清。東岸居士は保保兵九郎貞季つかふまつる。事はてゝ酒井備後守忠明風流を奉る。(日記。)〇十八日尾水兩廂并諸大名まうのぼる。松平右衛門佐忠之。鍋島信濃守勝茂。藤堂大學頭高次。松平阿波守忠英。松平土佐守忠義に使番して菓子を賜ふ。奥にて幸若舞御覽ぜらる。(日記。)〇十九日諸大名まうのぼる。有馬玄蕃頭豐氏。生駒壹岐守高俊。京極丹後守高廣。毛利甲斐守秀元。立花飛驒守宗茂に使番もて菓子をたまふ。又　仙洞へ玄鶴を驛進せらる。此日畑田加賀守正盛の邸へ成せらる。(日記。)〇廿一日諸大名まうのぼる。使番本鄕勝右衛門勝吉駿府の目付はてゝかへり參る。(日記。)〇廿二日大名登營連日のごとし。猿樂御覽ぜらる。加茂。千壽。羅城門。芦苅。三井寺。瀧田。項羽。鞍坂。猩々。矢服。事はてゝ小姓組番頭土井遠江守利隆風流を興行す。(日記。)〇廿三日尾水兩廂并諸大名登營す。(日記。)〇廿四日三緣山　靈廟に土井大炊頭利勝代參す。增上寺方丈智童并伊賀齋飯を下さる。松平越後守光長。松平筑前守光高。松平薩摩守光久。森內記長繼。伊達遠江守秀宗に使番して菓子をくだされる。(日記。)〇廿五日三家諸侯伯登營す。今年大風雨により。諸國秋稼の巡視命ぜらる。西は小姓組佐田內藏助信重。大番組頭石丸權六郎有吉。東は小姓組土屋忠兵衛知貞。大番組頭長井五右衛門吉次奉はり各暇給ふ。この日井伊掃部頭直孝御膳を獻ず。來國光の脇差をさゝぐ。猿樂高砂。生田。敦盛。芭蕉。紅葉狩。富士太鼓。野守。鼓。百萬。是界。善知鳥。橋弁慶。吳服。事はてゝ直孝また風流を奉る。(日記。)〇廿六日本城搆造落成により。東叡山にて祈禱あり。けふ結願によて堀田加賀守正盛御使し。大僧正天海へ銀二百枚。時服十。毘沙門堂門跡公海へ銀百枚。時服十。知樂院權僧正忠高へ銀五十枚。時服五。東叡山中衆僧銀千枚。日光山衆僧に五百枚。山里にて護摩仕ふまつりし僧等に三百枚。千妙寺嚴海。上乘院行盛。寒松院舜海時服三づゝ。寂海院晃海。双嚴院泰圀。竹林坊盛慧に二づゝ賜ふ。(日記。)〇廿七日吉辰なればとて。本城に御移徙の式行はる。巳刻御馬印并投納の鐘は。先遣てまいる。遠侍所に立ならべ。物頭つきしたがふ。次に四城より出まし。勘奇屋口より庭所をへて。大手より入ちせたまひ。黒木書院に着給へば。朽木民部少輔稙綱御祈禱の符籙持出て御覽に備ふ。次に新造の御所ども御巡覽あり。ふたゝび黒木書院にならせたまひ。三家拜賀ぜられ。御座所にて御膳奉り。又黒木書院にて御祝の御膳七五三を奉り三獻の御祝あり。井伊掃部頭直孝。松平下總守忠明は御次にて御酒をたまふ。三家并天樹院御方。大姫御方。英勝院。春日局より樽肴奉り。掃部頭直孝。下總守忠明。土井大炊頭利勝。酒井讃岐守忠勝并執政參政の輩より樽肴を獻ず。近習外樣の諸有司黒木書院の次にめして宴をたまふ。宴たけなはなる時。其席にのぞませたまひ。衆入みな拜謁せし所。こたび搆造の作事等行等を召出され。今度新造の結搆華麗に過たり。天下に倹を示す所以にあらず。華飾の所は速に毀ち去り。今より後營造作の華美を用ひまじき旨面命せらる。聞者みな戰慄せりとぞ。やがて四城にかへらせ給ひてのち。諸大名まうのぼり御移徙を賀し奉る。(日記。)〇廿八日月次拜賀例のごとし。松平縫殿助直矣。大久保主膳正幸信。松平主殿頭忠房。秋田河內守俊季。土屋民部少輔利直大坂加番はてゝ歸り謁す。この日新鄕臺にて猿樂あり。老松。田村。定家。各行。三井寺。藤戸。天鼓。女郎花。三輪なり。定家は柳生但馬守宗矩。三井寺は永井日向守直清。藤戸は佐久間將監實勝。天鼓は保々兵九郎貞季。其外みな猿樂のもの等役す。大僧正天海見る事ゆるされて憂ぜらる。事はてて但馬守宗矩より風流を御覽に備ふ。(日記。)〇廿九日

上家光移徙本城

堀田加賀守正盛御膳を献ず。よて猿樂あり。養老。通盛。班女。車僧。春栄。張良。柏崎。弓八幡。はて〻加賀守正盛風流を儘す。いさ〻か地震あり。(日記。)◎此月高山主水正盛聰二子平三郎利永召出されて小姓組にいる。(寛永系圖。)○九月朔日拜賀例のごとし。朝會はて〻大廣間前庭にて。近習小姓の輩馬上にて鞭打せしめ御覽ぜらる。(日記。)○二日堀田加賀守正盛の邸にならせらる。こたび二丸の　内宮御遷營にて。この廿日前御遷宮あるをもて。青蓮院門跡尊純法親王。勤修寺中納言經廣卿及伶人等。すでに發京する所。　御遷宮十三日に治定せられしかば。この輩その心していそぎ參着あるべき旨。老臣より急脚もて仰をつたふ。(日記。)○三日尾張大納言義直卿御茶を献ぜらる。よて猿樂五番あり。はて〻又紹宣卿より風流を御覽にそなへらる。(日記。)○八日この十七日日光山御祭により。秋元但馬守泰朝代參命ぜらる〻により。毘沙門堂門跡公海も同じくつかはさる。又肥前國平戸城主松浦壹岐守隆信遺領六万三千二百石を。その子肥前守鎭信に襲しめらる。此隆信は故肥前守久信が子にて。慶長八年　神祖に初見し奉る。(時に十三歳。)十七年九月叙爵し肥前守と稱し。後壹岐守に改む。父久信はこれより先慶長七年早く卒せしかば。祖父式部卿法印鎭信入道がゆづりをうけて。十九年に家をつぎ。今年五月廿四日四十七歳にて卒せり。又日向國佐土原領主島津右馬頭忠興子萬壽丸久雄に。遺領三万石をつがしむ。この宴を給ふ。(日記。)○六日參向の輩諸侍を命ぜらる。青門は桑山修理亮一玄。勤修寺黄門は青木甲斐守重兼之。この日二丸にて御饌奉りし時。御膳奉行水野善兵衛勝次いかゞ思ひ遠へけん。胡椒の粉を湯中に散らして奉りしかば。阿部對馬守重次にあづけらる。此日地震し。夜に入て雹雨甚し。(日記。)○七日紀伊大納言賴宣卿御茶献ぜらる。猿樂三番過て。白木書院にて御膳を奉られ。次間にて近習井營中伺候の輩ことごとく亞相より饗せらる。次に亞相に御盃給はり。亞相より來國光の御刀を奉らる。亞相は兼て所勞あれば。供膳の時にいたりまうのぼられ。その前は長子常陸介光貞朝臣かはりてつかふまつる。樂は玉井。忠度。井筒。鵜飼。百萬。鞍馬天狗。祝言。はて〻又紹宣卿より風流を御覽にそなへらる。(日記。)○八日この十七日日光山御祭により。秋元但馬守泰朝代參命ぜらる〻により。毘沙門堂門跡公海も同じくつかはさる。又肥前國平戸城主松浦壹岐守隆信遺領六万三千二百石を。その子肥前守鎭信に襲しめらる。此隆信は故肥前守久信が子にて。慶長八年　神祖に初見し奉る。(時に十三歳。)十七年九月叙爵し肥前守と稱し。後壹岐守に改む。父久信はこれより先慶長七年早く卒せしかば。祖父式部卿法印鎭信入道がゆづりをうけて。十九年に家をつぎ。今年五月廿四日四十七歳にて卒せり。又日向國佐土原領主島津右馬頭忠興子萬壽丸久雄に。遺領三万石をつがしむ。この

下松浦隆信

下島津忠興

忠興は故右馬頭以久が三子なり。祖父右馬頭忠將は大隅の國邊の戰に討死し。其子以久は父につき。兄右衛門尉尚久は朝鮮海路の戰に討死し。二男又六重時は入來院彈正重豐の養子となり。忠興十二歳にて。慶長十五年五月二日父が家つぎ。駿府に參り　神祖に見え奉り。元和四年十二月廿八日叙爵し右馬頭と稱し。この六月十一日卒す。三十九歳。また備中國足守領主木下宮内少輔利房が子淡路守利當に。遺領二万五千石を襲しむ。この利房は故羽柴二位法印家定が二男にて。豐臣太閤の時に若狹國高濱の城主とせられ。二万石たまはり。爾ゆりて宮内少輔と稱し。慶長五年の秋大阪の催促にしたがひ。北陸道發向せり。しかるに天下ことごとく　當家に歸しければ。利房死刑に處せらるべきを。政所のゆかりなればとて死刑をなだめられ。所領をば沒收せらる。十三年父の入道卒せし後。其遺領を兄少將勝俊と利房に分ち賜はりしな。政所勝俊にのみあたへられんとせられしかば。御氣色にかなはず。その遺領ことごとく收公せらる。大坂の軍おこりしとき。利房御陣に參りければ。元和元年今の地賜はり二万五千石領し。この六月廿一日卒す。歳は六十五なり。又上野國七日市領主前田大和守利孝子右近利意に。遺領一万石を襲しむ。この利孝は曩祖一位大納言利家の五男なり。はじめ中納言利長の母芳春院を關東にはじめて參らせしとき。利孝は芳春院に愛憐ふかく。片時も側をはなし得ず。ともなひて參りけり。關原の戰ひ終て。兄利長に加賀能登を加へられ。芳春院にも別に一万石の地をたまふ。その時土方河内守雄久も。利長のゆかりあるものにて。利長とともに北陸をしづめし賞とて。上野七日市の地を下されしが。芳春院關東にあれば。其便よからんため。利長望て土方が領地と加賀の地をかへて。七日市をば芳春院の領とせり。利孝慶長九年はじめて。　神祖　台德院殿に初見し。十八年八月十日叙爵して大和守と稱し。元和二年今の地を賜はる。これ芳春院が領せし所とぞ。この六月四日四十四歳にて卒せり。(七日市はじめに芳春院が領地の事。藩翰譜によりて加ふ。重修譜には此事見えず。)また信濃國須坂領主堀淡路守直升が子大學直輝に。遺領一万五千石をつがしむ。この直升は故淡路守直重が長子にて。元和元年　台德院殿に初見し。二年八月遺領をつぎ。叙爵して淡路守と稱し。この三月十七日三十一歳にて卒す。又上野國烏山城主堀美作守親良が遺領二万五千石を分て。二万石は長子又七郎親昌。三千石は二子孫太郎親智。二千石は三子三太郎親宣に給ふ。この親良始は秀家といふ。故左衛門督秀政が次子なり。豐臣家に仕へ叙爵して美作守と稱し。羽柴の家號を賜はり。後に越後の國藏王の城主として。四万石領せしが。慶長五年關原戰の前に。上杉景勝密に謀領越後の土民をかたらひ。一揆を起さしめ國中騷動せしに。親良悉く伐破り。敵

下堀親良

下堀直升

上木下利房

上前田利孝

の首三百餘級を討取たりしかば。　神祖　台徳院殿より御感書を賜はる。七年病あつかりしかば。兄左衛門督秀治が二子鍋千代をやしなひて子とし。所領をゆづり。その身は一万二千石をもて隠栖の料とす。又こひ卒り江戸に參りてつかへたてまつり。慶永一万二千俵たまふ。この時隠栖の料は鍋千代にかへ一附しぬ。鍋千代程なく卒しければ。親長は　當家につかへん事をこひ。太閤より父の時さづけられし數臣の姓を去て。母かたにつき菅原になりぬ。十六年慶永加へて下野國誌岡一万二千石賜はり。大坂前後の戦にしたがひ。元和四年十二月六日五千石加へられ。寛永四年今の地賜はり。また加恩ありて二万五千石になり。この五月十三日五十八歳にて卒せしとぞ。(日記。藩翰譜。寛政重修譜。)〇九日重陽の賀儀家門諸大名まうのぼり。老臣に謁して退く。この日水戸中納言賴房卿御膳を献ぜられ。申樂あり。尾張大納言義直卿もまうのぼり伺候せらる。竹生島。八島。源氏供養。黒塚。海士。春日。龍神。山姥。高砂。この牢に兩卿白木書院にて饗あり。近習拝謁中伺候の輩にも黄門より饗せらる。猿樂はて、黄門御盃賜はり。左文字の脇差をさゝげらる。紀伊大納言賴宣卿は所勞いまだ平愈にいたらずとて。猿樂はて、まう登り拝謁せらる。又黄門より風流を御覧にそなへらる。黄昏に太田備中守資宗を水郎につかはされ。けふの勞を慰せらる。(日記。)〇十日本多大隅守忠純。太田原左兵衛政清駿府加番にさゝれ。使番蒔田玄蕃頭定正。駿府目付にさゝれいとまたまひ。米倉平大夫重種。安藤彌兵衛次吉暇たまふ。賀詞の證人も暇下さる。薩摩中納言家久卿御不豫の事を聞て使奉り伽羅十斤献ず。よて御内書を給ふ。御病後はじめて御列をなさる。また伯州米子の士人朝鮮國に漂着せしかば。かの禮曹書簡をそへ送り來りし旨。宗對馬守義成注進す。(日記。)〇十一日諸大名まうのぼり御けしき伺ふ。(日記。)〇十二日も同じ。(日記。)〇十三日使番川勝丹波守廣綱。書院番佐々權兵衛長次卿後日付にさゝれ暇給ふ。さきに庖所より失火せしを。速に撲滅せし下男四人褒銀を下さる。(日記。)〇十四日春日局の邸へならせらる。(寛永の江戸給圖によるに。今の竹橋門より田安のあたりに。比丘尼町とて英勝院等の住居軒を並ぶ。其内に春日の邸は尤廣くかまへたり。)御膳を献上。猿樂高砂。實盛。藤永。終て稻葉美濃守正則風流を御覧に備ふ。局へ金三十枚。綿貳百把下さる。(日記。)〇十五日月次出仕例の如し。青蓮院門跡尊純法親王。勸修寺中納言經廣卿參向により。青門へ高家吉良上野介義彌。黄門へ今川刑部大輔直房をつかはさる。出納豐後守井伯倫十二人も參向せりとぞ。この日大廣間前庭にて。近習小姓の輩鞭打命ぜられ御覧ぜらる。(日記。吉良日記。)〇十六日柳生但馬守宗矩が別墅にならせらる。宗矩御膳を献上。猿樂あり。樂は高砂。船辨慶。東北。(日記。)〇

上本城二丸
上棟
下家光移徙本城

〇十七日本城二丸　御宮上棟あり。大工頭木原杢允藏久包次御太刀。栗毛の鞍馬一疋下され。鈴木兵九郎某に銀三十枚。興次郎大隅に廿枚。彌太郎に十枚。その他工人へ青蚨五千疋下さる。はて、大僧正天海。知樂院權僧正忠尊。　御宮にまうのぼり讀經あり。この日松平下總守忠明御膳を献ず。猿樂催さる。白樂天。經政。松風。裘上。三輪。自然居士。鐘馗。矢服。この牢に忠明御前に召され御盃賜はり。來國俊の刀を献ず。また忠明風流を催して御覧に備ふ。(日記。)〇十八日二九　御宮外遷宮あり。酒井讃岐守忠勝。御側中根平十郎正盛。知樂院僧正忠尊　神輿を供奉し。高家吉良若狭守義冬。今川刑部大輔直房御劔をもつ。各衣冠なり。また納戸組頭横地左右衛門安信。大番伊達庄兵衛房次は兎方番となり。書院番加藤喜右衛門正信。小普請奉行梶川四郎次郎忠助。四山太郎兵衛昌綱。幕奉行小林權大夫正吉。久松彦左衛門定佳。大番戸田平右衛門清久。其組頭中山五平次勝信は裏切手門の番命ぜられ。各同心十人づゝ屬ぜらる。又永井與次郎忠正。柘植小左衛門宗普。江原孫兵衛政令は遠慮命ぜらる。大番多門傳八郎信利。間宮權之助正次は小普請奉行となり。花畑番神田孫兵衛正頂は弓矢鐵奉行となり。大番青木彦兵衛之能雜奉行となる。この日猿樂御覧ぜらる。老松。田村。鵜。東岸居士。祝言。終て松平伊豆守信綱。阿部豐後守忠秋より風流を御覧に備ふ。番頭物頭みなみる事ゆるされ酒をたまふ。又信綱に松風といふ茶壺を下さる。この十日高野山聖方坊中失火し。坊舍七八百戸燒せし注進あり。(吉良日記。日記。寛政重修譜。家譜。)〇十九日四城より本城に御移徙あり。御牛務にて玄關よりならせられ。黒木書院にてのし鮑奉る。夜に入常の御座所にて御宴あり。御談伴及近習の輩酒を賜ひ。又營中伺候のともがらをもことごとく饗せらる。家門譜第衆長の袴着てまうのぼり。老臣に謁し御移徙を賀す。(日記。)〇廿日　御造助役の諸譜第衆　并作事奉行を白木書院に召て。今度營造各心力をつくし。のこる所なく盛慮に應ずる旨。老臣褒詞をつたふ。又裏門番頭小林勝之助正忠。日來嚴密に勤勞せりとて褒詞をつたへらる。(日記。)〇廿二日尾水兩廂にならせらる。(日記。)〇廿三日青門并勸修寺黄門のもとへ權まうのぼらる。(日記。)〇廿三日青門へは高家大澤右京亮基重。黄門へは使番香なくらせらる。青門へは高家大澤右京亮基重。黄門へは使番朝倉仁右衛門在重まかる。佐久間久左衛門信勝死す。信勝は

豆守信綱。又酒井讃岐守忠勝供奉し。吉良上野介義彌。今川刑部大輔直房左右に御劔を一振づゝ持て從ふ。ともに束帶なり。御假殿の前にて伶人神前にむかひ亂聲一調子。畢て大僧正天海御迎に參る。次に唐櫃二棹。獅子二頭。御弓御劔を先だて。そのあとより青蓮院門跡尊純法親王。毘沙門堂門跡公海。その外寒松院弁海。千妙寺には刑部大輔直房。大澤右京亮基重。各唐織物薄物二襲づゝこれかひき。その外の衆僧へは岡部大和守興貞。土屋大和守數直。酒井大膳亮勝吉。石丸淡路守定次。本多將監景次。秋田隼人正季信。白小袖一襲づゝ纏頭す。法會畢て御直垂にて參らせ給ふ。御束帶たるべしといへども。御病後により略させたまひしなり。御太刀は刑部大輔直房。御刀は太田備中守資宗。御香は岡部對馬守重次なり。國宗の御太刀。鹿毛の鞍馬。御奉幣。神酒等。あるべきさまにてまいて給ふ。尾紀水三卿も參拜あり。青門井に黄門經廣卿も參拜奉幣あり。次に井伊掃部頭直孝。松平下總守忠明。土井大炊頭利勝。松平伊豆守信綱。岡部豐後守忠秋。松平右衞門大夫正綱。青山大藏少輔幸成。内藤伊賀守忠重。秋元但馬守泰朝。板倉内膳正重昌。安藤右京進重長。松平出雲守勝隆。高力攝津守忠房。水野備後守元綱。伊丹播磨守康勝各束帶して參拜す。還御の後三卿まいのぼり賀せられ。掃部頭直孝。下總守忠明。大炊頭利勝。伊豆守信綱。豐後守忠秋井に近臣等に御酒をたまふ。青門井勤修寺黄門へは大炊頭利勝御使し。　正遷宮御法會全備して。御氣色の旨にて。中納言經廣卿白の時服一襲もらいて。舞人の左肩に纏頭す。次に納言利。これは上野介義彌纏頭の品もち出。右肩にかく。次に被物青門井大僧正天海毘沙門へは唐織浮織薄物三襲。黄門井上野介義彌これをひく。知樂院。尊勝院。上乘院。寒松院弁海。千妙寺には刑部大輔直房。大澤右京亮基重。各唐織物薄物二襲づゝこれかひき。その外の衆僧へは岡部大和守興貞。土屋大和守數直。酒井大膳亮勝吉。石丸淡路守定次。本多將監景次。秋田隼人正季信。白小袖一襲づゝ纏頭す。法會畢て御直垂にて參らせ給ふ。御束帶たるべしといへども。御病後により略させたまひしなり。御太刀は刑部大輔直房。御刀は太田備中守資宗。御香は岡部對馬守重次なり。國宗の御太刀。鹿毛の鞍馬。御奉幣。神酒等。あるべきさまにてまいて給ふ。尾紀水三卿も參拜あり。青門井に黄門經廣卿も參拜奉幣あり。次に井伊掃部頭直孝。松平下總守忠明。土井大炊頭利勝。松平伊豆守信綱。岡部豐後守忠秋。松平右衞門大夫正綱。青山大藏少輔幸成。内藤伊賀守忠重。秋元但馬守泰朝。板倉内膳正重昌。安藤右京進重長。松平出雲守勝隆。高力攝津守忠房。水野備後守元綱。伊丹播磨守康勝各束帶して參拜す。還御の後三卿まいのぼり賀せられ。掃部頭直孝。下總守忠明。大炊頭利勝。伊豆守信綱。豐後守忠秋井に近臣等に御酒をたまふ。青門井勤修寺黄門へは大炊頭利勝御使し。　正遷宮御法會全備して。御氣色の旨にて。

なつたふ。(日記。)○廿八日月次出仕の祝老臣に謁す。この日正遷宮御法會の事により。青門へ銀五百枚。綿五百把。黄門經廣卿へ銀二百枚。綿百把。大僧正天海へ銀千枚つかはさる。御使は土井大炊頭利勝井高家吉良上野介義彌なり。また毘沙門知樂院へも銀三百枚づゝ。上乘院僧正行盛。寒松院弁海。千妙寺僧正嚴海百枚づゝ。尊勝院僧正。　寂教院晃海。本實成院。　双嚴院豪俱。竹林坊盛憲五十枚づゝ。靜慮院。　延命院三十枚づゝ。衆僧へ青紙予貫文つかはさる。(日記。吉良日記。)○晦日　正遷宮を祝せられ。二丸にて賀宴あり。青門ならび勤修寺黄門および大僧正天海はじめ。是にあづかりし僧綱等および坊官伶人みな饗せられ。猿樂を見せらる。青門黄門は太刀目錄さゝぐ。青門黄門の饗席には。尾水兩卿伴食せらる。けふは尾亞相御名代なればとて。盃をはじめられしとぞ。猿樂はてゝ青門黄門拜謁せらる。樂は高砂。田村。芭蕉。張良。船辨慶。鵜。山姥。熊坂。兎服なり。猿樂等みな裝脚をたまふ。(日記。吉良日記。)◎此月鉄炮玉藥奉行加藤源四郎正勝死して。孫大藏源四郎正成家をつぐ。(寛永系圖。)◎この秋のはじめより。朝夕東西赤雲たなびき。櫻花咲所は春景にことならず。何等の災異かと衆人疑しとなり。(肥前島原記。)

大猷院殿御實紀卷三十六　寛永十四年十月に始り十二月に終る

○十月朔日月次拜賀例のもし。勤修寺中納言經廣卿錦洛の暇たまひ。銀百枚。時服十つかはされ。出納覽後に銀廿枚。御藏眞。繼兵部少輔に十枚。伶人に時服一襲。銀十枚づゝ下さる。青蓮院門跡尊純法親王には土井大炊頭利勝。高家吉良上野介義彌御使して。銀三百枚。時服二十つかはされ。坊官等に銀十枚づつ下さる。今朝黄門增上寺にまうづるによて。上野介義彌井に青山大藏少輔幸成。高力攝津守忠房つかはさる。此日近郊御狩場の御憩息所を。松平伊豆守信綱巡察にまかる。(日記。吉良日記。)○二日城外にて鷹をならし給ひ鴨を得給ひ。やがて吉祥寺にならせられ。其鴨を水戸黄門につかはさる。御使は太田備中守資宗なり。又御かへさに酒井讃岐守忠勝が別墅によぎらせられて。御膳奉り鴨三をくらせ給ふ。(日記。)○三日小石川邊に鷹つかはせ給ひ。鴈四。鴨一得たまひ。晉樂寺にて御膳を奉り。長福寺によぎらせられ。小石川より還御あり。(日記。)○四日芝猪御祝例のごとし。例は三千石以上の輩へ。御手づから餅を給ふといへども。御不豫により一同に拜謁す。(日記。)○五日城外にならせ給ひ。水戸中納言賴房卿の邸前にて。銃もて鴈を打とめたまひ。直に賴房卿に給はり。その邸にいらせられ御膳を奉る。かへらせ給ひて後黄門まうのぼり謝せらる。(日

記。)○七日松浦肥前守鎭信より。外國の大雉鷄哥慮等を獻ず。(日記。)○八日尾水雨卿まうのぼり。御氣色をうかゞはる。城外にならせられ鴨をからせ給ふ。細川越中守忠利病臥によて。阿部豐後守忠秋してとはせらる。(日記。)○九日大閤土佐守高井金紗二匣。伽羅綿五百把奉り。正綱より京極中納言定家卿增。植村土佐守泰朝駿城加番はてゝ歸謁す。けふも城外にならせられ。高田のほとりより酒井讃岐守忠勝が別墅によぎらせ給ひ御膳を奉る。また佐久間將監實勝が大久保の邸にわたらせられ御膳を奉る。(日記。)○十日幸若舞御覽あり。(日記。)○十一日諸寺社より。御不豫御祈の符籙を奉る。けふも城外にならせられ。二丸へかへらせ給ふ。(日記。)○十二日尾紀水三卿井諸大名まうのぼる。諸家より奉りし饌を御覽に備ふ。(日記。)○十五日月次例のごとし。出仕の輩老臣に謁す。(日記。)○十六日松平伊豆守信綱の邸にならせらる。信綱猿樂井風流十番御覽に備ふ。信綱に吉岡助廣の御刀。住吉といふ駿馬。時服三十。金十枚。三種三荷。長子甲斐守輝綱に國重の御刀。二子三郎兵衞吉綱に光包の御刀。三子內記信定に久國の御刀。四子采女信興に國行の御刀。女子に硯文匣。純子二十卷。其外女子三人へ卷物十。松平右衞門大夫正綱へ貞宗の御刀。金兵衞久綱へ行平の御刀賜はり。　御臺所よりも賜物かずく〳〵あり。獻物は伊豆守信綱より長光の太刀。馬。綿五百把。三種三荷。甲斐守輝綱より金。馬代。卷物三十一種。その他男子は銀。馬代。一種づゝ。女子は卷物十づゝ。右衞門大夫正綱は永則の脇差井一腰。(日記。)○八日尾水雨卿まうのぼり。御氣色をうかゞはる。城外にならせられ鴨をからせ給ふ。細川越中守忠利病臥によて。阿部豐後守忠秋してとはせらる。(日記。)○九日大閤土佐守高井金紗二匣。伽羅綿五百把奉り。正綱より京極中納言定家卿增。植村土佐守泰朝駿城加番はてゝ歸謁す。けふも城外にならせられ。高田のほとりより酒井讃岐守忠勝が別墅によぎらせ給ひ御膳を奉る。また佐久間將監實勝が大久保の邸にわたらせられ御膳を奉る。(日記。)○十日幸若舞御覽あり。(日記。)○十一日諸寺社より。御不豫御祈の符籙を奉る。けふも城外にならせられ。二丸へかへらせ給ふ。(日記。)○十二日尾紀水三卿井諸大名まうのぼる。諸家より奉りし饌を御覽に備ふ。(日記。)○十五日月次例のごとし。出仕の輩老臣に謁す。(日記。)○十六日松平伊豆守信綱の邸にならせらる。信綱猿樂井風流十番御覽に備ふ。信綱に吉岡助廣の御刀。住吉といふ駿馬。時服三十。金十枚。三種三荷。長子甲斐守輝綱に國重の御刀。二子三郎兵衞吉綱に光包の御刀。三子內記信定に久國の御刀。四子采女信興に國行の御刀。女子に硯文匣。純子二十卷。其外女子三人へ卷物十。松平右衞門大夫正綱へ貞宗の御刀。金兵衞久綱へ行平の御刀賜はり。　御臺所よりも賜物かずく〳〵あり。獻物は伊豆守信綱より長光の太刀。馬。綿五百把。三種三荷。甲斐守輝綱より金。馬代。卷物三十一種。その他男子は銀。馬代。一種づゝ。女子は卷物十づゝ。右衞門大夫正綱は永則の脇差井一腰。城積。金兵衞久綱は燕土と名付し茶釜井一種獻ず。　御臺所へ鳥丸大納言光廣卿筆古今和歌集。中院內府通村公筆菜花物語井金紗二匣。伽羅綿五百把奉り。正綱より京極中納言定家卿十二月和歌。丁字釜手筒をさゝぐ。信綱が家司井關の小姓に。時服一襲づゝ下さる。かへらせ給ひて後。信綱まうのぼり謝し奉りしに。雲龍といへる茶入を下さる。(日記。家譜。)○十七日紅葉山　御宮に土非大炊頭利勝代參す。この日大廣間にわたらせたまふ時。小姓組大久保莞之助忠辰。青木九十郎直影。白木書院の緣にて高聲に雜談しておりしを御耳に觸られ。その不禮をとがめられ。二人ともに門とざし家にこもらしめらる。また蓮池の門より廐にならせらる。馬を御覽あり。西城山里よりかへらせ給ふ。大島久吉義豐十四歲にて卒す。男子なければ家絕たり。よて采邑七千五百石收公せらるといへども。祖先の功を思召。支族茂兵衞義唯に。義豐が采邑をあづけらる。この義豐父は彌三郎光親といふ。寛永六年家つぎてこの日うせぬるなり。(日記。斷家譜。家譜。)○十八日城外に出たまふ。鴨四からせられ。御かへさに二丸にいらせ給ひ。鷹打を御覽ぜらる。(日記。)○十九日松平伊豆守信綱を。尾紀水三郎に御使せられて鷹をつかはされ。狩場の暇給ふ。けふ水戶黃門の邸外にて銃もて鴻を打とめ給ひ。直にその邸にならせられ御膳め

し。もし惡徒あらば嚴罰のうへ。五人組はさらなり。そのさまにより鄕中のもの等迄曲事たるべし。不審のものに宿借すべからず。もししらずしてかし。あやしげなる事あらば。たとひ親戚たりといふとも。すみやかに里正五人組迄有のまゝに申出べし。公私領とも。あるは新田及び鄕中に移り來るものある時は。本の出處を改め。たしかなるものにあいては居住せしむべし。鄕中より奴婢に出るか。または賣買の爲他行するとも。その行先を里正五人組に告ておもむかしむべし。各所にても。盜徒井に奸猾のものあらば。すみやかにうたへ出べし。たとひ盜徒より發顯せば。査檢のうへ五人組はいふ迄もなし。里正なき他より發顯せば。各別の御褒美あるべし。もしかくしうたへ出ざる事もあるべし。さあらんには密々うたへ出べし。迄も曲事たるべし。あるは與黨親戚等仇をなすべきかと思ひ。褒賜のうへ仇をなさゞるやう。きびしく命ぜらるべし。堂宮井に山林にいぶかしげなるものかくれ居るを見出しなば。からめとらへ里正屬民等はかりあひ。其他の代官地頭に渡すべし。追捕しがたきは里正に申出ば褒賜あるべし。其うへ里正すみやかに人をあつめ。力をつくしからめとらふべし。猶とらへ得がたき時は。行衞を見定めその地にはせむかひとらふべし。見聞しながら亡命せしめば。後に聞ゆともとがめらるべし。各村惡徒ある時は。鳴物をうつべし。さあらんには近村の農民馳集

りめしとらふべし。もし出合せざるものは。査検のうへ曲事たるべし。猶とりしとき代官地頭共地にありあはせずば。府にめしつれ奉行所に出すべし。その費用は官より給はるべし。所在盗賊ある事。代官給人の怠慢に思召るれば。きびしく査検すべし。もし心いれず此後黒徒あらんには。代官給人の過失たるべし。この他急令いよ〳〵こゝろいれ命ずべし。此旨領内の寺社にも觸しむべしとなり。(日記。令條記。)〇廿七日增上寺以傳を御談伴にくはへらる。この日麻布のほとり〳〵御鷹狩あり。柳生但馬守宗矩が別墅にて晝餉を供す。けふ地震す。(日記。)〇廿八日月次なり。本城搆造助役せし諸第衆の家司等銀時服下さる。多賀社遷宮によて奉祠不動院　に銀千枚下さる。兼てけふは土井大炊頭利勝の別墅に渡御仰出されしかど。雨によりとどめられ。二丸にて猿樂あり。(日記。)〇廿九日城外にて鷹を馴したまふ。この九日京嵯峨の市中火災の注進あり。この夜初雪ふる。(日記。)〇晦日雪によて紀伊亞相の病をとはせられ。狩場に奉書をつかはさる。薩摩中納言家久大病のよし聞えければ。書院番新庄右近直綱をして。御内書并鵜を給ふ。初雪により營中伺候の輩に鵜もて饗膳を下さる。黄昏幸若舞御覽あり。(日記。)〇十一月朔日土井大炊頭利勝の別業にならせられ。利勝御膳を献ず。その時利勝則國の脇差を献ず。また包永の御刀を給ふ。御かへさに水戸の邸前にて。銃もて白鳥を打留給ふ。本城御移徙を賀して。諸家より奉りし使者に賜物あり。大工等にも銀時服下さる。(日記。)〇二日昨日の白鳥を　大内に驛進し給ふ。けふも麻布のあたり狩せさせたまひ。鴈四。鴨十御得物あり。善福寺にて御膳奉る。住僧銀時服かづけらる。(日記。)〇三日加賀黄門利常はじめ。御使もて鴈一双つゝたまはる者十人。二丸にて猿樂あり。夜中幸若舞御覽ぜらる。(日記。)〇四日普第の祝をめされ。鵜の饗膳を給ひ各拜謁す。又水戸黄門別墅前にて白鳥をからせ給ひ。直に　仙洞に驛進せられ。その別墅にて晝餉奉る。(日記。)〇五日酒井讃岐守忠勝の別業にならせらる。毛利甲斐守秀元はじめ。使番もて鴈一羽づゝたまはるもの七人。(日記。)〇六日市橋下總守長政班鷹りの鷹を献ず。長崎の奉行榊原飛驒守職直。馬場三郎左衛門利重栗鼠をさゝく。また使番もて松平越後守光長。松平筑前守光高。松平勝五郎へは鴈一双。細川肥後守光尚。寺澤兵庫頭堅高へは鴈一づゝたまふ。けふも麻布にならせられ。鵜鴈湖あまたからせられ。柳生但馬守宗矩が別業にて御膳召上らる。けふも地震甚し。(日記。)〇七日尾紀水三卿狩場よりかへりまうのぼられて鴈献ぜらる。やがて岡部豐後守忠秋を三郎につかはし労せらる。昨日の眞鵠を　大内。黒鵠を　仙洞　大宮に驛進し給ふ。けふも小石川に放鷹したまひ。御得物かずく〳〵あり。(日記。)〇九日松倉長門守勝家(攝津重治に作る。)所領肥前國島原にて。天主教を奉するもの一揆をくはだて。松倉が城下の市井を放火し。有馬といへる所に橫行したる旨。豐後府内月付の報より注進ありければ。板倉内膳正重昌に。目付石谷十藏貞清いそぎかの地におもむかしめられ。長門守勝家。目根野織部正吉明も速に所領にかへり。もしかの一揆等松倉が手の者征し得さらんには。同國の故をもて鍋島信濃守勝茂。寺澤兵庫頭堅高が手の者加勢すべき旨令ぜられ。又細川越中守忠利。立花飛驒守宗茂。有馬玄蕃頭豐氏。中川内膳正久盛。稻葉民部少輔一通。木下右衛門大夫延俊は府にありといへども。手のものして速に加勢すべきよし。府内目付のもとまで聞えたる由。目付より注進ありければ。兼日の政令を殿に守りたる事。御感斜ならざる旨老臣より仰をつたふ。(日記。)　世に傳ふる所は。天主教は天下の大禁なれば。此頃別て殿に査検せらるゝ所。肥前國高來郡島原にかれて大矢野松右衛門。千束善右衛門。大江源右衛門。山善右衛門。森宗意《このものども往昔小四郎津守行長が家士にて。朝鮮の軍に戰功あり。行長元來天主教を信じければ。此ものどもその教を尊崇せる事年久しといふ。》といふ五人の者あり。この五人もとは肥後國天草の内大矢野千束村のものなりしが。年頃天主教を信ずる事ふかく。いかにもして此宗門を再興せん事を希ひし折ふしなれば。この廿五年先に天草にて。この宗門を教誡したるしやびるといひし伴天連が。本國へ放ちかへされしとき。末筵といふ書を残し留めたり。其書中に今年より廿五年をへて。天より神童をくだし此教を再興すべし。其時東四の天雲赤くして枯木花さくべし。これぞ瑞相なりとしるせしに。今年秋より赤雲東四の天をやくがごとし。かつ時秋にあたり所々の櫻花さきたり。又天草大矢野の庄屋益田甚兵衛が子四郎《後に時貞と名のる。》といへる十六歳の童子。學ばずして字をかき書をよく事衆にこえ。しかのみならず鳩を掌上に居て。掌中にて卵を生せ。その卵のうちより天主の經文をいだし。あるは竹にとゞまりし雀を枝ながら折て人に見せ。其身海上をかちわたりす。これぞしやびるの内大矢野千束村のものなりしが。年頃天主教を信ずる事ふかく。いかにもして此宗門を再興せん事を希ひし折ふしなれば。この廿五年先に天草にて。この宗門を教誡したるしやびるといふ。》といふ五人の者あり。この五人もとは肥後國天草の内大矢野千束村のものなりしが。年頃天主教を信ずる事ふかく。いかにもして此宗門を再興せん事を希ひし折ふしなれば。この廿五年先に天草にて。この宗門を教誡したるしやびるといひし伴天連が。本國へ放ちかへされしとき。末筵といふ書を残し留めたり。其書中に今年より廿五年をへて。天より神童をくだし此教を再興すべし。其時東四の天雲赤くして枯木花さくべし。これぞ瑞相なりとしるせしに。今年秋より赤雲東四の天をやくがごとし。かつ時秋にあたり所々の櫻花さきたり。又天草大矢野の庄屋益田甚兵衛が子四郎《後に時貞と名のる。》といへる十六歳の童子。學ばずして字をかき書をよく事衆にこえ。しかのみならず鳩を掌上に居て。掌中にて卵を生せ。その卵のうちより天主の經文をいだし。あるは竹にとゞまりし雀を枝ながら折て人に見せ。其身海上をかちわたりす。これぞしやびるの内より

を送れば。城中にこもりし百民も心がはりするもあり。鐵炮武具を盗取て逃出。一揆に加はるものも少からず。また三江村といふに松倉が米藏あれば。兵粮を取入んため城より人數を出したるに。千本木瓦平といふに屯したる一揆多勢おしよせ。鐵炮をもつて打立れば。この人數もあまた打立られ。死傷して敗北す。一揆等かの邪教を以て誘引し。これに從はざるをば打殺切殺し。又したがふものには財寶をあたへなどせしほどに。なべてくみせずといふ事なし。また肥後の天草には島原の一揆等すでに蜂起して。同宗のよしみに合力せん事をこひ。かの四郎といへる奇童を惣大將にせんとたのみければ。大矢野上下津浦次子赤島島原のものども。雖て邪教再興の時を待ㇾ事ゆへ。時こそ至れと一味合躰の誓約をなしぬ。この地は唐津の所治にて。富岡といへる城に寺澤が家士城代してありしが。このよし聞て城下の邪宗主張のもの一人二人を誅戮し。一旦しづまりしがごとしといへども。一揆等は猶人數をあつめ。事既に急に見えしかば。いそぎ唐津へ注進す。唐津より天草は海上四十八里。折ふし風あしく。唐津の人數十一月五日出船し。からうじて十日に富島に着きたり。天草島原の一揆等都合一万二千餘人。四郎を惣大將と推舉し。近日に長崎に亂入せんと評議最中。唐津勢多勢押寄ると聞。さらば先天草にて一戰を遂ん事。望む所の幸とて。島原の一揆も天草へ來り。死を一途にきわめ殿しく用意し。十四日一揆の方より逆寄して。唐津勢を追まくる。千五百人の唐津勢のこり少く打なされ。本戸村まで引退く。一揆はその勢に乘て。直に本戸へ押寄實立れば。唐津勢は三宅藤兵衛。並河九兵衛はじめをゝく討れ。殘兵少々富岡の城へ逃こみたり。一揆は直に付入にせんとて。十八日廿二日の兩日一万餘人手いたく城を攻けれど。此城堅固にして陷ず。鐵炮に打れ死するもの三百人ばかりありければ。こゝへ兼て大矢野村迄引退く。さるにても城中には人多く討せ。殘兵みな疲勞しければ。一揆退治せん事思ひもよらず。これもたゞ籠城の用意するのみにて日を送れり。この注進ども十一月のはじめ大坂に到着しければ。城代阿部備中守正次のもとへ。定番町率行以下の諸有司を會し。この事いかにと談しけるに。各いそぎ江戸へ注進すべしとのみ申。正次聞て江戸大坂の行程百三十三里。何ほどいそぐとも往來五日つゞ。江戸にて會議一日に定り。即日御下知ありても。其御下知大阪に着し。大阪より四國へ遣せんに。海上三百六十里。早くても十日はひまどるべし。況や海上風あらき折からなれば。十四日には及ぶべし。しからば以上三十日。その間には一揆ますゝ増長し。征伐大事に及びなん。先四國の人々に加勢の用意下知して。後江戸へ注進なしても遲かるべからずと申。正次がとばにたがふものあるべきならねば。みなその旨にしたがひ。豐後の目付幷隣國の

翌へ其よし返答なして。さて後にぞ江戸へは注進せり。江戸よりのその返事は。十二月十三日に坂府に達しけるが。正次がはからふ所よく機にのぞみ變に應ずといふべしと褒せられけるとぞきこえける。肥前島原記。）〇十日京大坂より島原騷動の事を注進す。よて諸大名まうのぼる。（日記。世に傳ふる所は。この日有馬玄蕃頭豐氏の家に申樂ありて。人々多く招かれし中に。柳生但馬守宗矩もその席にありしが。肥前の國高來郡の土民等領主松倉にそむき。耶蘇の宗門に事よせ蜂起せしかば。板倉內膳正重昌追討の御使發ほりはや發向しぬと聞て。但馬守宗矩主人にむかひ。急なる事思ひ出せり。足早き馬をかし給へといひ。急ぎ馬をかり西をさしてはせゆき。品川まで行て板倉はいかにととふに。驛長等はやはるかにのびさせ給ふらんとこたふ。宗矩いよ〳〵鞭鐙をあはせもみにもんで。川崎にて至てとへば。今は二三里もへだてたまふべしとこたふ。その時日ばはやくれぬ。宗矩せん方なくのりかへり。夜中まうのぼりいそぎ見參せんと申。やがて御前にめし。今何事のありて參りしぞと問せ給ふ。宗矩申さく。內膳が追討の御使奉り打立ぬとしかは。いそぎ追付て仰の旨を稱し。內膳を押とゞめんと早馬にのりて急ぎしかど。追つかずして日くれしかば。このよし聞えあげんとてまいりしなりと申。そは何故にかとゞめんとはせしぞと仰ありしかば。　上にはたゞ土民の一揆とのみ

聞召て。かろき者を追討使には立給ひしなるべし。宗門につきて人心の一致するは大事の物なり。今度は一定内膳こそ討死あるべけれと申す。よて御氣色損じ急に御座を立せ給ひしに。宗矩御跡にとゞまり夜ふくるまで退かず。此よし聞召。かされてめし出され。汝何故に内膳が討死せんとは申ぞと問せ給へば。さればにて候。軍は三軍の士をして。悉く死を一途に守らしむるをもて。古のよく兵を用ゆるの道とぜり。凡下愚の士民等宗門を深く信じ。その法をかたく守る時は。死を以て身の咎とす。これ百千の衆ことゞく期せずして。必死の勇士になるの術なり。遠く古の事を引にも及ばず。織田殿の兵威を以て。伊勢の長島にせめあぐみ。多の武士をうたせ。年をかさねて本願寺の津國大阪の城を落し得ず。又三河の一向一揆は近く御家の事にて。しろしめしたるがごとし。内膳若き時數十万騎の中よりえらばれ。大坂の御使をつとめ。君命を恥しめざるほどの者が。わづか百姓一揆をふみつぶさんは。いと易き事と思召べけれど。内膳位淺く祿少し。一旦は御使の事ゆへ西國の大名等その下知にしたがふといへども。案の外に時日のびてせめあぐまば。いかに思ふともせんかたなかるべし。その時にいたり。かされて家門の貴族か。また宿老の權威ある輩をもらひ御使立られば。内膳なに面目ありてか。そのまゝ歸り來るべき。あたらしき武士一人みすゝ討死せしめん事。まことおしきことならずや。かつは百姓の一揆に御使の人うたれしといふとは。永き天下の御恥辱にこそ存れ。あはれ御ゆるし蒙りて。今より打立内膳を引つれかへり來るべしと。はゞかる所なく申ける。されど一旦御使命ぜられ打立し重昌を。其日の内にめしかへされん事もかなひがたければ。先々御思案あるべしとて。

上にも御後悔の色見え給ひしが。宗矩もせんかたなく引退きけり。後に思ひあはするに。宗矩が詞掌をさすよりも明なりし事共なり。又小出が家に東海寺澤庵が消息をあまたつたふ。尤このころの消息かすゝにて。其うちに天草騷動の時。宗矩が聞えあげつるほどの事ども。一として其機にあたらずといふ事なく。すでに黒田が陣所に一揆共より夜討をしかけしも。また落城の事も。あらかじめ時日をさして申せしにたがはず。上にも下にもたゞ柳但々々とて。奇異の事に申沙汰せしとあり。また内膳正重昌昨日申の刻に仰率ばり。土井大炊頭利勝が宅によぎりて密談し歸れば。此事を聞て錢別の諸客門内に市をなす。重昌其中にて。出陣の支度人數くばり武具馬具とりそろへし用意のとゝのひしを見聞もの。日頃の心緩を感ぜしとぞ。重昌が子主水佑重矩父とともに出陣の事願ばんと。其夜松平伊豆守信綱がもとへ行て請しかば。信綱聞て。其請はるゝ所理なりといへども。深夜なれば聞え上がたしとてかへしたり。重矩せんかたなく阿部豐後守忠秋につきて愁願せしかば。忠秋その志を感じ。少し待れよとて直にまうのぼり。重矩かゝる志の切に聞えしかば。仰をも待ずゆるして出立せ候。この旨聞え上たまへと奥の女房まで言入てかへり。重矩にとく出立べしといそがし立しめしと聞えたり。藩翰譜。澤庵遺書。肥前島原記。）〇十一日本多甲斐守政朝。本多能登守忠義。本多内記政勝。本多伊勢守忠利。小笠原右近大夫忠眞。小笠原信濃守長次。小笠原壹岐守忠知。松平丹後守重直。松平和泉守乘壽。松平主税助忠昭。遠山利部少輔秀友。松平丹波守光重。松平主殿頭忠房。就封のいとま給ふ。この日地震す。（日記。）〇十二日使番松平甚三郎行隆ほ。いそぎ肥前島原にまかり。一揆騷亂のさま巡察して來るべしと命ぜられいとま給ふ。府内惣郭巡夜の輩をめして。各心いれつかふまつるにより。此頃失火なしとて褒詞加へらる。けふも大坂并府内横目の輩より。島原擾亂の注進あり。（日記。）〇十三日水戸黄門別業前にて放鷹し給ひ白鳥を得たまふ。けふ保科肥後守正之。酒井撰津守忠當。松平河内守定行。松平美作守定房就封の暇給ふ。（日記。）〇十四日細川越中守忠利。松平右衛門佐忠之。木下右衛門大夫延俊。稻葉民部少輔一通。中川内膳正久盛。有馬左衛門佐直純。立花飛驒守宗茂。鍋島信濃守勝茂。有馬玄蕃頭豐氏。五島淡路守盛利を召て。近日領四郎蘇宗の徒蜂起すれば。各子弟のうちを所領につかはし。封内を嚴に成敗せしむべき旨仰出さる。又相

良壹岐守賴寛。伊東大和守祐久。松浦肥前守鎭信。寺澤兵庫頭堅高。久留島丹波守通清。秋月長門守種春も所領の地にまかり。機に應じ嚴に沙汰すべしとて暇給ふ。（日記。）〇十五日島原騷動すといへども。長崎港は靜謐のよし聞ゆ。しかれども猶鎭梁すべき旨命ぜられ。榊原飛驒守職直。馬場三郎左衛門利重赴任のいとま給ふ。（日記。）〇十六日東叡山大僧正天海が坊にならせられ。風流御覽あり。天海銀時服下さる。（日記。）〇十七日紅葉山　御宮に酒井讃岐守忠勝代參す。けふ二丸の内宮にて連歌の筵をひらかる。大僧正天海を饗せられ。猿樂三番。龍波。賴政。班女。次に阿部豐後守忠秋風流を饗す。（日記。）〇十八日小石川の邊御鷹狩あり。鴈鴨過かず〳〵得たまふ。（日記。）〇十九日黒木齋院にて尾紀水三卿拜謁せらる。次に本城搆造の賞行はる。奉行牧野内匠頭信成。大目付井上筑後守政重。作事奉行佐久間將監實勝金廿枚づゝ。酒井因幡守忠知。神尾内記元勝金十枚づゝ。大工頭木原李允義久銀百枚。鈴木兵九郎米銀五十枚。その以下大工疊師等銀時服若干かづけらる。又二丸　内宮造營の奉行根來出雲守正盛金五枚たまひ。助役せし有馬玄蕃頭豐氏。阿部對馬守重次家士等時服羽織かづけらる。けふも城外にならせらる。（日記。）〇廿日松平新太郎光政の母はゝ。例の合力米給はる者十人。けふも小石川邊へならせらる。（日記。）〇廿一日本城天守の搆造助役したる水野日

下令松平信綱戸田氏鉄征島原逆徒

向守勝成。永井信濃守尚政。松平周防守康重。松平山城守忠國。永井日向守直清家士に銀時服羽折をかづけらる。けふも高田に御放鷹あり。(日記。)〇廿四日三緑山　靈廟に土井大炊頭利勝代參す。(日記。)〇廿五日先手頭久永源兵衛重知子小姓組牛之丞政勝はてめ。父死してその子家つぐ者九人。源兵衛重知三千二百石の内。五百石を二子小姓組源六郎重行に分つ。又書院番酒井作兵衛重行。三宅忠助康政。天野六右衛門康世。小姓組大久保喜六郎忠正。深津彌七郎正貞は本城の御膳奉行となり。内藤仁左衛門某。中奥番大久保彦十郎忠良。小納戸遠山忠四郎景重。小姓組小林長五郎直次。三宅惣兵衛正勝は二丸御膳の奉行を命ぜらる。けふも城外へならせ給ふ。(日記。)〇廿六日使番頭三右衛門直景。眞田長兵衛幸政。石川彌左衛門貫成。多賀左近常長。書院番能勢小十郎細隆。山崎權八郎正信。小姓組津田平左衛門正直。牧野織部成常。水野藤右衛門元吉。府内を巡夜し火賊を考察すべしと命ぜらる。こは近日各邸に火矢を放入。または火を放つ賊あるよし街說あるをもてなり。小姓進喜太郎成之三百俵。高島左近長親。一色松千代昭種。右筆齋田角左衛門元勝。建部甚右衛門賢豐。小島久左衛門重俊。山田小兵衛信治。二百俵づゝ新に賜ふ。寄合高山主水正成聰子書院番彌左衛門盛勝。天守番頭内藤甚右衛門種昌子大番椛右衛門種清等。父死して家つがしめらる。けふも城外にて鷹つかはせ給ひ。御得物かずくあり。黄昏に京坂及豊後より。急脚もて天草の事注進す。(日記。)〇廿七日天草の逆徒征討の御使を。松平伊豆守信綱戸田左門氏鉄に命ぜらる。(日記。)〇廿八日三家井諸大名登營す。戸田左門氏鉄は出陣の暇給ひ。金百枚。時服十。御馬を下さる。氏鉄が六子三郎四郎氏好も。父と共に天草に赴く事をゆるさる。けふも城外へならせ給ふ。(日記。家譜。)〇廿九日松平下總守忠明。石川主殿頭忠總。高力攝津守忠房就封のいとま給ひ。歩行頭久貝因幡守正俊。五味金右衛門豊直鎭四に御使往來するにより。豊前小倉にまかり。廻船の事沙汰すべしと命ぜられ暇給ひ。勘定頭伊丹播磨守康勝は駿府の御使。太田備中守資宗は京阪の御使命ぜられ暇下さる。けふ高田のほとりに狩し給ふ。(日記。)◎この月十日頃より日輝赤き事常にこえたり。(大内日記。)〇十二月朔日日蝕なり。三家諸大名まうのぼり。老臣幷に奏者番に謁して退く。(日記。)〇二日書院番中坊長兵衛時祐暇給ふ。けふも高田のほとりへ狩し給ひ。かへらせ給ひて後二丸にて。松平伊豆守信綱暇給ひ。金五十枚。時服二十井着御の羽織。乘御の馬を下され。そのうへ白紙の御朱印數通をさづけられ。且西國筋の飛檄途中に於て。内覽する事をゆるされ。明朝打立べき旨面命あり。(日記。家譜。)〇三日松平伊豆守信綱出陣の人數千三百人。與力同心二百餘人。江州水口驛より甲賀忍び者召具すべき旨命ぜらる。信綱の長

下京極忠高卒以無關除封而特賜六万石于嫡高和令率記

子甲斐守輝綱も。父と共に打立べき事をゆるされ。跡よりしたがふ。勘定組頭能勢四郎右衛門賴安。勘定山中喜兵衛信三。これも信綱に陪從し。粮米の事沙汰すべきむね。仰付られ暇下さる。(家譜。日記。)〇四日城外にて鷹をならし給ふ。けふ地震す。(日記。)〇六日高田に御放鷹あり。夜中御座所にて幸若舞御覽ぜらる。(日記。)〇七日先に京より召出されし針醫坂大藏卿幽玄五百石給ひ。奥醫になる。(家譜。)〇八日大日付水野河内守守信子左京守政はてめ。父死して其子家つぐもの十二人。(日記。)〇九日城外に狩し給ふ。加賀藩醫雨中納言はてめ。御使もて鷹給はる。翌九入。(日記。)〇十日藤堂大學頭高次はじめ。使番して鷹下さるるもの五人。けふも城外にならせらる。(日記。)〇十一日品川に鷹狩せられ。眞鶴白鳥鷹鴨若干得給ふ。けふ松平越後守光長はてめ。御使して鷹たまふもの六人。(日記。)〇十二日駿府町奉行土屋市之丞勝正御前に召て面命の旨あり。夕かけて城外に放鷹し給ふ。(日記。)〇十三日牛込のあたり狩くらし給ふ。けふ　大宮に眞鶴を驅進せられ。三家に加恩千石たまはり。千八百石になされ。父平左衛門正世が遺跡五百石は。二子勘兵衛正友につがしめらる。此正世は文緑二年よりつかへ奉り。納戸頭にて品川御殿をあづけられ。老年に及び御談伴の列に加へられ。常に御盤遶ありしなり。(日記。家譜。)〇十四日平水番内田權九郎正信が遺家に鶴をつかはさる。(日記。)〇十四日平水番内田權九郎正信が遺跡五百石になされ。父平左衛門正世が遺跡五百石は。二子勘兵衛正友につがしめらる。此正世は文緑二年よりつかへ奉り。納戸頭にて品川御殿をあづけられ。老年に及び御談伴の列に加へられ。常に御盤遶ありしなり。(日記。家譜。)〇十五日月次拜賀の服老臣に謁して退く。右雄神尾勝左衛門保重子小左衛門高久初見す。(日記。寛永系圖。)〇十六日酒井讃岐守忠勝が別業にならせらる。(日記。)〇十七日二丸御宮に酒井讃岐守忠勝代參す。この日二丸にて猿樂あり。老臣幷大僧正天海見せしめられて饗せらる。猿樂等今年は濱府にて。常に御宴に侍するをもて銀千枚給ふ。又土井遠江守利隆風流な御覽にそなふ。夜中また幸若舞御覽あり。けふ地震す。(日記。)〇十八日使番朝倉仁左衛門在重。大久保甚右衛門長重京坂目付にさへれいとま給ふ。(日記。)〇十九日前夜中橋の邊より失火し。今朝にいたり諸侯の別業幷市街多く燒たり。けふも城外にならせ給ふ。(日記。)〇廿日煤拂例のごとし。この日諸大名三千石以上の嫡長稽首し。白木書院にて拜謁し。各太刀目錄を獻ず。御還徒かち賀し奉る。けふも城外にて鷹をつかはせ給ふ。(日記。)〇廿一日在封の諸大名使もて。太刀目錄をさゝげ御還徒を賀し奉る。薩摩中納言家久卿の病をとはせ。封地にて御使せし書院番新庄右近直綱歸謁す。三家父子まうのぼられ。きのふ外殿に出まし。諸大名の謁をうけ給ひしを賀せらる。又のあたり狩くらし給ふ。けふ　大宮に眞鶴を驅進せられ。三家に加恩千石たまはり。千八百石になされ。父平左衛門正世が遺跡五百石は。二子勘兵衛正友につがしめらる。此正世は文緑二年よりつかへ奉り。納戸頭にて品川御殿をあづけられ。老年に及び御談伴の列に加へられ。常に御盤遶ありしなり。(日記。家譜。)〇十四日平水番内田權九郎正信が遺家に鶴をつかはさる。(日記。)〇十四日平水番内田權九郎正信が遺跡五百石になされ。父平左衛門正世が遺跡五百石は。二子勘兵衛正友につがしめらる。此正世は文緑二年よりつかへ奉り。納戸頭にて品川御殿をあづけられ。老年に及び御談伴の列に加へられ。常に御盤遶ありしなり。(日記。家譜。)〇十五日月次拜賀の服老臣に謁して退く。右雄神尾勝左衛門保重子小左衛門高久初見す。(日記。寛永系圖。)〇十六日酒井讃岐守忠勝が別業にならせらる。(日記。)〇十七日二丸御宮に酒井讃岐守忠勝代參す。この日二丸にて猿樂あり。老臣幷大僧正天海見せしめられて饗せらる。猿樂等今年は濱府にて。常に御宴に侍するをもて銀千枚給ふ。又土井遠江守利隆風流な御覽にそなふ。夜中また幸若舞御覽あり。けふ地震す。(日記。)〇十八日使番朝倉仁左衛門在重。大久保甚右衛門長重京坂目付にさへれいとま給ふ。(日記。)〇十九日前夜中橋の邊より失火し。今朝にいたり諸侯の別業幷市街多く燒たり。けふも城外にならせ給ふ。(日記。)〇廿日煤拂例のごとし。この日諸大名三千石以上の嫡長稽首し。白木書院にて拜謁し。各太刀目錄を獻ず。御還徒かち賀し奉る。けふも城外にて鷹をつかはせ給ふ。(日記。)〇廿一日在封の諸大名使もて。太刀目錄をさゝげ御還徒を賀し奉る。薩摩中納言家久卿の病をとはせ。封地にて御使せし書院番新庄右近直綱歸謁す。三家父子まうのぼられ。きのふ外殿に出まし。諸大名の謁をうけ給ひしを賀せらる。又のあたり狩くらし給ふ。けふ　大宮に眞鶴を驅進せられ。三家に加恩千石たまはり。千八百石になされ。父平左衛門正世が遺跡五百石は。二子勘兵衛正友につがしめらる。此正世は文緑二年よりつかへ奉り。納戸頭にて品川御殿をあづけられ。老年に及び御談伴の列に加へられ。常に御盤遶ありしなり。(日記。家譜。)〇廿二日南部山城守重直去年參覲運々して。御拂氣變りしが。けふ御ゆるしあり。出雲國松江城主京極若狹守忠高卒して子なかりしかば。出羽及び御談伴の列に加へられ。常に御盤遶ありしなり。(日記。家譜。)〇廿二日南部山城守重直去年參覲運々して。御拂氣變りしが。けふ御ゆるしあり。出雲國松江城主京極若狹守忠高卒して子なかりしかば。出羽國二十六万四千二百石餘を收公せられ。會弟主殿

高政が男刑部高和に。祖父宰相高次がとき江州大津にてたまはりし六万石を。播州龍野にてかへたまはり。祀を奉ぜしめらる。これ高次が勲功を思召され。忠高も日頃怠慢なく奉仕せしがゆへとぞ。この忠高はもとの宰相高次の長子。母は贈中納言長政卿の息女（重修譜母は山田氏といふ。長政の女は養母にや。）にて。妻は　台徳院殿の姫君（初姫御かた。後に輿安院と贈り進らす。）なれば。一かたならざる御ゆかりにて。慶長八年十一歳にて二月十日江戸にまいり元服し。御諱の字たまはり忠高と稱し。十一年三月三日從五位下侍從に叙任し。若狭守と稱し。五月七日從四位下にのぼり。十四年父が家つぎ。大坂の軍には忠高の母常高院。城中にいり御和睦の事をあつかひ。翌年の軍にもふたゝび御和睦の事執しけれど。その事ならずして城陷りければ。忠高からめてにむかひ。敵の首三百六十切て獻ず。寛永元年の冬二万千五百石加恩ありて。十一万三千六百石となり。三年八月十九日右近衛の少將にすゝみ。十一年閏七月六日出雲隱岐の兩國をたまはり。二十六万四千二百石餘を領し。いまの城に住し。十三年三月二十七日又石見國二万郡も下阿娑港入貢

本多政武卒以無嗣除封

邑知郡にて。四万石の地および銀山をあづけらる。姫君は御子もなくてうせたまひしかば。世の聞えをはゞかりしにや。妾の腹に男子設けしかど。はゝめより子なきよしを聞えあげしかば家たえたり。（一說は高和實は忠高が妾の腹に設けし子なる。弟なりと聞え上たりともいふ。）よて出雲隱岐兩國沙汰すべきむね使番堀市正利重御使にさゝれ。大河内善兵衛正勝。多賀左近常長は目付にさゝれこれにそひ。小出大和守吉英。古田兵部少輔重恒。龜井能登守兹政は兩國在番命ぜらる。又大和國高取城主本多因幡守政武も。卒して子なかりしかば家絶たり。（この政武（藩翰譜には左京利長としるしたり。）はゝめ大和大納言秀長卿の家司たりし因幡守俊政が子なり。父俊政慶長五年關原の戰に。關東の御方せしかば。政武慶長十三年家つぎ三万石を領す。（藩翰譜は大和記によりて。二万七千石のよしるす。）大坂前後の戰に。大和路よりはせむかひ。元和元年五月六日道明寺にてたゝかひ。七日の戰に首四十三切て獻る。其後叙爵して因幡守と稱し。この七月十三日病て卒せしとぞ。よて小出對馬守吉親。桑山修理亮一安高取城の番仰付られ。目付堀三右衛門直景をそへつかはさるべしと命ぜらる。されど今年の稅入ばことゞくその藩士に賜はりしとぞ。また町奉行加々爪民部少輔忠澄。堀式部少輔直之。近日府内大火ありしをもて。警火のおこたりをたゞされ。門とざし家にこもらしめらる。（日記・藩翰譜。家譜。寛政重修譜。）〇廿三日家門諸大名歲暮を賀して例の時服奉る。阿娑港入入貢し方物を獻ず。はてて品川へならせらる。此夜退儺例のごとし。酒井宮内大輔忠勝御膳を奉る。（日記。）〇廿四日立春。增上寺方丈智童齋歛を賜ふ。仲冬も同じ。（日記。）〇廿五日出雲隱岐兩國の御使在番目付の輩。御前にめして面命の旨あり。勘定組頭杉田九郎兵衛直昌銀山の事命ぜられ。六和國高取の在番目付の輩ともに面命あり。目付能勢彌五左衛門正直島原の巡察命ぜられいとま給ふ。（日記。）〇廿六日酒井與四郎忠清。酒井万千代忠能。丹羽左京亮光重。松浦肥前守鎭信。島津万壽丸久雄。堀又七郎親昌。木下淡路守利當。前田右近利意。水野左京守政亡父の遺物を獻ず。（日記。）〇廿八日三家井諸大名歲暮を賀し奉る。（日記。）〇廿九日品川の邊に御放鷹あり。（日記。）〇晦日三家井三世子各太刀目錄をもて。本城御遷徙を賀せらる。石川八左衛門政次先日の大火にあひし時。官船つゝがなく守護せしを褒せられ。金五十枚給ふ。未後城外にならせたまひ。黃昏に歸らせらる。けふ地震あり。（日記。）◎このとし植村土佐守泰朝子左京泰治。大番森川才兵衛長貞子助左衛門長重。習員平田藤庵某子道有某初見の禮をとる。秋元但馬守泰朝二子右馬允忠朝は新にめし出され。昵近せしめられ。大番中島三右衛門正平養子權左衛門正勝大番にいり。同朋石川細阿彌久次弟觀阿彌宿次召出され同朋になる。品川權大夫高寛。小栗勘八郎信房は小姓組にいり。松平傳助昌重。淺井八郎左衛門智忠は大番にいり。もと駿府につけられし小林半兵衛正信。三枝善右衛門守知。三枝清右衛門吉勝。太田善右衛門盛憲召かへされ。正次は大番にいり。

朝日十右衛門近吉。尾崎武助正勝。森川兵左衛門重勝も大番にいる。土屋半四郎正吉弟勘左衛門正次も大番にいれられ。采邑をたまふ。山崎權八郎正信二子三左衛門政則。石原惣左衛門安吉。大岡長十郎淸正は始めて奉仕す。旗奉行島田次兵衛重孝子町奉行彈正忠利正。外山藤左衛門正勝子天守番頭忠三郎正吉。鐵炮玉藥奉行加藤源四郎正勝が孫大番源四郎正成。畠林與

べしと命ぜらる。田付四郎兵衛景利も筆に起かんよしうたへければ。もし大事に及ばん時はつかはさるべしとてゆるされず。されどその志をば褒せらる。旗奉行大久保彦左衛門忠教は采邑にありしを府に召よばれ。書院番本多丹後守重世は五畿井伊賀。伊勢。志摩。紀伊。淡路。阿波。讃岐。伊豫。土佐十四か國巡察命ぜられ。小姓組東條猪兵衛安長は出羽國秋田に配流せし本多上野介正純死せしよし聞えければ。檢屍に赴かしめられ。代官角倉庄七玄紀は淀橋の修理命ぜられ。淺野內匠頭長直は防火の事を奉る。又御不豫の間儒役林道春信勝は。晝夜御病床に侍して。諸醫の治療を沙汰し。かたはら和漢の故事をかたりなぐさめ奉り。醫官半井驢庵成近。岡本玄治諸品は御藥を獻じ。桑酒命院子石は京よりめしよせられ。清水龜庵瑞室は諸醫とともに御治療を討論す。よて驢庵成近は秘府の聖濟惣錄をうつす事をゆるされ。玄治諸品は何事もはばからず意見を聞え上る事をゆるされ。御藥の劑。藥箱。茶壺。花瓶。奇楠香。人蔘。布帛。采緞若干を給はり。澁江徹齋氏胤は千代姫君の御病を療治して錢を給ひ。高木玄濟正長は法眼にのぼり。野間德昌院成岑は京にかへる。又旗奉行太田善大夫吉正病臥せしとき。鋪奉行安藤治右衛門正珍をもて病をとはせらる。小姓組北條新藏正房は四城山里にて御的のとき射手に加はる。右筆屋合太郎兵衛員通は雌子金を給ふ。又保科肥後守正之は暇給はりし。同國酒井長門守忠重所領白岩の土民困究して蜂起しければ。延澤の代官小林十郎左衛門時喬これをしづめんとせしかど。力たらざるよし聞えければ。正之人數を出し。一揆等三十餘人をからめとり。山形の城下に梟首せりとぞ。(家譜。寛永系圖。家譜抄。寛政重修譜。)

山形にかへりしに。

大猷院殿御實紀卷三十七

寛永十五年正月に始り三月に終る御歸府五

寛永十五年戊寅正月元日慶賀例のごとし。御病後により家門はじめ御盃給はらず。臭へいらせたまひて後。五位以上時服かづけらる。けふ中根平十郎正盛叙爵して壹岐守と稱す。この曉より黃昏まで烈風。天地晦冥。この夜大坂井鎭西より天草の注進あり。(日記。世に傳ふる所は。島原天草の叛徒等は征討の御使むかひたりと聞および。今は天誅のがるべからず。各宗門のため死をともにせんと一致し。去年十二月朔日より高來郡原の古城をとりたて。八日までに城郭堅固にとりかため。今は天下を敵に引うけん事。恐るゝにたらずとて待かけたり。板倉內膳正重昌は十一月十七日に伏見に着し。十八日大坂十九日大坂川口出船せしに。折ふし大風雨にて出船なしがたく。心ならず遲緩し。廿二日やう〳〵帆をあげて晦日豐前の小倉に

板倉重昌攻原城不利

いたり。十二月朔日肥後の高瀨に着陣す。こゝにて豐後府內目付その外の御使等にも會し。近國の諸大名家司もみな出むかへて命をまつ。重昌は筑後。肥後。筑後三國の兵を以て。誅戮すべき仰を蒙りしかば。鍋島。有馬。立花。細川の家々へ軍勢を催促し。三日肥前神代。五日島原にいたれば。鍋島甲斐守直澄。紀伊守元茂もこゝにむかへて令をきゝ。五日に重昌及び石谷十藏貞清島原の城にいれば。松倉長門守勝家父子もむかふ。六日の朝より松倉を案內者とし。原の城をさして押出し。七日深江すはの上栗林。八日有家堀の內まで着ぬ。道道叛民の明退たる空舍はみな放火す。松平甚三郎行隆。林丹波勝正。牧野傳藏成純等は細川肥後守光尙。寺澤兵庫頭堅高といもに。天草にいたり搜索すれども。一揆はみな原城にこもりてこゝに一人も殘らず。重昌は九日原の城に押寄。十日に松倉勢を濱手の先手とし。鍋島勢を山手の先手とし。有馬勢も引つゞく。さて原の城をかこみ與聲をあげ。鐵炮をうちかけせむるといへども。城兵鐵炮盛しく打たて堅固に防けば。寄手散々に打立られ。手負死人多く引退く。立花左近將監忠茂もけふ到着しして。直に寄手に加はりき。十一日諸手陣場を取しき。十二日より竹束をつけ。双方鐵炮打あはせ日を送る。十四日有馬兵部大輔忠頼も着陣し。すべて總勢三万ばかりとぞ。今は總責せんとて廿日軍令を正じ。諸手の手配をさだめ。寄手寅一點よりきびしく責立る。殊更立花左近將監忠茂はみづから采幣取て諸勢を指揮し。城門近く進みしが。城中よりは木石を投出し。弓鐵炮をそろへ防戰すれば。これにあたり打殺さるゝ者山のごとく。鍋島勢も打立られ。寄手三百人ばかり討死し。城兵は手負一人もなし。此時板倉の本陣より使をたてゝ。松倉が後詰の兵を催促すれども。松倉は立花に先を奪はれしと怒て其指揮をうけず。廿一日より銘々陣所々々なかため。又々鐵炮を打かくるのみにて日を送りしに。廿二日にいたり城中よりは。寄手の陣に矢文を以て。我々國郡を望み利慾のため反逆を企しにあらず。たゞ此宗門をふみつぶし給はんとの事ゆへ。正事を得すして防戰するの趣をのせたりとぞ。この夜の注進はこれらの事にてや有けん。肥前島原記。肥前島原錄。)〇二日拜賀例のごとし。けふも御盃なし。入御の後時服を綱頭せらる。又謠曲始も停廢あり。みな御病後によてなり。この夕城外にて鷹をならし給ふ。(日記。)〇三日拜賀例に同じ。大目付井上筑後守政重島原の御使を勤り帝江の御刀給はり。御前にめして面命の旨あり。けふも城外にならせらる。(日記。)〇四日大僧正天海はじめ。天台一宗の僧綱拜賀し奉る。立花飛驒守宗茂。細川越中守忠利。鍋島信濃守勝茂。有馬玄番頭豐氏をめして。昨日大目付井上筑後守政重を島原につかはされし旨を傳へらる。大阪定番豐後府內目付島原追討の翌より注進の旨あり。けふ細川に

ならせられ。暮深く二丸へかへらせ給ふ。(日記。)○五日品川す。此元日一揆等立籠りし有馬の古城總實ありしに。寄手の首の邊に御放鷹ありて白島を御覽ぜらる。直に大内に驛進せらる。けふも京阪其外各所より島原の注進あり。(日記。)○六日增上寺尾と〳〵のはず。板倉内膳正重昌塀際にて鐵炮にあたり討死し。智鏡はじめ。諸宗の寺社人拜賀例のごとし。けふは特拜の輩みな一同に拜し奉る。大阪豐後駿府より急脚の注進あり。また坂石谷十藏貞清。松平甚三郎行隆も深手負ひ。其外諸手の討死手負若干なりとぞ。よて細川越中守忠利。鍋島信濃守勝茂。有馬府および鎭西へ急脚を立らる。(日記。)○七日七種御祓。酒井玄蕃頭豐氏。立花飛驒守宗茂も討手にさゝれいとま給ひ。松平宮内大輔忠勝これを役す。尾紀水三卿まうのぼられ。老臣に謁右衛門佐忠之も人數をかしこにおもむかしむるによりいとませらる。大阪九州の注進一日兩度におよぶ。(日記。)○八日三たまひ。稻葉民部少輔一通。木下右衛門大夫延俊。中川内膳正家始め諸侯暮時服獻ぜし家々に御内書を給はる。其使者には時久盛は所領ほど近ければ。暇給ひ就封せしめ。追討使の指揮にしたがひ。人數出すべしと命ぜられ。有馬左衛門佐直純は彼地服を下さる。醫員岡本玄治諸品二丸にて茶を奉る。けふも京坂案内者として速に行むかへ。追討使の報と軍議すべしと命ぜより飛脚到來す。松平伊豆守信綱。戸田左門氏鐵よりも注進狀られ。使番本郷勝右衛門勝吉はかの地御使命ぜらる。(日記。)をさゝぐ。(日記。)○九日高田へならせられ。御憩息所にて豐世に聞ふる所は。松平伊豆守信綱。戸田左門氏鐵重れて島原の御使奉はり。去年十一月二十九日江戸を打立。正月二日には有馬の地に參着するよしきこえければ。彼地にて風說區々なり。しかるに十二月の廿九日に。江戸老臣より申遣するところの書簡到着せしかば。板倉内膳正重昌の陣所に諸將を招き。今度伊豆左門の兩人へ御使奉はり。一兩日の間にはこゝに到着するよしなり。もし兩人至りて速に大軍を催し。此城を力攻に攻落す時は。重昌は更なり。各とても今日まで一揆等を誅戮せんに。味方の人數を費すまじとのみはからひしかども。最早遲滯なるべからず。明日元三の祝ひとて城中にも油斷すべし。其

上板倉重昌戰死

虛に乘じ一もみにもみ落すべし。諸將ひたすら心もちひ力をのぼるに。また銃炮乳の下にあたり。そのまゝたふれんとするを。家人赤羽源兵衞。北川又左衞門。小林九兵衞三人その身もつくすべしと令せしに。何れもげにもと領掌す。よて其夜中に深手負ながら。主の屍を肩にかけて。塀を下りて本陣に引かへ軍法を令し。明れば元日のまだしのゝめに。有馬兵部大輔忠頼す。十藏貞清は南の塀下に付し所を。敵兵長身の鑓を以て肩先を先陣とし。三の丸の堀際まで押つめたり。しかるにはやくも を突しが。家人湯淺覺大夫其敵を突ふせて。貞清はそのひまに城内にはこの日の城實もれ聞えて。弓鐵炮大木大石を用意な 退きたり。松平甚三郎行隆有馬の手に有しが。鐵炮にて足をうし。寄るを遲しと待かけし事なれば少しもためらはず。木石を たれ引退く。重昌が子主水佑重矩は松倉がすゝみ兼しを憤り。投下し弓炮をそろへ打出しけるにぞ。寄手案に相違して。見 これも衆にぬきんで攻寄しが。この攻口別て峯高くのりがたろが内に千餘人打ころされて有馬勢は引退く。城兵このとき く。城中より投出し打出す大石銃玉のために。うたるゝもの數木戸を開き散々に追ちらし。再び城に入て要害をとりかたむ。多く。かくては急に攻とりがたからんと貞清諸陣へふれ渡し。時刻うつりて寄手一同せめよすれば。待まうけたる城兵なが各軍を退しとき。重矩はかひ〳〵しくも後殿して引退き。また はためらふべき。切先をそろへて切ていづれば。寄手射るゝ 備を立直し。父の吊軍せんといさみ立しかど。この城實今日に者數しらず。人なだれをなして敗北す。この跡を見て重昌眞先 かぎるべきにあらずと。衆人あながちにいさめて引返したり。にのり出し。金の采幣打ふりて松倉に向ひ。早々先をかけらる 立花勢は去月廿日の戰に諸勢後詰せざるを憤り。けふは淚手べしと下知すといへども。松倉は鐵炮のきびしさにや恐れけにむかひてかゝらず。此の日有馬士討死九十四人。雜兵千百餘ん軍を進め得ず。かされて有馬に命ずれども。今曉の戰に手人。鍋島士討死三百八十三人。雜兵二千五百餘人。松倉士十七の者多く射れたりとて遲々すれば。重昌いらつて石谷十藏貞人。雜兵三百二十七人。諸大名使者三十餘人。都合討死手負四清といへども。進むものも 千餘人。城中には手負死人九十餘人ばかりなりしとぞ。その中なければ。重昌手勢ばかりを引ぐし堀をわたりこし。數十丈の にも哀なる事は。内膳正重昌今朝試筆の心にや。出陣前に筆を堀を乘んと近寄にぞ。城兵も大將と見ければ。我も〳〵と切て めて。去年のけふは江城にて烏帽子の緒をしめ。今年の今日かゝれど。家人等もよく戰て遂に乘入んとする所に。城中より は島原にて兜の緒をしめ。はや打立候とありて。奥にあら玉の大石をとばせて重昌が兜をくだく。重昌これにも屈せずかけ

としの始に散花の名のみ殘らば先かげとしれとかきしぞ。なおき世のかたみとはのこりける。肥前島原記。肥前島原錄。）〇十三日松平薩摩守光久。水野美作守勝俊就封の暇給ふ。この日高田の邊に放鷹の御遊あり。けふも各所より島原のありさまを注進し。府よりも驛使を立らる。（日記。）〇十四日松平隱岐守定行就封のいとま給ふ。宮城越前守和甫。石川彌左衛門貴成島原の御使にさゝれ。かの地着陣せし諸大名に。御黒印の令條をさづけらる。（日記。）〇十五日三緣山にて　台德院殿七回の御法會。讀經万部執行あり。長の御務にて詣給ひ。三家陪拜せらる。次に　崇源院殿靈牌所にも詣給ふ。けふ晝院番に入もの廿人。大番に入もの十一人。この四日松平伊豆守信綱。戸田左門氏鏡島原に到着せしよし注進あり。（日記。）〇十六日夜中島原より注進あり。（日記。）〇十七日御病後を更雨ふるがゆへに。紅葉山御參なし。二丸の　御宮に參らせ給ふ。三家諸大名はなの〳〵紅葉山に進拜す。大僧正天海齋飯を下さる。（日記。）〇十八日毛利甲斐守秀元就封のいとま給ふ。（日記。）〇十九日松平筑前守光高痘瘡平癒を賀せられて。阿部豐後守忠秋御使し。筑前守光高に銀五百枚。時服二十。大姫御方に銀百枚。糸五十斤つかはされ。執事中川重右衛門忠次井女房等に銀若干給ふ。町奉行加々爪民部少輔忠澄。堀式部少輔直之御勘氣をゆるさる。夜に入て使番兼松彌五左衛門正直。島原より暇

り調して。かしこの事實を地圖によりて面謁す。こたびの御法會によりて緊獄をゆるさるゝむねを國々へふれらる。けふも例の注進あり。府よりも驛使を立らる。（日記。）〇廿日具足の御祝例のごとし。連歌興行又おなじ。世と共にさかゆく春の小松かな。（昌程。）風もおさまりかすむ山々。（御同。）年もいま千里の空に立ぬらん。（忠尊。）奥にかへりていらせ給ふとき。黒木書院にて御膳を奉る。この日　勅使花山院大納言定好卿。院使園宰相基音卿。　大宮使葛尾頭中將隆量參向あり。これは　台德院殿御法會によりてなり。よて吉良上野介義彌慰勞の御使す。酒井因幡守忠知。駒木根長次郎政次島原の御使命ぜられていとまたまふ。紀邸に阿部豐後守忠秋御使して。島原の御使兼松彌五左衛門歸謁し。かの地のさま詳に聞召るゝうへは。いよ〳〵征討を急にせず。しづかに時日を延滯し。をのづから落城を待べき旨命ぜられたるよしつたへしめらる。大納言輕宣卿仰の趣謹て承はられ。攻城のこと急速の功をつのり給はざる旨。げにさるとながら。萬一九州大名の中に。邪宗にこゝろひかるゝ人のあるまじきにもあらず。其かみ織田右府大坂一向門徒の城せめられし時も。寄手に宗門のものあまたありければ。ひそかに城中に内通して。年月をへたるよし承りたり。今度も九州にて名望重き大名等。みづから身命を拋ほどの擧動せざる間は。とても速功は得べからず。おほよそ我等を御

名代として。かの地に赴かしめたまふ樣に聞え上らるべしと　井宮內大輔忠勝。松平式部大輔忠次。奥平美作守忠昌。堀田加賀守正盛侍座す。唱名はて〳〵　御墓にまいて給ひ。それより安國殿へわたらせ給ひ。御燒香ありてまかでたまふ。三卿へも加賀守正盛もて。こたび此山中に　神願いとなませ給ひぬ。拜せらるべき旨を傳へらる。よて三卿は還御の後　安國殿に詣らる。かくて御法會の席には。　禁裏よりの御願經を吉良上野介義彌。　仙洞よりの御經は大澤右京亮基重。大宮の御經は今川刑部大輔直房捧出て。　雜前の机上に置。　勅使。　院使。　大宮使机際にまいり拜せられ。重て自書の納經は役僧もち出て。三使拜謁ししりぞく。次に知恩院門跡眞純法親王の願經は。刑部大輔直房もちいて門主燒香あり。つぎに知恩院　燒香し。次に普第外樣の大小名旗下の甕井大僧正天海拜す。この日諸大夫以上の輩は束帶。小姓組。舍院番。大番すべて烏帽子着百人山內に伺候し。弓鉄炮の頭は門々口々を警衛せり。御法會におづかりし僧等布施若干行はれ。寺門にて貧病乞丐に施行あり。又罪徒數人を放たる。けふ。大風又京坂并九州高取より注進の旨あり。（日記。紀伊記。實明日記。）〇廿五日尾紀兩亞相登營せられ。昨日の御參を賀せらる。けふ市谷より高田の邊御放鷹あり。又大阪九州よりの飛檄到着す。（日記。）〇廿六日品川の邊御鷹狩あり。黄昏にかへらせ給ふ。この日兩本願寺門跡參府により。高家今川刑部大輔直房もて

慰勞せらる。京坂九州の飛檄昨日のことし。(日記。)〇廿七日公卿靈應猿樂ありて。諸大名みなまうのぼる。御病後により中將をめさる。樂は高砂。田村。東北。善界。自然居士。張良。祝言。淨土院。櫻本坊。實相坊。四谷一坊。十二か寺。南谷一坊。十三か寺。東谷一坊。一か寺。在家二百六十余宇燒しとぞ。夜に入て目付市橋三四郎長吉有馬の御使命ぜられ暇給ふ。(日記。吉良日記。)〇二日光久能の御鏡御拜嶽あり。毘沙門堂門跡公海大僧正天海はじめ。古宗の僧侶社人拜賀し奉る。堀田加賀守正盛は所領の火事により。仙波　御宮此災にかゝりしをもて。御けしきに應ぜず。出仕をとゞめられたり。しかるを大僧正天海聞え上る旨あるによりゆるさる。京伶辻伯耆。久保丹後。園左兵衛日光山伶に樂曲相傳せしとて。銀卅枚。時服二づゝ給ふ。(日記。吉良日記。)〇三日日光山の火災。　御宮に及ばざる事。と更よろこばせ給ひ。御參あるべき盛慮といへども。御病後たるにより高家吉良上野介義弼代參せしめられ御馬をひかる。松平右衛門大夫正綱はかの地におもむかしめられ。火後のさまを實檢し。秋元但馬守泰朝と共に諸事沙汰せしめらる。この日松平長門守秀就はじめ。就封のいとま給はるもの九人。(日記。)〇四日大姫君痘瘡なやませ給ふにより。三家まうのぼり老臣に謁してうかゞはる。この日高田の邊に御放鷹あり。黄昏に還御なる。九州注進の飛檄到來し府よりも立らる。(日記。)〇廿日二丸にて猿樂催され。尾紀水三卿はじめ。普第の衆

下松平直政之轉封　上三枝守正屋代忠正之新封

井大僧正天海。毘沙門堂門跡公海を饗せらる。これは日光御宮に火災の及ばざるを。賀し給ひてなりとぞ聞えし。樂は雜波。實盛。千部。國栖。黒塚。融。養老なり。時服要脚繩頭例のごとし。奥平美作守忠昌は日光山諸堂社修理の助役命ぜられて暇たまふ。(日記。紀伊記。)〇六日知恩院門跡良純法親王こたび　台德院殿御法會にて參向ありければ。阿部豐後守忠秋御使して銀五百枚つかはされ。家司三人へも銀十枚づゝ下さる。兩本願寺門跡も同じく參向せしかど。御不豫によて御對面なし。これも豐後守忠秋御使して謁洛のいとま給ひ。銀三百枚つかはさる。けふ城外に鷹をならしたまふ。(日記。吉良日記。)〇七日大坂九州の飛檄到す。(日記。)〇八日天草の騒亂により。島原城は小笠原壹岐守忠知。久留島丹波守通春在番し。富岡城は松平主稅助忠昭。伊東大和守祐久在番するにより。島原へは書院番下曾根三十郎信由。富岡(は杉原四郎兵衛正永目付としてつかはされ。けふいとま給ふ。もと駿河大納言家につけられし三枝勘解由守正。屋代越中守忠正ともに召かへされ。同じく安房の國にて一万石づゝ給はり。先手頭命ぜられ。與力十騎同心五十人をあづけらる。(日記。)〇九日高田のほとりに御狩ありて。大橋觀慶重保が舊宅にならせられ御膳召上らる。(日記。)〇十日麻布の邊に狩せさせ給ひ。柳生但馬守宗矩が別墅にならせられ。御膳を召上らる。こたび御法會にあづかりし

代官等金時服を給ふ。(日記。)〇十一日松平出羽守直政信濃國松本を轉じて。出雲國一國に給はり。隱岐國をもあづけらる。又小姓組水野藤右衛門元吉肥前國有馬の御使命ぜらる。けふも高田の邊に鷹狩せさせたまふ。(日記。)〇十二日目黒のほとりに狩せさせ給ふ。還御の後使番本郷勝右衛門勝吉有馬より歸り謁し。攻城のさま御直に聞え上る。この日土井大炊頭利勝。酒井讃岐守忠勝御前に於て膳なたまふ。(日記。)〇十三日大姫御方痘瘡いえて。けふ酒湯の式行はる。よて御方へも松平筑前守光高にも。銀時服かずゞ祝ひつかはされ。女房井執事中川市右衛門忠次等にも銀下さる。御使は牧野内匠頭信成なり。この日松平因幡守勝義信濃國松本の在番。使番青山善四郎重長。小姓組津田平左衛門正重は同所目付にさゝれ暇たまふ。けふ葛西へ狩せさせ給ひ。千鳥にて御膳めし上らる。(日記。)〇十四日京の御使せし高家吉良若狹守義冬歸參す。尾紀水三卿まうのぼられ。大姫君酒湯の式行はれしを賀せらる。(日記。)〇十五日三家并諸大名登營し。老臣に謁して當日を賀す。宮城越前守和甫。石川彌左衛門資成有馬より歸り。御前に於て彼地の事狀を聞えあぐる。(日記。)〇十六日三浦志摩守正次有馬の御使命ぜられいとまたまひ。目付村越七郎左衛門正重これにさしそひまかるべしとて。同下くいとま給ふ。かされて志摩守正次が宅へは。阿部豐後守忠秋御使して。鹿毛の御馬を賜

ふ。この日品川にならせ給ひ。柳生但馬守宗矩かしこみて御膳を獻ず。そのとき正次はや打立て。品川の驛にかへりしかば。召て御盃を給ふ。夜中幸若舞御覽あり。(日記。寛永系圖。)○十七日紅葉山　御宮に酒井讃岐守忠勝代參す。二丸にて猿樂御覽あり。大僧正天海も見るとをゆるさる。(日記。)○十八日夜に入て幸若舞御覽ぜらる。(日記。)○十九日高田の邊に狩せさせたまふ。(日記。)○廿日千代姫君を尾張右兵衛督光友朝臣へ御定婚あり。よて尾紀水三卿まうのぼられ。普第衆もみなめして其事仰下され。物頭以上へは御酒たまふ。この日京極刑部高知播磨國龍野新封を謝して拜し奉る。實後城外にて鷹をならし給ひ。還御の後二丸にて。有馬より歸參せし酒井因幡守忠知。駒木根長次郎長次を御前にめし。賊徒征伐の事狀を親問し給ふ。(日記。)○廿一日城邊にて御放鷹あり。(日記。)○廿二日駒込の邊に鷹狩し給ひ。淺草知樂院にて晝飯奉る。現住　金時服給ひ。暮鐘を聞せたまひて還御なる。この日淺草の堤をならせ給ふ時。叢中に小兒の鳴聲せしかば。尋搜さしめ給ひしに。何者のしはざにか小兒を捨置しなり。拾ひあげ給ひ知樂院にあづけ置。慈育をせしめられ。成人の後は聞え上べしと命ぜられしが。此小兒女子なりしかば。後に英勝院尼むかへとりて養育ありしとぞ。(日記。紀伊記。)○廿三日千代姫御方御定婚仰出されしにより。右兵衛督光友朝臣まうのぼられ。太刀一振。

下松平信綱等攻原城賊勢稍挫

時服三十。銀三百枚奉られ。大納言雲直卿よりも太刀一振。時服三十。銀二百枚獻ぜられ。父子長矛にて拜謝せらる。又光友朝臣より姫君へは小袖二十。銀五百枚。檀二十荷。着二十。春日局へも其下の女房へも。銀時服かずく贈らる。御三獻の御祝ありて。光友朝臣に貞宗の刀を給ふ。雲直卿へも御盃つかはされ。事はて、紀水兩卿兩世子拜謁して賀せられ。成瀨隼人正正虎も拜し奉る。けふ普第衆晉頭井近侍の猩に長矛を着せり。(日記。紀伊記。)○廿四日三緣山　增上寺にて土井大炊頭利勝代參す。增上寺方丈智童齋飯を下さる。伴僧も同じ。日付永井監物白元出雲國松江城引渡し命ぜられ暇給ふ。(日記。)○廿五日千代姫君御定婚を賀して。諸大名揃着獻ずる事差あり。諸老臣近習の人にも同じ。姫君へ十万石以上金千疋。六万石以上五百疋。九千石以上三百疋奉り。紀邸より　御所に樽五荷。鹽鯛三十枚。熨斗三十把。昆布三十把。姫君に樽三荷。その外上におなじ。御生母へも二荷。鹽鯛二十枚。熨斗廿枚。昆布廿把贈らせらる。けふも城邊にて鷹をならし給ふ。松平右衛門佐忠之有馬より注進せしは。忠之有馬にて島を乘取井櫓をくみ。一揆の城中をうかゞひ鐵炮を打かくる。一揆等この口を守るもの五百人ばかりなるが頗るひるみたる躰とぞ。(日記。紀伊記。)世に傳ふる所は。松平伊豆守信綱。戸田左門氏鐵の兩將は正月三日島原に入津し。四日有馬表に着陣あり。はや諸軍銳氣を生ず

人々きをふこと大方ならず。細川越中守忠利。同肥後守光尚二万三千五百人。鍋島信濃守勝茂。同甲斐守直澄三万五千人。松平右衛門佐忠之。黒田甲斐守長興。同市正高政一万八千人。立花飛驒守宗茂。同左近將監忠茂八千三百人。有馬玄蕃頭豐氏。同兵部大輔忠頼八千三百人。有馬左衛門佐直純。同藏人康純三千三百余人。小笠原右近大夫忠眞六千人。水野日向守勝成。同幾作守勝俊。同伊織勝貞五千六百人。小笠原信濃守長次二千五百人。松平丹後守重直千五百人。寺澤兵庫頭堅高七千五百七十五人。松倉長門守勝家五百余人。板倉石谷はじめ使番等殘兵八百人。薩摩勢千人。諸家使者八百余人に。信綱が千五百人。氏鐵が二千五百人をそへて。すべて十二万四千四人の着到とぞ聞ける。松倉は嘉冬より數度の戰に。每度家人等損傷し先手かなはざる旨訴るにより。細川を以て先手に入かへ。さて信綱氏鐵の兩將。賊徒籠城のさまを委細に巡見して諸陣へ令しける。これ迄討手の人々土民一揆の籠城と輕蔑し。無謀の動してはこと。諸將の過失といふものぞ。いまより後は銘々仕寄を附。竹束井樓を設け。鐵炮をもて遠攻し。城兵をして退屈せしむる計策簡要たるべしとなり。是よ小笠原。有馬。寺澤。四の旗手は黒田。後陣水野。島津が勢は細川陣の隙にて北濱口に陣とり。信綱氏鐵は立花松倉が後に陣し。諸陣に指揮を加ふ。諸手兩將の令を守り。城中を見下すほどに山をきづき井櫓をあげ。道路を修理し攻口をかため。井櫓より鐵炮嚴しく打かくれば。城兵もたまらず三丸はあけ退しとぞ。又信綱長崎に令し關船をめし。寄手城の後より石火矢をうちかくるといへども。更に恐るゝ色もなく。結句關人城の鐵炮にてうちころさる。黒田細川兩手の番船を海上につながせ。城中へ鐵炮を打かくる。これにぞ城兵少しひるむよし聞ゆ。薩摩鍋島の手より忍びいれ。立花手より金堅をいれなどして日數を送るうち。城中粮米に困窮し。磯邊にいでゝ海藻をとり食ふ樣なれば。今は落城もほどあるまじく見えしとぞ。又長崎津々の政法嚴重にたゞされしとなり。肥前島原記。)○廿六日井伊靱負佐直滋就封のいとま給ふ。留守居岡本啓迪院諸品は新に千石下され。坂幽玄齋三は貳百石ましたまはり。扈從を采邑にかへて五百石になし下さる。これは御不豫の間。晝夜宿直して治療に心もちひたるを褒せられてなり。けふ高田の邊へ鷹狩にならせたまふ。(日記。)○廿七日大久保の邊へかりし給ふ。佐久間將監實勝別墅に立よらせ給ひ。御膳を召上らる。(日記。)○廿八日三家諸大名登營し老臣に謁す。勅使三條前内大臣實條公。日野大納言資勝卿。院使阿野大納言實顯卿參向により。土井大炊頭利勝に高家吉良上野介義弼をへて慰勞せらる。(日記。)○廿九日井伊靱負佐直滋就封するにより馬を給ふ。市橋

上諸將與島原賊戰

下總守長政。小出大隅守三尹公料の地巡廻するのいとま給ひ。中にも討死手負少からざる旨。松平伊豆守信綱。戸田左門氏鉄歩行頭彦坂平六郎重定井數寄屋頭は宇治採茶の暇下さる。これより注進あり。よて庄田小左衛門安照。齋藤左源太利政をかしの日九條前關白幸家公。松殿大夫道昭。近衛前關白信尋公。左こにおもむかしめて。其さまを査検せしめらる。(日記。世に大將尚嗣公。二條右大將光平卿。四圓寺前内大臣公益公。徳大傳ふる所は。籠城の一揆等久しく攻かこまれ。糧食いまはつき寺中納言公信卿參向により。土井大炊頭利勝に高家吉良上野はてしかば。城中よりの落人等も日夜絶ず。これを捕て糺明す介義彌して慰勞せらる。又高田に狩し給ひ。水戸中納言賴房卿るに。兵粮矢玉もつきたる樣しるければ。はや落城も程あるべ別墅にいらせられ。齋膳を供御せらる。(日記。)〇三月朔日三からずと思ふ所に。城兵もかくてむなしく餓死せんより。花々家井諸大名登營し。老臣に謁し退く。品川に御放鷹あり。かしく切て出寄手の眠りをさまさんと。四郎時貞謀を定め。蘆塚ここにて阿部豊後守忠秋御茶奉る。有馬に御使せし目付市橋三忠兵衛。布津村代右衛門。上總村三平。千々輪五郎左衛門。天草四郎長吉歸り。これも品川にて拜謁し。か〳〵らせ給ひてのち直玄札等を夜討の大將とし。各千餘人を分ち。さて細川が陣は銃れて召れ。有馬の事狀を御みづからとはせ給ふ。(日記。)〇二炮嚴しく仕寄を付たり。有馬立花が陣は地形あしく。鍋島寺澤日松平出雲守勝隆。有馬の御使にさゝれし駒井次郎左衛門昌黒田が三陣場所もよし。かけ入て竹束に火をかけ。陣營を燒保も。同〳〵副使にさゝれ。これも共に暇給ふ。又昵近の公卿ひ。戎器粮米を奪ひとるべしと。計策既に決しければ。二月廿參着により。使番能勢次左衛門賴寛。眞田長兵衛幸政もて慰勞一日の丑刻臘夜の月に乘じ。四郎は二丸の櫓にありて下知をせしめらる。(日記。)〇三日三家井諸大名登營し老臣に謁してなし。忠兵衛。代右衛門千四百餘人を卒し。黒田が陣に切入たり。黒田が家老黒田監物兼て遠見を出し置。今夜の事情をさぐ上巳を賀す。尾張亜相邸傍の閑地を。世子右兵衛督光友朝臣につかはされ。新邸經營せしめらる。これは姫君御入輿あるべき故とぞ聞えし。九州よりは有馬の古壘にこもりたる一揆等。二月廿一日の夜大江口より切て出。松平右衛門佐忠之。寺澤兵庫頭堅高。鍋島信濃守勝茂。立花飛驒守宗茂が陣を襲ひしに。陣中よく戰て賊徒の首あまた討取。生捕のものもあり。寄手の陣

下原城陷

總勢を追拂ひ。鍋島父子の陣營にてもよく防ぎ。敵あまた打取。すべて今夜賊兵二百五十八人討取。生擒する所廿四人。寄手にも黒田が家老監物父子始三十八人。甲斐守長興が手にて兩人。市正高政が手にて十五人。寺澤が手にて五人。鍋島信濃守勝茂手にて武士二十一人。雜兵九十四人討死せしとぞ。肥前島原記。)〇四日尾張亜相まうのぼられ。昨日右武衛宅地增加を謝せらる。小姓組水野藤右衛門元吉天草より歸謁し。城営のさまを面陳す。この夕城外より赤坂のあたりまでわたらせ給ひ。鷹を馴養し給ふ。(日記。)〇五日高田の邊に御放鷹あり。(日記。)〇六日參向公卿引見あり。歲首の　勅使四三條前内大臣實條公御太刀目錄をさゝげ。次に日野大納言資勝卿は去年御不豫により。御對面なきがゆへに。舊年の賀詞をつたへ進らせ。御太刀目錄をさゝぐ。阿野前大納言實顯卿は。　院より去當兩年の賀詞をつたへられ。各御太刀目錄をさゝげ。大宮兩年の賀詞は。大納言資勝卿傳へ黄金十兩づゝさゝぐ。次に本城御移徙幷千代姫君降誕を賀せられて。　内よりの御使四圓寺前内大臣公益公國綱の御太刀幷御太刀目錄。　院よりも兩賀の御使清閑寺前大納言共房卿。國長の御太刀幷御大刀目錄。　大宮よりも姫君へ御誕生を賀せられ　内　院　大宮より打枝薫物。姫君へ御わたましを賀せられ。内より唐織二卷。　院よりも同じ。　大宮より大高一束。緋

したがはず。今は攻滅すの外はあらじと。信綱しきりに使をたてゝ勝成をよぶといへども。勝成は愚老が登り候はゞては。各には城を乘取合點はあるまじ。ゆる〳〵と待給へと挨拶してわざと日數をへ。二月廿二日其地につき。廿四日人々信綱が陣に集り軍評定する時に。戸田左門氏銭進み出て。我々仰蒙りて候しは。あひかまへて軍兵うたすな。謀をめぐらし城をば攻落せとの御旨なれば。たゞ遠攻にして城中糧盡るをまつべきにやと申ける。信綱勝成にむかひて。日向守殿にはいかゞ御思慮あるにて候やとありければ。勝成聞て。今天下一統の時にあたり。此奴原に力合せんもの一人もあるべきにあらず。何の恐れか候べき。たゞ頓をも出さしめず。千殺してくれ候にしくべからず。　神祖むかし高天神の城もかくこそは攻給ひし。とにこの有馬の城と申は。古より名高き城なりとは。勝成が若き時鎭四に流浪せしころより兼て承り及びき。あたら武士の命を。土民百姓等が爲に失はれん事。謀にあらずといふ。戸田聞て。日向守殿の仰尤に候。たゞ敵の糧盡んをまつべく候といはせもはてず。勝成大聲を發し。けふ迄人々の遠攻して寄手うたせ給はぬがよき謀と申事にて候。賊徒にはかにこもり百日に及び。今は粮料も矢種もつきはてし事はしるべきなり。今日何をかまたるべき。只今より平攻に攻破てすてられ候へといへば。さらば攻らるべきに定まりぬ。然るに細川鍋島が陣所は無碍に城近ければ。兩將先二三丸をば攻破るべし。その時惣勢は閧のこゑをあはせ給はるべしと申けるに。勝成ゐたけ高になつて。細川鍋島兩將のみにて攻られば。兩將の勇名こそゆゝしからめ。其他の人々は物見見物に集りしごとくならん。勝成身不肖には候へども。そのかみ　神祖の御供して。十六歳三州小豆坂の初陣より。雨に浴し風に櫛て。戰場に身力をつくすと既に五十余度。終に人にこえたる事もあられども。また人におとりたる擧動も候はず。いはんや閧の聲ばかりつくりて。鍋軍したるためしなし。かく人々功を爭はれんには。軍勢多くうたれぬべし。江戸にての仰にも。軍兵うたすなとこそ承れ。凡城を攻る事は。味方の心を一にせずしては叶はぬ事勿論なり。今度の軍は竹釘軍といふ物にて。頭たらんものなきに似たり。伊豆守殿追討の御使に御下向あれば。この度の惣大將は伊豆守殿にまきれあるべからず。たゞ伊豆守殿御下知の事はいかでそむき候べき。老人の長居は難儀に候。惟勇作守勝俊父が代官としてこれにとゞむ。かれも若き時大坂の軍にめし具せられ。大和口にて後藤又兵衛出張の時高名をとげ。軍の樣をもよく見しりたる男に候。よも無骨の擧動は仕るまじ。御暇申かたがたと座を立て返りければ。その日の評定には。廿六日諸手一同城攻あるべきむねに定めらる。かゝる所に廿四日の夕より廿六日の曉まで。大雨車軸を流しければ延引し。廿六日の夕に

彌廿八日惣攻のよしふれられたり。廿七日氏銭の陣所に諸將會集し。廿八日城乘の評定はてゝ各へ濃茶を點じ。しばし談話してある間。物見の者はしり來て。鍋島はや城乘するよし呼ければ。伊豆守信綱よもさるを有べきやと。みづから井樓へかけのぼりみるに。はや乘込て火の手あがりしをみて。信綱さては鍋島が扱懸せしと見えて候。今は前後の評議にや及ぶべき。おの〳〵心まかせに乘取らるべしと令すれば。諸大將望む所ござんなれと。面々馬引よせ陣所〳〵へはせ歸る。鍋島勝茂も其座にありしが。家人等麁忽笑止なりといひながら急ぎ歸り。とても麁忽に乘崩せよと下知を加へて出丸におしつむる。水野勝成はをのが陣營にありしが。この事を聞とひとしく。鍋島が仕寄塀まで詰かけて。息勝俊孫勝貞が歸るをまちかね。本城をめがけ打立させ。鍋島が人數出丸二丸にて取亂したる寂中を押通り。本丸の石垣下に押寄。敵の炮にあたり死するもの百余人。勝俊父子自身鎗取て無二無三に下知をくはへ。遂に石垣乘廻て一番に馬印を立。づゞいて旗をも立たり。勝成も跡より詰かけ。孫が初陣に城乘せしをみて。老後の悦これに過ずと。涙を流してよろこびたり。さて本丸へ自身乘込しは水野父子。有馬父子計りなり。藏人康純は寺澤の後陣より乘扱て。本丸の內松丸の橫合にかゝり乘いりしかば。水野が旗馬印は先に押立たれば。其身ははるが跡慶曲輪にあり。さては我こそ一番乘なりとて。たがひの爭論すこぶる大事に及ばんと見えし時。信綱の本陣より先手を鍋島へわたし。各はもとの陣所へ引かへさるべしとありしかば。やむとを得ず水野は鍋島の後陣に引とり。有馬は寺澤の後陣へ引とり。その外の諸大將はいづれも二三丸に詰かけたり。又鍋島が手より。麁忽に軍を仕出したるそのゆへいかんとなれば。城兵等かれて今宵は鍋島細川が陣所へ。夜討をかけんと支度して。用意既にとゝのへば。時刻は丑一點と定め。それまでは各兵氣を養はんと休息したり。鍋島が營あまりに城に近かりしかば。城內今宵ひそまりかへり。物音もせざるをあやしみ。家老鍋島安藝竹束の際まで來り。敵城の躰をうかゞひみるを。手の者ども城乘するぞと心得。各城へ乘入てはや合戰をはじめ。すでに二丸へこみ入て凱をあぐれば。長崎奉行にてありし榊原飛驒守職直。同左衛門職直も一同に乘出せば。鍋島勢これを見て。飛驒守父子をうたすなと指揮し。紀伊守元茂。甲斐守直澄數多の軍勢を率して。三丸に攻入火を放てば。城兵防禦の術をうしなひ散々に敗北す。細川父子の大軍もおなじく三曲輪を乘やぶり。西刻には本丸海手詰丸東方を攻取。大櫓をふり旗を立て夜の明るをまち。有馬。立花。小笠原。寺澤。松倉勢は外郭を乘とり。松平右衛門佐忠之大剛の人なれば。素肌に具足を着し。自身鎗とつて大江口といふ雛所をのりこへ。天草丸を乘とり。これも夜陣をはりて夜の明

下織田尚長

るなまち。板倉主水佑重矩は父の吊軍せんと。精力をはげましこれも二丸へおしよせ。本丸に向て攻入る。此戰に牧野傳藏成純手負しとぞ。すべて今度細川の陣は馬場三郎左衞門利重。鍋島は横原飛驒守職直。立花。有馬。松倉は牧野傳藏成純。黒田は林丹波勝正。寺澤は下曾根三十郎信由。杉原四郎兵衞正永は目付として。これを監せしとぞ。肥前島原記。藩翰譜。紀年錄。）〇七日白木書院に出御あり。九條前關白幸家公。二條右大將光平卿。松殿大夫道昭太刀目錄もて拜謁せられ。次に近衞前關白信尋公。左大將尚嗣卿同〻く太刀目錄さゝげて拜謁あり。次に滋野井中納言季吉卿。中御門右大弁宣順。油小路中將隆基。近衞嗣卿。二條右大將光平卿に。吉良若狹守義冬御使し。鵞一隻。樽一荷つかはされ。近衞前關白信尋公。左大將尚嗣卿。二條右大將光平卿に。吉良若狹守義冬御使し。鵞一隻。樽一荷つかはさる。この日堀田加賀守正盛信濃國松本にて六万五千石に。江戸近郊地をそへて給はり。十万石になされ。連署の列をゆるさるゝ旨面命せらる。また薩摩中納言家久卿この廿三日病卒せるよし注進あり。また肥前國有馬より松平伊豆守信綱。戸田左門氏銕井三浦志摩守正次。非上筑後守政重注進せるは。此二月廿七日未刻より有馬の古城を總攻し。本丸二三の丸ども即時に破却せりとぞ。（日記。二月廿七日惣勢原の城に攻入夜をあかし。廿八日しのゝめに。黒田勢一番に詰の丸へ乘かくれば。城兵いまはこれまてと。石礫をうち材木井に苦に火を付てなげかけ鍋釜を投出し。其すき間に弓炮を射かけ打かけ防たり。されども黒田勢透をあらせず乘込て。廿八日巳

下堀田正盛発遣署且加封

下島津家久卒下島ゝ亂平

種に。遺領一万石つがしめらる。この尚長は故有樂入道長益が五男にて。元和元年八月十二日父の所領をわかち給ひ。爵ゆりて大和守又武藏守。越後守と稱し十一月三日卒しぬ。年四十二。又津輕土佐守信義が家士等。これより先津輕伊豆美作等が事に與謀せしともがらば。信義が心まかせに追放べき旨命ぜらる。此日肥前國有馬落城のよし聞えしかば。三家まうのぼらる。（日記。藩翰譜。紀伊記。）〇八日九條前關白幸家公井松殿大夫道昭へ。大澤右京亮基重御使し。博陸へ鵞一隻。樽一荷。大夫へ白鳥一隻。樽一荷つかはされ。近衞前關白信尋公。左大將尚嗣卿。二條右大將光平卿に。吉良若狹守義冬御使し。鵞一隻。樽一荷つかはさる。この日堀田加賀守正盛信濃國松本にて六万五千石に。江戸近郊地をそへて給はり。十万石になされ。連署の列をゆるさるゝ旨面命せらる。また薩摩中納言家久卿この廿三日病卒せるよし注進あり。また肥前國有馬より松平伊豆守信綱。戸田左門氏銕井三浦志摩守正次。非上筑後守政重注進せるは。此二月廿七日未刻より有馬の古城を總攻し。本丸二三の丸ども即時に破却せりとぞ。（日記。二月廿七日惣勢原の城に攻入夜をあかし。廿八日しのゝめに。黒田勢一番に詰の丸へ乘かくれば。城兵いまはこれまてと。石礫をうち材木井に苦に火を付てなげかけ鍋釜を投出し。其すき間に弓炮を射かけ打かけ防たり。されども黒田勢透をあらせず乘込て。廿八日巳

刻にるかに詰の城を陷いる。細川勢は廿七日酉刻に詰丸の東のはしを乘破り。城内に九曜の星の旗をおしたて。敵前に柵木をゆはせ夜をあかし。翌日早天に四郎時貞がありし家に押入て燒立て。四郎が首なば細川が家士陣野佐左衞門討とりたり。されば江戸への注進には。細川が一番乘とは聞え上たりとぞ。凡廿七八日兩日の城責。細川が勢二百七八。黒田勢二百十三人。同甲斐守長興手にて三十二人。市正高政が手にて十六人。鍋島が手百六十人。有馬勢七十八人。立花百廿七人。小笠原十九人。松平丹後守重直が手三十一人。水野が手百六人。有馬左衞門佐直純が手三十九人。寺澤二十三人。松倉廿七人。伊豆守信綱が手にも六人。左門氏銕が手にも四人。すべて討死千百五十一人。手負は六千七百四十三人とぞ。肥前島原記。）〇九日三浦志摩守正次肥前有馬より歸謁し。一揆等落城の事狀を聞え上る。また太田備中守資宗有馬の御使にさゝる。（日記。）〇十一日有馬の　地御使命ぜられたる太田備中守資宗御馬を給ふ。又薩摩中納言家久卿卒去せしにより。使番能勢小十郎賴隆薩州へ御使命ぜられ。薩摩守光久を吊せられ。香銀五百枚下さる。この日公卿兩山參詣により。東叡山は内藤伊賀守忠重。井上河内守正利。三緣山は青山大藏少輔幸成。水野監物忠善して警衞せしめらる。（日記。）〇十二日目付村越七郎左衞門正重有馬より歸謁し。かの地の子細を面陳す。この夕城外へならせたまふ。（日記。）〇十三日品川へならせられ。堀田加賀守正盛茶を献ず。大目付井上筑後守政重有馬より歸り。品川にて拜謁し。かへり給ふ後まうのぼり。彼地のさまを聞えあぐる。（日記。）〇十四日攝家の方々知恩院門跡尊純法親王。其外公卿拜謁し。饗せられ猿樂あり。酒井宮内大輔忠勝所勞により。酒井讃岐守忠勝能始の事を役す。擬頭また同し。能は翁。三番叟。高砂。忠度。熊野。船弁慶。羅生門。海人。祝言。三家井普請諸大名及北面公卿の使者も饗せらる。紀伊大納言賴宣卿は病後によて。心まかせに進退あるべき旨懇命を傳へらる。（日記。紀伊記。）〇十五日三家まうのぼり老臣に謁せらる。午刻大僧正天海が許にならせられ御膳を奉る。（日記。）〇十六日公卿東叡山の　御宮に參拜あり。よて内藤伊賀守忠重。井上河内守正利警衞にまかる。（日記。）〇十七日公卿三緣山　靈廟に進拜あり。青山大藏少輔幸成。水野監物忠善警衞す。　この日紅葉山御宮に酒井讃岐守忠勝代參せり。（日記。）〇十八日公卿辭見あり。京への御返詞をつたへらる。賜物かずく　あり。年頭勅使西三條。日野銀二百枚。綿百把づゝ。　院使銀百枚。綿百把。御移徙の　勅使銀二百枚。綿百把。　院使百枚。百把。大宮使百枚。時服十。昵近廣橋百枚。十。柳原五十枚。十。高倉。飛鳥井。烏丸。勸修寺わなに。土御門は五十枚。五。殿上人山科。六條。四條。舟橋。日野。柳原銀五十枚づゝ。四淸院三十

枚。時服五。北面十枚。時服二づゝ。その外使者みな縁かづけらる。未刻高田の地へ御放鷹ありて。黄昏にかへらせたまふ。(日記。吉眞日記。)〇十九日水谷伊勢守勝隆川越在番。使番眞田長兵衛幸政同所目付命ぜられ。内藤豊前守信照。堀又七郎親昌。寄合植村長門守泰朝大坂の加番を命ぜらる。酒井讃岐守忠勝及高家吉良上野介義弼御使し。攝家へ歸洛の事仰つかはさる。九條前關白幸家公銀五百枚。綿五百把。松殿大夫道昭銀三百枚。時服二十。近衛前關白信尋公銀五百枚。綿五百把。左大將尚嗣卿銀三百枚。時服二十。二條右大將光平卿も同じ。供奉せし滋野井銀三十枚。時服四。油小路銀二十枚。時服四。中御門も同じ。殿上人家司は銀十枚づゝなり。この日兩傳奏へ傳られしは。西洞院家領百七十石餘少納言時良に給はり。少納言時良方領八十石を松花入道時慶養老料にたまはり。宰相時直は死せしにより。方領八十石收公せられ。轉法輪中將公富方領百石。先年幼稚によりかへし納めしかど。既に成人し　禁中奉仕するをもて。もとのごとく家領たまはるべし。東園中將基敎卒して子なし。男大夫基賢をもて祭を奉じ。　禁中所役つかふまつれば。家領百八十石を基賢にたまはるべし。四辻中將公理は

内　院の叡慮にまかせらるべし。新家十疋入。川鯉。小倉。油小路。裏辻。岩倉。千種。梅園。花園。倉橋。鹽小路。七條。これまで百石づゝたまはる所。なの〳〵加恩せられ。百五十石つゝたまはるべし。四辻中將公理は

大猷院殿御實紀卷三十八　寛永十五年四月に始り八月に終る

〇四月朔日尾水兩卿諸大名まうのぼり老臣に謁す。午後品川の御殿にならせ給ひ。井伊掃部頭直孝。土井大炊頭利勝。酒井讃岐守忠勝。阿部豊後守忠秋。堀田加賀守正盛に御茶を給ふ。松平出雲守勝隆。普請奉行駒井次郎左衛門昌保肥前國有馬より參る。(日記。)〇二日半禮の邊へ御放鷹あり。かへらせ給ふまで酒井讃岐守忠勝留守を命ぜらる。尾紀兩卿へ書院番頭稲垣若狹守重太。水郎へ書院番頭池田帶刀重賢御使して鶉を つかはさる。かへらせ給ひし後。小十人の頭歩行の頭を黒木書院に召て。けふ半禮にて各隊勢子つかふまつりしに。各指揮其度にかなひ。御けしきうるはしき旨の仰を。杤木民部少輔稙綱傳へてお の〳〵時服かづけらる。(日記。)〇三日宇治の茶到着により數寄屋へならせられ。御膳を奉り。夕かけて二丸にて杤木民部少輔稙綱御茶を奉る。この日使番蒔田玄蕃頭定正駿府より歸參す。(紀伊記。日記。)〇四日二丸にて鞠打の御覧あり。(日記。)〇五日入貢の蘭人まうのぼり。酒井讃岐守忠勝に謁して方物を奉る。算留稿二十卷。綸子十卷。ちよろけん五卷。天鵞絨二卷。各色羅紗七疊。硝子障子四連。雉子。馬なり。午刻高田に放鷹したまふ。(日記。紀伊記。)〇六日紀伊亞相のもとに。阿部豊後守忠秋御使して。養生のため放鷹の暇つかはされければ。申刻より浦和に赴かる。醫官吉田意安宗恪上洛の暇たまはる。(日記。藩翰譜。)世に傳ふる所は。長門守勝家常に岡田作右衛門。大町權之助といふ佞臣を信用し。國政みだりがはしく民を苦しめけるより。こたびの一亂を引起しけるを

下 牧松倉勝家封流矣作

下 寺澤堅高之減封

もて。罷業りしなり。兵庫頭堅高國政よろしからず。衆人そむきたるといへども。唐津城より天草は程へだゝりたる所ゆへ。なめし集め。戰勞を慰せらるゝ盧慮を傳へ歸りしなり。使番齋藤左源太利政は島原天草引渡。眞田長兵衛幸政は濱松引渡命ぜらる。また明日は諸大名東叡山　御宮參拜するにより。內藤伊賀守忠重。松平出雲守勝隆かしこにまいり。其禮法を嘗すべしと命ぜらる。松平越前守忠宗所領陸奥の國仙臺。去年兩度水害にかゝりたるをもて。銀五千貫目恩貸せらる。（日記。紀年錄。）○十七日二丸　內宮へ御參あり。紅葉山　御宮へは土井大炊頭利勝代參す。此夜大風暴雨屋を倒し樹を拔く。（日記。）○十八日けふも雨やまず。尾水兩卿井松平越中守宅嗣。牧野右馬允忠成。內藤帶刀忠興。脇坂淡路守安元。松平大膳亮忠重老臣に謁し。御氣色を伺ふ。（日記。）○十九日細川肥後守光尙は有馬の地より歸謁し。忠興入道三齋參觀して拜謁し。使番能勢小十郎賴隆は薩州より歸謁す。青院番山崎權八郎正信は。使番齋藤左源太利政と兵に。島原天草の引渡に赴くべしと仰付らる。（日記。）○廿日高家吉良上野介義彌日光山より歸謁す。酒井讃岐守忠勝の別墅にならせられ。鞭打御覽あり。忠勝に乘御の馬を給はる。（日記。）○廿一日品川御殿にならせられ。井伊掃部頭直孝茶を奉る。はて丶囃子の御遊あり。直孝に御盃を賜ひ。元重の御刀を引る。直孝行光の脇差を奉る。けふ阿部豐後守忠秋留守を命ぜらる。松平伊豫守忠昌家司證人暇

上高力忠房之轉封

上山崎家治之轉封

崎にいたり。天草有馬を巡察し。豐前小倉にて天草追討の諸將をめし集め。戰勞を慰せらるゝ盧慮を傳へ歸りしなり。使番齋藤左源太利政は島原天草引渡。眞田長兵衛幸政は濱松引渡命ぜらる。また明日は諸大名東叡山　御宮參拜するにより。內藤伊賀守忠重。松平出雲守勝隆かしこにまいり。其禮法を嘗すべしと命ぜらる。松平越前守忠宗所領陸奥の國仙臺。去年兩度水害にかゝりたるをもて。銀五千貫目恩貸せらる。（日記。紀年錄。）○十七日二丸　內宮へ御參あり。紅葉山　御宮へは土井大炊頭利勝代參す。此夜大風暴雨屋を倒し樹を拔く。（日記。）○十八日けふも雨やまず。尾水兩卿井松平越中守宅嗣。牧野右馬允忠成。內藤帶刀忠興。脇坂淡路守安元。松平大膳亮忠重老臣に謁し。御氣色を伺ふ。（日記。）○十九日細川肥後守光尙は有馬の地より歸謁し。忠興入道三齋參觀して拜謁し。使番能勢小十郎賴隆は薩州より歸謁す。青院番山崎權八郎正信は。使番齋藤左源太利政と兵に。島原天草の引渡に赴くべしと仰付らる。（日記。）○廿日高家吉良上野介義彌日光山より歸謁す。酒井讃岐守忠勝の別墅にならせられ。鞭打御覽あり。忠勝に乘御の馬を給はる。（日記。）○廿一日品川御殿にならせられ。井伊掃部頭直孝茶を奉る。はて丶囃子の御遊あり。直孝に御盃を賜ひ。元重の御刀を引る。直孝行光の脇差を奉る。けふ阿部豐後守忠秋留守を命ぜらる。松平伊豫守忠昌家司證人暇

上山崎家治之轉封

たまふ。（日記。）○廿二日紀伊亞相阿午の狩場より。使もて齊藤を獻ぜらる。阿部備中守正次武州岩槻の所領五万石の內。一万石は早世の嫡子修理亮政澄が子德千代政令にあたへ。其他の四万石井子對馬守重次が所領一万三千石。合せて五万三千石の軍役をつとむべしと命ぜらる。此日稻富市十郎重吉初見す。（日記。寛政重修譜。）○廿四日三緣山　靈廟に土井大炊頭利勝代參す。少老太田備中守資宗一万九千四百石加へて。三万五千石になされ。三河國四尾の城主とせられ。少老の職をゆりて奏者番を命ぜらる。（日記。紀年錄。）○廿五日松平和泉守乘壽一万六千石余加へられ。三万六千石になされ。美濃國岩村を轉て遠江國濱松の城主にせられ奏者番を命ぜらる。書院番組頭川窪越前守信雄小姓組番頭になり。花畑番岡部大和守長賢。小姓組柴田七九郎康久小姓組番頭になる。小姓堀采女正直政は病もて職ゆるさる。寄合酒井下總守忠正。竹中左京重常甲府在番にさゝれ暇たまふ。（日記。）○廿六日高田の逸に放鷹の御遊あり。大橋龍慶重保が宅に過らせ給ひ御膳を奉る。（日記。）○廿七日僧淨慶がために。品川に一寺を創建せらる。八木勘十郎守直搆造の奉行命ぜらる。今の東海寺是なり。使番齋藤左源太利政。書院番山崎權八郎正信は島原天草城引渡にさゝれ。書院番牧野織部成常は備中國成羽の目付にさゝれいとまたまひ。奏者番太田備中守資宗は就封のいとまたまふ。書院番頭丹羽式部少輔氏信一万石くはへ二万石になされ。三河國伊保より美濃國岩村に轉封し。番頭の職をゆるさる。また薩摩國鹿兒島城主中納言家久領遺封薩摩大隅日向。すべて六十万五千石余并琉球國十二万三千七百石を。長子薩摩守光久に賜しめらる。この家久領實は故修理大夫貴久が四子なり。兄宗相義弘入道惟新が世つぎとなり。始め忠恒といふ。朝鮮の役には父義弘と共にかの國にわたりわたり戰功少からず。歸朝の後慶長四年正月三日　神祖家久が伏見の邸へならせたまひ。歸朝を賀せられ長光の御刀をたまふ。同十九日戰功を賞したまひ。正四位下の少將に叙任し。九年六月仰によつて陸奥守と稱す。このころまでも豐臣家の家號ゆるされて。羽柴と名のりしなり。そのとし九月十一日中將にうつり。十一年六月十七日御名の字たまはり家久とあらたむ。十四年の春家久のぞみ請て琉球をうたんと。二月十一日南洋にうかみ。大島德島の地に戰ひ。四月朔日那覇津にいたり。琉球の兵を攻やぶり。三日中山王を生け取て本國にかへり。そのよし注進せしかば。　神祖御書を賜はり。琉球國をながく家久に給ふ。　台德院殿にも龍伯入道。惟新入道。家久三人に御書を下され其功を褒せられ。十五年八月八日中山王を駿府に引具し參り　神祖に見參し。其月二十八日　台德院殿に見參せんとて關東に參る。大坂前後の戰には海上風波穩ならずと申て參らず。元和三年七月

下丹羽氏信之轉封

上太田資宗轉封且罷若年寄

下島津家久

上松平乘壽之轉封

上品川東海寺

十八日登譜をかけ。九月朔日御家號を賜ひ薩摩守に改む。寛永元年十一月十三日家眷をたづさへ江戸に移る。是鎭西の大名妻子を關東にうつせし始とぞ聞えける。三年八月十九日從三位に昇階し權中納言に任ず。八年四月朔日大隅守に改め。十一年八月四日薩摩大隅兩國。日向國諸縣郡。すべて六十万五千石。琉球國にて十二万三千七百石。合せて七十二万八千七百石の御判物を下され。此二月六十三歳にて卒せしなり。(日記。寛永系圖。貞享書上。藩翰譜。寛政重修譜。)○廿八日尾水兩卿其他諸大名きうのぼり。老臣に謁し退く。坂城成役の大番久久保八左衛門某。春田長兵衛久次城内にてこの十七日關守し。共に討果したるよし。成役の大番頭井目付より注進す。(日記。)○廿九日明日品川の御殿にて。三家に御茶賜はるべしと仰出さる。ときに紀伊大納言賴宣卿狩場にあれば。阿部對馬守重次その地に御使せり。(日記。)○五月朔日越前宰相忠昌始。參覲する者二十六人。此日品川の御殿にて尾紀水三卿に御茶をたまひ。御盃の獻酬ありて。御閑談時をうつさる。御病後ゆへに堀田加賀守正盛御名代として點茶つかふまつる。(日記。紀伊記。)○二日加賀中納言利常卿。藤堂大學頭高次。京極丹波守高廣はじめ。十四人の大名就封のいとま賜はるとて。別に令せられしは。先令に何等の事ありとも。各境を守るべき旨令せられしは。各其國に於て私の事を營み。令條にたがふか。又は盜賊等ある時の事なり。もし國家の大法制をおかし。凶逆のふるまひせるやからあらんには。牌國の狼速に馳むかひ討伐すべし。小邑の輩は時宜により。近領の輩興謀してはからふべし。又先に五百石積以上の大船を停禁せられしといへ共。商船はこの限にあらずとなり。堀田加賀守正盛も信濃國松本城就封の御ゆるしあり。(日記。)○三日尾張大納言義直卿就封の辭見せられ。鷹馬をつかはされ饗せられ。家司成瀨隼人正正虎以下の輩にも饗給ふ。けふ亞相はじめて御座所にて。姬君に對面し給ひ祝酒を給ふ。(日記。)○五日蒲節により家門はじめ出仕の輩。老臣に謁し退く。御病後ゆへ御養生のため。外殿にはのぞませ給はず。(日記。紀伊記。)○七日酒井宮内大輔忠勝はじめ。就封のいとまたまふもの十人。松平越中守定綱。內藤伊賀守忠重は別に御前にめして御馬をたまふ。夜中前田玄以某めし出されて。平家琵琶を彈ず銀時服を下さる。(日記。)○八日山內修理大夫忠直はじめ。暇賜はるもの三人。書院番上野八郎左衛門貞當は書院番組頭になり。小納戸野々山新兵衛雄綱。喜多見久大夫重勝。書院番山崎權八郎正信は目付となり。小姓組北條新藏正房。書院番兼松又四郎正尼。御膳奉行大久保彦十郎忠員は歩行頭となり。中奥番大久保金彌忠利。目下部作十郎正定は小納戸となり。松平二郎右衛門某。腰物役小林平三郎正玄。川井五兵衛昌等。小十人小林善兵衛義次。安藤忠五郎定武。宮重

下五百石積以上大船

上士圭間番

上松平信綱凱旋

金左衛門信次。岡部喜兵衛正次。飯室金左衛門昌吉。川尻惣兵衛鉦宗。中根八郎左衛門正勝は士圭間番命ぜらる。(日記。これのとき士圭間番といふは今の新番なり。)○九日杤木民部少輔正綱御使して。尾張右兵衛督光友朝臣へ菓子つかはさる。(日記。)○十日使番能勢次左衛門賴重。小姓組大久保權左衛門正信。豐後府內目付にさゝれ暇たまふ。右雖の徒晝夜精勤すとて金時服下さる。(日記。)○十一日端午時服さゝげし家々へ御內書を給ふ。(日記。)○十二日松平伊豆守信綱。戸田左門氏鐵天草の地より凱旋す。明日吉辰により召出さるべき旨命ぜらる。けふ夕かけて高田の邊へならせ給ふ。(日記。伊豆守信綱は去年十二月三日島原賊徒誅伐の仰を蒙り江戸を出て。今年正月四日有馬の地に着陣せしより。攻城の事をばすてゝ竹束仕寄を殿にし。諸軍に令し甲冑を脫て休息せしめ。京大坂より商賈を呼下して。飯食諸具をひろくうらしめ。衆人便を得し事大方ならず。廿八日には江戸より宮城越前守和甫御使して。近國の米を遣送し。諸軍勢の粮米をあつく扶持すべき仰をつたへ。二月朔日には酒井因幡守忠知御使して。信綱士卒を損せずして。粮米以下の下知思召まゝに事ゆくよし御感を蒙り。同下十七日には御感の御書。廿六日には御判の御內書をたまはり。さて廿七八兩日に城陷りし時。四郎時貞が首を切て實檢し。その事注進する消息の箱の止に。人の目に立ばかりに落城といふ二字をかゝしめてまいらせしかば。この箱いまだ開かざる前より。はや見聞もの心を安じ。また諸手にてからめ取落人等は。速にゆるして百民となし。諸軍の陣營をもとみにこぼちて。離散せし士民にあたへしかば。士民忽に家居作る事を得て。安堵をなしけり。三月朔日には一揆の城跡ことごとく燒拂て。時貞はじめ一揆の首は。のこりなく其地に梟首し。邪宗を改めしものは罪をゆるし。猶も宗門を改め兼る者は。兒女子といへどもみな首切て衆に示し。九日天草を立て十六日長崎の湊にいたり。法令を正し。四月三日豐前國小倉に於て。太田備中守資宗が御使していたるに會し。諸將の功爵を沙汰し。鍋島が軍法に背きたるほか。府にかへり御旨を請べき旨さだめ。この日關府せしが。信綱去年の冬出門せしより。けふかへり來るまで。軍中はいふまでもなし。險岨艱難の地をふると三百里にあまるといへども。あるは馬にのりまたはかち立にて。遂に奧夫の力をからざりしとぞ。(家譜。)○十三日松平薩摩守光久國封を謝して。大方ならず。廿八日には江戸より宮城越前守和甫御使して。近國行の太刀。銀千枚。縮緬五十卷獻上。父中納言家久卿遺物正宗の刀。貞宗の脇差。唐物肩付三幅の簡。　後鳥羽院宸翰の御懷紙をさゝぐ。弟又八郎忠期拜謁し。家司も同じく拜し奉る。立花飛驒守宗茂天草より參謁し。しばし御前にめして。御密話ありて退く。其事は秘して傳はらず。次に松平伊豆守信綱。戸田左門氏鐵拜謁し。信綱が子甲斐守輝綱。氏鐵が二子淡

路氏經。六子三郎四郎氏照も拜謁す。この日品川御殿へならせ給ふ。信綱は夜中又平川門よりまいるのぼり。二丸にいてゝ軍中の委細を聞えあげ奉る。(日記。紀伊記。家譜。)○十五日出仕の諸大名老臣に謁す。この日出仕の輩に令條を驗せらるゝ旨。二日の令に同じ。三家はじめ其家司をめして。今度天草島原の一揆等。その初め速に誅伐を加へば。大事に及ぶまじきを。延滯して多くの人數を損じたり。此後も近國他領の爭論などあらんには。先々の令のごとく各其境を守りて。みだりに動く事あるまじといへども。こたびのときに於ては。速に誅戮するをもて緊要となすべし。廻船もいかほど大船なりともくるしかられば。製造せしむべし。軍船は先々のごとくに禁ぜらるべき旨を傳へらる。(日記。水戸記。)○十六日町奉行加々爪民部少輔忠澄。堀式部少輔直之職ゆるされ。忠澄は大目付になり。作事奉行酒井因幡守忠知。長崎奉行神尾内記元勝町奉行になる。下總國佐倉城主松平紀伊守家信遺領四万石を。長子若狹守康信に三万六千石。弟修理亮氏信。新九郎信忠に二千石づゝ分ち給ふ。この家信は和泉入道殿第四の御子佐渡守與副六代の孫にて。曾祖佐渡守親忠。祖父紀伊守家廣。父紀伊守家忠よりこなた。　神祖の御供して所々の戰功少からず。天正十年の秋武田四郎勝頼亡し後。甲斐信濃の國々亂れしかば。家信生年十四歳。父と共に酒井左衞門尉忠次にしたがひ。信濃國に向ひ。高島の戰に勝事を得たり。十二年三月尾張國羽黒にて。森武藏守長一が手に。野呂助左衞門といへる剛勇のものありしが。かれにわたしあひ。終に首とつて見參に入しかば。　神祖野呂は聞えし大剛のつはもの。家信生年十六歳。かれが首とる事不審に思召けるに。家信こは全く郎等がおりあひてうつたるにて候。家信が高名にて候はずと申しければ。御感なゝめならず。十八年小田原の役には。駿河國富士川船橋の事を沙汰し。關東にうつり給ひしとき。加恩ありて上總の國五井にて五千石領し。文祿元年肥前國名護屋に御發向のとき。船手の事を奉り。淺草にて船二艘をつくらしめ名護屋に赴く。關が原のときは三河國毛呂崎を守り。慶長六年五井を改めて。本領三州形原をたまひ。十五年正月二十六日叙爵して紀伊守と稱し。元和四年九月留守居となり。安房國に於て五千石を加へられ一万石となり。五年九月攝津國高槻の城たまはり。加恩ありて二万石を領し。寛永十一年七月十六日從四位下にのぼり。十二年二月二十九日今の城たまはり。二万石加へ四万石になされ。鄰つもりて七十四歳。この正月十四日卒せしなり。(日記。家譜。藩翰譜。)○十七日紅葉山　御宮に土井大炊頭利勝代參す。この日二丸にて申樂十番あり。澤庵和尚井に知樂院僧正　めして見せしめらる。(日記。)○廿日高田へならせらる。(日記。)○廿一日品川にならせたまふ。(日記。)○廿二日知恩院門跡良純法親王旅館へ。高家吉良若狹守義冬御使して。菓子并酒樽をつかはさる。この日高田になならせられ。かしこにて晝餉奉る。かへらせ給ひ夜に入て幸若舞御覽ぜらる。(日記。紀伊記。)○三日二丸にて囃子の御遊あり。はてゝ近臣等に鞭打命ぜられ御覽ぜらる。(日記。)○五日酒井讃岐守忠勝が別業にならせられ。鞭打を御覽じ給ふ。(日記。水戸記。)○六日高松彈正尹良仁親王(後陽成院第七宮。)所勞の聞えあるにより。北條右近大夫氏利御使命ぜられいとまたまふ。井上河内守正利遠江の國濱松の在番はてゝかへり參る。(日記。)○七日品川にならせらる。(日記。)○八日京より驛使もて。高松良仁親王此三日薨ぜられし旨を注進あり。よて聞傳奏へ御弔慰の御内書をつかはされ。又知恩院門跡良純法親王へ。高家大澤右京亮基重御使して弔せらる。伊勢國專修寺門跡堯朝尊向ありければ。使番大河内善兵衞正勝慰勞の御使す。尾張大納言義直卿在封により。名古屋城へ書院番頭池田帶刀長賢御使命ぜられ。御内書に菓鶴四そへてつかはさる。紀伊大納言賴宣卿狩場にて所勞の聞えあれば。醫員武田道安信重をつかはされ。其病を訪せらる。未後酒井讃岐守忠勝が別業にならせられ。鞭打を御覽ぜらる。(日記。水戸記。)○九日駿府城の殿閣撰造の助役を。松平大膳大夫忠重。水野隼人正忠清。井上河内守正利。水野監物忠善に命ぜられ。大島淺兵衞義唯。會院帶喜多見五郎左衞門重恒その奉行を仰付らる。(日記。)○十日金森長門守重直就封の暇給ふ。堀田加賀守正盛新封の地よりかへり。太刀。馬代金二十枚。綿百把獻り謝し奉る。有馬兵部少輔忠頼祖父の助宗次三河國四尾よりかへり參る。(日記。)○廿四日三緣山　靈廟に土井大炊頭利勝代參す。けふ增上寺智演齋飯をたまふ。伴僧も同じ。(日記。)○廿五日阿部對馬守重次御使して。紀伊大納言賴宣痢病をとはせ給ひ。菓鶴をつかはさる。(紀伊記。)○廿七日二丸にて囃子の御遊あり。(日記。)○廿八日三家はじめ出仕の輩。老臣に謁し退く。けふ品川の御殿にならせらる。此日小出大和守吉英。戸川土佐守正安。高野山大塔造營奉行命ぜらる。山崎甲斐守家治。備中國成羽より肥前國天草に轉ぜしかば。肥前の國宮岡に在城すべしと仰付らる。(日記。)○廿九日先手頭齋藤伊豆守利宗相摸國小田原より歸謁す。大目付秋山修理亮正重。井上筑後守政重御前に召て面命の旨あり。今夜幸若舞御覽ぜらる。(日記。)○晦日老臣の輩より町奉行に。先先の法令幷今度改鑄禁札の令。心いれて市井に令し。市人をして堅く守らしむべき旨を傳へ。又目付をめして。奉行等怠りなく法令をふれわたし。市人も制禁を守るやいなや。そのさまを歩行目付して。巡察せしむべしと令す。(日記。)○六月朔日拜賀例のごとし。松平修理亮氏信幷弟新九郎信忠分知を謝し奉る。岡本宮内義保。戸田藤五郎重種甲府在番はてゝかへり謁す。(日記。)○二日知恩院門跡良純法親王旅館へ。高家吉良若狹守義冬御使して。菓子并酒樽をつかはさる。この日高田になならせられ。かしこにて晝餉奉る。かへらせ給ひ夜に入て幸若舞

稱なればとて度々願により。中務大輔に改めしめらる。知恩院門跡良純法親王の旅館に。高家大澤右京亮基重御使して。米五百俵つかはさる。夕かけて城外にならせ給ふ。(日記。)〇十一日品川の邊へならせらる。(日記。)〇十三日大僧正天海日光山よりかへり謁す。紀伊亞相狩場より使して。此ほど炎熱なるに御けしきうるはしくわたらせ給ふを賀せられ。かつ久しく狩場にありとて謝せらる。(日記。)〇十五日水戸中納言賴房卿はゝ上め。月次拜賀のためまうのぼる。老臣に謁し退く。永井信濃守尚政參觀す。北條右近大夫氏利京より歸り參る。(日記。)〇十六日嘉定例の如し。使番大久保甚右衞門長重。朝倉仁左衞門在重大坂目付はてゝ歸り謁す。けふ二丸にて堀田加賀守正盛御茶を奉る。猿樂あり。(日記。)〇十七日紅葉山　御宮に土井大炊頭利勝代參す。この日二丸にて近習の輩鞠打御覽じ給ふ。(日記。)〇十八日酒井讃岐守忠勝の別業にならせられ。御病後始て御馬にめさる。(日記。紀伊記。)〇廿日黒木書院にて。大目付町奉行目付をめして面命の旨あり。(日記。)〇廿一日京極主膳正高通。淺野內匠頭長直就封のいとま給ふ。紀伊亞相久しく狩場にありといへども。鳥少き時節なれば。鹿狩せらるべき旨仰つかはさる。溜詰酒井讃岐守忠勝が別業にならせらる。(日記。紀伊記。)〇廿二日夕かた水戸中納言賴房卿別業にならせ給ひ。翌五番御覽ぜられ初夜に還御なる。(日記。紀伊記。)〇廿四日三緑山　靈廟に土井大炊頭利勝代參す。(日記。)〇廿五日酒井讃岐守忠勝が別業にならせられ。夜にいりて二丸へかへらせたまふ。(日記。)〇廿六日鍋島信濃守勝茂。榊原飛驒守職直。肥前國有馬より參着せしかば。評定所にめして軍法違犯の旨を諸老臣尋鞫す。たゞし松平伊豆守信綱は其座に臨まず。(水戸記。)〇廿七日書院番頭池田帶刀長賢。尾張國名古屋より歸り參る。二丸にて蟲子の御遊あり。(日記。)〇廿八日專修寺門跡覺朝黒木書院にて拜謁す。家司も同じく拜し奉る。松平能登守定政參覲す。戸田采女正氏信子新次郎氏西初見し奉る。駿府町奉行揖斐與右衞門政景駿府より歸り謁す。此日評定所にて大會聞あり。(日記。)〇廿九日反祕例のごとし。小姓內田權九郎正信母たまほり信濃守と改む。この日鍋島信濃守勝茂は出仕をとゞめられ。榊原飛驒守職直井子左衞門職信は家にこもらしめらる。有馬城攻に軍法を犯せしが故なり。(日記。)〇七月朔日出仕の諸老臣に謁し退く。けふ酒井讃岐守忠勝が別墅にならせらる。(日記。)〇二日千代姫君より生見魂の御膳をさゝげ給ふ。よて老臣はじめ諸有司饗膳を給ふ。此日常陸國土浦領主堀市正利重が遺領一万四千石を分て。長子越中守利長に一万二千石。二子數馬利直に二千石たまふ。この利重は播部大夫秀重が三子にて。故左衞門督秀政が弟なり。甥左衞門督秀治が推舉により。慶長四年　神祖に初見し。　台

德院殿に召され。關原の時宇都宮より水曾路を供奉しけるが。信濃の神邊よりと更御馬をいそがせ給ふに利重扈從し。七八十騎のうちにて。はやく美濃の鵜戸の渡りに着しかば御感を蒙り。　御凱旋の後罰ゆりて伊賀守と稱し。采邑八千石給はり。并伊掃部頭直孝にかはり書院番頭となる。十九年大久保相摸守忠隣罪蒙りしとき。利重かの縁者たるにより。奥平大膳大夫家昌にあづけられ。下野國宇都宮に蟄居する事九年。その後元和元年大坂の軍に。松平下總守忠明に屬し。五月六日七日の戰に高名をあらはし。元和八年御勘氣ゆりて。常陸國土浦にて一万石給はり。奥平美作守忠昌幼稚なれば。後見すべき仰をうけて。宇都宮にあること四年。寛永三年江戸にめされて。ふたゝび書院番頭となり。御上洛の供奉し。其後五年大番頭になり。十年四月廿三日四千石加恩ありて一万四千石になされ。後奏者番にうつり寺社奉行をかれ。十四年堀尾山城守忠晴が改公の所領に御使して。出雲隱岐の國におもむき。ことし三月かの地を松平出羽守直政にわたしかへるとて。四月廿四日攝津の大坂に於て卒せり。歳五十八。また旗奉行太田善大夫吉正子小姓組十左衞門吉次。書院番組頭服部玄番頭政久子某。西城書院番衆左兵衞佐可澄子書院番九一郎可久。大坂町奉行中山猪左衞門重時子小姓組左兵衞幸時。みな父の遺領をたまふ。使番松平甚三郎行隆は有馬の地に。軍の微とく見て參るべき旨仰を奉り。かしこに赴きながら。私の軍功を貪りかへり參らず。仰を背たる罪かろからればとて追放たる。(日記。寛永系圖。家譜。寛政重修譜。)〇三日品川へならせらる。(日記。)〇四日二丸にて阿部對馬守重次御茶を献じ。その後に鞠打を御覽あり。御膳奉行大草次左衞門公繼大病により。酒井讃岐守忠勝に陪員清水龜庵瑞室。池田道陸重次をめし具し其病をとはしめらる。此公繼が母も叔母も。　崇源院殿の時より宮づかへし。公繼も　當代御幼稚のときより。御抱守をつとめたりしかば。かく御谷願にあづかりしなるべし。(日記。家譜。)〇六日三家はじめ生見魂の賀物献ずるともがら十一人。また紀邸へ少老土井遠江守利隆御使し。松平伊豫守忠昌。松平越前守忠宗へ使番して。雲雀五十づゝたまふ。(日記。)〇七日星夕の拜賀あり。松平越後守光長はじめ雲雀三十づゝ給ふもの七人。未後酒井讃岐守忠勝別墅にならせらる。(日記。)〇八日水戸黄門井尾張武衞のもとへ。少老酒井備後守忠知御使し。細川忠興入道三齋へ使番もてともに雲雀を給ふ。二丸にて鞭打あり。昨夜酒井讃岐守忠勝が別墅よりかへらせ給ふ時。二丸門內制禁の所へ。三浦志摩守正次が若黨入てありしを御目にふれしかば。速にとらへしめ死刑に處して。一橋門外に梟首せしめらる。(日記。)〇九日春日局より生見魂の御膳を献ず。(日記。)〇十一日水邸より新鮭を献ぜられければ。即日　大內へ驛進せらる。けふ

駿府作事奉行大島茂兵衛輩唯。喜多見五郎左衛門重恒いとまを給ふ。(日記。)〇十二日細川肥後守光尚はじめ。靈雀下さるゝ者五人。大宮附天野豐前守長信京より參る。(日記。)〇十三日昨夜大風雨により紀水雨廂まうのぼり。御氣色うかゞはる。(紀伊記。)〇十四日酒井讃岐守忠勝が別業にならせ給ふ。けふ松平越前守忠宗新館を獻ず。(日記。)〇十五日三緣山御詣あり。　台德院殿靈廟。　崇源院殿靈牌所兩御墓所へも詣給ひ。御かへさ方丈へわたらせ給ひ。智嚴拜謁し銀時服給はり。役僧にもかづけられて後。　安國殿へもならせらる。曾第大名盥石の邊にて拜し奉る。還御ありて後二丸にて調馬を覩たまふ。(日記。紀伊記。)〇十六日二丸にて堀田加賀守正盛御茶奉り猿樂あり。加茂。濱經。井筒。船弁慶。鵜。羅生門。觀音。はてゝ風流あり。正盛には芝屑衝をたまふ。(日記。水戸記。)〇十七日紅葉山　御宮御參あり。紀伊亞相井普第の大名陪從す。還御の後御誕生日なりとて。老臣始殿中伺候の輩餠酒をたまふ。けふ大僧正天海は　內宮へ參拜して退く。(日記。)〇十八日水邸より鮭を獻ぜられければ。　仙洞へ驛進あり。(日記。)〇十九日水戸黃門のもとに。三浦志摩守正次御使して。黃門牙痛をとはせ給ふ。さきに罪蒙り森內記長繼にあづけられたる松倉長門守勝家。その所領にて逆徒蜂起せしめしのみならず。平日佞臣を登用し。國民をくるしめし罪かろからず

とて。長繼が宅地にて斬に處せられ。大目付井上筑後守政重。秋山修理亮正重檢使にまかる。弟右近重利は先に生駒壹岐守高俊に預けられしが。又かされて保科肥後守正之に預けられ。三彌某も松平長門守秀就に預られしを。こたび內藤帶刀忠興にあづけらる。この日目付石谷十藏貞清を評定所にめして。この正月元日有馬の城惣責の事實を鞫問ありしに。貞清答申けるは。元日の城責全く松平伊豆守信綱。戶田左門氏鉄が。再び進討の御使としてまかるより聞て。俄におもひ立し事にはあらず。去年十二月十日かの地に着しとき。はや鍋島紀伊守元茂が。城を一責せめみんと申けるを。板倉內膳正重昌も我と同じく。敵城險阻に據たれば。容易に攻かゝらば人數を損ずべし。江戶にてもうち〳〵に。人數を損ぜざらん樣にとこそは仰を承りたれ。いかにも仕寄を付。その所へ付て責べしと。其日より仕寄をつけ。廿日までしよせて候へば。元日にせめかゝりたるなりと答へしとぞ。又內藤豐前守信照。堀又七郎親昌。植村長門守泰朝大坂加番命ぜらる。けふ高田へならせられ。かしこにて御膳めし上られ。黃昏二丸にかへらせ給ふ。(日記。紀伊記。寬政重修譜。水戶記。)〇廿日品川へならせらる。(紀伊記。)〇廿一日烏丸大納言光廣卿日頃わづらはしくありしが。この十一日卒せしよし京より注進す。この卿は　神祖の御眷注ありし遺老あり。(日記。)〇廿二日有馬中務大輔忠頼はじめ。

石いとまたまふ。(日記。)〇八月朔日嘗賀例のごとし。水邸より三度まで獻ぜられし新鮭は。みな　內。　院。　女院へ驛進し給ひ。四度目に獻ぜられし鮭。はじめて今朝の供御に奉る。此日松平越前守忠宗が子万助初見し。宗對馬守義成。松平河內守定賴參覲し。堀數馬利直は分地を謝し。　大宮附天野豐前守長信京より參謁し。使番窪藤左源太利政。勘定組頭能勢四郎右衛門賴安。勘定山中喜兵衛信三九州より歸謁し。尾邸の老竹腰山城守正信就封の暇たまひ。大番頭松平縫殿助眞次子左七郎乘次。大久保右京亮教隆二子至之助忠朝井大番の子五人初見し奉る。(日記。水戶記。)〇三日井伊掃部頭直孝の病をとはせ給ひ。少老酒井備後守忠知御使して菓子遣はさる。此日千代姬君より饗し奉り給ふ。(日記。水戶記。)〇四日高田へならせらる。(日記。)〇五日阿部對馬守重次二丸に於て茶を獻ず。(日記。)〇六日品川の御殿にて。永井信濃守尙政茶を獻じ。育江の刀をさゝぐ。尙政にも御馬に皆具そへて賜ふ。此日紀伊亞相今年中こゝろのまゝに。狩塲におはすべき旨傳へらる。(日記。紀伊記。)〇八日尾紀兩亞相へ鮭を驛騎し給ふ。知門へは高家吉良若狹守義冬御使して。菓子をくらせ給ふ。(日記。)〇九日品川御殿にて育山大藏少輔幸成御茶を獻じ。一文字の刀をさゝげ。宰成にも守家の御刀を下さる。(日記。)〇十日尾張武衛(阿部對馬守重次御使し鮭を遣はさる。松平筑前守光

高所勞により。少老板木民部少輔頊綱御使して魚物を遣はさる。(日記。)〇十一日松平右衛門大夫正綱。加々爪民部少輔忠澄。目付野々山新兵衛兼綱。勘定組頭糸原甚左衛門重正を一隊とし。伊丹播磨守康勝。堀式部少輔直之。目付山崎權八郎正信。勘定組頭諸星清左衛門盛政を一隊とし。關東山野論所を巡察すべしと命ぜらる。又紀伊常陸介光貞朝臣所勞により。少老三浦志摩守正次してとはせらる。(日記。)〇十二日御頭痛により。家門諸大名まうのぼり御けしきうかゞふ。(日記。)〇十三日けふも諸大名まうのぼる。(日記。)〇十四日も同じ。(日記。)〇十五日またおなじ。(日記。)〇十六日阿部對馬守重次二丸にて茶を献ず。大名登營連日の如し。(日記。)〇十七日紅葉山御宮に酒井讃岐守忠勝代參す。二丸にて拍子の御遊あり。けふ金地院元長に僧祿の御朱印井五山十刹出世の公帖を下さる。(日記。)〇十八日酒井讃岐守忠勝が別墅にならせ給ふ。(日記。)〇十九日高田へならせらる。(日記。)〇廿一日使番石川淸兵衛忠治に時服賜ふ。此習常に怠らず供奉をつとめ。そのうへけふ雨中ことさら勞せしがゆへとぞ。この日からせ給ひし厩な。大内へ參進せらる。(日記。實政重修譜。)〇晦日二丸にて拍子の御遊あり。紀伊常陸介光貞朝臣(今朝御使して。梨をつかはさる。(日記。紀伊記。)

上令巡察關東山野

(日記。)〇廿六日紀水兩殿尾武衛まうのぼり御けしき伺はる。松平伊豫守忠昌はゝ〻め四人の獅に。菓子を賜ひ。知門へは高家吉良若狹守義冬もて。酒樽并梨子をつかはさる。この日高田へならせられ。銃にて鴈を打とめ給ひ。御かへさに酒井讃岐守忠勝が別業にならせられ。御膳めし上らる。(日記。)〇廿七日青山大藏少輔幸成就封の暇給ふ。松平越後守光長ほゝ〻め七人の大名へ菓子下さる。けふも高田へならせらる。(日記。)〇廿八日出仕の罷老臣に謁し退く。けふ諸老臣して郭内修理所を巡視せしめらる。(日記。)〇廿九日品川へならせ給ひしが。大雨により躋らせ給ひて後。徒頭坪内半三郎定次。堀田權右衛門一純。北條新藏正房。兼松又四郎正尾。彦坂平六郎重定。神尾宮内少輔忠勝。大久保彦十郎忠眞。小十人頭山下彌藏周勝。田中一郎右衛門忠勝。小栗平吉久支。小林新平正重。少納戸中根次郎左衛門正寄。腰物持小笠原左門元定。天野淸兵衛正信。御手洗吉左衛門昌頊。如蘭基之助治次。新番本目權兵衛直信。貴志彌兵衛忠治に時服賜ふ。此習常に怠らず供奉をつとめ。そのうへけふ雨中ことさら勞せしがゆへとぞ。この日からせ給ひし厩な。大内へ參進せらる。(日記。實政重修譜。)〇晦日二丸にて拍子の御遊あり。紀伊常陸介光貞朝臣(今朝御使して。梨をつかはさる。(日記。紀伊記。)

大猷院殿御實紀卷三十九　寛永十五年九月に始り十二月に終る

上崇源院十三回忌

〇九月朔日出仕の諸大名老臣に謁し退く。大番本多權右衛門玄正子九右衛門重冬初見す。(日記。寛政重修譜。)〇二日紀伊邸より南部新酒二樽獻ぜらる。(紀伊記。)〇三日酒井讃岐守忠勝の別墅にならせ給ふ。(日記。)〇四日未後高田の邊にならせ給ふ。此日　禁裏。　仙洞に新鵜を驒進せらる。(日記。)〇五日立花飛驒守宗茂が別墅にならせ給ひ。宗茂茶を献じ。栗田口則國の御腰差并小袖五たまひ。宗茂よりも則重の刀を献ず。また園中にて銃もて鴈二。鴫もて雁一とらせ給ひ。すぐに其鴈を調理し宗茂御膳を奉る。(日記。紀伊記。)〇六日　崇源院殿十三年周忌の御法會。三緣山にて万部執行あり。よて惣門は松平式部大輔忠次。奥平美作守忠昌。丹羽左京大夫光重。眞田伊豆守信之。山門は大久保加賀守忠職。六郷長五郎政勝。本多下總守俊次。九鬼式部少輔隆季。井伊兵部少輔直好。遠藤但馬守慶利。菅沼織部定芳。杉原吉兵衛重長。裏門は加藤式部少輔明成。松平石見守長綱。一柳丹波守直重。鳥居主膳正忠春。寺内橋邊は松平能登守定政。織田修理長種。遠山刑部少輔季友。一柳美作守直家。庫裏口は一柳藏人直賴。谷大學助衛政。池田内藏助重政。織田左衛門佐長政曾衛し。總奉行酒井讃岐守忠勝はとゞめ。伊丹播磨守康勝。松平出雲守勝隆。安藤右京進重長。地方奉行大河内金兵衛久綱。代官伊奈半十郎忠治等まかる。(日記。水戸記。)〇七日細川忠興入道三齋二丸に召て御茶を給ふ。こたび蹈封によりてなり。(日記。)〇九日菊節例のごとし。松平式部大輔忠次。酒井播津守忠當。秋田河内守俊季參觀し。仙石越前守政俊。西尾丹後守忠照。安部播津守信盛。保科彈正忠正貞大坂加番はてゝかへり。使番牧野織部成常は因幡國成羽より歸謁し。脇坂淡路守安元。山口但馬守弘隆駿府加番のいとまたまふ。女院附天野豐前守長信子長三郎長重并大坂駿府在番に赴く。大番の子ども初見し奉る。(日記。)〇十日奥州へ馬買につかはさるゝ厩の徒いとまたまふ。(日記。)〇十二日小納戸中根次郎左衛門正勝。小姓組小笠原左門元貞。腰物持御手洗吉左衛門昌重。天野淸兵衛正信。新番貴志彌兵衛忠治。道奉行内藤傳左衛門長敎。多門平次郎正勝。先手頭加藤勘介重政へ金二枚づゝ。其外腰物持五人へ金一枚づゝ。小十人組頭へ銀六枚づゝ。番士へ五枚づゝ。歩行組頭(四枚づゝ。歩行士(三枚づゝ。歩行目付も三枚づゝ。與夫へ一枚づゝたまふ。これ日頃怠らず供奉つかふまつればなり。また獵獲頭猪飼次兵衛には。加恩七十俵くだされ。けふより諸門宿直の先手頭。每夜姓名をしるし奉るべしと仰出さる。又　女院へ鵜驒進あり。(日記。水戸記。)〇十三日高家吉良若狹守義冬日光山代參命ぜらる。けふ供奉怠らずつとむる貝役庖更等褒銀給ふ。(日記。)〇十四日馬

役加藤助三郎正光。同勘四郎正利。諏訪部源次郎定吉。常に供奉怠らざるをもて褒銀たまふ。此日尾張大納言義直卿に鶴を驒送せらる。(日記。)〇十五日　崇源院殿十三年の御法會万部結願により。長袴にて諷給ふ。聲明音樂ありて御燒香御拜等り方丈へわたらせ給ひ。增上寺智童并役僧等に時服銀そこばくかづけられ。新寺院にて御膳奉り智童伴食す。立花飛驒守宗茂。加藤式部少輔明成めして御物がたりあり。茶室にて御茶を奉り。後堂にて智恩院門跡良純法親王御對面ありて歸らせ給ふ。けふ普第の輩は山門内にて見え奉り。勤番の輩はその外にて拜謁す。還御の後御布施物かずく頒賜あり。知門へはさらに銀綿をくりたまふ。又寺の門外にて乞丐に施行せられ。繫獄の者をも放たる。この日紀水兩卿は銀五十枚。小袖五づつ。水戸黄門は銀三十枚。小袖五。三世子は金一枚。小袖二づつ。松平越後守光長。松平越前守忠宗銀二十枚づゝ。松平大和守直基銀五枚。松平土佐守直良銀三枚。保科肥後守正之。松平阿波守忠英。上杉彈正大弼定勝金一枚づゝ。本多甲斐守政朝は銀十枚。蜂須賀家政入道蓬庵。小笠原信濃守長次銀五枚づゝ。本多能登守忠義。松平山城守忠國。小笠原壹岐守忠知三枚づつ。松平丹後守重直は二枚。其外十万石以上銀十枚づゝ。八万石以上五枚づゝ。五万石以上三枚づゝ。二万石以上二枚づゝ。一万五千石以下はなべて一枚づゝ献ず。(日記。水戸記。)〇十六日酒井讃岐守忠勝二丸に召て御茶を給ふ。御法會懃督の勞を慰せられてと。おなじく御法會はてしをもて。三家まうのぼり老臣に謁せらる。關東郡代伊奈半十郎忠治。大河内金兵衛久綱はじめ。御法會にあづかりし代官等。金銀時服たまふ事差あり。(紀伊記。水戸記。日記。)〇十七日東叡山　御宮に參らせ給ひ。大僧正天海が坊に立よらせられ饗し奉り。猿樂御覽に備ふ。けふ醫員半井驢庵成近。今大路道三親昌。御勘氣をゆるさる。柳生七郎三嵓も同じ。また酒井讃岐守忠勝日光山御使奉はり發程するにより。天海が坊に召て暇給ひ。乘御の馬并鞍皆具をたまふ。(日記。水戸記。)〇十八日高田の邊へならせらる。黄昏霰降ければ。紀邸より使出し御氣色伺はる。(紀伊記。)〇二十日天主教は先々年をかされて制禁有りといへども。いまだ芟夷せず。まして今度天草の叛民等その邪教を唱へ。一揆をくはだてたり。今より後は各國いよ〳〵其禁令を嚴にし。もしその徒を訴出ば。其身の罪をゆるされ褒賜せらるべし。その裁限は。ばてれんの訴人銀二百枚。いるまんは百枚。切支丹は五十枚。又は三十枚下さるべしとの旨を。諸大名在府在封の輩になべて仰下さる。旗下の輩にも同じ。又關東國々散在の山堺評論。目安をさゝげ訴ふるものは。番頭組頭査檢して。事を決すべしといへども。もし滯ることあらんには。その目安に裏判して。こたびつかはさるゝ檢使の輩にさゝぐべしとなり。(日記。

下嚴禁天主教

下訴訟之制

水戸記。)〇廿一日松平伊豫守忠昌はじめ。御使もて菓子賜はる大名八人。此日阿部對馬守重次二丸めして御茶を下さる。(日記。紀伊記。)〇廿二日紀伊亞相。水戸龍作へ土井遠江守利隆御使して。鴈一隻づゝつかはされ。松平越後守光長。松平筑前守光高へ使番もて菓子賜ふ。(日記。)〇廿三日紀伊亞相便利の所にて。別墅の地たまはるべきむね仰出さる。使番堀豐前守宗明子兵四郎宗通家をつぎ。千五百石の内五百石を。次子七三郎利英に分たしめ給ふ。この日小十人組大木茂兵衛親茂その組頭になる。(紀伊記。日記。)〇廿四日三緑山　靈廟に土井大炊頭利勝代參す。(日記。)〇廿五日高田へならせ給ふ。こたび關東散在の野山評論檢使をつかはさるれば。各領の地頭等よくよく査檢を加へ。訴へ出ずして治定するほどの事は。内々にて檢斷すべし。査檢行とゞかざる事を。卒忽に訴ふべからざるよし。曉諭すべき旨總物頭へ令せらる。(日記。)〇廿六日堀田加賀守正盛封地よりかへりしかば。御座所に召て見え奉る。この夕城外へならせ給ふ。(日記。)〇廿七日三家はじめ重賜時服獻ぜし家々に御内書を給ふ。けふも城外放鷹あり。又大番津田左次兵衛某病のよしにて。大坂の戍役に赴かず。あまさへ近日居宅へ數人招集て相撲を催し。はてには爭論を引出し。見物に來りし根岸源五兵衛某に。双肌に及びたるよし聞ゆれば。左次兵衛某は切腹。弟採左衛門某は小十人頭蓮合小平次道次にあづけらる。この日地震兩度。(日記。)〇廿八日白書院に出たまひ。東本願寺門跡光從新門光瑛拜謁し。太刀目錄奉る。下間法眼以下の家司も拜し奉る。次に金地院元良拜謁し。寺地を三緣山の傍にたまふむね面命せらる。關東野論檢斷使ゆし出され面命の旨あり。けふも重賜時服獻ぜし家々に。御内書を頒布せらる。又三浦志摩守正次御使し。紀水兩卿へ鵠一隻づゝつかはさる。(日記。)〇廿九日尾張國名古屋城へ。阿部對馬守重次御使して。亞相義直卿へつたへられしは。このほど御氣色日を追てうるはしく。常に御狩にもならせらるれば。亞相にも心やすく在封して休息せらるべし。重次常に御湯藥をもみづから煎じすゝめ奉れば。御氣色のさまよく聞給はんため。御使につかはさるゝなり。又明年　千代姫君御入輿により。第宅華麗に結構せらるゝよし聞し召れたり。されども天下へ教戒の爲にも華麗を省かれ。いかにも事輕く搆造有べしとの仰なりとぞ。(紀伊記。)◎此月小十人淺原又三郎正勝子又左衛門勝吉。遠山勘九郎方景二子藤四郎長景家をつぐ。(寛政重修譜。)〇十月朔日月次拜賀例の如し。稻葉美濃守正則封地より歸謁す。午後高田へならせらる。(日記。)〇二日城外へならせたまふ。(日記。)〇四日品川へならせらる。(日記。)〇五日酒井讃岐守別墅へならせたまふ。(日記。)〇六日　崇源院殿御法會により。九條家幷四本願寺一門田門跡より。まいらせられし使暇下さる。

(日記。)○七日阿部豐後守忠秋御使して。東本願寺門跡光從師洛の暇給ひ。銀三百枚。綿二百把つかはされ。新門跡光瑛銀百枚。時服二十。家司五人も時服下さる。(日記。)○十日亥猪御祝儀のごとし。たゞし御病後により。御手づからは賜はらず。(日記。)○十一日城外へならせらる。(日記。)○十二日下谷より牛込のあたり狩せさせたまひ。大橋龍慶重保が隱宅にて御膳を召上らる。(日記。)○十三日葛西に鷹狩し給ひ。鶴白鳥鴈鴨鷺あまたかり得給ひ。還御の後鶴を　大内。白鳥を　仙洞へ驛進し給ふ。(日記。)○十四日三浦志摩守正次御使して。紀水兩卿へ鶴をつかはされ。松平伊豫豫忠昌はじめ十二人へは。使番もて鴈を下さる。昨日の御狩に鶴白鳥とらせ給ひしかば。鷹師等銀給ひ褒せらる。(日記。)○十五日家門及諸大名出仕の翌老臣に謁し退く。阿部對馬守重次尾州より歸參す。(日記。)○十七日紅葉山　御宮に酒井讃岐守忠勝代參す。これより先元和四年大番にて改易せられし內藤興盛兵衛正守。その外市川三太郎昌恒。河四兵九郎親旁。大澤求之助某。寛永八年改易せられし書院番內藤圖書助忠俊。小普請奉行前田五左衛門定頁。大坂破損奉行加藤清兵衛正重。書院番一尾伊織通尙。寛永十一年御上洛のとき改易せられし小姓組肥田主水忠親子牛兵衛忠賴。淵川與三右衛門直政。書院番甲斐庄喜右衛門正述。大番向山傳右衛門盛房。榊原七右衛門政勝。飯田次郎右衛門昌重。八木次郎右衛門重明。橫田九左衛門某。梶才兵衛某。御膳番柳原小右衛門宣經。御膳奉行つとめし水野等兵衛勝次。御膳所整所役人にて松平伊豆守信綱にあづけられし日根野九郎兵衛正重。坂田甚兵衛。板橋三郎兵衛。尾崎新六郎。谷兵右衛門罪ゆるされ。渡邊清兵衛。大番渡邊六左衛門綱治。燒火間番つとめし石川傳三郎一富。岡田新太郎某。小岩井五左衛門子某。米津清三郎某。米津所左衛門某。奥山縫殿助某。花井右衛門某。生駒主水某。木村彌右衛門某。鈴木傳右衛門某は國免許。高野山安室中靈院。勢藏院。万藏院。桂香院。令勝院は罪ゆるさるゝといへども。踏山かなふまじき旨命ぜられ。遠江國諏訪の神主宮內も。島よりゆるされてかへるといへ共。神に奉仕する事はゆるされず。(日記。寛政重修譜。)○十八日葛西にならせられ。白鳥鴈鴨鷺を狩せたまふ。(日記。)○十九日昨日御狩の白鳥もて。普第の大名を饗せらる。井伊掃部頭直孝はと更に召て鴈をたまふ。昨日角田川木母寺にわたらせ給ひしにより。住僧をめして銀十枚下さる。夕方城外にならせ給ふ。(日記。)○廿日酒井讃岐守忠勝の別墅にならせ給ひ。忠勝茶を奉るとて。　神祖御筆の一幅幷奇楠を献上。一文字の御刀を賜ふ。立花飛驒守宗茂剃髮して立齋入道と號す。(日記。紀年錄。)○廿一日加賀黃門利常卿へ鶴を驛賜あり。けふ高田へならせられ。御拳にて鶴一隻鴈六からせ給ふ。(日記。)○廿二日　大宮へ鶴を驛進し給ふ。松平大和守直基。松平土佐守直貞。松平右近大夫輝興。松平吉兵衛へ使番もて鴈をつかはさる。けふ品川邊御放鷹あり。白鳥鴈鴨あまたかりせ給ふ。常陸介光貞朝臣痘瘡により。松平伊豆守信綱もてとはせ給ふ。(日記。紀伊記。)○廿三日昨日御狩り白鳥もて。老臣始め諸物頭まで饗せらる。白鳥とりし鷹師には褒銀給ふ。(日記。)○廿四日三絲山　羅刹に土井大炊頭利勝代參す。堀式部少輔直之三子五郎七郎直治。加々爪民部少輔忠澄二子主馬信澄。三子內記定澄。　女院附天野豐前守長信の子長三郎長重をはじめ。書院番に入もの十八人。大番に入者八人。小十人組に入もの二人。(日記。)　○廿五日城外にて鷹を馴し給ふ。(日記。)○廿六日高田の邊へならせ給ひ。作事奉行佐久間將監實勝が大久保の別墅によぎらせたまひて御膳奉る。(日記。)○廿七日戸田左門氏銕御座所に召て就封のいとま給ひ。正宗の御脇差を下さる。醫員久志本式部常好采邑三百石給ふ。井伊兵部少輔直好就封の暇給ふ。未刻城外へならせらる。(日記。)○廿八日月次出仕の翌老臣に謁ししりぞく。松平伊豫守忠昌へ使番もて鶴を給ふ。(日記。)○廿九日紀伊常陸介光貞朝臣痘瘡日を追て平愈あり。けふ酒湯の式行はれしかば。酒井讃岐守忠勝御使して。酒二樽。熨斗鮑。昆布。鯣幷鶴一隻つかはさる。こたび品川牛込の兩地藥苑をひらかる。よて醫員池田道陸重次は品川。山下芳藤軒宗琢は牛込の園監として。

上置藥園於品川牛込兩所

上大老之起（酒井忠勝任之）　下片桐孝利　上阿部重次任老中　上若年寄之起（三浦正次朽木稙綱任）　上大番頭及奏者寄合初爲老中支配

屋にならせ給ひ。井伊掃部頭直孝。立花宗茂入道立齋。土井大炊頭利勝御相伴に伺候す。御茶はて〻書院に渡御なりて。加賀守正盛國宗の太刀一振。鞍馬一疋。綿三百把。卷物五十捧げ。子興一郎正信猩々緋十間。太刀目錄そへて捧げ。次子久太郎正俊も太刀目錄さゝげ拜謁す。猿樂あり。三番はて〻御祝の御膳を獻ず。この時正盛に左文字の御刀。興一郎正信に左安吉の御脇差。小袖十。久太郎正俊へ小袖六。正盛奏に緋縮緬三十反賜はり。正盛また貞宗の刀。則國の脇差を獻じ。家司七人御前にめし拜謁して後還御あり。（日記。紀伊記。）〇七日土井大炊頭利勝。酒井讃岐守忠勝鎗組の職掌にあづかる事みなゆるされ。朔望のみ出仕し。その間にももし大政の事あらばまうのぼり。老臣と會議して怠るべからざるむね命ぜらる。（これ今の世にいふ大老なり。）土井遠江守利隆。酒井備後守忠朝少老の勤をゆるされ。永井信濃守尚政。井上河内守正利。水野監物忠善と同下〻く出仕すべしと命ぜられ。酒井與四郎忠清この歲暮より。父阿波守忠行が如くつかふまつるべしとなり。阿部對馬守重次は宿老の列にくはへられ。三浦志摩守正次。朽木民部少輔稙綱は旗下の職を所屬として。何事もうけたまはり。正次は二丸の事をもつかさどるべしと仰付らる。（これ今の世の若年寄なり。）大番井奇合の職は松平伊豆守信綱。阿部對馬守重次支配たるもとなり。）この日午後城外へならせ給ふ。（日記。紀伊記。）〇八日高田の邊へならせ給ふ。（日記。）〇九日大番頭。留守居。寺社奉行。奏者番。町奉行。大目付。作事奉行。鐵奉行。勘定頭。伏見奉行。大坂町奉行。駿府町奉行。堺政所。船手川船奉行。銃炮役井上外記正繼。弓役吉田久馬助重信をめして。今よりのちすべての職事。松平伊豆守信綱。阿部豐後守忠秋。阿部對馬守重次につきて。聞え上べしと命ぜらる。またこれまで板倉内膳正重昌に屬せし寄合組の職を。松平右衛門大夫正綱。秋元對馬守泰朝が所屬に分附せられ。徒頭齋藤攝津守三友は小姓組番頭命ぜられ。書院番中坊長兵衛時祐は父飛驒守秀政原職命ぜられ。家つぎて南都町奉行代官たらしめらる。（日記。）〇十日高田へならせらる。御首途の時玄關前に於て。中坊長兵衛時祐拜謁し。父の原職命ぜられしを謝し奉る。この日攝津國茨木城主片桐出雲守孝利遺領四万石の内一万石を。その弟牛之丞爲元につがしめられ。大和國龍田の領主とせらる。この孝利は子なかりしが故とぞ。孝利は故市正且元が養子にて。實は同族左衛門直重が子なり。慶長十五年五月初見し。十九年十二月叙爵し出雲守と稱し。その年大坂の軍おこりし時。父子兄弟打つれて都にのぼり御陣に參り。元和元年より家を駿府にうつし。夏の御陣には且元大病により。孝利も駿府に留て看

下天海僧正護寺務子公海　下英勝尼寺領　上百人番所

病し。且元卒して後家をつぎ。ことし八月朔日廿八歲にて卒したりとぞ。又目付馬場三郎左衛門利重。大河内善兵衛正勝長崎の奉行仰付られ。隔年に赴任せしめらる。（日記。寛政重修譜。藩翰譜。）〇十一日書院番頭水野石見守忠貞。徒頭久世大和守廣之小姓組番頭となり。八木勘十郎守直。船越三郎四郎永景。牧野織部成常作事奉行命ぜらる。使番本郷勝右衛門勝吉和州高取目代にさゝれいとまたまふ。此日松平越前守忠宗鷹下され。松平伊豫守忠昌はじめ。八人の大名菓子たまふ。（日記。寛政重修譜。）〇十二日使番齋藤左源太利政。小姓組三宅牛七郎重吉豐後目付にさゝれ暇たまふ。此日城外にて鷹を放ち給ふ。（日記。）〇十三日柳生但馬守宗矩別墅にならせ給ふ。數寄屋にわたらせ給ひ。御相伴は酒井讃岐守忠勝。永井信濃守尚政。細田加賀守正盛つかふまつり。御茶事畢て次の座敷にて。但馬守宗矩に腐光の御脇差を賜ふ。かくて別業の邊にて鷹はなちたまふ。讃岐守忠勝仰により。鷹つかひ鷹をとりければ。その大鷹を忠勝に下さる。今朝ならせたまふとき。根來番所（今いふ百人番所なり。）にて高取目付本郷勝右衛門勝吉辭見し奉る。（日記。）〇十五日月次出仕の班老臣に謁して退く。（日記。）〇十六日大僧正天海病臥により。醫官半井驢庵成近。今大路道三親昌。野間玄琢成岑。武田道安信重をつかはさる。（日記。）〇十七日三番頭并三組頭小十人頭を召て。各隊の番士采邑井宅地の境界。あるは家士等以下の訴論あらば。頭組頭會集し査撿して裁斷すべし。もし違背するものあらば曲事たるべしと。そのうへにも裁斷なし得がたきことある時は。老臣へうたへ指揮をうくべしとなり。けふより大僧正天海がもとへ。酒井讃岐守忠勝をつかはされ。その病を看侍せしめらる。又大僧正天海大病によりて。寺務を門跡公海につがしめらる。よてその よしを松平伊豆守信綱して。紀水兩邸につげらる。（日記。水戸記。紀伊記。）〇十八日松平大膳大夫忠重。松平和泉守乘壽を奏者番に命ぜらる。（日記。水戸記。）〇十九日酒井備後守忠利奏者番命ぜらる。（日記。）〇廿日錄倉英勝尼寺に。相摸國地子村三百石の地をよせらる。こはおかちの方とて。太田源六郎資康の女十三にしてみやづかへし。常に　神祖の御かたはらにさぶらひ。御いつくしみを蒙り。松姫君市姫君をまうけしかども。幼して世を早うし給ひ。市姫君は仙臺中納言政宗卿の息越も。幼して世を早うし給ひ。市姫君は仙臺中納言政宗卿の息越前守忠宗に降嫁の御ゆるしありて。そのことゞげず失給ひしかば。この局なげきしきりにして。尼となり御跡を弔はん事を願ひしかば。御外孫なる池田宰相輝政の女子を養はせられ。越前守忠宗にあはせらる。又この局をもて。水戸中納言賴房卿の御母代となさる。局は　神祖かんさらせ給ひし後。常に近侍をとげ娘衣の身となりて。英勝院と號せしが。その後また賴房卿の息女二人をやしなひとりて己が子とし。其一人は後に　御

勝院尼後閣にまうのぼり御膳を奉る。(日記。水戸記。)〇廿八日今朝二丸數寄屋にて。紀伊大納言賴宣卿。水戸中納言賴房卿に御茶賜ふ。井伊掃部頭直孝。立花宗茂入道立齋相伴に伺候す。賴宣卿病後なればとて。佐久間將監實勝して。待合の席に火爐を設らるれば。ゆる〳〵休息して。御茶室へ參らるべきよし傳へられ。やがて堀田加賀守正盛出迎へ御茶室にまからる。前後の御炭も御手づから。はて〻勝手の間に導かせたまひ。けふ　御所にも積年の御不豫平愈したまひ。賴宣卿にも平快せられ。かくかたみに御茶を點ばせ給ふ事。大幸このうへなしとの仰にて。かされて薄茶幷盛物を供せられ各退出あり。この御祝とて營中伺候の輩みな酒宴を賜ふ。晝より高田へならせ給ふ。(日記。紀伊記。)〇廿九日松平越前守忠宗に。近郊にて狩場の地をたまふ。(日記。)〇十二月朔日拜賀例のごとし。紀伊大納言賴宣卿に狩場のいとま給ふ。今年は常陸介光貞朝臣寢疾の事によて。期日すでに遲緩あれば。速に赴かるべきよし面命あり。つぎに大佛養源院。　崇源院殿御法會によて。銀幷米たまはりしを謝し奉る。次に松平因幡守忠憲はじめ參觀八人。寄合要木權左衛門賴利。奇院番小堀九郎兵衛正十。岡田將監義政は江州多賀造營にて〻歸謁す。本多伊勢守忠利二子內膳助久。池田備中守長幸弟左兵衛長信初見し奉る。儒員林永喜信澄が子永甫信次家つぎて初見し奉る。これより儒員に加はり。評定所に伺候せしむ。片桐出雲守孝利が遺物來國光の刀を其弟半之丞爲元より奉る。使番齋藤左源太利政子主殿利則。子となり。寛永七年はじめて見え奉り。九年八月廿六日父の家つぎ。十三年十二月廿九日叙爵して大隅守と稱し。この七月廿九日廿六歳にて卒せしなり。けふ出仕の諸大名に。此ほど府內にて天主教の徒を多く搜得たり。各領にてもいよ〳〵嚴く究索すべきむね。老臣仰を傳ふ。また駿河より召かへされし大井長右衛門正義は百石賜はり大番に入る。大井新右衛門政景は千石たまはる。(日記。紀伊記。藩翰譜。藩翰譜備考。寛政重修譜。)〇二日葛西に御狩ありて。白鳥鶴鴈鴻鴨鷺若干からせ給ひ。等勝寺にて御膳召上らる。今朝ならせたまふ時。大手門の內にて魔師の子十人。綱率行の子二人拜し奉る。(日記。)〇四日東四本領寺へ宅地の御朱印を給ふ。また無足大番士廿八人。廩米二百俵づゝ下さる。鐵炮方井上外記正繼五百石加恩せらる。興力五騎。同心廿人を附屬せらる。これ日頃職事精研し。其上銃技に於てさま〴〵の新術工夫するを賞せられてなり。(日記。)〇五日少老三浦志摩守正次。杤木民部少輔稙綱。小姓組番頭兼る事をゆるされ。加々爪甲斐守直澄。安藤伊賀守重元小姓組番頭になる。大河內金兵衛久綱地方奉行をゆるさる。小姓組番頭所の者一人。奥坊主八人廩米下さる。深川番小浪久太郎嘉隆へ五百俵。加藤勘四郎利頼は二百俵たまはる。また二丸搆造の事つとめし大工庇作の徒は銀時服若干賜ふ。下野の國權本領主本多大隅守政遂領二萬八千石を。其子犬千代某につがしめらる。此政遂は安房守政重が子にて。もとの大隅守忠純が養

上本多政朝卒

下本多政遂

下搜索天主教徒

井出十左衛門正長。下島庄五郎興政。杉田六之助直昌。桑原甚十郎某は作事方の會計を司るべしと仰付らる。寛後城外へ遣はさる。(日記。)〇六日松平伊豫守忠昌。松平越後守光長。土杉彈正大弼定勝。加藤式部少輔明成。松平大和守直基二丸に召て御茶をたまふ。土井大炊頭利勝は跌伴のため召加へらる。此日もとの駿河大納言家につかへし書院番荒木四兵衛元政召かへされ。采邑千五百石給ふ。設樂甚三郎貞代子主馬貞長に。采邑二千百五十石つがしめ。要木彦左衛門重吉子書院番傳兵衛重直に。千二百石つがしめ。みな庇蔭料は收公せらる。大番組頭松平加賀右衛門正次死しければ。采邑五百石の内三百石を。次子市郎左衛門正茂にたまはる。長子内藏助正成は兼て五百石給ふがゆへなり。久留善兵衛正次が三百石は收公あり。次子三十郎勝政に廩米二百俵たまはり。幸田五左衛門纖治は三百五十俵の内二百俵を。次子與宗清治に給はる。難波田善左衛門意利は二百石の内百石を。次子長吉慥長に下され。大番須田儀左衛門正時は。子三大夫盛廣幼稚により。四百石の内甘邑二百石たまはり。加恩の地二百石は收公せられ。大番林兵四郎忠勝五百石の内。甘邑三百石を長子藤四郎忠隆にたまはり。設樂三右衛門貞時も。同じく五百石の内三百石を。子三左衛門貞利にたまはり。小林十大夫忠吉は長子三郎左衛門某多病により。二子右衛門三郎重勝に四百石賜はり。大番飯河新右衛門盛信が子兵十郎直信に五百石。三枝源藏守英子八兵衛守信に三百俵。材木奉行山木安兵衛勝義子平八郎勝寛に四百石そのまたまはり。山中左大夫介重が遺祿六百三十七石の内。去々年四百石餘長子與五兵衛常發に賜はりし時。廩米八十石の事は聞え上ざりしゆへたまはらざりしを。こたび願ひ出しかば更にたまふ。又先にめし出されし醫員江藤玄瑞哲新に廩米百俵。月俸十口。平田道有某にも月俸十口たまふ。けふ紀伊大納言賴宣卿狩場より。使もて鷹をさゝげらる。豊より城外へならせたまふ。(日記。寛政重修譜。紀伊記。)〇七日二丸數寄屋にて松平越前守忠宗。松平薩摩守光久。佐竹修理大夫義隆。宗對馬守義成。松平右近大夫輝興。松平土佐守忠義に御茶を賜ふ。酒井讃岐守忠勝を相伴として召加へらる。はて〻麻布邊へ御狩あり。遠御の後宰若舞御覽じたまふ。(日記。水戸記。)〇九日父死して子家つぐもの三人。(日記。)〇十日寒に入しかば。水邸より使もて御けしき伺はる。井伊掃部頭直孝のもとに。御側中根壹岐守正盛御使して。心まかせに狩場に赴くべしと仰下さる。又御不豫の間御藥の事に預りし坊主に褒銀を下され。無足の庖人八人に廩米月俸を下さる。(水戸記。日記。)〇十一日土井大炊頭利勝別墅にならせ給ひ。數寄屋にて御茶奉る。立花宗茂入道立齋。永井信濃守尚政。堀田加賀守正盛御相伴つかふまつる。御茶はて〻池上の亭にわたらせ給ひ。御宴をひらかれ。

又ちかきほとりにて放鷹し給ひ。かさねて別墅にならせられ。利勝御膳奉る。この時利勝に行光の御刀をたまひ。利勝より左文字の脇差を奉る。(日記。水戸記。)〇十二日太田備中守資宗參覲の拜謁す。紀邸より蜜柑さゝげらる。未後城外へならせらる。(日記。)〇十四日物頭の輩は。何事も御前にて聞え上べきむね先に命ぜられしが。此ほど御病後なれば。すべて注記し御覽に備ふべし。其上にて御前に召るべきむね仰出さる。又此日紀伊亞相狩場より歸られしが。明朝御さうとなればとて。いそぎ便たて〻鷹三さゝげらる。(日記。紀伊記。)〇十五日大雪なれば表に出御なし。御病後によてなり。月次出仕の輩みな老臣に謁して退く。二丸にて幸若舞御覽あり。この日小納戸宮崎備前守時重子筆入重政。使番大久保甚右衛門長重子牛之助長昌。書院番酒井作右衛門重之子與九郎重良召出され書院番にいる。(日記。)〇十六日爵ゆるさるゝもの三人。酒井與四郎忠清は河内守。大坂町奉行曾我又右衛門古祐は丹波守。堺政所石川三右衛門勝政は土佐守となる。書院番酒井作右衛門重之書院番組頭となり。小十人頭長坂茶利九郎信次。書院番井戸新右衛門直弘はともに先手頭となる。又寄合井戸覺寛覺弘が子左馬助良弘は。父の遺領三千石并庇蔭料五百石ともにたまはり家をつぎ。大坂具足奉行太田七右衛門吉次は。三百俵の内二百俵其子小兵衛吉家にたまはり。大坂藏奉行飯高彌五兵衛貞次は。

原祿を長子吉兵衛貞成にたまはり。吉兵衛貞成が庇蔭料を八子三四郎貞久に下され。彌五兵衛貞次が大坂にてたまはりし廩米は收公せらる。銀山奉行佐野主馬吉綱が子主馬正周は父の原祿たまはり。材木奉行須田平右衛門盛滿は原祿三百石收公せられ。三子五郎八盛森に廩米二百俵だまはり。佐野吉兵衛久綱。佐野喜三郎公當は月俸五十口づゝたまはり。書院番になり。書院番梶川金彌重昌は廩米三百俵たまはり。小姓組大島久弥三郎春政は。今迄給はりたる月俸は收公せられ。廩米三百俵たまはる。此日二丸にて老臣に御茶をたまふ。(日記。)〇十七日紅葉山　御宮に御參あり。紀水兩卿陪拜せられ。幷第大名皆供奉す。この日書院番能勢市十郎賴永歩行頭になる。薄暮高家吉良上野介義彌京より歸謁す。重て京の御使命ぜらる。(日記。)〇十八日吉良上野介義彌京のいとまたまふ。この日百五十俵づゝたまはるもの二人。百俵たまはるもの五人。その他廩米月俸加へ給はる小吏若干なり。又老臣台して三年以來の番帳査檢あり。午後高田に放鷹せらる。(日記。水戸記。)〇十九日臨時朝會ありて。松平下總守忠明はじめ參覲九人。水野出羽守忠職は。就封のいとま給ふ。使番柘植平右衛門正時。戸田半十郎重政は大坂よりかへり。勘定杉田六之助直昌は石州よりかへり謁す。大番野口兵左衛門成次は廩米を給ふ。松平筑前守光高は狩場より歸り謁す。この夕朽木民部少輔稙綱二丸にて御

下西郷正員

三十五人に。をの〳〵褒美をくだされ。此日安房國東條領主四郷若狹守正員子孫六郎延貞遺領一万石をつがしめらる。此正員は故の彈正左衛門家員の四男にて。兄出羽守康員男子なかりしかば家をつぎ。慶長十八年十二月二十日初見し。十九年正月大久保相摸守忠隣が所領没入せられしとき。その所領相摸國小田原城を勤番し。その九月里見安房守忠義國除かれしとき。城うけとりにまかり。十月大坂の戰に房州の押となり。元和元年の戰には小田原城を守り。箱根の要路を警衛し。三年六月伏見の城を守り。五年六月福島左衛門大夫正則家國没入のとき。駿州久能を固め。六年九月五千石加恩ありて一万石となり。下總國生實より今の地にうつり。閏十二月廿八日叙爵して若狹守と稱し。寛永四年大坂城の加番をつとめ。六年六月四城石垣營築の助役し。九年二月　台德院殿御遺銀三百枚給ほり。十一年又大坂の加番し。十三年江戸惣堀の助役し。此十一月十四日卒しぬ。歳四十六とぞ。(日記。紀伊記。寛永系圖。家譜。寛政重修譜。)○廿三日駿河大納言家より召かへされし輩。十人は小姓組に入番し。十人は書院番に入番せしめらる。歩行目付谷庄兵衛利次。中根新右衛門某。石川伊左衛門某。杉浦喜左衛門某は御狩のとき庖厨の長持舁夫をめしかゝへ。陪從すべしと命ぜらる。けふ紀伊亜相まうのぼられ。薨後の御けしきうかゞはる。よて杤木民部少輔穉綱を紀郎につかはされて勞

下狩野探幽叙法眼

せらる。小姓組千本又七郎和隆。兄故大和守義等が舊領の内にて。八百五十石加恩ありて千五十石となる。(日記。紀伊記。寛政重修譜。)○廿四日三緑山　靈廟に御詣の事仰出されしが。御頭痛氣にわたらせたまふゆへ。土井大炊頭利勝代參す。増上寺方丈智童井侍僧へ齋膳を賜ふ。(日記。紀伊記。)○廿五日家門諸大名より歳暮の時服を献ず。此日書院番桑山内匠貞利弟猪兵衛貞寄に。五千五百石の内二千石たまはり。神尾豐前守守重養子大膳守正に。千石の内五百石たまはり。天野三丞雄好弟權四郎雄政に。四百石の内二百石賜はり。家つがしめらる。(日記。)○廿六日醫員熊谷伯安慶傳法眼に叙し。翌月甫庵元珍法橋に叙す。駿河大納言家より召歸されし河野庄右衛門照辰父庄右衛門照盛原祿五百石たまふ。(日記。)○廿七日使番蒔田支葭頭定正信濃國飯山城の目付命ぜられていとまたまふ。これ城主佐久間三五郎安次幼稚にて卒せしによてなり。(日記。)○廿八日歳暮拜賀例の如し。水戸中納言賴房卿次子右京賴重初見せらる。こはうち〳〵紀伊大納言賴宣卿しきりに懇擧せられしとぞ。次に毛利甲斐守秀元はじめて參覲四人。戸川土佐守正安高野山より歸謁す。未後城外へならせ給ふ。(日記。紀伊記。)○廿九日松平勝五郎御前にめし首服くはへられ。從四位下侍從に叙任し。御名の字たまはり。相摸守光仲と改む。よて時服廿。太刀。馬代銀三百枚獻上。御盃にそへて左文字

大猷院殿御實紀卷四十　寛永十六年正月に始り六月に終る御齡三十六

べしと命ぜられ。大番小野瀨右衞門高光其組頭となり。代官小野長左衞門貞正廣米二百俵たまふ。長谷川利部正登は高田御方執事になり。代官南條金左衞門明門子金之丞則綱は勘定役となり。本堂伊勢守茂親は日光山普請つとめ。香院番松平源二郎正村は普請奉行となり。新庄內匠之直は牛込普請奉行をつとめしが。搏造の地へならせられ怨旨を蒙る。醫員野間玄琢成岑は上洛して。　大宮の執匙となり。その子三竹成大京にて法眼に叙せらる。岡本玄琢介球御脉を伺はしめられ。望月甫庵元珍は治療に心もちゆるとて。本科外科をかれ司らしめ。來舶の醫書若干たまはり。御藥を製せしめらる。伏見奉行小堀遠江守政一をめして。品川東海寺中の園林泉石を經營せしめられ。茶亭坊舍を搆造せしめらる。園林成功してならせられしが。政一が設置し池邊の石を御貨美ありて。これに名を命ずべきむれ命ありければ。けふ爰にならせ給ひし御祝に。万年石と名付べしと聞え上しに。御旨にかなひ着御の羽織を賜りしとぞ。(家譜。斷家譜。寛永系圖。　澤菴が記せし万年石の記文によれば。此石の名を賜はりしは。寛永廿年三月十四日なりといへり。)

下松平信綱
阿部忠秋之轉封

下三浦正次之加封

下蜂須賀家政卒

る。この日大姫御方齒黑めの御祝ありて。五種三荷奉らる。增上寺方丈智童大病により。使番宮城越前守和甫もて尋問せらる。また小石川邊御鷹狩ありて。鴈鴨かずく得たまふ。天野三郎右衞門貞重大番に入る。御手鷹師眞野惣右衞門重則死して。子九兵衞重勝家をつぐ。けふ立春なり。(日記。紀伊記。寛永系圖。)〇六日寺社拜賀例のとし。增上寺智童病臥によて出仕せざれば。新田大光院。傳通院井に綠山伴僧も出ず。この日壬生城の在番は。奥平美作守忠昌に命ぜらる。〇七日若栄御祝例の如し。(日記。)〇八日　大內義首の御使高家大澤右京亮基重命ぜられ暇たまふ。けふ城外へならせらる。又增上寺へ使番多賀左近常長つかはされ。智童が病をとはせ給ふ。(日記。)〇十日增上寺智童昨夜迁化したるにより。山中法令各所勤番の事査檢すべしとて。寺社奉行安藤右京進重長。松平出雲守勝隆をつかはさる。(日記。)〇十一日齋藤伊豆守利宗天守壁下引橋門(今いふ桔槹橋なり。)定番命ぜらる。(日記。)〇十二日高家吉良若狹守義冬日光山代參命ぜられ。使番永井監物白元川越城の目付。島四郎左衞門三安は壬生城の目付。寺山着四郎重長は忍城目付命ぜられ暇給ふ。この日供奉勤る諸職。每日まうのぼるに及ばず。ならせ給ふ事ある時は。前日に命ぜらるべしと仰出さる。(日記。)〇十三日城外へならせ給ふ。納戸頭横山藤左衞門一重死して。子小右衞門一義家をつぐ。(日記。寛永系圖。)〇十四日三浦志摩守正次一万石加へられ。二万五千石になされ。壬生の城主になる。書院番松平新平勝直。大番中山茂左衞門忠勝竹橋門番所搆造奉行を命ぜらる。(日記。)〇十五日登營の輩老臣に謁し退く。(日記。)〇十六日蜂須賀家政入道蓬庵卒せしかば。使番多賀左近常長を阿波國德島へつかはされ。松平阿波守忠英を弔せられ。御內書并に香火料銀三百枚給ふ。この日永井信濃守尚政二丸におゐて御茶を献ず。猿樂二番あり。(日記。)〇十七日紅葉山　御宮御參あり。御直垂をめさる。御太刀は松平武部大輔忠次。御刀は池田帶刀長賢。御簪は安藤右京進重長役し。御進献の御太刀は酒井讃岐守忠勝役す。紀伊大納言賴宣卿。水戸中納言賴房卿陪拜せられ。國持諸大名參供奉す。(日記。)〇十八日城外にならせたまふ。(日記。)〇十九日松平伊豫守忠昌庶子死しけるにより。書院番頭池田帶刀長賢御使して弔せらる。(日記。)〇廿日具足御祝あり。連歌興行例のごとし。發句は昌程。みさほなる松に祝ふや御代の春。御脇御句はなべて長閑にすめる民の戸。第三忠尊。見わたせば百千町田を耕して。此日高家吉良若狹守義冬日光山より歸り謁す。大番士駿府城在番を免され。今より後は書院番もて在番せしめらるれば。每年十月をもて瓜期とすべしと仰出さる。新庄越前守直好井に子新三郎直常。大田原左兵衞政清就封の暇給ふ。朱後城外へならせ給ふ。(日記。)〇廿一日堀田加賀

守正盛二丸において御茶を献ず。(日記。)〇廿二日井伊掃部頭直孝のもとに。中根登岐守正盛してとはせらる。(日記。)〇廿四日紅葉山　台德院殿靈廟に詣給ふ。御直垂なり。御太刀は吉良若狹守義冬。御刀は今川刑部大輔直房。御杳は安藤右京進重長役し。紀水兩卿陪拜せられ。普第大名供奉す。本覺寺。昏頭寺　この所にありて拜し奉る。綠山は方丈智童病死して穢あるゆへに。けふは紅葉山にならせたまひしとぞ。(日記。)〇廿五日城外へならせたまふ。(日記。)〇廿六日井伊掃部頭直孝二子弁之助直寛痘瘡により。阿部對馬守重次もてとはせたまふ。此日書院番石尾七兵衛治昌。松田平右衛門勝居知樂院搆造奉行を命ぜらる。未後城外へならせ給ふ。(日記。)〇廿七日高田へならせらる。(日記。)〇廿八日拜賀例のごとし。四本願寺門跡光圓大僧正補任を謝し。使もて太刀目錄檀香を献ず。四鄉孫六郎延員父若狹守正員遺物とて。信國の刀を献ず。水谷伊勢守勝隆河越城在番はてゝかへる。代官五味金右衛門豐直京より參り。使番堀三右衛門直晃は大和國高取よりかへり。水野監物忠善は就封のいとま給ふ。寺社奉行松平出雲守勝隆五千石加恩ありて。一萬五千石にせられ。上總國佐貫の城主になさる。また天野權四郎雄政初見し奉る。(日記。寛政重修譜。)〇廿九日春日局奥において御膳を奉る。(日記。)〇晦日去年より關東國々野論査検の御使に赴く輩を御座所にめして。その事實御尋問あり。使番駒木根長次郎政次上總國佐貫城引渡命ぜらる。(日記。家譜。)〇二月朔日日光久能の御鏡符齎拜戴し給ふ。毘沙門堂門跡公海はじめ。吉宗の僧侶神官等拜し奉る。門跡公海は大僧正天海の職務つぐべき旨仰出されしを謝し奉る。この日京泉涌寺開光寺。南都西大寺に寺領御朱印を給ふ。未後酒井讃岐守忠勝が別業にならせ給ふ。(日記。水戸記。)〇二日水戸中納言賴房卿のもとへ。少老三浦志摩守正次御使す。左衛門督光圀朝臣痘瘡なやまるゝゆへなり。未後城外へならせ給ふ。(日記。)〇三日書院番頭中根大隅守正成は。尾張大納言義直卿在間の御使命ぜられいとま給ふ。長崎奉行馬場三郎左衛門利直。大河内善兵衛正勝赴任のいとま給ふ。任所において廉米二千俵給ふ。明年よりは一人づゝ赴くべしといへども。二千俵はそのまゝ賜はるべしと面命せらる。松平出雲守勝隆就封のいとまたまふ。水野(へ)炎者番太田備中守資宗御使して。左武衛の痘瘡をとはせられ。この後資宗附添て。日々の病体をきこえ上しとぞ。(日記。水戸記。)〇四日青山のほとりへ。放鷹の御遊にならせたまふ。(日記。)〇五日臨時朝會あり。紀伊亞相狩場より使もて鴈三獻ぜらる。大坂舟手頭小濱民部少輔光隆參る。よて其子久太郎嘉隆暇賜はりかしこに赴く。勘定方伊奈半十郎忠治二子半彌治詰。三子半三郎忠重。勘定頭谷根源左衛門吉勝二子孫助吉正。山名左助豐玄。船手頭向井將監忠勝六子八

十郎正興。七子弁之助正次。歩行頭大久保彦十郎忠眞子彦兵衛忠重。持筒頭松平新五左衛門直次二子と。郎兵衛直重。使番川勝丹波守廣綱二子主水廣氏。小十人頭落合小平次道次三子三五郎某。目付村越七郎左衛門正直二子權左衛門正直利見の禮をとる。松平伊豫守忠昌はじめ。使番もて鴈一双づゝ賜はるもの九人。　内　院へ鶴を驟進せらる。此日老臣はじめ營中伺候の輩へ酒をたまふ。(日記。)〇六日番匠美作守直房二子伊織直時初見し奉る。小笠原安藝信盛子万千代長住も同じ。(寛永系圖。)〇七日酒井讃岐守忠勝もて。大僧正天海が病をとはせらる。松平越後守光長狩場より使もて鴈二獻ず。(日記。)〇八日高家大澤右京亮基重京よりかへる。けふいさゝか御不豫なり。(日記。水戸記。)〇九日御頭痛のよし聞えければ。普第の輩參らざる旨なりしかば。松平越後守光長狩場より歸りければ。まうのぼり御けしき伺ふ。(日記。)〇十日御咳氣により。面仕まうのぼり御けしき伺ふ。(日記。)〇十一日またおなじ。(日記。)〇十二日右兵衛督光友朝臣常陸介光貞朝臣普第大名まうのぼり御けしき伺ふ。(日記。)〇十三日諸大名御けしきうかゞふ。(日記。)〇十四日紀伊亞相はじめ。諸大名御けしきうかゞふ。この夕數寄屋にならせられ。普院番頭池田帶刀長賢。小姓組番頭加々爪甲斐守直澄。書院番組頭岡野權左衛門英明。歩行頭坪内半三郎定次。内藤庄兵衛直信。柳生十兵衛三嚴。同助九郎宗冬の劍法を試しめらる。(日記。)〇十五日紀水兩卿井武衛及諸大名御氣色伺ふ。紀伊大納言賴宣卿より。御使もてかへりのたち左京風呂御巨燵を献ぜらる。上杉彈正大弼定勝の子德松卒せしかば。書院番頭田中主殿頭吉官御使してとはせらる。けふ諸門修理の奉行を命ぜらる。南鍋町喰違門は書院番藤堂主馬嘉長。大番夏目甚五左衛門安信。筋違橋は西城小姓組村上次郎左衛門三正。大番若林六郎左衛門三由。小石川門は書院番内藤四郎左衛門正次。大番堀川七之丞忠久。市谷門は書院番佐久間宇右衛門盛郎。大番田澤久左衛門正美。四谷門は小姓組宰賀源七郎正俊。大番大岡傳左衛門正清。赤坂門は小姓組加藤左内正直。大番小川總之助安則なり。下總飯沼弘經寺慈眼(始擇念と稱す。)は增上寺住職を命ぜらる。(日記。紀伊記。)〇十六日紀郎へ松平伊豆守信綱御使して。きの之獻ぜられし御調度ども。御好に應ぜる旨なつたへらる。松平越後守光長狩場より歸りければ。まうのぼり鴈一双奉る。長崎奉行與力へ銀十枚下さる。(日記。紀伊記。)〇十七日紅葉山　御宮へ酒井讃岐守忠勝代參す。此頃連日御頭痛にてなやましくわたらせ給へば。普第の輩まうのぼり御けしき伺ふ。(日記。)〇十八日御けしき伺

きのふ大風により。三家まうのぼり御氣色を伺はる。此日奴僕例のごとし。御病後によて老臣に謁し退く。(日記。)〇二日号身假の定制をふれらる。中間小もの草履取の給分金二兩二分炮組の徒例年のごとく。その技を試みしめらる。目付これを閲かあるは二兩。夫より以下ははかりあふまゝたるべし。されど す。(日記。)〇三日桃節例のごとし。出仕の輩老臣に謁し退く。けふ播磨國姫路城主本多甲斐守政朝遺封十五万石を。其從弟内年來つかへたるものは。其主の心にまかすべしとなり。(日記。令條記。)〇廿四日三緑山　竪願に酒井讃岐守忠勝代參す。記政勝につがしめらる。又政朝が二子勘右衛門政長。七郎次郎御頭風により家門井に諸大名御けしきを伺ふ。この日日付の政信ともに幼年なるがゆへに。政勝が養子として教育すべし罷直月を定め。怠慢なく法令を沙汰すべき旨仰出さる。(日と命ぜられ。姫路を轄して大和國郡山の城主とせられ。政勝が記。)〇廿五日大番榊原久兵衛定吉死して。子大番四郎左衛門所領四万石をも。和州におねてかへられ。その子彈正左衛門政定正家をつぐ。(寛永系圖。)〇廿六日巳日の被例のごとし。来利にたまはる。この政朝は故美濃守忠政が二子なり。慶長十七後城外へならせ給ふ。(日記。)〇廿七日紀水兩邸へ書院番頭池年十二月十八日叙爵して甲斐守と稱し。大坂の役に父と共に田帶刀長賢御使す。これは御病中累日登營し。御起居を伺はれ戰ひ。叔父出雲守忠朝その軍に討死せしかば。元和元年七月朔しにより。近日御快くわたらせたまへば。まうのぼらるゝに及日其家つぎて。上總國大多喜五万石を領し。三年九月十八日大ばざる旨傳へらる。四本願寺門跡光圓參向により。使番眞田長多喜より。播磨國龍野に轉封あり。が。寛永三年五月七日兄中兵衛幸政もて慰勞せらる。(日記。)〇廿八日月次出仕の輩老臣務大輔忠刻うせければ。宗家の世つぎとなり。八年閏十月十八に謁して退く。御惱御快くわたらせ給ひ。城外へならせ給ふ。日家つき。姫路十五万石を領し。政朝が領せし五万石をわけ紀邸へ酒井讃岐守忠勝御使す。(日記。水戸記。)〇廿九日東叡て。弟能登守忠義に一万石。忠朝が子内記政勝に四万石をゆづ山へならせたまひ。六位正天海の方丈に臨冦。給ひ御膳を奉り。十一年七月十六日從四位下の侍從にのぼり。十五年十一月る。よて天海へ銀百枚。八丈縞二十反下さる。供奉の輩みな肩二十日四十歳にて卒せしなり。又遠江國濱川の城主松平大膳衣袴を着す。(日記。)〇晦日參向公卿の館伴を命ぜらる。勅亮忠重遺領四万石を。その子万助忠倶につがしめられ。忠倶幼使は松平若狹守康信。海口出雲守宣直。院使は土方彦三郎雄稚なればとて。信濃國飯山に轉封せらる。この忠重は故左馬允氏なり。けふ城外へならせらる。(日記。)〇三月朔日出仕の輩忠賴が子なり。忠賴慶長十四年九月廿九日水野市正忠胤が宅

上奴婢之給金

下本多政勝之轉封

下本多政朝

下松平忠倶之轉封

下松平忠重

上本多忠義等之轉封

に酒宴して。久米左平次と服部半入と爭論に及びしをさゝへんとして。左平次が爲にさし殺さる。子どもいとけなければ。城外へならせらる。(日記。)〇七日姫路の地六万石は公料の地になさる。よて小堀遠江守政一その地の事を代官せしめられ。いとま給ふ。けふ大番轎屋與兵衛吉成は大坂具足奉行。大久保勘九郎某は同城弓矢奉行。森川庄兵衛次吉。若林與三右衛門包盛。横地市郎右衛門忠重は同城金奉行。中根喜四郎正勝は府の天守番頭。大番有田九郎兵衛吉久は土藏番頭命ぜらる。夕かた城外にならせらる。けふ　大宮より御使として。幡大納言の局參府せり。(水戸記。日記。)〇八日美濃國郡代岡田將監義政は美濃の加納代官。松平清左衛門親正は遠江國掛川の郷村引渡の事命ぜられいとま給ふ。先日仰付られし人々と共に。引渡の事つかふまつるべしとてなり。醫官今大路道三親昌。半井驢庵成近。施藥院法印宗伯。坂上池院宗說。竹田法印定宣。久志本右馬助常尊等には。家法の奇藥を製し奉るべしと仰付らる。けふ二丸にならせられ。堀田加賀守正盛御茶を奉る。(日記。)〇九日鑒官半井驢庵成近。野間玄琢成挙。久志本右馬助常尊。施藥院法印宗伯。竹田法印定宣。坂上池院宗說。曲直瀬養安院玄理。河野松庵通幸。岡道琢幸賀。池田道陸重次。清水龜庵瑞室。山下芳齋軒宗琢。田澤清雲道賀。内田元庵正俊。奈須玄竹恒昌。江藤良庵瑞哲。數原清庵宗和。板坂卜齋春字。半井卜養養友等をめして。養生の術を尋問し給ふ。末後城外にならせらる。(日記。)〇十日勘定頭伊丹播磨守康勝年老て頭禿なればとて。

ふまゝに剃髮の御ゆるしあり。高倉中納言永慶卿參向により。使番柘植平右衞門正時もて慰勞せらる。未後城外へならせらる。(日記。)〇十一日酒井讃岐守忠勝が別墅にならせらる。そのとき玄關前にて歩行頭坪内半三郎宗次宇治採茶いたし給ふ。また

大内御不豫により醫官半井驢庵成近上洛し。治療すべき旨命ぜられいとまたまふ。(日記。)〇十二日紀水藩卿へ書院番頭池田帶刀長賢御使して。枝柿一箱づゝつかはさる。松平伊豫守忠昌はじめ十三人の大名へ。使番もて菓子たまふ。三條内大臣實條公。日野大納言資勝卿。中御門大納言尚長卿參向により。酒井讃岐守忠勝に高家吉良上野介義彌そへて慰勞し給ふ。夜に及んで幸若舞御覽あり。(日記。水戸記。)〇十三日午込のあたりへならせらる。(日記。)〇十四日持弓持筒組の與力同心等が甲冑指物。御覽あるべき旨仰出さる。二丸において躑躅子の御遊あり。此夕申刻ばかり江戸中土人騷動する事大方ならず。その故何といふ事をしらず。(日記。)〇十五日月次出仕の翌老臣に謁して退く。松平相摸守光仲證人等交替あり。增上寺方丈慈眼入院を謝し奉る。けふ諸物頭をめして。無日より指揮なくして登營する事禁ぜらるゝ所。昨夜ゆへなく騷動せし事法令に違へり。この後いよ〳〵嚴命かたく守るべしと仰いだされ。また晝夜巡りの罷をめして。いよ〳〵忘らず府内巡行すべしと命ぜらる。この日　勅使。　院使の旅館に高家吉良上野介義彌して　勅使へ鵝。　院使へ白鳥をの〳〵樽一荷づゝそへてつかはされ。また青蓮院門跡尊純法親王參向により。吉良若狹守義冬もて慰勞せらる。(日記。)〇十六日南風烈し。紀水兩卿御使して御けしさうかゝはる。逸見勘右衞門義頭子長太郎義運初見し奉る。(日記。)〇十七日紅葉山　御宮に酒井讃岐守忠勝代參す。けふもひれもす風やまず。塵埃を吹あげて天地晦冥なるがごとし。よて急脚を馳て。日光山　御宮の安否を伺はしめらる。(日記。)〇十八日麻生のほとりへならせ給ふ。(日記。)〇十九日千駄の邊へ御鷹狩とてならせ給ひ。鴈鴨あまた御得物あり。その中にも鴈一隻は御みづから御長刀にてかけ給ふ。御狩場より小納戸安西甚兵衞元成御使して。酒井讃岐守忠勝へ鴈一雙給ふ。松平右衞門大夫正綱日光山より歸り參。(日記。紀伊記。水戸記。)〇廿日東叡山藥師堂より火おこり。　御宮の廻廊五重の塔等炎上す。よて紀水兩卿。尾武衞まうのぼり。紀水兩卿まかられければ。杤木民部少輔種綱御使してとはせらる。(日記。水戸記。)〇廿一日大番頭書院番頭小姓組番頭をめして。今より後たとひ城中火災ありとも。番士等指揮なきに城に入事あるべからず。各寄場に會集し。指揮をまつべき旨面命せらる。(日記。水戸記。)〇廿三日さきにゆへなく府内士庶騷擾せしにはいとひがとなり。今よりして城中火あり

下東叡山藥師堂火

とも。所屬の與力同心みだりに入城すべからず。各頭のもとへ召集め。そのさまにより定制の寄場に會集すべき旨。先手頭小十人頭歩行頭に老臣もて命ぜらる。此日一條前攝政昭良公參向ありければ。高家吉良上野介義彌して慰勞せらる。(日記。)

〇廿四日三緑山　靈廟に酒井讃岐守忠勝代參す。夜中幸若舞御覽あり。(日記。)〇廿五日酒井讃岐守忠勝別墅にあそばせたまふ。けふ一條前攝政昭良公旅館には。高家吉良若狹守義冬御使し。鵝ならびに酒樽をくらせられ。　勅使へは大澤右京亮基寛御使し。菓子酒樽つかはされ。　院使へは若狹守義冬御使し。おなじ品つかはさる。(日記。)〇廿六日一條前攝政昭良公旅館にて病臥せられしがば。高家吉良上野介義彌幷に醫員岡本啓迪院諸品。野間玄琢成岑をつかはさる。大番頭松平縫殿助乳次二條城在番に充られしが。こゝろまゝに先三河の封地におもむき。それよりして直に二條にまかるべしとて。期に先だちいとま給ふ。(日記。)〇廿八日月次出仕の翌老臣に謁し退く。(日記。)〇廿九日尾張大納言義直卿參府により。酒井讃岐守忠勝もて慰勞せらる。(日記。)◎この月大番組頭柘植小左衞門宗普西城裏門番頭となり。また京醫人見玄德賢知を召て千代姫君に御藥を奉らしめらる。(家譜。寛永系圖。)〇四月朔日一條前攝政昭良公並に三條前内大臣實條公。日野大納言資勝卿。中御門大納言尚長卿引見あり。　主上　上皇　大宮はゝ

めて。攝政内侍のかたゝ〳〵歳首の賀物例のごとく進らせらる。次に高倉中納言永慶卿。飛鳥井中將雅章。高倉右衞門佐永敦。廣橋右中辨綏光。舟橋式部少輔相賢。土御門中務大輔泰榮。各太刀目錄獻じ。次に川鯉中將基季。小倉中將公根。油小路中將隆貞。裏辻中將季福。千種少將有能。鹽小路右馬頭通規同く太刀目錄獻ず。この六人はこぞの新恩を謝し奉るなり。次に正親町少將實豐。日野西侍從光氏おなじく拜し。次に藤波祭主友忠藏ならびに太刀目錄奉りて總目を謝し。次に知恩院門跡良純法親王は濫物太刀目錄。九條家政所杉原打枝。本願寺門跡光從權肴。各使もてさゝげ奉る。此罷例は特拜すといへども。御病後なるをもて惣禮せしめらる。つぎに一條前攝政御對面あり。殿上人彈正大弼某薫衣香奉りて拜したてまつる。次に公卿の家司。北面冠工井に一條家諸大夫。醫員。その他の使。天王寺惣中加茂の惣中拜して。加茂の徒は葵を獻ず。この日未後城外へ放鷹の爲ならせ給ふ。また尾張大納言義直卿中屋敷へ移徙せらるゝにより。阿部對馬守重次御使して。鵝ならびに酒樽をつかはさる。(日記。)〇二日大納言義直卿參府のぼり拜謁せらる。參府の後所勞ありて。けふにおよびしなり。家司も拜し奉る。紀水兩卿もなべく拜謁あり。この日　勅使。　院使。その他月卿雲客東叡山　御宮進拜あるにより。高家吉良上野介義彌。寺社奉行井上河内守正利をつかはさる。一條前攝政任三

上立花宗茂致仕

綠山　靈廟參拜せらるゝにより。永井信濃守尚政。寺社奉行安藤右京進重長つかはさる。けふ前攝政の旅館へ上野介義彌御使して。銀五百枚。綿五百把遣はされ。殿上人彈正大弼某に時服十。賭大夫家司に銀十枚づゝ。贈員に時服三賜ふ。この攝政は病後により。けふ　御宮參拜の事辭せられて。增上寺へ參拜せられ。また速に歸洛の事こはるゝにより。とみに御使ありしとぞ。また品川へならせらる。二條大手門番春日左衛門家吉子左衛門家次父死して家をつぐ。（日記。水戸記。吉眞日記。寛政重修譜。）○三日松平長門守秀就はじめ參覲四十五人。松平出羽守直政封地賜はりて後。はじめての參覲なれば。來國行の太刀を獻ず。去年天草の地追討のためまかりし報には。各勞詞を加へらる。一條前攝政より。きのふ歸洛の事仰出されしを謝して。　仙洞御作の薫物。兵部卿香合二卷獻ぜらる。又筑後國柳川城主立花飛騨守宗茂入道立齋致仕し。所領十万九千六百石を。其子左近將監忠茂につがしめらる。此宗茂實は高橋主膳兵衛尉紹運入道鎭種が長子なりしが。故丹後守入道鑑連が養子となり。（立花が家はもと大友の一流と。高橋もおなじ流なりしかば。世つぎとせしよしと傳ふ。）父の入道天正十三年九月十一日七十三歲にて。筑後國高良山の陣中にて死せしかば。宗茂家をつぎ筑後國立花山城にあり。あくれば十四年の秋宗茂が實父紹運も島津が爲にうたれ。島津が多勢豐後國に發向す。宗茂きつて出。よくはたらきて高鳥居城を攻落す。豐臣關白はなはだ稱美あり。宗茂わづかの勢をもて大敵を打破り。あまつさへ敵の城まで攻やぶりし事。一方ならずと褒書をたまひ。十五年の秋九州二島ことゞく豐臣家の版圖に入しかば。宗茂には筑後國にて。所領十三万二千二百石余給はりて。同國柳川の城主とせられ。羽柴の氏をさづけられ。七月二日從四位下の侍從に叙任し左近將監になる。これは關白つれに宗茂が戰功を賞せられ。四國九州のうち關國のぞむべきよしありしに。宗茂は當時殿下の大恩蒙りて。手勢三千餘人撫育するにたれり。この上國郡望むべき身にあらず。あはれ今生の思出に。殿上の仙籍ゆるされ候はんやと申ければ。關白感ぜらるゝ事なゝめならずしてかくはなさる。關白常に錦四にて立花宗茂。東國にては本多平八郎忠勝。天下一双の勇士なりと仰せられしと聞えけり。天正十八年小田原の役に。はじめて　神祖に見え參り。文祿のはじめ朝鮮にわたりて。大明の總督李如松が大軍を打やぶり。慶長五年の秋は大坂方にありて。大津の城をせめ落す。關ヶ原の戰大坂方やぶれしかば。本國に引かへし城を持かため鍋島が勢と戰ふ。黑田如水入道。加藤肥後守清正がすゝめにしたがひ。鍋島との戰をやめ。をのれ先陣して薩摩國にはせ向ふ。しかるに島津はや降をこひねがへば。戰はすして引かへす。この時黑田加藤等。みづからの勸賞にかへて。宗茂が事なげき申ければ。その罪はゆるされて。封國はとごとく除かる。慶長八年十月二十五日關東に下り。　兩御所の御前にめされ。陸奥國にて一万石たまひ。棚倉城主たらしむ。　台德院殿に近侍し奉る。（このとき三万石たまはりて。書院番頭命ぜられんとありしを。　神祖聞召て。宗茂はさる剛のものなり。所領の多少にかゝはらず。いづかたにても城たまふべきこそと仰られしかば。奥の棚倉城たまはりて一万石くだされるといふ。）御談伴の衆十二人の隨一にて。御眷注淺からず。十五年七月廿七日加恩二万石たまはり三万石となり。大坂前後の戰に　台德院殿に供奉し。元和六年十一月廿七日本領たまはりて柳川にかへり。十万九千六百石になり。八年十二月廿七日仰により。飛驒守とあらため。のちに　台德院殿踏家へならせたまふごとに。扈從し奉らずといふ事なし。寛永十四年十月肥前國天草の凶徒追討のため。長子左近將監忠茂供して鳴向ひ。去年十月廿日剃髮して立齋と號し。けふ致仕し。十九年十一月二十五日七十四歲にて卒せしとぞ。この日水上六左衛門政重大番にいる。（日記。藩翰譜。寛政重修譜。家譜。）○四日御病後はじめて御月代なさる。よて家門諸大名まうのぼり賀し奉る。（日記。）○五日公卿三條山　靈廟參拜に安藤右京進重長。松平出雲守勝隆つかはさる。また國俣奏の旅館に。高家吉良若狹守義冬御使して。菓子賜らせられ。　院使井に青蓮院門跡には。高家今川刑部大輔直房しておなじくり給ふ。又松平長門守秀就はじめ。使番もて菓子給はる大名十四人。この日幸田五左衛門繼治養子半左衛門清治めし出されて大番に入らる。（日記。家譜。）○七日細川肥後守光尙はじめ。就封のいとま給はるもの十二人。筑波山知足院の府內談嚴所千三百兩。相摸國大山寺に一万兩。美濃國南宮へ七千兩。造營料としてたまふ。夜中幸若舞御覽あり。（日記。）○八日藤堂大學頭高次はじめ參覲四人。酒井宮內大輔忠勝就封のいとまたまふ。けふ酒井讃岐守忠勝が別業にならせらる。（日記。）○十二日公卿饗應の猿樂あり。けさ四本願寺門跡光圓まみえ奉り。太刀銀百枚時服二十献ず。家司おなじく拜し奉る。直に猿樂をも見せしめ饗たまふ。猿樂翁。三番叟。高砂。經政。千歲。舟辨慶。櫻川。熊坂。祝言。狂言三番。腐生。三人片輪。大山伏なり。紀伊大納言賴宣卿は病後により。心まかせに見物あるべき旨。阿部對馬守重次もて仰つかはさる。また饗膳も亞相のため。とさら服餌あるべき品ゑらばれ命ぜられしとぞ。けふは裏脚失服渡なし。青蓮院門跡へ高家吉良若狹守義冬もて。觀樂のため招かせ給ふべしといへども。饗膳さうとならざれば。わざと招かせ給はざる旨仰つかはさる。（日記。紀伊記。吉良日記。）○十三日公卿辭見あり。　勅使に銀貳百枚。綿百把づゝ。　院使

に銀百枚。綿百把。高倉に銀五拾枚。時服十。飛鳥井。高倉。廣橋。船橋。土御門に銀五十枚づゝ。川瞎。小倉。油小路。裏辻。千種。正親町。日野四。觀小路に銀三十枚。時服五づゝ。藤波に銀三十枚。時ふく六給はり。　勅使　院使の家司。冠工。職政の使に銀十枚。時服二つゞ。北面并使者へ時ふく二づゝ下さる。また四本願寺門跡光圓旅館へ。安藤右京進重長御使して。銀三百枚。綿二百把つかはさる。家司に時服下さるゝこと差あり。(日記。)〇十四日高家吉良上野介義彌日光山代參命ぜらる。此日松平越前守忠宗が子万助首服加へられ。從四位下侍從に叙任し。御名の一字賜はり。越前守光宗とあらため。父の越前守忠宗は陸奥守に改めしめらる。よて光宗は長直の太刀。馬代銀三百枚。時服二十献ず。忠宗は太刀。馬代銀二百枚。羅紗十間献ず。父子とも御盃たまはり。光宗に貞宗の御刀くだされ。忠宗にも來國光の御脇差下さる。忠宗より貞宗の刀を献ず。(日記。)〇十五日月次出仕の雁老臣奏者に謁して退く。けふ書院番伊藤安兵衛正次。長谷川藤九郎正次。戸田七內政次。小姓組神谷五助次重。倉橋三五郎尚政。長谷川長五郎重辰。松下彦兵衛房利。城友之助時度。水野金十郎某。小十人組頭原田小兵衛種春ともに中奥番命ぜらる。(これ中奥番のはじめなるべし。)細川忠興入道三齋所勞により。使番石川彌左衛門貴成してとはせらる。(日記。)〇十六日大番向坂源左衛門政定。板橋與五左衛門岐邦。大岡忠四郎忠種。江原九郎右衛門榮次。中奥番命ぜらる。兩僧奏旅館へ高家大澤右京亮基重して菓子つかはさる。水戸左金吾痘瘡平快ありて。はじめてまうのぼらる。(日記。水戸記。)〇十七日紅葉山　御宮に御參あり。御太刀は大澤右京亮基重。御刀は今川刑部大輔直房。御奢は安藤右京進重長役し。尾紀水三卿陪拜し。國持の雁諸參し。普第大名供奉せり。大僧正天海大病愈てまうのぼりければ。其祝とて二丸にて猿樂あり。天海に銀二百枚。時服十。伴僧若干にも時服たまふ。(日記。)〇十八日水戸左衛衛督光圀朝臣疱後はじめて御對面あり。父の中納言賴房卿も見え參られ。父子ともに饗斗を給ふ。加賀黃門利常卿はじめ參觀七人。井伊掃部頭直孝就封のいとま給ふ。鳥丸侍從資慶家督を謝し。高家吉良若狹守義冬は日光山よりかへり謁す。土井大炊頭利勝大病日數かさねて煩はしく聞えければ。その第に臨駕ありて病をとはせたまひ。かつ庶子八助利長。七助利房はじめて見參す。(日記。)〇十九日三條四前內大臣實條公。日野大納言資勝卿まうのぼり。黑木書院にめして面命の旨あり。高倉中納言永慶卿しばらく滯府あるべき旨仰出されしを謝す。(日記。)〇廿日上野岡沼田城主眞田熊之助信利七歲にて早世せり。よて沼田城には祖父伊豆守信之が子共のうちをもて。さし置べしと命ぜらる。(日記。)〇廿二日こたび參觀の雁并に近日就封の人々をめして饗せられ。

下眞田信利卒

上中奥番

上家光臨北井利勝邸訪病

下家光召諸大名於白木書院敎誡

下關人入貢

家門并諸大名まうのぼり。猿樂見せしめ給ふ。樂は翁。三番叟。竹生島。八島。芭蕉。紅葉狩。自然居士。是界。祝言。狂言三番。鍋ばるもの六人。近江水口八幡神主參府して拜し奉る。(日記。)〇廿九日松平薩摩守光久就封のいとま給ふ。牧野右馬允忠成。眞田隼人正信重參觀す。紀郎の老安藤千福丸義門より。父飛驒守直治の遺物行光の脇差を捧ぐ。この日二丸にて阿部豐後守忠秋茶をすゝめ進らせて。さしぞへを献ず。(日記。)〇晦日鳥丸侍從資慶歸洛のいとまたまひ。銀五十枚。給五下さる。(日記。)◎この月盛員人見玄德賢知めし出さる。(家譜。)〇五月朔日出仕の雁老臣に謁し退く。入貢の關人貢物を奉る。針金織五卷。花氈二枚。天鷲絨五卷。貝光布滿團二。珊瑚三朶。大鏡一。いんす鳥笛一。かるこん鳥一双。次二疋なり。次に青蓮院門跡尊純法親王御對面ありて。太刀目錄。卷物二十さゝげ。坊官家司も拜し奉る。次に高倉中納言永慶卿は宅地廣米恩賜を謝し。澤庵和尚は品川新寺御建入院を謝す。松平伊豆守信綱は川越より歸り。寺社奉行松平出雲守勝隆は上總佐貫より歸り。井伊直滋參覲す。旗奉行大久保彥左衛門忠教遺領二千石を。長子平助忠名に賜ひ。忠名が庇蔭料六百石を分て。三子大八郎政雄。四子新藏包教に三百石づゝ下さる。又書院番近藤勘右衛門用清歩行頭になり。松平助十郎重信小姓組與頭になる。越前宰相井松平新太郎光政が關人交替す。尾張右兵衛督光友朝臣に。朽木民部少輔稙綱御使して。關人の貢せしかるこん鳥一双つ

辭見せんとて。まうのぼるといへども。烈風により出御なし。かされて召るべき旨つたへられて退く。この大風によて紅葉山　御宮な。目付市橋三四郎長吉して巡視せしめらる。尾紀兩亞相のもとに。阿部對馬守重次して菓子つかはさる。(日記。)〇十一日町奉行酒井因幡守忠知。小十人頭小林新平正重兩人。采邑入返の事により互に爭端やまず。上裁を仰ぐにいたる。二人とも重き職掌をも奉る身にて。かゝる小事に私論を申つのる事本職無狀なりとて。因幡守忠知は安藤右京進重長にあづけられ。その子四人は井伊兵部少輔直好にあづけられ。新平正重は井上河内守正利にあづけらる。その子は太田備中守資家にあづけらる。けふ未刻城外へならせたまふ。(日記。)〇十三日高家吉良若狹守義冬日光山代參のいとま給ふ。書院番組頭高木九助正則。石谷友之助清正。歩行頭都筑彌左衞門爲次。神尾宮內少輔守勝。佐野左京亮正直。近藤五左衞門用行病免す。(日記。)〇十五日月次出仕の雁老臣に謁して退く。酒井因幡守忠知。小林新平正重訴論の事により。目付兼松彌五左衞門正直に歩行目付二人そへて。二人の采邑につかはさる。今日朽木民部少輔種綱二丸にて御茶を獻ず。(日記。水戸記。)〇十六日駿府戌役の者院番頭。この後は祿額の半物成給はるべしと仰出さる。けふ二丸にて堀田加賀守正盛御茶を獻ず。猿樂ありて柳生但馬守宗矩閑寺を勤む。(日記。水戸記。)〇十七日紅かばさる。(日記。)〇二日家門井例の家々端午を賀して時服を獻ず。松平越後守光長はじめ。使番して菓子給はるもの十人。此日阿部對馬守重次二丸において御茶奉る。(日記。)〇三日松平相摸守光仲はじめ。使番もて菓子給はるもの九人。(日記。)〇五日端節例のごとし。井伊掃部頭直孝狩場よりかへり謁す。松平勝三郎仲政初見の禮をとる。土井大炊頭利勝の庶子八助利長。七助利房始めてまうのぼり拜謁し。平野藤次郎友平。島山權藏精元。井狩猪之助某。近江國芦浦觀音寺　弟子式部卿も。おなじく初見し奉る。町奉行堀式部少輔直之。使番朝倉仁左衞門在重。青山善四郎重長。駒木根長次郎政次。島四郎左衞門安。小姓組波逸與右衞門正。書院番佐々權兵衞長次。荒尾平八郎久成。戸田玄蕃頭定正。松平助十郎重信。各所引渡しはてゝかへり。書院番喜多見五郎左衞門重俊。大島茂兵衞義唯。駿府修理はてゝかへり謁す。阿部豐後守忠秋ならびに三浦志摩守正次。新封の地へいとまたまひ。永井信濃守尙政。稻葉美濃守正則も襲封のいとまたまふ。飛鳥井中將雅章鞠道の御例物をくだされ。(日記。)〇六日加賀黃門きのふより。病臥の聞えあるにより。朽木民部少輔種綱してとはせらる。細川忠興入道三齋へ使番石川彌左衞門賞成もて。菓子をつかはさる。(日記。)〇七日松平伊豆守信綱二丸に於て御茶を奉り。脇差を獻ず。(日記。)〇八日丹羽左京亮光重はじめ。四人の大名就封のいとま

下町奉行酒井忠知拜領

下品川東海寺令蘭人試驗石火矢

上令小林正重自殺

下家光召總番頭訓令旗士儉約事

上追放酒井忠知

葉山　御宮御參あり。今川刑部大輔直房御釼の役す。尾紀水戸三卿陪拜せられ。國持井普第の盟饗參し供奉例のごとし。此日二丸にて大僧正天海へ御茶を賜ふ。(日記。水戸記。)〇十八日所司代板倉周防守重宗京より參り。高家吉良若狹守義冬日光山よりかへり。町奉行加々爪民部少輔忠澄。使番眞田長兵衞幸政。播磨國姬路引渡はてゝかへり謁す。醫員施藥院宗伯。曲直瀨養安院玄理。竹田法印定宣。片山與安宗琢。坂上池院宗悅。南倉專益林卷。年例の藥を獻ず。酒井因幡守忠知。小林新平正重訴論の旨査檢ありしに。新平正重申旨更に證左なきのみならず。私の憤にたへず因幡守忠知方へ。打果すべき旨書狀を送るところ。全く狂氣にひとし。そのうへ血氣の勇につのり。物頭役たるものゝ所業にあらずとて。父子とも切腹せしめらる。よて檢使として井上河內守正利宅へは目付宮城越前守和甫。山崎權八郎正信。太田備中守資宗宅へは目付野々山新兵衞兼綱監臨す。又因幡守忠知は新平正重と評論既に兩度に及びしかば。奉行所にうたへ指揮受べきを左もなさず。新平正重より討ば。奉行所にうたへ指揮受べきを左もなさず。新平正重より討果の書狀を送りし時。同意の返簡をつかはしたり。すでに重き職掌を奉る身にて。かゝる爭論に及ぶ事につかはしからず。新平正重同罪に處せらるべしといへども。兩度とも爭論の旨にて。申所なき理りあるをもて。死罪一等を減じて追放たる。よて目付市橋三四郎長吉。兼松彌五左衞門正直その地に行むかふ。(日記。)〇十九日諸番頭諸物頭をめして。きのふ酒井因幡守忠知。小林新平正重上裁のさまを示されて。今より後各其慎あるべき旨老臣仰をつたふ。未後品川の新寺にならせられ。澤菴和尙に銀貳百枚。帷子十下され。かしこにて人々當座の和歌あり。けふこの寺名を万松山東海寺と賜ふ。(日記。)〇廿日關人進貢せし石火矢をもて。麻生の地にて關人にその技を試しめ。堀田加賀守正盛。阿部對馬守重次。牧野內匠頭信成。目付兼松彌五右衞門正直監臨せしめらる。四町ばかりへだてたる茅屋へ打かくる事。數度なりしかども。とかくされば茅屋に火もうつらず。かへつて關人毀傷せしとぞ。この日高倉中納言永慶卿へ。使番堀三右衞門直景もて鶴をつかはさる。(日記。水戸記。)〇廿一日書院番組井佐治右衞門勝茂小十人頭となる。(日記。)〇廿三日丹羽左京亮光重はじめ。就封のいとまたまはる者四人。三宅大膳亮康盛。土岐山城守賴行大坂加番のいとまたまふ。この日御座所に惣番頭をめして。旗本の諸士各奢侈を禁ず。萬事儉約を宗とし。先々の法制を欣遵すべし。またたびたび。酒井因幡守忠知。小林新平正重を罪に處せられたり。この後もかゝる事あらば。內々にてさまよく遂にすませしむべき旨面命せらる。(日記。)〇廿四日三條山　鎭廟に詣給ふ。吉良若狹守義冬御釼の役す。　崇源院殿にも詣給へり。尾水紀三卿陪拜せられ。國持普第の諸大名隨參供奉例の如し。入夏の關入

にいとま給ひ。時服かづけらる。又石火矢献ぜしによて別に銀を下さる。(日記。)〇廿五日尾張亜相加賀黄門はじめ。參覲大名十四人へ合力米を給ふ。酒井備後守忠朝就封のいとまたまひ。御前にて御馬を下さる。こたび二丸にて的場を設らる。けふ吉日なれば。持弓頭内藤外記正重。本多太郎左衛門信勝。持筒頭大森半七郎好長所屬與力同心の弓銃を試らる。目付兼松彌五右衛門正直これを閲す。(日記。)〇廿六日午後酒井讃岐守忠勝が別業へならせらる。(日記。)〇廿七日合力米賜はりし諸大名。まうのぼり謝し奉る。(日記。)〇廿八日月次出仕の群老臣に謁し退く。(日記。)〇廿九日櫓大納言の局跡洛するにより。　主上に金高坏二。枝珊瑚一。繻子十卷。　院へ針金織五卷。重硯箱一。金文盤一。　大宮へ伽羅一木。匂箱一。掛硯一。金入卷物五。綿百把。女二宮へ繻子綸珍三十卷。女三宮へ繻子二十卷。又大宮へ千代姫君より紗綾廿卷。大姫君より越前綿百把。此日阿部豊後守忠秋新封の地より歸謁し。金十枚。綿百把。三浦志摩守正次も同じく歸謁し。金五枚。綿百把奉る。午後廉生へならせられ。柳生但馬守宗矩が別業にて御膳奉る。(日記。)〇六月朔日拜賀例のごとし。酒井下越守忠正。竹中左京亮重常甲府より歸り謁す。美濃衆參謁するもの七人。伊東大和守祐久子左京祐由。鵜千代某。主殿助祐春。佐久間藏人勝友子權之助勝豐。溝口八十郎信勝。酒井讃岐守忠勝三子朝

下水谷勝匡之轉封

貞忠直。松平若狹守康信子又七郎典信。朝倉越後守宣親子内膳宣成。鳥居内膳忠春。松平大膳亮忠重子右馬介忠倶初見し奉る。戸澤越中守定盛參覲す。使番駒木根長次郎政次。小姓組津田平左衛門正重跡目付命ぜらる。靈所組頭鈴木傳左衛門某千代姫君かたに付られ。同じ頭になる。樋大納言の局臨洛のいとま給ふにより。　大宮へ御手宮ならびに金貳千兩そへて進ぜらる。(日記。)〇三日三家はじめ端午時服献ぜし家々に御内書をたまふ。松平伊豆守信綱。阿部對馬守重次。四城及びその他の修理所を巡視す。(日記。)〇五日尾張大納言義直卿當家御系圖編纂ぜらるゝよし聞召。其家司成瀬隼人正正虎召て。其御系圖御覧にそなへらるべき旨仰下さる。此日水谷伊勢守勝隆常陸國下館より備後國成羽へ轉封せられ。三千石加へて五万石になさる。醫官半井驢庵成近御勘氣ゆるされしのち。はじめて診脉せしめらる。(紀伊記。水戸記。)〇六日御側中根壹岐守正盛御使して。大僧正天海へ甜瓜をつかはさる。(日記。)〇八日高田へならせらる。三家へ久世大和守廣之御使して。菓應各三連道はさる。又井伊掃部頭直孝累日所勞のよし聞召。御側中根壹岐守正盛御使して御馬給たまふ。(日記。)〇九日醫官半井驢庵成近なもて。久志本式部常尹にかはり奥に伺候せしむ。(日記。)〇十日木部藤左衛門直春銅五奉行命ぜらる。(寛政重修譜。)〇十一日小姓組番頭溝口藤城津守三友千六百

下臨脇内膳

石加へて五千石になされ。御側中根壹岐守正盛千二百石加へて三千石になされ。徒頭小出越中守尹貞七百石加へて二千六百石になされ。小納戸安西甚兵衛元氣五百石加へて千三百石になさる。(日記。)〇十二日寺澤兵庫頭堅高蟄居をゆるさる。これはその封地逆徒蜂起せしを。みづから誅戮する事を得ず。官より追討せらるゝまでにしなしたる罪。かろかられればとて。天草の所領收公せられ。けふまで蟄居せしめられしなり。(日記。)〇十三日土井大炊頭利勝所領下總國古河城にありて。重くわづらふにより。小納戸宮崎備前守時重もてとはせられ。鹽鮭一隻。酒一荷賜ふ。午後酒井讃岐守忠勝が別業にならせらる。(日記。)〇十四日黒田甲斐守長興襲封のいとま給ふ。けふ板倉周防守重宗二丸に召て御茶を賜ふ。明日山王祭により歩行頭朽木興五郎友綱。兼松又四郎正尾。近藤勘右衛門用清。能勢市十郎賴永所屬を引つれつかはさる。(日記。)〇十五日使番朝比奈源六泰勝。柘植平右衛門正時城邊修理奉行命ぜらる。けふ山王祭禮により。天守前樒にならせられ御覽あり。目付兼松彌五左衛門正直。市橋三四郎長吉を山王へつかはされ。作法を監察せしむ。三河國深溝領主板倉内膳正重昌遺領一万五千石を分て。長子主水佑重矩に一万石つがしめられ。同國牛島にうつされ。次子甚太郎重直に五千石分たしめらる。この重昌はもとの伊賀守勝重の三子にて。十六歳のとき慶長八年正月伏見

上板倉重矩之轉封

上板倉重昌

にめされて。　神祖の御側に召つかはれ。十年四月十六日侍ゆりて内膳正と稱す。世の人重昌を字して臨暗内膳とよびしは。兄の重宗周防の守にてありければ。周防を蘇芳にかよはして。兄より增たる才覺を稱美せしとぞ聞えし。十三年靈巖寺佐たまひ。十四年采邑にかへ下さる。のち營中の事を執行ひ。松平右衛門大夫正綱。秋元但馬守泰朝と共に近習出頭人となる。十九年七月千二百石加恩あり。大坂御和睦のとき。重昌はづかに二十六歳。總軍數万の中よりゑらび出され。ひとり城中に入て右府秀頼の血脉をうけとり。　神祖の思召まゝに事をとのへてかへる。元和二年三千石加恩ありて五千貳百石領し。

神祖かんさらせたまひしのち。　靈柩久能より日光山にいたらせたまふとき供奉し。其後　台德院殿につかふる事もとのごとし。寛永元年父伊賀守勝重が遺領の内六千六百十石餘下され。今の領主となり。　台德院殿四城に御隱退のとき。營院番頭をかれ。十年新墾田を合て一万五千石になり。肥前國島原賊徒蜂起せしとき。追討の御使うけたまはつて馳むかひ。四國の諸軍勢を引つれ城を攻しが。十五年正月元日の城攻に。みづから諸軍に先立て城につき。盆にのりいらんとせしお。敵のはなつ銃炮にあたりて討死す。齢五十一歳とぞ。また醫官半井通仙院瑞桂が子驢庵成近家つがしめらる。(日記。寛政重修譜。)〇十六日嘉定例のごとし。加賀黄門利常

月より　台德院殿の姫君(嗣々姫君又珠姫君と申。第二の御女なり。)にそひまいらせ。十年五月十一日首服加へられ。從四位下侍從に叙任し筑前守と稱し。御家號をゆるされ。六月廿八日家をつぎ。十九年七月故黄門利長卿の養老料をも合せ領し。その九月九日左近衛權少將にのぼり。大坂の兵起りし時は。急ぎ軍勢を催し馳向て城を攻。明る元和元年五月の合戰に。　台德院殿の先陣して多くの敵をやぶり。首三千二百切て献る。閏六月十九日參謁をかけ。寛永三年八月十九日從三位に昇階し。中納言にのぼせらる。六年四月廿三日肥前守に改め。此日家を讓りてのちは。小松の城にすみぬればとて。小松の中納言とは稱しける。万治元年十月十二日齢つもりて六十六歳にて卒せしとぞ。上野國沼田城主眞田熊之助信利遺領三万石を分て。二万五千石は叔父内記信政。五千石は弟兵吉信澄に給ひ。内記信政に賜りし一万七千石は。信政が弟隼人信重に下さる。この信利といへるは。伊豆守信之が長子。河内守信吉が子にて。寛永十一年十一月廿八日家をつぎ。十二年十二月六日初見し奉りしが。今年七歳にて早世しければ。かく別に賜はれるなるべし。(日記。潛蘊譜。寛政重修譜。　潛蘊譜には信吉父に先立うせしかば。家をば舍弟信政つぎ。子信澄に沼田城をゆづるとす。纘編にはこの信澄をのちに信利と改めしよしるし。信之が致仕せし日。家を内記信政にゆづり。信政がこれ

下　眞田信利

上　前田利常致仕

上　前田利次同利治之分封

卿へ稲垣若狭守重太。細川越中守忠利へ池田帶刀長賢。有馬玄蕃頭豊氏へ使番石川彌左衛門實成使して熱瓜を下さる。このともがら病もて。けふまうのぼらざる故とぞ。(日記。)〇十七日紅葉山　御宮に酒井讃岐守忠勝代參す。(日記。)〇十八日高倉中納言永慶卿薨洛のいとまたまふ。大坂町奉行曾我丹波守古祐。堺政所石河土佐守勝政もいとま給ひ。小十人頭山下彌減周勝駿河國清水船手役命ぜらる。尾張大納言義直卿のもとへ酒井讃岐守忠勝。松平伊豆守信綱。阿部豊後守忠秋。阿部對馬守重次御使して仰を傳へしは。近日世俗華奢の風習なれば。嚴にこれを禁ぜられ。しばく倫約の令を仰出さるゝ時なるをもて。千代姫君御婚禮の事。すべて肖畧あるべき旨。去年重次名古屋に御使したる時に仰つかはされき。いよ〳〵その心して。華麗の設あるべからざる旨なり。又紀伊大納言賴宣卿のもとへは。伊豆守信綱御使して狩場のいとま仰つかはさる。(日記。)〇十九日大納言賴宣卿狩場の暇仰出されしを謝してまうのぼらる。(日記。)〇廿日加賀國金澤城主黄門利常卿年頃の願により。致仕の御ゆるしあり。原封加賀能登越中百十九万石のうち。八十万石は長子筑前守光高。十万石は二子淡路守利次。七万石は三子飛驒守利治に分ち。二十二万石は黄門養老の料たらしめらる。この利常卿は贈從一位權大納言利家卿の四男にて。兄の贈正二位大納言利長卿の世嗣になり。慶長六年九

上　修理所在歟館

まて領せし地を。信利にあたふるよしをしるし。熊之助が事はさらにしるさず。みな誰を日記にとらず。臆斷の誤なり。信利といへるは熊之助が事にて。信澄は伊賀守が名なる事明らけし。また領地を分賜はりし事も。熊之助信利が早世によれるといふ事を。曾てしらずしてもらせしと見えたり。)又各所離館の修理奉行仰付らる。葛西は小姓組小倉忠右衛門正守。大番本多清兵衛正次。府中は小姓組長谷川半右衛門重治。大番本多左大夫光政。船橋は書院番佐藤勘右衛門成次。大番小笠原源四郎貞信。稲毛は小姓組安藤市郎兵衛忠次。大番小俣平右衛門政貞。中原は書院番長谷川四郎兵衛重政。大番山岡傳右衛門景信。越谷は書院番平野清左衛門長利。大番山田彦左衛門正清なり。又使番大久保甚右衛門長重。勘定長谷川太郎兵衛正清は備後成羽の目付にさゝれ暇たまふ。申刻城外へならせたまふ。(日記。)〇廿一日中奥番大岡忠四郎忠種。板橋與五左衛門政鄰。倉橋三五郎尚政。伊藤安兵衛正次。水野金十郎某。長谷川長五郎重長。松平彦兵衛房利小納戸命ぜらる。三家の世子へ加々爪甲斐守直澄御使して巣鷹つかはさる。青蓮院門跡尊純法親王へ多賀左近將監御使して。酒樽菓子おくらせ給ふ。(日記。)〇廿二日小姓組に入番するもの九人。(日記。)〇廿三日水野日向守勝成病臥し。參覲しがたしとて。子美作守勝俊參覲す。戸田左門氏鐵大病により。子淡路守氏經并三郎四郎氏照看侍のいとまたまふ。大番の子初見九人。書院番沼間兵右衛門清評二子將監清村。大番組頭中川市右衛門忠次二子三十郎忠政。奥方番の頭永井勘九郎吉勝二子牛之助信勝。裏門切手番頭四山太郎兵衛昌綱三子久右衛門昌姓。梶川四郎次郎忠助二子太兵衛忠正も初見し奉る。未牌より酒井讃岐守忠勝が別業にならせたまふ。(日記。)〇廿四日三緣山　羅漢に酒井讃岐守忠勝代參す。(日記。)〇廿五日細川忠興入道三齋。松平出羽守直政。森内記長継。立花左近將監忠茂。宗對馬守義成合力米をたまふ。醫官今大路道三親昌病死せるにより。その子大力之助親俊に家つがしめらる。(日記。)〇廿六日大番組頭大橋兵右衛門親善千代姫宮につけらる。(日記。)〇廿八日月次拜賀のためまうのぼりたる罷老臣に謁し退く。(日記。)〇廿九日尾水兩卿を酒井讃岐守忠勝が別業に招請するにより。杵木民部少輔種綱を御使とせらる。夕かけて又中根壹岐守正盛をもつかはさる。(日記。)〇晦日尾水兩卿きのふ酒井讃岐守忠勝が別墅に遊びし時しばく御使せられたるをもて。まうのぼり謝せらる。名越の被例のごとし。これまでの小細工部屋を大僧正天海が宅地に給ふ。よて書院番與津兵左衛門宗能。その作事奉行仰付らる。また紀伊亞相狩場へ書院番頭池田帶刀長賢御使して。菓子魚物おくらせたまふ。(日記。)◎この月桑山猪兵衛貞寄書院番にいる。宋吉庄太郎長明父孫左衛門長方の原職をつぎ。織河の代

下令鎖四賭大名宣捡入津外舶

下告庶商及闔商以天主教之禁且停教徒來國止禁阿媽港船入津

大猷院殿御實紀卷四十一

寛永十六年七月に始り九月に終る

官となる。(家譜。)

○七月朔日月次出仕の衆老臣に謁し退く。尾張大納言義直卿。水戸中納言頼房卿のもとへ。杤木民部少輔稙綱御使して。甘瓜二籠づゝをくらせたまふ。紀伊大納言頼宣卿狩場には。書院番頭池田帶刀長賢御使して。菓子并鰯なつかはさる。また日野大納言資勝卿病卒により。三條内大臣實條公のもとへ。老臣奉弔もて吊せらる。(日記。水戸記。紀伊記。)○二日水戸中納言頼房卿より。新鮭を献ぜられければ。大内へ驛進せらる。(日記。)○三日太田備中守資宗鎭西長崎の邊へ御使命ぜられいとま給ひ面命の旨あり。水邸よりかされて鮭まいらせられければ。仙洞へ驛進せらる。申刻四城へならせ給ふ。(日記。)○四日太田備中守資宗を御前にめして。并伊豫部頭直孝。土井大炊頭利勝。酒井讃岐守忠勝。堀田加賀守正盛。松平伊豆守信綱。阿部豊後守忠秋。阿部對馬守重次連署の令條を授らる。これ阿媽港船渡海を禁ぜらるゝ所なり。その文にいふ。本邦に於て天主教厳禁せらるゝの旨をしりつゝ。ひそかに弘法のものを渡船せしむる事たえず。邪教の猖獗をむすび。不道の企するものはすでに誅滅あり。しかるに伴天連のやから隠れすむものある所へ。密に資財を運致するよし聞ゆ。今より後餓流陀船渡海のことかたく禁ぜらる。もしこの令を違犯し來舶するに於ては。其船を破却し。船中渡來るものはことごとく斬に處せらるべしとなり。又鎭西の諸大名へは伊豆守信綱。豊後守忠秋。對馬守重次連署の令條を下さる。其文にいふ。天主教殿に禁ぜらるゝといへども。彼國より密に伴天連を渡海せしむるをもて。今度かれうた船停止せらる。各領浦々にさるべき者を居らしめ。不審なる船來らば。心いれて査検し。もし蛮船着岸せば。先年より定制のごとく。船中の人數を閲し。上陸せしめず速に長崎の湊に送りつかはすべし。いぶかしげなるものを載せ來るか。または船中の人ひそかに上陸せばうたへ出べし。そのさまにしたがひ。きと褒賜せらるべし。匿託をもてたのまば。約せし一倍を賜はるべしとなり。又唐船へ令せらるゝには。天主教殿しく制禁せらるれば。彌令條を守り。伴天連ならびに其宗門の徒を載せ來べからず。この令違犯せば殿科に處せらるべし。もしひそかにかくし載せ來らば。同船の者たりともうたへ出べし。きと褒賜あるべしとなり。又關人に令せらるゝ旨もこれにおなじ。よて又國持はじめ万石以上の盟をも。白木書院にめして。老臣この令條をさづく。(日記。)○五日尾水兩邸へ松平伊豆守信綱御使す。また千代姫君御入輿近づかせたまふによ

上禁天主教

下松平頼重之新封

り。尾張の家司日々出仕すべしと令せらる。こたび伊豆國熱海之。小姓組川口久助宗次。小姓組與頭になり。小姓組室賀源七郎正俊小十人頭となり。書院頭宮城三左衛門和治。小姓組依田内藏助信重。曾我太郎右衛門包助。石野八兵衛氏照。松平新平勝直歩行頭となり。大番組頭筧新太郎正成二條城番になり。與力二十五騎預けらる。駿河清水船手役山下權蔵周勝六百五十石くはへて千七百石になさる。この日酉城へならせられ。板倉周防守重宗御茶を献ず。鳥居左京亮忠政献ぜし茶入(文琳。)を給ふ。(日記。水戸記。)○十三日水戸中納言頼房卿次子右京頼重年齢長じたればとて。常陸國下館にて新に五万石を賜ふ。此封地狭少といへども。水戸城程近ければ先賜ばり。ゆく〳〵加恩せらるべく思召せば。この後心いれて父黄門へ孝養なすべき旨面示し給ふ。家司中山市正信吉も拝謝し奉る。黄門もまうのぼり謝し奉らる。松平若狭守康信。堀越中守利長。酒井左近忠俊大坂加番命ぜられ暇たまふ。立花宗茂入道立齋滯府により。糜米二千俵給はり。青蓮院門跡尊純法親王及細川忠興入道三齋へは使番もて菓子つかはさる。(水戸記。日記。)○十四日御厩にわたらせ給ひ。それより泉殿にて供奉の駿游泳せしめられ。日暮四城へならせられ。夜中大廣間にて花火御覧あり。(曾我日記。)○十五日三緑山　台德院殿靈廟。　崇源院殿靈牌所へ御參あり。　御墓へも詣たまふ。　御弟大名供奉す。

小方丈にて現住譽念拝謁し。銀三百枚。時服十かづけられ。役

上朝倉在重任町奉行

僧二人へも銀時服下さる。(日記。)〇十六日水邸より新鮭献ぜられければ。　大宮の御かた〳〵へ進ぜらる。酒井讃岐守忠勝の別業にならせ給ひ。小姓の猪馬上にて鞭打あり。日暮池邊にて花火御覧ぜらる。けふ梶次郎兵衛正勝死して子次郎兵衛正持家をつぐ。(日記。曾我日記。寛永系圖。)〇十七日二丸　御宮に御參あり。酒井讃岐守忠勝は東叡山　御宮へ代參す。けふは紅葉山にならせ給ふべしとい〳〵ども。二丸の　御宮に納め給ふ御絲起御拜覽のため。内宮へならせられしとぞ聞えし。この日御誕辰によて。宮中伺候のともがら餅酒をたまふ。(日記。水戸記。紀伊記。)〇十八日使番朝倉仁左衛門在重町奉行になる。新に命ぜられし歩行頭松平新平勝直。石野八兵衛氏照。宮城三左衛門和治。依田内藏助信蕃。曾我太郎右衛門包助を黒書院にめし。年少しとい〳〵どもいづれも心いれ番つとむるよし聞召て。あらたに扱擢せらる。御暨に遊ばさらん様に。いよ〳〵こゝろもちひて奉職すべしと面命せらる。松平備中守伊豆子彌三郎忠利。大番組頭大澤忠次郎基雄次子六兵衛基之。間宮助左衛門信正次子次郎兵衛信重。天野蓼右衛門重勝次子又右衛門重吉。腰物奉行松波梶平重次二子源左衛門重信。吉田久馬助重信子十郎左衛門重宗初見し奉る。けふ立花宗茂入道立齋別業にならせらる。(日記。)〇十九日大坂弓具足奉行糟屋興兵衛義成。大久保勘九郎某。御城金奉行森川庄兵衛次吉。若林與惣右衛門包盛。横地一郎右衛門忠重彼地におゐて加恩八十石づゝ給ふ。使番石川彌左衛門貫成。小姓組鈴木友之助重氏大坂目付にさゝれいと〳〵下さる。夜中幸若舞御覽あり。(日記。)〇廿日品川御殿へならせられ。東海寺へわたらせらる。(日記。曾我日記。)〇廿一日尾張亞相〈安藤伊賀守重元御使し。紀伊亞相。水戸黄門〈加々爪甲斐守直澄御使し雲雀五十づつつかはされ。加賀黄門はじめ。四人の大名へは使番もて雲雀三十づゝたまふ。(日記。)〇廿二日松平筑前守光高はじめ七人へ。使番もて雲雀三十づゝ下さる。清水船手細井金兵衛勝吉死して。子小姓組金五郎勝武家つがしめらる。(日記。)〇廿三日酒井讃岐守忠勝季子主殿助可一。目付山崎權八郎正信二子三左衛門政乘。野々山新兵衛緜綱二子瀬兵衛緜宗。使番石川彌左衛門貫成二子左次兵衛貫定。疏田長兵衛幸政二子市右衛門幸吉。徒頭堀田權右衛門一紐二子甚五左衛門一則。小十人頭田中一郎右衛門忠勝二子小十郎勝以。納戸番頭筒井内藏忠重二子源丞忠榮。書院番伏屋新助爲次子小兵衛爲房。大番横山小右衛門一義弟其右衛門一通。大坂金奉行横地一郎右衛門忠重子七之助元堯。大坂具足奉行糟屋與兵衛吉成二子彌右衛門義行。小島助左衛門正余子傳兵衛正朝。森本助左衛門吉久子助右衛門正久。神谷左馬助三正子小左衛門三盛。石川半左衛門正次子長五郎正重初見し奉る。使番城織部佑信茂長子書院番半

上近歲五穀不登即發法度誡農民

左衛門朝茂に。父の原跡二千石たまはり。半左衛門朝茂が庇蔭料五百石の内三百石を。三子七之助高茂に下され。書院番由良市兵衛貞繁子新六郎貞房家つがしめらる。京より急脚のもち來りし文箱を。川崎にてうばひ去りし者。并その箱取てわたせし者の妻子四人。府より攝津の牧方まで引わたしてのち。川崎にて磔罪に處せらる。よて歩行目付小人目付中間皆圍のためつかはさる。この日松平出羽守直政はじめ。使番もて雲雀三十づゝたまはる大名十人。けふ近年凶作により。臨時の高札をたてらる。その文は。一兩年五穀みのらず。農民疲憊すと聞ゆ。此條可被仰出之間。百姓共に對し非義の緊動なすべからず。もし立毛損亡なきとく。農民に對し非義の緊動なすべからず。もし立毛損亡なきに。申かすめて租稅雜濫する農民あらば。きびしく罪に處せらるべしとなり。(日記。寛政重修譜。武家嚴制錄。)〇廿四日三緣山　竈殿へ酒井讃岐守忠勝代參す。方丈雪念役僧まて齋飯をたまふ。この日京に驛傳して。　大宮へ御内書進らせ給ふ。(日記。)〇廿五日秋田河内守俊季。高木善次郎正弘。駿府番代としてつかはさる。井伊掃部頭直孝のもとへ齋藤攝津守三友御使して菓子を給ふ。肥前の國平戸へ蘭船着岸せしかば。優待して交易せしむべき旨。宗對馬守義成。松浦肥前守鎭信へ命ぜらる。この日高田へならせらる。大橋龍慶重保が隱宅にて御膳を奉り。夕かた雜司谷邊にて雲雀をからせたまふ。歩行士勢子をつとむ。(日記。水戸記。曾我日記。)〇廿六日立花宗茂入道立齋。南部山城守重直に雲雀三十づゝ給ふ。相應院尼に林檎。養珠院尼に雲雀三十遣はされ。松平伊豫守忠昌母。松平陸奥守忠宗母。松平新太郎光政母。松平阿波守忠英母。生駒壹岐守高俊母へ。雲雀三十づゝつかはさる。又久能の　御宮塔供養あり。(日記。水戸記。)〇廿七日水野備後守元綱邸宅を召て小姓工部屋にせらる。(今いふ御作事小屋か。)尾紀水三卿近日舊水へ舟遊あるべし。御舟も命ぜらるゝ旨。松平伊豆守信綱もて仰つかはされ。又紀伊亞相へは狩場へもしばゝまからるべき旨仰下さる。三世子〈雲雀五十づゝ。常陸介光貞朝臣生母。松平陸奥守忠宗。松平長門守秀就。松平新太郎光政。細川越中守忠利。松平安藝守光晟。鍋島信濃守勝茂。毛利甲斐守秀元等の妻へ雲雀三十づゝ給ふ。日光山〈八朔の代參として。高家吉良若狹守義冬つかはされ。神馬奉納せらる。(日記。紀伊記。)〇廿八日月次出仕の雁老臣に謁し退く。評定所〈諸大名の家司を召て。天主教の殘葉并蠻船漂着のとき。法令を守るべき旨つたへらる。井伊掃部頭直孝〈杤木民部少輔稙綱奉書もて雲雀三十給ふ。(日記。)〇廿九日松平右京亮重。松平越前守光宗。松平淡路守利次。松平飛驒守利治。加藤孫三郎明友に雲雀三十づゝ給ふ。土井大炊頭利勝わらはやみのよし聞ゆれば。小姓組番頭齋藤攝津守三友井戸官野間玄琢成岑な。古河城につかはさる。

上林道春撰無極大極和字抄

上令諸大名修理四城石垣

稻葉美濃守正則小田原の封地よりかへり參る。（日記。水戸記。）◎この月儒臣林道春信勝仰を奉て。無極大極和字抄を撰進せしとぞ。（家譜。）○八朔當賀例のごとし。表へ渡御の前に。三家幷三世子及右京賴重に酒菓を饗せらる。花山院少將忠長拜謁して。太刀目錄奉る。大猷寺門跡空性法親王使もて一束一卷さゝげ。東寺の塔御建立を謝せられ。天龍寺仙長老は朝鮮國書簡の事命ぜられしを謝し。建仁寺僧長老は公帖を謝し奉る。（日記。）○二日四城石垣の修理助役の役。四隊に分ち仰付らる。一隊は土井大炊頭利勝を其隊首として。松平因幡守忠雅。同采女忠節。稻葉美濃守正則。二隊は松平式部大輔忠次を隊首として。井伊兵部少輔直好。織田百助信良。諏訪因幡守賴水。三隊は奥平美作守忠昌を首とし。眞田伊豆守信之。隼人正信重。兵吉信澄。佐久間藏人勝友。源六郎勝盛。四隊は酒井河内守忠清を首として。安藤右京進重長。鳥居主膳正忠春。酒井万千代忠能を屬せられ。朝比奈源六泰勝。柘植平右衛門正時その奉行すべしと命ぜらる。この日尾張大納言義直卿。紀伊大納言賴宣卿。水戸中納言賴房卿。右兵衛督光友朝臣。常陸介光貞朝臣。左衛門督光圀朝臣。右京賴重を角田川に舟遊せしめ給ふ。よて御舟よそひして。船手頭小濱彌十郎安隆。小笠原安藝信盛。間宮虎之助長澄御迎に參る。松平伊豆守信綱及び目付兼松彌五左衛門正直は。八町堀より舟にのりて先にまいり。饗應の事を沙汰す。御舟大川にのりいづれば。漁舟あまた左右にうかべ。網引して遊覽に供す。角田川の御離館にて饗應のほど。三浦志摩守正次御使して。梨子林檎をつかはさる。饗宴はてゝ尾紀水三世子は水泳せられ。夕かけて花火あり。かへさの船中にても酒宴を催さる。この日土井大炊頭利勝病重く聞えければ。長子遠江守利隆を古河城につかはし看侍せしめらる。高家吉良若狹守義冬日光山より歸謁す。また柳生但馬守宗矩に雲雀二十くださる。（紀年錄。日記。水戸紀。紀伊紀。）○三日三家井三世子まうのぼり。昨日の舟遊を謝せらる。目付永井監物白元。書院番德永式部少輔昌成常陸下館より歸參す。柳生但馬守宗矩數寄屋に召て子息の書幅を給ふ。（日記。）○四日酒井讃岐守忠勝が別業にならせ給ふ。鞭打井花火あり。けふ鈴率行今村九郎兵衛吉正死し。養子次郎四郎吉重家を繼ぐ。この夜大風雨。（日記。當我日記。寛政重修譜。）○五日三家使もて御けしき伺はる。昨夜大風雨によりてなり。先に佐竹修理大夫義隆に預られたる竹中筑後重信死せしにより。檢屍として小姓組岡田太郎右衛門利永をつかはさる。（日記。）○六日朽木民部少輔稙綱草津浴湯の暇下さる。（日記。）○七日鵜殿右大將經季卿武家傳奏仰付らるゝ旨。三條內府實條公のもとへ奉書もて仰まいる。大坂堺の市人等。江戸の海濱を埋めて宅地とせんと望請事年久し。よて松平伊豆守信綱。阿部豐後守忠秋。阿部對馬守重次その地を巡視にまかる。青蓮院門跡尊純法親王增上寺に參詣せらるゝにより。松平出雲守勝隆をつかはさる。また紀伊大納言賴宣卿こはるゝまゝに。狩場のいとま賜ふ。（紀伊紀。日記。水戸記。）○八日千代姫君。この九月廿一日尾邸に御入輿の事仰出さる。（水戸記。）○九日細川越中守忠利。松平右衛門佐忠之。有馬玄蕃頭豐氏。鍋島信濃守勝茂。立花宗茂入道立齋を大廊下に召て老臣仰なつたふ。こたび目付兼松彌五左衛門正直を長崎につかはされ。變船の法令仰出さるゝのよしを示さるゝ所なり。けふ南部山城守重直より新鵠を獻ず。（日記。）○十日目付兼松彌五左衛門正直長崎御使命ぜられ暇たまふ。大村丹後純信。寺澤兵庫頭堅高。黑田市正高政。松浦肥前守鎭信。五島淡路守盛利。相良遠江守賴寛を大廊下にめして。こたび彌五左衛門正直を長崎につかはされ。變船嚴制仰下さるゝ旨を老臣つとふ。立花民部種長。中川內膳正久盛。久留島丹波守通春。伊東大和守貽久。秋月長門守種春。有馬左衛門佐直純。稻葉民部少輔一通にも同じくつたへ。在封の輩は家臣を召てつたふ。けふ品川にならせらる。（日記。）○十一日辰刻より雨甚しくふるに。巳刻ばかり奥の厨より火おこり。忽ちに殿閣門廡に火うつる。本城ことごとく回祿に及ぶ。たゞし二丸幷天守城櫓は恙なし。寶物奉行星合伊左衛門員枚。四尾加右衛門正保。三雲內記成賢。關兵三郎正成は速に富士見の寶庫にいり。庫內收

上江戸城火

蓄の秘帙奇書をことごとく他所にうつしければ。殿長元和以來　神慮もてあまれく御搜索ありし本朝の古書。縉紳家々の舊記。一としてこの災にかゝらのなし。かくて西城に火をさけたまふ所。また四城の下屋より火をあやまち。すでにこれも大事に及んとせしかば。數人かけ集りからうじて撲滅したりとぞ。この火災最中尾水兩卿三世子まうのぼらる。又紀伊亞相狩場へは使番堀三右衛門直景御使して。　御所井廻君平らかにわたらせたまふむね仰つかはさる。亞相も速に狩場よりかへり西城にまうのぼらる。よて西城をば大番頭水野備後守元綱。北條出羽守氏重。書院番頭酒井壹岐守忠重。中根大隅守正成。小姓組番頭仙石大和守久隆。安藤伊賀守重元。小十人頭室賀源七郎正俊。小栗平吉久支。細井左次右衛門勝茂。歩行頭依田內藏助信重。能勢市十郎賴永。彦坂平六郎重定。大久保彦十郎忠真。各所屬引つれて宿直し。目付宮城越前守和甫。村越七郎左衛門正重。市橋三四郎長吉。使番能勢次左衛門賴重宿直す。また西城の大手は百人組の頭久世三四郎廣當。西門は先手頭屋代越中守忠正。裏門は中山勘解由直定。山里門は阿倍四郎五郎正之。山里後門は依田肥前守信政。紅葉山下門は石川主殿頭忠總。坂下門は松平越中守定綱これを警衛し。二丸門は先手頭近藤登助貞用。御門は持筒頭根來出雲守盛正。大手門は百人組の頭渡邊圖書助宗綱。冠木門は松平式部大輔忠次。切手門

はそのころ中山五平次勝信。裏門は持筒頭齋藤佐渡守利宗。梅林坂門は留守居酒井和泉守忠吉。二丸　御宮門は先手頭神谷四郎左衛門種直。宮田庄左衛門久尚。加藤平右衛門一重。河野庄大夫照貞。坂井半左衛門成令。向井權十郎政直。神谷八郎左衛門政成。駒井孫四郎勝重。野々山一郎左衛門兼周。服部兵右衛門元延に仰付らる。夕かけて　東照宮御神躰を。四城より二丸にうつさせられ。その跡より二丸にならせらる。(日記。紀伊記。曾我日記。)〇十三日諸大名より器械屋材など數々獻ず。尾紀水三卿よりは木材をさゝげらる。また諸大名はまうのぼり老臣に謁す。(日記。紀伊記。)〇十四日高家吉良若狹守義冬火災により。　日光山　御宮に告祭の御使命ぜられ。雄飯龍跡を進らせらる。けふ二丸より四城にかへらせ給ひ。白木書院番にて國持ほか諸大名拜謁し。また御調度ども奉る。朽木民部少輔稙綱ぱ。このほど草津の溫泉にまかりてありしが。こたびの火災をきゝおどろきけふかへりまいる。松平伊豆守信綱は本城殿閣搆造惣奉行命ぜられ。勘定頭伊丹康勝入道順齋。曾根源左衛門吉次これにそひ。作事奉行八木勘十郎守直。船越三郎四郎永景。牧野織部成常に指揮して沙汰すべし。手斧始は吉辰を撰てかされて仰出さるべしとなり。夜にいりて二丸にわたらせ給ふ。(水戸記。日記。紀年錄。)〇十五日紀伊大納言頼宣卿より。千代姫君井御生母。春日局。英勝院。其他後閤の女房へ紗綾縮緬數々をくり物せらる。ささの火災によてなり。けふ

上江戸城修築之助役

また西の後閤失火す。からうて打けしたり。(紀伊記。水戸記。)〇十六日水戸黄門并井伊掃部頭直孝。松平隱岐守定行。松平越中守定綱。松平美作守定房。松平能登守定政。青山大藏少輔幸成。木多下總守俊次に本城搆造の助役仰下さる。藤堂大學頭高次には石垣助役仰下さる。南部山城守重直より鵜。松平陸奥守忠宗。丹羽左京亮光重より新鴻を献上ければ。鵜は　禁裏へ。鴻は　仙洞へ。皆進せらる。又此ほど紀伊亞相わらはやみ重き由聞召。阿部豊後守忠秋に鑒官牛井驢庵成近。岡本玄治諸品。野間玄琢成岑そへてつかはされ。安藤彦四郎直政は付添て看視し。日ごとに病躰聞え上べしと命ぜらる。この夕朽木民部少輔稙綱茶を献ず。又この十日遠江國荒井の市中火事あり。されど御旅館に於ては恙なきもいと注進す。(日記。紀伊記。水戸記。)〇十七日二丸　内宮に御參あり。岡部美濃守宣勝。松平主殿頭忠房。織田左衛門佐長政。木下淡路守俊當本城搆造の助役仰付らる。紀邸には小姓組番頭安藤伊賀守重元。加々爪甲斐守直澄かはるゝ〳〵まかり。毎日四五度づゝ亞相病躰聞えあぐべし。牛井驢庵成近。野間玄琢成岑は毎日まかりて診脉すべし。たゞし仰蒙りしさまにはあらで。私にまかりしさまにはからふべし。さなくば亞相病中とにかく心用ひ。病のさはりともなるべしとの御むれなり。(日記。紀伊記。)〇十八日二丸より四城にわたらせ給ひ御炎あり。數奇屋にて柳生但馬守宗矩茶

臣實條公。菊亭右大將經季卿。阿野前大納言實顯卿。中御門大納言尚長卿菅筒もてとひ進らせらる。よて酒井讃岐守忠勝。板倉周防守重宗奉書もて御請詞をつたへ進らす。また松平伊豆守信綱。阿部豐後守忠秋。阿部對馬守重次。この後は奥の間までまかり。萬事はからふべき旨命ぜらる。よて春日局のもとへこの三老臣を招て饗應す。讃岐守忠勝。周防守重宗もまかる。（日記。）〇廿四日三緑山　饗廟に酒井讃岐守忠勝代參す。（日記。）〇廿五日本城撰造により。材木拔柴の御使命ぜらる。駿遠兩國の水涯并安倍山は小姓組長谷川三左衞門守勝。大番筧三郎左衞門正重。甲駿濱原と田橋邊は書院番杉原四郎兵衞正永。大番久留七郎左衞門正親。下總國佐倉。常陸國江戸崎は小姓組丹羽平右衞門正長。大番杉浦彦左衞門親勝。伊豆國山中は書院番能勢惣右衞門賴之。大番揖斐半右衞門政軌なり。（日記。）〇廿六日酒井讃岐守忠勝が別業にならせらる。鞭打御覽例のごとし。又茶亭にて陶器製造のさま御覽にそなふ。御宴の半に忠勝に御盃たまふとて。御佩刀を引出物としたまふ。（日記。曾我日記。）〇廿七日千代姫君降嫁近よりしかば。紀邸よりも長持二十掉。生駒壹岐守高俊銀盥手巾架を獻ず。其外諸大名より布帛の類御調度ども若干奉る。紀伊亞相の病によて。武田道安信重いそぎ參向すべき旨。重て急脚を立らる。（日記。紀伊記。家譜。）〇廿八日紀水兩卿始。月次登營の大小名老臣に謁し退く。けふも千代姫君に諸大名より。御資裝の品かすかすに獻ず。（日記。）〇九月朔日出仕の衆老臣に謁し退く。高家吉良若狹守義冬伊勢大神宮へ。代參使命ぜられいとま給ふ。兩宮へとりぐ〳〵御太刀目錄并に神馬二疋づゝ進らせ給ふ。（日記。）〇二日武田道安信重參着せしかば。紀邸へつかはさる。又小姓組番頭安藤伊賀守重元御使として病牀をとはせ給ふ。（日記。）〇三日　院　大宮へ姫一隻づゝ驛進し給ふ。紀伊亞相今朝の病牀をとはせ給ひて。阿部豐後守忠秋をつかはされ。夕かけてまた酒井讃岐守忠勝をつかはさる。けふ使番多賀左近常長。書院番蒔田數馬助長廣因幡國目付命ぜられいとま下さる。（日記。水戸記。）〇四日小姓組番頭杤木民部少輔稙綱一万石加へられ二万石になさる。又酒井讃岐守忠勝もて。紀伊亞相の病をとはせ給ふ。（日記。）〇五日家門はじめ諸大名より。重陽の時服を獻ず。二條攝政康道公并に長子右大將光平卿。九條前關白幸家公并に長子內大臣道房公同上。政所及松殿大夫道昭より。本城回祿せしをもて使奉り。時服布帛等さゝげらる。紀邸へは岡本啓迪院諸品病臥により。武田道安信重の藥を用ひ給ふべき旨仰遣はさる。（日記。紀伊記。）〇七日寄合星合采女正具泰死して。子書物奉行伊左衞門具枚家をつぐ。（寛政重修譜。）〇八日柳生對馬守宗矩劒術奥祕の秘書を獻ぜしかば。正宗の御脇差をたまふ。小姓保々兵九郎貞季。佐野半四郎某。一色主馬

下杤木城綱之加封

下天海撰東照宮緣起

昭晴御勘氣蒙り各其父に預らる。（日記。水戸記。）〇九日重陽例のごとし。水野日向守勝成參覲す。內藤豐前守信照。畑又七郎親昌。寄合植村長門守泰朝は大坂加番はて〳〵歸り謁し。太田備中守資宗は長崎御使勞て歸謁し。使番窪藤左源太利政。小姓組三宅半七郎重吉は戰後萩原目付はて〳〵かへり謁す。東本願寺門跡光從使もて楫肴獻上定婚を謝し。又兩本願寺より本城回祿により。使もて御けしきうかゞひ奉る。又松平伊豆守信綱もて。紀伊大納言賴宣卿へ仰つかはされしは。老臣をもて日日の病牀をとはせたまふべしといへども。しかあらばしゐて對面せられ。病の隙りともなりなん。近習のともがらをつかはさるゝも。また同じ樣にこゝろを勞せらるべき所を推はかり給ひ。安藤彦四郎直政着侍の爲付置せらる。いづれにも療養の補益ともなるべき事あらば。へだてなく信綱にとひはからはるべしとなり。けふ又　勅使　院使參向により。酒井讃岐守忠勝。高家吉良上野介義弼慰勞の御つかひし。木下右衞門大夫延俊饗應使たり。（日記。紀伊記。吉良日記。）〇十一日千代姫君御入輿の時。酒井讃岐守忠勝は御輿渡し。酒井河內守忠清は貝桶の事奉る。太田備中守資宗長崎よりもたらせしいんこ鳥。さとう鳥井甘蔗を獻ず。この日午後酒井讃岐守忠勝が別業にならせらる。（日記。）〇十三日高家大澤右京亮基宣日光山　御宮代參奉る。けふ品川東海寺にならせられ。銃もて白鳳二打留給ふ。紀邸へは酒井讃岐守忠勝に。牛井曙庵威近そへてとはせらる。けふ營築の事により條令を下さるゝこと。（寛永十三年正月八日の令に同じ。（日記。紀伊記。憲敎類典。）〇十四日井伊掃部頭直孝。保科肥後守正之はじめ。諸老臣。奏者番。留守居。勘定頭。作事奉行。町奉行等をめして廻の饗たまふ。（日記。）〇十五日出仕の諸老臣へ謁し退く。三緑山　崇源院殿靈牌所に。阿部豐後守忠秋代參す。（日記。）〇十六日　勅使櫛笥中將信孝。院使山本左京大夫勝忠引見あり。　內より干帖一卷。院より蒸物まいらせ給ふ。こたびの火災をとはせたまふてなり。菊亭右大將經季卿は使もて太刀目錄獻上。傳奏奉りしを謝す。目付兼松彌五左衞門正直は長崎よりかへり謁す。この日吉辰とて千代姫君の御調度ども尾邸へ搬送す。目付山崎權八郎正信これにそふ。また大番頭。書院番頭。小姓組番頭を御前にめして。近年御不豫により各御氣色をはゞかり。何事をも聞え上ざる樣なり。今ははや御平快にわたらせ給へば。大小の事擧嚴せず言上すべき旨面命ありて。起請文を仰付らる。（水戸記。日記。）〇十七日二丸　內宮に參らせ給ひ。大御正天海が兼て御旨を奉じ撰進せし。　東照宮の御緣起を御覽ぜらる。又本城回祿により。攝家親王門跡清華昵近の公卿殿上人。急脚をはせ御けしきうかゞふ。攝家は進らせ物あり。（日記。水戸記。吉良記。）〇十八日　勅使　院使まうのぼり。御返詞仰進らせら

下千代姫降嫁尾張光友

れ。饗せられてのちともに歸洛のいとまたまはり。樋口中將信孝銀百枚。小袖十。山本左京大夫勝忠銀百枚。小袖五給はる。次に秋田河内守俊季。高木善次郎正弘駿府加番のいとまたまふ。二條城番覽新太郎正成三千主馬助正時初見し奉る。千代姫君執事大橋五左衞門親善に。千石加恩ありて二千百二十石になされ。同じかた邏所頭鈴木傳左衞門某に三百石給ひ。いまゝて給はりし廩米月俸は。その子傳次郎某にくださる。これはその父を千代姫君につけらるゝがゆへとぞ。紀邸へ松平伊豆守信綱御使し。このほどは專ら孤生にこゝろもちゐたまふべければ。いさゝかも慢りなく。いかなる遊戲にてもこゝろを養はるべきむね仰つかはさる。又書院番頭中根大隅守正成御使して。細川忠興入道三齋に菓子を給ふ。(日記。紀伊記。)〇十九日千代姫君に付らるゝ侍五人。五十俵づゝくはへて各百二十俵。庖所の徒二人は六十俵づゝ加へ。二人は十三俵づゝ。賄方一人は三十三俵加へ。同朋一人は新に五十俵。月俸五口たまひ。庖所小川三左衞門某これまでたまはりし廩米月俸はその子に下したまふ。けふも御調度どもを尾邸に搬送せらる。目付山崎權八郎正信そひて參る。この廿一日御入輿の時の辻固を。牧野右馬允忠成に仰付らる。(日記。)〇廿日細川忠興入道三齋が四子中務立孝初見し奉る。先に紀伊亞相の病により。京より召返されたる武田道安信重もけふ拜謁し奉る。小姓組久永源兵衞政勝第內記重章初見して奥小姓になる。明日姫君御入輿により。家門井踏大名まうのぼり。老臣に謁し賀し奉る。紀伊亞相病をつとめてまうのぼるべしと聞えければ。酒井讃岐守忠勝御使してこれをとゞめらる。姫君附大橋五左衞門親善御座の間に召て法令を授たまふ。畢て親善に金二枚。時服二。鈴木傳左衞門某に金一枚。時服二。侍五人へ銀十枚づゝ。庖所賄方へ銀五枚づゝ下さる。(日記。寛永系圖。紀伊記。)〇廿一日御入輿により在府の譜第大名ことゞく登營す。井伊掃部頭直孝。板倉周防守重宗。阿部豊後守忠秋。石川主殿頭忠總は御先にまかる。午刻二丸の庖所より西門を御出輿あり。長柄の輿一番は天勝。次は姫君。次は英勝院。次は春日局。御輿の左は酒井河内守忠清。目付山崎權八郎正信。野々山新兵衞雅綱。留守居杉浦內藏允正友。右は酒井讃岐守忠勝。使番蒔田玄蕃頭定正。目付兼松彌五左衞門正直。留守居酒井和泉守忠吉守護す。この外松平伊豆守信綱。青山大藏少輔幸成。秋元但馬守泰朝。大目付井上筑後守政重。留守居牧野內匠頭信成も供奉す。大番士二十人。歩行士二十人。姫君附大橋五左衞門親等。鈴木傳左衞門某。井伊掃部五人これに從ふ。召替乘物。具桶一荷。手箱一荷。衣桁一棹。挾箱一荷。長刀二振。傘一本。守懸桐長柄廿挺。席包乘物二十挺。村越七郎左衞門正頂。歩行士廿人そふ。尾邸に入輿し給へば。讃岐守忠勝御輿を成瀨隼人正正虎に渡し。河內守忠清貝桶を竹

腰山城守正信に渡す。けふ姫君より大納言殿直卿へ。銀五百枚時服五十。右兵衞督光友朝臣へ銀五百枚。繻子百巻進らせられ。また　御所より山城守正信。隼人正正虎へ銀二百枚。小袖十づゝ。少老へ銀五十枚。小袖十づゝ。大名分井番頭の徒へ銀三十枚。小袖六づゝ。朝臣の傳役へ銀百枚。小袖六づゝ。小姓頭。五十人頭。歩行頭へ銀廿枚。小袖六づゝ。頭目付使番へ銀廿枚。小袖四づゝ。庖所頭賄頭同朋へ銀十枚。小袖三づゝ下さる。本城にては護送の弾井營中伺候の人々に饗宴たまひ。奥にては一曲あり。伊勢兵庫貞衡仰を蒙り。今日の行注を製して奉る。その家に傳ふる所の古實によるといふ。(日記。紀伊記。水戸記。家譜。)〇廿二日千代姫御方昨日御婚禮ありしを賀して。水戸中納言賴房卿。常陸介光貞朝臣。左衞門督光圀朝臣。右京大夫勝重ほゝめ諸大名樽肴を獻ず。午後下谷邊へ狩せさせ給ひ。鴻鸘を得たまひ。また銃もて鴈七打留給ふ。この日紀伊大納言頼宣卿へ御內書つかはさる。さきの回祿により。數々献物ありし故とぞ。(日記。紀伊記。)〇廿三日姫君三日の御祝とて。目付山崎權八郎正信御使して。尾邸へ五百八十の餅幷樽五十荷。肴二十種をくらせ給ふ。かなたよりも竹腰山城守正信を使して。五百八十の餅に樽二十荷。肴二十種そへてさゝげらる。山城守正信御酒たまひ。時服五襲かづけらる。(日記。)〇廿四日三緣山雲龍へ酒井讃岐守忠勝代參す。(日記。)〇廿五日高田へ御狩あり。眞鶴一隻は銃にて打とめたまひ。一隻は鷹にてとらせらる。大橋重保入道龍慶がもとにて御膳奉る。(日記。曾我日記。)〇廿六日昨日鷹にてとらせ給ひし鶴を　大內。銃もて打留給ひし鶴を　院に膳進せらる。又酒井讃岐守忠勝に。鎌倉三浦本牧にて放鷹の地を下さる。又土井大炊頭利勝が病をとはせ給ひ。歩行頭小出越中守尹貞をつかはさる。(日記。水戸記。)〇廿七日非伊掃部頭直孝に。御側中根壹岐守正盛御使して。阿蘭の雉子を給ふ。(日記。)〇廿八日千代姫御方四城の奥へまうのぼりたまふ。右兵衞督光友朝臣もまうのぼられ。白木書院にて御對面あり。眞守の太刀。時服五十。卷物五十。銀千枚獻ぜらる。大納言頼宣卿も定利の太刀。時服五十。綿五百把。金百枚さゝげらる。御盃つかはされ光友朝臣へ五月雨郷の御刀。吉光の御脇差を引出物し給ひ。頼宣卿へ貞宗の御刀。大森吉光の御脇差をつかはさる。御三獻はて、後竹腰山城守正信。成瀨隼人正正虎拜謁し。次に水戸中納言賴房卿。常陸介光貞朝臣拜謁せらる。正信正虎に時服十。銀二百枚。志水藏人忠正時服十。銀五十枚たまふ。(日記。家譜。)〇廿九日松平筑前守光高。松平越後守光長。松平出羽守直政登營し。昨日御聟君御對面有しを賀す。(日記。)〇晦日紀伊大納言頼宣卿病日を追て快復せらるれば。兼日邸中に御家人を付置るゝ事を辭せらる。(紀伊記。)

上依江戸城修築令諸士發夜

大猷院殿御實紀卷四十二　寛永十六年十月に始り十二月に終る

○十月朔日御咳氣により。出仕のともがら老臣に謁しそゝく。（日記。）○三日亥日の御祝例のごとし。たゞし御病後により御祝の餅に。御手付させ給ひて入御あり。その後各拜賀す。（日記。）○五日二丸にて猿樂あり。（曾我日記。）○六日菅薗院門跡尊純法親王へ。使番瓜田長兵衛幸政もて櫛井菓子をつかはされ。細川忠興入道三齋へは。使番酒田玄蕃頭定正。藤堂大學頭高次へは使番能勢次左衛門賴重御使して。今度撰造の地へは家老をして付置しめ。その身は時々巡視すべしと仰つけらる。（日記。）○七日小松中納言利常卿はじめ十人の大名へ。御使して菓子を給ふ。本城撰造の間各所假屋多きによて。小姓組七人。書院番八人。大番十五人巡夜の事命ぜらる。この日紀伊亞堂主馬蕭長。新庄右近助直綱なり。夕かけて城外にならせたまふ。この日紀伊亞相辭せらるゝにより。小姓組番頭安藤伊賀守重元。加々爪甲斐守直澄。かの邸に赴て。伺候する事をゆるさる。又御膳奉行三宅惣右衛門康政三子藤三郎康盛めしいだされ小姓となる。（日記。紀伊記。寛永系圖。）○八日松平筑前守光高はじめ八人の組に。御使もて菓子を給ふ。きのふ仰付られし巡夜の組に各所を分配せらる。神田橋邊。飯田町坂下。錢瓶橋。淨願寺前。一番は。夜。書院番水野小左衛門守正。正木左馬允康長。曉は小姓組三淵縫殿助藤利。書院番松田善右衛門勝政。二番は小姓組水野藤右衛門元吉。書院番高木左兵衛正俊。大番柴田傳右衛門正吉。牧野助兵衛正服。三番は書院番三井市藏吉次。渡邊與右衛門正。大番猪飼半左衛門正久。岡部小次郎吉次。山の手は山王前より餘田町坂下まで。一番小姓組山田清大夫重棟。書院番本多舟後守重世。大番遠山四郎兵衛景綱。土屋半右衛門正吉。二番は小姓組三宅半七郎重吉。太田十左衛門吉次。大番成瀨吉平正吉。本間太左衛門祇直。三番書院番喜多見五郎左衛門重俊。大番植村庄右衛門正相。八木忠三郎數政。米津彦七郎正守。櫻田山王より錢瓶橋まで。一番小姓組森次郎兵衛重機。書院番日根野長右衛門弘佐。渡邊內匠綱良。堀甚五兵衛秀嵩。二番大番加藤平右衛門一重。武藏孫之亟秀良。中山茂左衛門忠勝。高木喜左衛門正長。三番書院番石尾七兵衛治昌。能勢小十郎賴隆。藤堂主馬蕭長。新庄右近助直綱なり。夕かけて城外にならせたまふ。この日紀伊亞相辭せらるゝにより。安藤彦四郎直政彼邸に伺候する事をゆるさる。明日よりは每日一度づゝまかりうかがひて。その樣聞え上べしとなり。（日記。紀伊記。）○九日高田邊御狩あり。落合の原にて鷹放させ給ひ鴈鴨からせられ。酒井讃岐守忠勝が別業にて御膳奉り。大橋重保入道龍慶が宅前にて鶴を得給ふ。鴈鴨は久世大和守廣之して。尾紀水三邸へつかはさる。菊亭右大將參向により。吉良上野介義弼慇勞の御使す。（日記。曾我日記。吉良日記。）○十日小石川邊へ御かりあり。高田にて御膳奉る。故大友左衛門督義親が舊邸へよぎらせ給ひ。日くれてかへらせたまふ。（日記。曾我日記。　大友は三千石餘領せしが。元和五年死し嗣子なくいへたえ。伯母佐子局東福門院御方に宮づかへし奉りしかば。局が弟松野右京正照が三子內藏助義孝をやしなひて子とし。義孝明曆三年に召いだされ高家となりしなり。）○十一日王子邊へ御狩あり。かしこにて堀田加賀守正盛御茶を獻ず。（日記。）○十二日菊亭右大將經季卿參向してまうのぼり拜謁し。太刀目錄綱紗十卷さゝげ。傳奏奉りしを謝し。北面山本右衛門尉某。山本木工某も物さゝげ拜し奉る。脇坂淡路守安元。山口但馬守弘隆。駿府加番はてゝ歸り謁す。酒井讃岐守忠勝は狩場にありしが。めされてかへり謁す。この日板倉周防守重宗二丸にて御茶を獻す。青山大藏少輔幸成御相伴に伺候す。又醫官半井驢庵成近が子三位成忠家つがしめらる。（日記。）○十三日高家大澤右京亮基重御使して。菊亭右大將經季歸洛の暇給ひ。銀百枚綿百把つかはされ。山本右衛門尉某。山本木工某に銀十枚づゝ下さる。（日記。）○十四日大久保邊へ御鷹狩にならせらる。作事奉行佐久間將監實勝が別業にて御膳奉る。（日記。曾我日記。）○十五日月次拜賀例のごとし。尾水兩卿に狩場の暇たまふ。尾邸の老臣井右武衛の傳役物奉り拜謁す。秋元但馬守泰朝。土屋民部少輔利直。西尾丹後守忠昭。細川玄蕃頭興昌。淺野內匠頭長直。大關土佐守高增火災のとき心いれ消防すべしと命ぜられ。丹後守忠昭は紅葉山に餘炎及ばず。人數引具し巡察すべしと命ぜらる。使番川勝丹波守廣綱。大和國高取城目付代命ぜられて暇たまふ。加茂社人藤木十左衛門某針治に精しければ。召出され廩米二百俵。月俸廿口下さる。（日記。水戸記。）○十六日小普請山水新五左衛門吉正死して。其子書院番助八郎重吉家をつぐ。（寛永系圖。）○十七日二丸　內宮へ御參あり。こたび姬君御婚禮なりて。　大宮より數々進らせられしにより。御手書進らせられ謝したまふ。又本城撰造の折から。各所に失火する事絕されば。市中警火の事を兩町奉行に令せらる。（水戸記。日記。）○十八日戸田因幡守忠能養子主膳忠昌。牧野右馬允忠成五子左近忠清。書院番長谷川縫殿助正尙養子小兵衛守俊。馬廻桑島孫六郎吉宗子助左衛門吉成初見の禮をとる。船手頭小濱久太郎嘉隆大坂よりかへり謁す。小姓組三宅半七郎重吉小十人頭になる。小姓組番頭川窪越前守信雄子新十郎信貞。書院番組頭長谷川淡路守正信子書院番久三郎正相家つがしめらる。越前守信雄に給はりし七百石の加恩は收公せらる。（日記。）○十九日高田へならせらる。（曾我日記。）○廿日高田へならせらる。御狩場に於て農民二三人馬に乘連れ御前を過しかば。彼道捕へよと腰物持役加藤甚之助治次に命ぜらる。甚之助これを奉り追かけしかど。はや程遠く見失ひたりと申ければ。御けし

上堀直時之分封上堀直寄

き損ㇾ。今日中追捕へ得ざらんには。治次曲事たるべき旨仰出さる。よて治次甚驚き。かされて追かけ引とらへたり。この農民は小納戸安西甚兵衛元眞が采邑のものとぞ。されど治次をば小姓組番頭大久保左馬允忠知に預らる。(日記。水戸記。)○廿二日越後國村上城主堀丹後守直寄遺領十万石たりといへども。沒前に十七万石餘の軍役つかふまつらん事請置しにより。今度十三万石の高になされ。十万石は嫡孫千助直定わづかに四歳なるに給はり家つがしめ。三万石は二子七郎五郎直時に分たしめられ同國安田に住す。この直寄は臨物直政が二子なり。直政は奥田と稱す。ある說に室町家の時管領たりし斯波武衛の後にて。尾張の國奥田といふ所を領せしかば。奥田とは名のりたり。直政織田殿のとき。堀久太郎秀政が從弟なればとて。秀政が手に屬せらる。豐臣關白の時にいたり。奥田を改め堀となのる。斯波は室町殿の同族。正しき清和源氏なるを。此時より藤原氏と稱せしとも聞ゆ。直政秀政が女子を妻とし。その腹にまうけたる雅樂助直次に家つがせ。直寄は童より豐臣太閤の近侍し。十六歳のときみづから請て。朝鮮の軍に赴かんと申けれぱ。太閤その勇氣を感ぜらる。慶長三年叙爵して丹後守と稱し。越後國の内にて一万石領し。坂戸の城に住し。秀政が子秀治が領所の目代につけらる。五年關原の軍おこりしとき。八月朔日下倉の城の後卷ㇾ。三百餘人が首切てみづから

も太刀打し首を取。同二日には四日市の賊二百人が首切て關東に奉る。　兩御所御感なゝめならず。御書給はりて其功を賞せらる。直政卒して後直次直寄が兄弟の間むつまじからざりしかば。十四年直寄駿府に參り。封事を奉り愁訴するに及ぶ。十五年春駿府の城に於て。閏二月二日　兩御所兄弟を御前にめし對決せしめらる。直次遂に論に負て。秀治が子越後守忠俊までも。主從ともに罷歸りぬ。此時より直寄は御家人になりて。信濃國飯山の城主とせられ四万石給ふ。そのとし十月九日駿府の城大火ありしに。直寄一番にはせ參り消防の功擢群なり。(世に傳ふる所。其頃は世に防火の器械收貯するもの少かりしに。直寄數多の器械に己が名を書付。こゝかしこにすて置たり。人々しるもしらぬもこの器械をひろひ取。火を消したる事なれば。今日のと直寄一人が功に歸し。日頃用意の程御感にあづかりしといへり。)十六年一万石加へ給はり。五万石になされしも。この御賞とぞ申ける。十九年の冬大坂の兵起りしに。神祖の御本陣を守り。元和元年の夏大坂の兵かさねて起りしときは。大和路より向て。五月六日道明寺の戰に敵を破り。明る七日の戰ひに首八十七切て獻ず。松倉豐後守重正と道明寺の功を爭論し。　兩御所の御裁斷を仰ぐ。四月朔日　神祖御病床に直寄をめし給ひて。もし天下に叛逆を企るともがらあらば。一番合戰は藤堂高虎二番井伊直孝。直寄は其兩備

の間に有て。横鎗を入べしとの恩命を蒙り。このとし三万石加恩ありて八万石になされ。飯山城より越後國長岡城を給ふ。(藩翰譜には八万石になされし後。江戸城築かれしとき。十万石の役つかふまつるべしと望しかば。九万石の役命ぜらる。その後所領の田畝地せしかば。一万石を得たりとてます〳〵十万石の役を望により。その望にまかせられき。元和四年の事とぞ傳へける。又ふるき人の申けるは。直寄常に我所領もし十万石にみたば。風雲の會に乘て天下はかるにたらずと申けるが。いかにも十万石に至らんとを思ひければ。かく色々には計りて遂には本意のごく十万石になりしに。猶も十七万石餘の軍役を常に望申せしその志のほど。いかゞあるべきにや。この事ども人童稚より老後までの言行。世に傳へしめづらかなる事どもの少からず。されども國家の大躰にあづからざる事ゆへ。今はもらして記さず。)ことし六十三歳にて六月二十九日に卒したり。嫡子兵部大輔直次父に先立て卒しければ。嫡孫もて家はつがせられしとぞ。又松平伊豫守忠昌在封にて大病のよし聞えければ。書院番頭中根大隅守正成を。越前の國福井へつかはさる。醫官野間玄琢成岑はこのほど京都にあれば。速に越前に赴き治療すべき旨奉書を下され。忠昌が毎濟夏院尼へは小姓組番頭池田帶刀長賢。小姓組番頭久世大和守廣之御使として。菓子つかはさる。(日記。實我日記。)○廿八日月次拜

大猷院殿御實紀卷四十二　寛永十六年十月　五百四十九

ふ大久保邊御鷹狩あり。(日記。藩翰譜。寛政重修譜。)○廿三日松平右京亮重就封の暇給ふ。尾水兩郷へ松平伊豆守信綱御使して大鷹二据づゝつかはさる。板倉周防守重宗日光山參拜のいとまたまふ。小十人組より腹物持鐵炮藥込役命ぜらるゝもの六人。(水戸記。紀伊記。日記。)○廿四日紅葉山　靈廟へ詣たまふ。三家井伊掃部頭奉侑のごとし。大番より腹物持井鐵炮藥込役となるもの七人。(日記。)○廿五日大塚板橋高田邊へならせらる。此日水郎より大鷹を獻ぜらる。又大番佐橋甚左衛門吉堅その組頭になる。(日記。水戸記。)○廿六日尾水兩郷狩場より使もて。鴈一双づゝさゝげらる。松平河内守定頼。石川彈正大弼雕勝。青山大膳亮幸利就封の暇たまふ。秋元但馬守泰朝は日光山の事命せられ暇下さる。書院番頭酒井壹岐守忠重二子藤松忠正。歩行頭彦坂平六郎重定二子源三郎重治。保科彈正忠正貞養子圭水正景。駿府作事奉行大島茂兵衛嫉唯子兵吉義近。小普請奉行飯田清左衛門在久子三大夫在勝。小姓組内藤左七政俊子菊太郎政忠。裏門番頭小林勝之助正直子千代菊正忠。奥方番伊達勝兵衛房次子大學勝治初見し奉る。夕かけて城外へならせ給ふ。(日記。)○廿七日柳生但馬守宗矩が別業へならせられ。則重の御刀を獻ず。藥莵へもならせらる。けふ尾水兩郷狩場へ書院番頭池田帶刀長賢。小姓組番頭久世大和守廣之松平出羽守直政へは書院番中根五兵衛正次もて訪せらる。け

賀例のごとし。堀千助直定祖父丹後守直寄の遺物とて。繻光の刀。宗邇の茶入を献ず。堀七郎五郎直時分封を謝し奉る。書院番堀三左衛門直氏駿府目付のいとま給ひ。使番大久保甚右衛門長重。長谷川太郎兵衛正清。備中國成羽よりかへり謁す。酒井河内守忠清より白雀黒釜ふがはりの鳩を献ず。また在封の諸大名より。千代姫御方御婚儀を賀しもの奉るにより奉書を下され。使者にも疎かづけらる。夕かけて城外へならせたまふ。又このほど諸驛路に盗賊ありて。往來の旅人が憫すよし聞えければ。東海木曾兩道へ歩行目付つかはし。査検せしめらる。(日記。水戸記。)〇廿九日府内無頼の徒徘徊し。剽盗をなす聞えあれば。與力同心を廻らし。殿に追捕せしむべき旨惣物頭に命ぜらる。こたび本城二丸に御移徙あらば。保科肥後守正之。石川主殿頭忠總西城を警衛すべしと命ぜらる。夕かけて城外へならせらる。(日記。)◎是月渡邊七郎兵衛年綱初見す。(寛永系圖。)〇十一月朔日出仕の罷老臣に謁し退く。午後城外へならせ給ふ。(日記。)〇二日酒井讃岐守忠勝が別業へならせられ。板倉周防守重宗陪從して御馬を下さる。この時水郎より鮮鯉を献ぜられしかば。すぐに調理して御膳を奉る。櫻井助右衛門正吉死す。子惣助吉久は駿府亞相頓崇らせられ!時。御勘氣を蒙りしゆへ家つがせられず。吉久後にいたり召返され御家人となる。(日記。水戸記。寛永系圖。寛政重修譜。)〇三日二丸假殿に御移徙あり。群臣ことごとくまうのぼる。保科肥後守正之。石川主殿頭忠總御前に召て。四城勤番心用ゆべき旨面命せられ。次に諸有司拜謁す。越前國福井に御使せし書院番頭中根大隅守正成歸謁す。大猷正天海は　東照宮御緣起の草案を御覽に備ふ。(日記。)〇四日御緣起の案を紀伊郎に遣はされ。三廟合して拜覽せらるゝ。(初遣)事はてゝ酒井讃岐守忠勝して知樂院へ持參せしめらる。青山善四郎重長死して。原祿二千石の内千石。養子新九郎利政へ下さる。(日記。寛永系圖。)〇五日夕方城外へならせ給ひ鴨三得給ふ。(日記。)〇六日留守居酒井和泉守忠吉二子午之助忠經。佐渡奉行高木筑後守正次養子九兵衛正勝。先手頭屋代越中守忠正養子甚三郎正與。使番川口茂右衛門宗重養子友之助宗憲。櫻井庄之助勝成養子勝五郎勝正。御膳奉行犬塚平右衛門重世養子小善次忠世。二丸留守居齋藤金七郎政吉子助十郎正利初見し奉る。京鑒坂以鏡菜初てまいり拜謁す。小姓横田大和胤松小姓組にいる。夕かけて城外へならせ給ふ。(日記。家譜。)〇七日二丸搆造成功により家門井諸大名まうのぼり賀し奉る。紀郎へ阿部對馬守重次御使す。夕かけて城外へならせ給ふ。(日記。)〇八日花房勘右衛門正盛ふたたび舊のごく目付を命ぜらる。(日記。)〇九日麻布邊より芝浦まで狩せさせ給ふ。(日記。替我日記。)〇十日一色宮内茂直三子内記直氏。日向半兵衛正成子數馬政次。書院番組頭松平監物乘次養子右衛門八正貞。大坂金奉行若林與右衛門包盛養子兵九郎忠直。二九　御宮附三浦八郎左衛門義勝子小左衛門義景初見の謁たとる。新に右筆仰付らるゝ。翌四人。(日記。)〇十一日數寄屋にて今朝尾水岡鄉井毛利甲斐守秀元御茶をたまひ。豊は松平越後守光長。松平筑前守光高。松平新太郎光政。松平安藝守光晟。有馬玄蕃頭豊氏御茶給ふ。藤堂大學頭高次は召れたれど。所勞によてまうのぼらず。高家吉良若狹守義冬日光山の奥方番になる。(寛永系圖。)〇十九日細川忠興入道三齋歸國の辭見し奉り。五條三位俊成卿。京極中納言定家卿兩筆の書幅を御てづから給はる。この日高田邊へ御鷹かりあり。鑒員田湯清墨道賀死して。子江齋意春家をつぐ。(日記。寛政重修譜。)〇廿日牛込邊へかりせさせ給ふ。(御徒方万年記。)〇廿一日井伊播部頭直孝。松平越中守定綱をめして。松平伊豆守信綱仰を傳へしは。明日吉辰により。本城二重三重の多門柱立のと。卽て時刻までも期定せられし所。御旨をもうかゞはす。期に先立て今日搆造に及びしはいとひが事なり。卽時にその多門共は毀ち去るべし。この後かゝる擧動せば。營作の卒他人に命ぜられ。その上にも嚴譴せらるべしとなり。(水戸記。)〇廿二日吉辰によて。城櫓多門の柱立あり。(日記。)〇廿三日品川に御狩あり。東海寺へわたらせたまふ。鵜鴻鴈鴨あまた得たまふ。(日記。)〇十四日今朝小松中納言利常卿に御茶給はり。豊は細川忠興入道三齋。立花宗茂入道立齋へ御茶を下さる。夜にいり幸若舞御覽あり。けふ記邸へ(松平伊豆守信綱御使す。(日記。紀伊記。)〇十五日出仕の罷老臣に謁し退く。(日記。)〇十六日朽木民部少輔植綱御茶を献ず。(日記。)〇十七日二九　内宮へ御參あり。鎗奉行松田六郎左衛門定勝。寛助兵衛爲春ともに旗奉行仰付られ。直に御前にて祝酒給ふべき旨面命あり。營中伺候の猥皆祝酒給はる。大僧正天海奥に召て拍子の御遊あり。宴たまふ。(日記。)〇十八日駿河大納言家につかへし杉原平左衛門忠明召返されて

正天海を召て御緣起御聽聞あり。天海に饗給ふ。はてゝ高田へならせられ。酒井讃岐守忠勝が別業にて御膳奉る。(日記。曾我日記。)〇廿六日松平筑前守光高。松平飛驒守利治就封の辭見す。小松中納言利常卿もまう登り謝し奉る。黄門父子も重れて奥に召て宴開かれ。光高に行光の御脇差を給ひ。又山里の御茶室に於て。父子とも御茶給ふ。富士見番富田庄兵衛政勝死して。子庄兵衛政成家をつぐ。(日記。寛永系圖。)〇廿七日土非大炊頭利勝が別業にならせたまひ猿樂あり。(日記。曾我日記。)〇廿八日出仕の翌老臣に謁し退く。けふ牛込邊御鷹狩あり。(日記。)〇廿九日大番牛奥七大夫吾成死して。子左源太吾次家をつぐ。(家譜。)〇三十日吉辰により本城搆造の地を御覽巡あり。搆造にあづかる翌へ褒斗を給ひて後。牛込の邊御鷹狩にならせたまふ。(日記。曾我日記。)◎是月水原八右衛門親好奥方番となる。(寛永系圖。)〇閏十一月朔日月次拜賀例のごし。本城石垣成功せしかば。藤堂大學頭高次拜謁し。家人その事つかふまつりし七人の徒。時服銀若干かづけらる。井上河内守正利子大學正任初見の禮をとる。未後高田へかりせさせ給ひ。小石川より水戸黄門賜房卿の邸へ渡御あり。黄門へ大鷹差羽二据をつかはさる。(日記。紀伊記。)〇二日品川へならせられ。柳生但馬守宗矩が別業にて。御膳奉り御釼法を試たまふ。(日記。曾我日記。)〇三日酒井讃岐守忠勝御緣起を紀邸に持參し。尾尓雨卿も會集して拜覽せらる。(日記。)〇四日小石川の邊へ御鷹狩あり。(日記。)〇五日井伊掃部頭直孝先に狩場の暇たまはりしが。けふかへり謁す。(日記。)〇六日諸老臣非板倉周防守重宗を白木書院に召て面命の旨あり。此日近年搜索せらるゝ所。天主教の伴天連を。今度保科肥後守正之の所領にて捕得たるより注進す。又各所無賴劇掠の徒徘徊する聞えあれば。急ちず追捕すべき旨。總物頭諸有司へ傳へらる。尾張亞相の狩場より使もて鴈一双獻ぜらる。又堀田加賀守正盛放鷹の暇給はり。川越の狩場へ赴くによて。大鷹二据給ふ。(日記。水戸記。)〇七日小松中納言利常卿のもとへ。松平伊豆守信綱もて所勞をとはせらる。この日表高家品川新六郎高久子内膳高如。使番花房右馬助正榮子小姓組又七郎榮勝家つがしめらる。大番中島五郎右衛門盛利土藏番組頭になり。土藏番組頭深尾掃部元治此六月死して。二子八大夫元重家をつぎ。父の職命ぜらる。長田喜平重政天樹院御方に附られ。大番松平長右衛門昌舍大坂藏奉行になり。武川芦田七九の徒三十人召出され。天守番仰付らる。此芦田黨といへるはもと甲州の士にて。のちに歸降せしな。駿河大納言家につけられたるが。大納言家御事ありし後。信州佐久郡に謫れしをこたび召出されしなり。水戸中納言賜房卿狩場より使して。鴈鴨各一双。雁壹一隻さゝげらる。又相摸國小田原海濱の漁人。石中に珊瑚珠を生ぜしを網引得たり。よて領主稻葉美濃守正則よりさゝげ奉る。(日記。寛政重修譜。富士見御寶藏番來由。水戸記。)〇八日近衛前關白信尋公歷物なやまるゝよし聞えければ。高家今川刑部大輔直房を上洛せしめ問せらるゝとて。けふ暇たまふ。使番石川彌左衛門貫成。小姓組鉛水友之助重氏大坂目付はてゝ歸り謁す。小松黄門の病訃聞給ふとて。使番永井監物白元つかはさる。未後王子邊御鷹狩あり。(日記。水戸記。)〇九日角田川邊かりせさせ給ひ。鶴鴈鴨得たまひ。六内　仙洞へ鴈一隻づゝ獻進せらる。又井伊掃部頭直孝へ小出越中守尹貞御使して鴈を給ふ。(日記。)〇十一日尾張亞相狩場へ曹院番頭稻垣若狹守重太御使し。水戸黄門狩場へ曹院番頭池田帶刀長賢御使して魚物つかはさる。けふ柳生但馬守宗矩が別業へならせらる。(日記。)〇十二日菅沼織部正定芳就封の暇たまふ。夜にいり奥にて幸若舞御覽あり。(日記。)〇十三日知樂院樞僧正忠尊遷化によて。その弟子延命院寺務相續するといへども。弱年の間は二丸　西宮の奉仕は。竹林坊命ぜらる。よて竹林坊に月俸五十口給ふ。松平和泉守乘壽。大手假橋の勤番仰付らる。天守下桔槹橋番奉りし菅沼織部正定芳就封するによりて。太田備中守資宗これにかはる。二丸　御宮番小林庄右衛門政成納戸番にかへらる。又今度搆造の間火災あらば。速に目付の翌に馳加り。消防の指揮すべき旨。町奉行加々爪民部少輔忠澄。堀式部少輔直之に仰下さる。もし防火の人數欠乏にたゞし。小笠原右近大夫忠眞。牧野右馬允忠成。内藤帶刀忠興をして加勢せしむべしとなり。右近大夫忠眞。右馬允忠成。帶刀忠興にも其よし仰下さる。又先に消防命ぜられたる在府の翌。しばゝ火災の地に出るをもて勞詞を給ひ。彌搆造中心いるべきよし命ぜられ。松平式部大輔忠次。奥平美作守忠昌當番をさだめ。搆造の人歩を指揮し。もはら火なからしむべし。非番の時は城外に屯して。當番の人數欠乏せば。當番よりの指揮にまかせ。城に入て萬事はからふべし。城邊に火ある時。四城は保科肥後守正之。石川主殿頭忠綱。兩人當番をさだめ心いれ警衛し。非番は四城門外に伺候し。非常のときならば當番より指揮にまかせ。入城して沙汰すべしとなり。(日記。)〇十四日搆造の間。三丸其外材木置るゝ所。心いれ巡察すべき旨火番の翌に命ぜられ。城邊に火あらば。森川半五日寒に入ければ外殿に出たまはず。出仕の翌老臣に謁し退く。この日使番大久保甚右衛門長重。書院番松田善右衛門勝政。竪後府內目付にさゝれいとま給ふ。(日記。)〇十六日祀伊の家司をめして。老臣仰をつたへしは。このほど寒威烈しければ。亞相つとめて朔望の朝會に登營あるに及ばず。和暖の日をみらみ心まかせにまうのぼらるべしとなり。小姓組番頭齋藤播津守三友御使して。井伊掃部頭直孝へ鴈一隻たまふ。

上水野勝成致仕

備後國福山城主水野日向守勝成衰老せりとて。年頃骸骨を請ひしきりなるにより御ゆるしあり。所領十万千石を長子美作守勝俊につがしめらる。この勝成は故右衛門大夫忠政が孫にて。和泉守忠重の嫡男なり。忠政嫡子は下野守信元にて。忠重は其弟なりとぞ。忠政の息女(傳通院殿なり。)岡崎の　贈大納言殿に參らせ。　神祖其御腹に降誕ましましければ。信元まさしき御外甥にて。御したしき御なからひなりしに。信元今川義元と中たがひて。織田殿にくみしけるにより。　贈大納言殿も北方を送りかへさせ給ひぬれば。兩家たちまち敵味方と分れ。合戰やむ時なし。然るに忠重は兄信元と不快なりしかば。永祿六年冬一向專修の門徒蜂起せし時。御味方に參り手をくだき戰ふ事度々に及び。此後常に御軍にしたがひ。軍のさきがけせずといふ事なし。天正三年冬信元織田殿のために討れし後。三河國刈屋の城を守る。しかるに後豐臣關白殿下に仕へ武者奉行を勤り。豐臣の姓まで給はり。叙爵せしはいかなるゆへにや。慶長五年の秋池鯉鮒の宿にして。加々井彌八郎秀盛がために討れ死す。勝成遂に家をつぐ。これより先勝成は十六歳にて。高天神の城攻に高名せしをはじめとして。甲斐の古府星崎の戰にも其功少からず。長湫の合戰にみづから敵の首切事三。御感ないめならず。其後本治城盤江の城にて敵を追崩す。かく度々の功名ありしが。少壯のとき身の行狀撿束なく。

暴橫の擧動かさなりしかば。遂に父の不興を蒙り刈屋の城を出奔す。此時　神祖ひそかに清洲の寺の中にかくし置給ひしといへり。しかりし後こゝかしこに流浪し。あるは佐々陸奥守成政。小西攝津守行長。加藤肥後守清正等が家につかへしともありしが。こゝにても人かしこにても人を切て立のき。また黒田甲斐守長政にもつかふ。長政ある時大坂にのぼるとて。船に乘て帆柱の繩とけといひしかば。頓て柱によぢのぼり帆繩をばひきときしが。長政國士を遇するの道をわきまへず。かゝる賤卑のしはざあふせたりと憤り。其夜船中より立さり。しばしが間毛利の家人三村紀伊守家親といふものゝ方に。大祿うけて口を糊してありけるに。ここにても童坊が不禮をとがめ。その童坊をたゞ一太刀に切てすて。都なさしてのぼりしに。大坂の奉行人等伏見の御館を攻べしと。洛中洛外騷動に及ぶ時にあひぬ。勝成これ幸の事こそ出來れと。御館にはせ參りければ。　神祖悅ばせ給ふ事大かたならず。されど父忠重さゝへ申ざれば。見參はゆるされず。後に山岡備前入道長友御使にて。色々と忠重に仰下されしかば。忠重遂に心やはらぎ父子對面な遂し後にぞ御前にもめされ。さて月俸百口を給はりける。やがて奥の會津御征伐にしたがひ。小山の御陣にありしが。父忠重池鯉鮒の驛にて討れたるよし聞えければ。勝成速に馳かへり。刈屋の城守るべしと仰くだされる。勝成は年頃父の不興蒙りし身なれば。今更家子郎等ども聞ふべしとも思はずと申により。今より後水野が家士等。かまへて勝成が下知にそむくべからざる旨御書をなし下さる。勝成この御書をいたゞきてはせかへり軍勢を催し。美濃國曾根の古城を守り。島津が兵と戰ひ。また大柿の城を攻て攻くだす。此後刈屋の城を領し三万石になさる。慶長十五年五月十一日從五位下して日向守と稱し。十九年冬大坂の城攻にはせ向ひ。元和元年の夏大和路の先陣を承り。大和の國勢なひきゐてむかふ。まことや去冬の軍には藤堂和泉守高虎この軍の總督奉り向ひしが。諸將其下知に應ぜざりしかば。今度は勝成に命ぜられしとぞ。五月六日の合戰に。敵の先陣打破り。首あまた切て御感の聞え。七日天王寺の合戰に。嫡子美作守勝俊と二手に別れ逃る敵を追ふ。勝成が手にて明石掃部助をうちとり。眞先に城中に攻いる。一番に旗をたて首九十七切とる。うちすては數をしらず。然るに神祖は勝成今度大和路の總督たる身なれば。少年の時のごとくかるゞしき擧動あるまじきよし命ぜられしに。今度の戰功かれての仰をそむきたりとて悅ばせたまはず。されども七月廿一日大和國郡山の城たまはり。三万石加へ六万石になされたるは。この賞とぞ聞えける。同五年八月四日四万石加恩ありて十万石となされ。郡山より備後國常興寺山に城を築き住す。八年八月二十八日地名を福山と改め。四海道の鎭守にささ

れ。このとき伏見城の櫓楯を下さる。寛永三年八月十九日從四位下にのぼり。このとし千石加恩あり。十四年肥前國有馬の賊徒征伐のとき。勝成さるふるつはものなればとてつかはさる。(このときのゆゝしき擧動は。十五年の記にくはしければこゝに畧しぬ。)齢つもりて八十六。寛文入道して宗休と號し。慶安四年三月十五日八十八歳にて終をとりしとぞ。この日令せらるゝは。頃日賊徒數多あるよし聞ゆ。よて來地ならびに居邸別宅等に不審のものあらばよく吟撿すべし。平日心を用ひざるにより。さるもの多くありと思召るれば。此後かたく命ずべしとなり。(紀伊記。日記。落穗譜。寛政重修譜。)○十七日紅葉山御宮に酒井讃岐守忠勝代參す。(日記。)○十八日尾紀水三烟狩塲より歸謁せられ。尾張亞相は鴈三。水戸黄門は鴈鴨小鴨を獻ぜらる。宗對馬守義成就封のいとま給ふ。松平伊豫守忠昌病中御尊の御使たまはりしを謝して。もの參りければ。其使御前にめし。御みづから病狀をとはせたまふ。松平支葛頭清昌參覲の拜謁す。未後城外へならせ給ふ。(日記。水戸記。)○十九日尾張邸へ諸老臣會議あり。世俗鴈奢の風を禁ぜられん爲とぞ聞えける。(水戸記。紀伊記。)○廿三日小出大和守吉英。戸川土佐守正安。高野山大塔造營奉行命ぜられ暇たまふ。京に御使せし今川刑部大輔直房歸謁す。(日記。)○廿六日青蓮院門跡尊純法親王。大僧正天海に御茶を給ひ。酒井讃岐守忠勝。板倉周防

上狩野探幽給東照宮緣起

守重宗相伴す。其事畢て法親王に　東照宮御緣起詞書繪卷の贈とて。新に寺領五百石よせ給ひ。鷹洛のいとまつかはさる。この御緣起の給つかふまつりし狩野探幽法眼守信に金十枚給ひ。裝潢師有庵に金五枚時服かづけらる。未後城外へならせたまふ。(日記。)〇廿七日常蓮院門跡昨日寺領御寄附ありしを謝してまうのぼらる。退出せられて後高家吉良上野介義彌御使して。門主に銀三百枚。綿二百把をくらせ給ひ。坊官等にも銀時服かづけられ。未後城外へならせらる。持筒頭齋藤伊豆守利宗番所に伺候せしを召て。供奉せしめられ。歷の取し鴨をたまふ。(日記。曾我日記。)〇廿八日月次出仕の罷老臣に謁し退く。四辻宰相公理。日野左少辨弘資家綱しを謝して參向ありしが。輕服によて二丸にはまうのぼらず。(この時二丸は內宮います故。服穢を改られたると見えたり。)三丸に登り老臣に謁す。即ち歸洛のいとま給ひ。宰相公理に銀五十枚。小袖。五弁。弘資は銀五十枚つかはさる。又水城惣石垣成功により。其勞つかふまつりたる酒井讃岐守忠勝が家士五人銀時服かづけらる。(日記。吉良日記。)〇廿九日この十二月六日は。故駿河大納言忠長卿十七年忌により。上野國高崎大心寺にて法會行はれ。安藤右京進重長御使す。(水戸記。)〇十二月朔日拜賀例のごとし。尾紀水三卿放鷹の暇給ふ。松平右京頭直。松平隱岐守定行。分部左京亮光信。堀久七郎親昌參觀す。水野美作守勝俊長子藤十郎勝貞初見の禮をとる。京所司代板倉周防守重宗上洛のいとま給ひ。面命の旨あり。水邸へ松平伊豆守信綱御使し。大鷹一据。常陸介光貞朝臣へ黃鷹一聯つかはさる。未後酒井讃岐守忠勝が別業にならせ給ふ。京醫木下道圓守清初見し奉る。(日記。水戸記。紀伊記。寛政重修譜。)〇三日吉辰なれば。本城大廣間。黑木書院。白木書院柱立あり。水戸黃門頼房卿擔造つかふまつらるにより。杤木民部少輔稙綱御使して樽一荷。鮮鯛一折つかはされ。井伊掃部頭直孝も同じ事により。徒頭小出越中守尹貞御使し。御紙色の旨仰下さる。(日記。水戸記。)〇四日大久保邊へ御狩あり。作事奉行佐久間將監實勝別業にて御膳奉る。川越喜多院　駿府賓頭院住職を命ぜらる。松平伊豆守信綱及寺社奉行して。增上寺にまかりこの命をつたふ。(日記。曾我日記。)〇七日柳生但馬守宗矩別業にならせらる。(日記。)〇八日聖護院門跡道晃法親王三井寺にて灌頂の謝として雜數薰物奉らる。松平阿波守忠英。京極左京高治母堂へ銀綿をつかはさる。(吉良日記。日記。)〇九日昨日は大雨。けふは烈風により。日光山に驛をはせて。山中のさまとはせらる。又紀邸へも久世大和守廣之御使して。けふ病後の起居を御尋問あり。(日記。)〇十日紀伊大納言賴宣卿へ。藥苑の藥材三十三種つかはし給ふ。常陸介光貞朝臣狩場より使もて鴈さゝげらる。(紀伊記。)〇十一日初雪降ければ。三家使もて御けしき伺ばる。小姓組番頭加々爪甲斐守直澄もて。紀伊亞相薨中の起居をとはせ給ふ。(水戸記。紀伊記。)〇十二日煤拂あり。例は廿日にこの式行はるれど。ことしは十六日立春によて。けふに取こし行はれしとぞ。庖所役用の事査檢すべき旨。勘定頭伊丹順齋康勝。曾根源左衛門吉次。留守居牧野內匠頭信成。杉浦內藏允正友に命ぜらる。未後城外へならせ給ふ。(日記。)〇十三日新に廩米三百俵づゝ給ふ書院番十七人。又右筆二人も同列と同じく給ふ。榊原小右衛門宣臨もとのごとく三百八十俵賜ひ納戶番にいり。指田九郎左衛門延久も舊のまゝに二百俵たまひ。小十人にいれらる。尾張右武衛狩場より歸り鴈二さゝげらる。(日記。)〇十四日高家吉良若狹守義冬日光山　御宮立春代參の暇たまふ。鍋島甲斐守直澄母へ綿をつかはさる。けふ紀伊常陸介光貞朝臣狩場よりかへらる。(日記。紀伊記。)〇十五日月次拜賀の祕宰臣に謁し退く。又水戸左金吾狩場よりかへりまうのぼらる。三家并諸大名重陽時服獻ぜし家々に御內書たまふ。此日追儺。酒井河內守忠清初てつかふまつる。(日記。水戸記。)〇十六日立春なり。松平新太郎光政。松平右衛門佐忠之謁人交替す。(日記。)〇十七日紅葉山　御宮御參。尾水兩卿幷在府の諸大名陪從し。今川刑部大輔直房御劔の役す。かへらせ給ひて後。大僧正天海。東海寺澤庵をめして饗せられ能あり。高砂。田村。三輪。國栖。葵上。藤戶。祝言なり。三輪は柳生但馬守宗矩。國栖は永井日向守直清。葵上は大橋龍慶重保。藤戶は作事奉行佐久間將監實勝。その外は猿樂等つかふまつる。又杤木民部少輔稙綱風流躍御覽にそなふ。(日記。水戸記。)〇十八日高田へならせらる。大橋龍慶重保がもとにて御膳奉る。紀伊亞相感冒のよし聞えければ。安藤伊賀守重元御尋問の御使す。(日記。曾我日記。水戸記。)〇十九日白木書院に大番書院小姓組三番頭小十人頭歩行頭を召て。　當代はとさら諸士へ加恩も給はり。金銀も恩貸せらるゝ所。近年一統家計困難せるよし聞召る。其ゆへよし委詳に査檢して。聞えあくべしと命ぜらる。この日二丸にて小姓組番頭齋藤攝津守三友御膳を奉る。(日記。水戸記。)〇廿日大久保邊御狩あり。作事奉行佐久間將監實勝がもとにて御膳奉る。けふ紀邸へ小姓組番頭加々爪甲斐守直澄御尋問の御使す。(日記。曾我日記。紀伊記。)〇廿一日溜谷邊へならせられ。杤生但馬守宗矩がもとに立よらせ給ひ茶宴あり。細川越中守忠利。毛利甲斐守秀元。有馬玄番頭豊氏俄に召れ御相伴に伺候し。夜に入て飯法試み給ふ。(日記。曾我日記。)〇廿二日立花宗茂入道立齋病臥せしにより。杤木民部少輔稙綱御使して御尋問あり。未後城外へならせらる。(日記。)〇廿三日三家はじめ諸大名。歲暮の時服を獻ず。例は諸家の使者御前に召れ。拜し奉るといへども。御病後により其事なし。松平右京頼重今年始て時服を獻ず。(日記。)〇廿四日

下貧困之原査檢旗本

紅葉山　靈廟へまうで給ふ。兼てけぶは三緑山　靈廟に詣たまふべしと定められしが。御疾氣に渡らせ給へば。酒井雅樂守資爲。御膳番水野右京亮勝忠ともに書院番に入られ。鳥居内膳忠直は廩米二千俵賜はり寄合になる。寄合伊勢兵庫貞衡は千俵給はり。小姓大草主膳高盛は御膳番命ぜらる。無足の大番山里へならせられ猿樂あり。又代官市岡理右衛門忠次死して。五十人に廩米二百俵づゝ。小十人組にも廩米給はり。武川芦田子書院番多左衛門定次家をつぐ。(日記。水戸記。寛永系圖。)〇の闕跡の如く采邑廩米給はり。兒醫人見元德貫知。太田次兵衛廿五日四城石垣改築成功せしかば。其事奉りたる土井大炊頭宗勝召出され廩米月俸下さる。大番并代官勘定の徒父死して。利勝。松平式部大輔忠次。奥平美作守忠昌。酒井河内守忠清。松子家つぐもの若干なり。先年御勘氣蒙りたる前田五左衛門定平因幡守忠雄。松平采女忠節。稻葉美濃守正則。井伊兵部少輔頁。加藤清兵衛正重。内藤興三兵衛正守。河四兵九郎親秀。八木直好。織田百助信昌。諏訪因幡守頼水。眞田伊豆守信之。眞田隼次郎右衛門重明。板橋三郎兵衛某。足崎新六某召出され。舊のA正信貫。眞田兵吉信澄。佐久間藏人勝友。佐久間源六郎勝盛。ごとく廩米下さる。(日記。水戸記。寛政重修譜)〇廿七日春日安藤右京進重長。鳥居主膳忠春。酒井万千代忠能。家司等假時局御使して右武衛のもとに歲暮をほがせたまひ小袖つかはさ服かづけらる。けふ松平土佐守忠義證人交替す。また手水番荒る。武衛よりも小袖三。鯉五尾奉らる。紀郎へは安藤伊賀守重川丹波守持暇に。四百石加へられて七百石になり。高島左近長元御使して病牀をとはせ給ふ。又使番石川彌左衛門貴成御使親に三百石加へ五百石になされ。共に御膳番仰付らる。(日記。して。小松黄門の所勞尋下さるとて鵞を給ふ。(水戸記。紀伊紀年錄。)〇廿六日市谷邊放鷹の御遊あり。これよりさき諸有記。日記。)〇廿八日歲暮拜賀例のごとし。眞田大内記信政井長司を御前に召て。近年各局の諧調度其外庖所等の物價騰貴子勘解由信就弟隼人正信重。酒井備後守忠利。内藤文藏信直參するをもて。下々みだりなる樣に聞ゆ。今より後萬事節儉を守觀す。溝口出雲守宣直が食客越後浪士織田金左衛門順高初見り。留守居牧野内匠頭信成。杉浦内藏允正友。勘定頭伊丹康勝し奉る。松平長門守秀就家醫品山支昌景吉同じく初見す。右兵入道順齋。曾根源左衛門吉次の指揮をうけはからふべしと面衛督光友朝臣腋ふさぎ(今の世にいふ袖留のごとなり。)の祝命せられ。四人の輩へも。ことさら心いれ沙汰すべき旨仰付らて。使もて時服并魚物奉らる。未後牛込邊御狩あり。この日書

上儉約令

下腋ふさぎ祝(袖留祝)

院番瀧川長門守利貞。土屋兵部少輔之直。岡野長十郎成恒進物番になされ。石川甚十郎邦穩。折井左京正利。阿部五郎三郎正義御膳番になる。又芦屋勘右衛門忠賴死す。子なくして家絶たり。(日記。寛政重修譜。)〇廿九日城中各門勤番の輩彌怠慢なく警衛し。不審の者咎捡すべし。若見のがして他より見顯はさば。當番の輩罪たるべき旨。先手頭の輩へ老臣仰を傳ふ。二丸にて猿樂あり。(日記。水戸記。)〇晦日諸大夫仰付らるゝもの五人。京極刑部高和は少輔になり織田百助信昌は因幡守と改め。織田辰之助信勝は上野介。加藤式部少輔明成子孫三郎明友は内藏助。鳥居主膳忠春は正になる。布衣着する事を免さるゝ者九人。目付野々山新兵衛兼綱。小姓組與頭柴田七九郎康久。書院番組頭酒井作右衛門重之。上野八郎右衛門貞當。先手頭并戸新右衛門直弘。歩行頭北條新藏正房。兼松又四郎正尾。大久保彦十郎忠眞。能勢市十郎賴永なり。醫員岡本玄琳介球は法眼。清水龜庵瑞室。瀧江徹齋氏胤は法橋に叙す。又致仕水野日向守勝成。太田備中守資宗就封のいとま給ふ。此日尼水及び三世子まうのぼり。老臣に謁して歲暮を賀せらる。(日記。水戸記。)◎是月醫員瀧江徹齋氏胤に月俸十口加へ給はり。加茂宮金左衛門直能に廩米給はり。安西六郎右衛門定之大番に召出され。もと駿河大納言家につけられし柳澤十右衛門安忠召出され御家人に列す。(家譜。寛永系圖。)◎是年松平新太郎光政子三左衛門が生母は。天德院御かたにしたがひ奥にて見え奉る。千代姫御かた附太田次兵衛宗勝三百俵加恩あり。秋山市左衛門近憲子惣三郎遠治。遠見勘右衛門義重子長太郎澁賞。都筑源左衛門某子源三郎某。納戸番小佐手左源太信家子五左衛門信忠。大番森川才兵衛長良子助左助衛門長重は。父死して家をつぎ。青山虎之助義成。森川庄兵衛次吉子庄左衛門次政。藪科孫九郎爲虎は大番にいり。間宮助左衛門信正次子次郎兵衛信重。筒井彌左衛門久忠三子彌兵衛忠重。須田平左衛門盛常は初見し奉り。駿河大納言家に付られたる内田八兵衛定次。玉虫次郎右衛門俊茂は召かへされ。依田權兵衛信忠は二百石たまはり。廢敷置命ぜられ。曾雌彌九左衛門定次。多田次郎右衛門昌繁。内山七兵衛永明は祿たまはり天守番となり。曲淵甚右衛門信行。曲淵清兵衛吉門召返され。鵜井宗左衛門久信も召かへされ采地二百石たまはり奥方番になる。渡邊吉左衛門多組父舊邑なればとて。山城國一乘寺并田中にて采邑をかへ賜ひ。杉原小左衛門昌明子小左衛門之明。大井小兵衛滿美。石原太郎右衛門吉次采邑を給ひ。石野六左衛門廣吉子三左衛門廣尚。森川兵左衛門重勝。岡谷與五兵衛重信。榊原喜平次正之。瀨名小左衛門貞利。秋山伊兵衛正勝子七郎兵衛朝正はじめて廩米をたまふ。大井新右衛門政景。林治大夫重直。大澤次郎左衛門信詮。蘆波田善左衛門憲長大番にいり。駿河大納言家につけられたる波多

野次郎有綱もめしかへされて大番にいる。勘定頭伊丹康勝入道順齋小普請支配をかれしめられ。中奥番伊藤安兵衛正次は小納戸奉行。遂奉行大河内善左衛門政憲は本城諸所給奉行。書院番大久保新八郎康任弟平六郎忠知は近侍命ぜられ。曜岐五郎右衛門重世は國目付。小泉次大夫吉綱は忍の代官。稻田喜藏正信は手鷹役となる。(寛永系圖。家譜。)

大猷院殿御實紀卷四十三　寛永十七年正月に始り四月に終る御齡三十七

寛永十七年庚辰正月元旦の慶會二丸にて行はる。御齒固大服以下の御祝例のごとし。紀伊大納言賴宣卿は去年の所勞快して出仕ありければ。と御更衣色の旨仰を下さる。二丸は殿閣狹ければ。布衣以上諸物頭并に小姓組二組書院番のみ拜賀す。諸大夫以上及法印法眼に賜はる時服は。西城において授らる。朝會はてゝ後酒井河内守忠清御祝の御饌を獻ず。兎吸物菓麵等例のごとし。また土井大炊頭利勝酋年より病臥して家にあれば。內田信濃守正信御使し。御盃を其家に給ふ。(日記。紀伊記)○二日例のごとし。但し二丸は狹少なれば。元日にことゞく出仕する事をあたはず。諸有司諸番士昨今兩日にいてゝ拜賀す。朝會はてゝ御齒固御鏡餠を供御す。諮詢始例のごとし。事はてゝ御座間にて諸老臣宴を給ふ。酒井讃岐守忠勝及び柳生但馬守宗矩にはと更御盃を下さる。この夜紀伊大納言賴宣卿は病後によて出仕をとゞめらる。(日記。紀伊記。)○三日例に同じ。高家吉良上野介義弼日光山より歸謁す。致仕水野日向守勝成齒年就封のいとまたまひしかば。けふまうのぼり禮し奉る。小姓組。大番。小十人組の番士井寄合の輩元日二日に出仕せざるは。けふまうのぼり拜賀し奉る。未後城外へならせ給ふ。(日記。)○四日元日拜賀の輩。例は御前にて時服給ふといへども。二丸狹少なるがゆへにけふその輩を西城にめしてかづけらる。(日記。)○五日大僧正天海はゝ宗の猊井東海寺澤庵拜賀し奉る。澤庵には御對面所にて雜煮を下さる。この日烈風餘寒甚し。(日記。)○六日未後城外へならせらる。(日記。)○七日若槃御祝例のごとし。はてゝ西城にわたらせ給ふ。高家吉良若狹守義冬伊勢より歸謁す。また增上寺雪念はゝ宗の寺社人拜賀す。例はきのふなれど風烈により。けふにのべられしなり。この朝會畢て二丸に還御なる。けふ地震甚し。在府の諸大名使もて御けしきをうかゞふ。又同ゝ事により老臣の奉書つかはし。松平右衛門大夫正綱に日光山中のさまなどはせらる。この日未後牛込の邊かりせさせ給ふとて。酒井讃岐守忠勝が別墅にわたらせたまひし御道にて。持弓頭松平新五左衛門直次所屬の同心(立原久大夫。白崎八左衛門。)二人。はか

下誠足輕等侈

らず。出て御眼路にふれたり。しかるにこの兩人足輕の身に應ぜざる美麗の上下衣服を着したり。しばゝ儉約の令を下さるゝ所。卑賤の身にて華奢のふるまひなすと。言語に斷たり。立所に斬に處せらるべしと雖も。歲首初て忠勝がもとへならせ給ふ事なれば。しばし寛宥の御沙汰とて。新五左衛門直次を召出され。嚴しく戒め給ひ。かの同心二人ともに新五左衛門直次に預けらる。かくて忠勝が別墅にては立花宗茂入道立齋。永井日向守直清。柳生但馬守宗矩及び澤庵等をめして御宴あり。(日記。)○八日先手頭を召て。こたび松平新五左衛門直次所屬の同心。分外の奢侈の舉動尤もひが事なれど。こたびは死罪一等を減じて追放たしむ。今より後步行同心等は。綿紬木綿の外一切着用せしむべからざる旨。老臣仰を傳ふ。午後柳生但馬守宗矩が別墅にならせらる。(日記。)○九日高家大澤右京亮基重は　大內の御使。吉良上野介義弼は日光山代參奉る。午後小石川巢鴨邊へ狩せさせ給ひ。還御の後幸若舞御覽ぜらる。(日記。)○十一日大番頭。書院番頭。小姓組番頭。同下三組頭步行頭小十人頭を御前に召て。先年惣組中一統に加祿給はり。又金銀恩賜恩賞せらるゝ事少からず。かく賑救し給ふ事しばゝくなるに。かへりて儉約の令を用ひず。各分外の奢侈に耽り。又は無用の浮費をなし。家計難困に及ぶよし聞し召る。これしかしながら各番頭組頭曉諭とゞかざるのいたす所なり。今より後所屬の徒かゝる所行の者あらば。速に聞え上べし。もしかくし置て他よりあらはれば。本人よりは番頭組頭を嚴密に沙汰あるべしとなり。また日付を召て。今日諸番頭に面命ありしとく。もし儉約の法令違犯の徒あらば。心いれ査檢し聞えあぐべしと命ぜらる。(日記。)○十二日城外へならせらる。(日記。)○十三日畑田加賀守正盛が淺草の別墅にならせらる。この日旗本の士に令せらるゝは。軍役幷に上洛の供奉及びすべて奉仕の道。常に怠慢なくたしなみ。身の分限にしかがひ。家計窮乏せざらんやう心がくべし。番士の罷襲應のときは。一汁三菜。香物。酒三盃に過べからず。從者は前令定員の外召具すべからず。はたかいらぎ鉾。大刀。大脇差。たてもの。手ふり。造り鬚など。人目に懸る類は停禁せらるゝにより。かゝるもの抱置べからず。今より後小袖并肩衣袴等。定紋を用ゆるに及ばず。有あはせしまゝに着用すべし。奴僕の給分前に定られしごとくめし抱ゆべし。屋舍搆造毎に諸器財以下。要子の衣服にいたるまで。分にしたがひ華美をつくすべからず。處士に會合すべからず。膳具茶器等の好すべからず。京坂戍役(二字抹殺)の役の番士歸府のとき。親戚たりと雖も土產を贈るべからず。遊觀の地はいふも迄もなし。故なく會集しみだりに市街徘徊す可らず。これらの事よくゝたしなむべし。各家計窮乏の旨こたび聞し召る。前にも旗下の士艱困すと聞ゆるによて。其分限に應じ向來生計

下儉約令

上衣服之制

上儉約令

のたつべきほど来地増加せられ。其後も賑恤を加へられしに。こたび諸番士并に諸有司に至る迄。猶貧窶と聞し召れ。御不審少からず。よて番頭組頭及諸有何等までそのさま査検せられしうへ仰出さるれば。いまより後何事も心いれ。家計の節せざらんやう心用ゆべし。もし違背せば速かに聞え上べきにより。そのときにいたり遁論なきやう。豫しめその心すべしとなり（日記。寛教類典。）〇十四日八町堀辺出火あり。（日記。）〇十五日普請大名并留守居先手頭使番等彌倹約の令をまもり。軍役の備を專とし私の奢侈なすべからす。こたび日付に命ぜられし旨あれば。もし驕奢により家計究迫せる聞えあらば曲事たるべき旨。諸老臣仰を傳ふ。此日朝會停廢あり。十七日近さが故とぞ。留守居酒井和泉守忠吉去年居宅失火せしをもて。營土居命ぜられしが。ゆるされてけふまうのぼる。夜中幸若舞御覽あり。（日記。紀伊記。）〇十六日酒井讃岐守忠勝が別墅にならせらる。（日記。）〇十七日紅葉山　御宮に御參あり。御衣紋は阿部豐後守忠秋奉る。御太刀は松平式部大輔忠次。御刀は書院番頭池田帶刀長賢。御沓は安藤右京進重長つかふまつる。國持の猿樂參。尊代大名行列。尾紀水三卿陪拜例の如し。御太刀目錄は酒井讃岐守忠勝役す。かへらせ給ひて。また二丸の内宮へ詣させ給ふ。（日記。）〇十八日東叡山へ酒井讃岐守忠勝御使し。御祈禱料とて大僧正天海へ銀二百枚。小袖十。惣出家へ銀千枚。千妙寺亮運。上乘院行盛へ小袖三づゝ。寂教院晃海。双嚴院豪傳へ二づゝ給ふ。未後城外へならせらる。（日記。）〇十九日大久保高田邊へ御狩あり。御かへさに番町の大番組加藤太郎左衛門眞勝が宅前を過させ給ふとて。目付山崎權八郎正信して。宅内にいり居宅のさたを見せしめらる。番町邊の宅地この頃皆竹垣もて圍とせし中に。太郎左衛門眞勝が宅舍のみ石垣をめぐらし。屋舍もこけら葺ゆへ。一際目立し故とぞ。この日普請奉行庄田小左衛門安照。今市御旅館修理命ぜらる。（曾我日記。日記。）〇廿日具足御祝連哥興行例に同じ。緣にて春を常なり千代の松。（昌程。）朝日のどかに照す天地。（御句。）鶴あそぶ浦はも山も雪解て。（光海。）此日所勞いささか快とて。土井大炊頭利勝及町奉行島田出雲守利正諮首の拜謁す。利勝には御盃賜ひそへて給ふ。（日記。）〇廿一日諮首時服獻ぜし家々に御内書を給ふ。午刻より千住邊鷹狩し給ひ。堀田加賀守正盛が淺草の別墅にならせらる。（日記。曾我日記。）〇廿三日大番組頭加藤太郎左衛門眞勝分外に居宅を構造せしさま御目にふれしかば。その番頭水野備後守元綱をめして。その子細を尋れ下されしに彼者元來家計ゆるやかなれば。先年恩貸金をも辭して借まいらせず。身に應じたる武具兵具をも用意し。餘財をもて居宅を營作せし旨。元綱聞えしかば。とがめ給ふ旨なしと雖もかの屋舍は速に破却し。狹少に營むべきよし命ぜらる。こ

の日町奉行堀式部少輔直之寺社奉行命ぜられ。町奉行加々爪民部少輔忠澄大目付になる。（日記。）〇廿四日三緣山　靈廟御詣あり。　崇源院殿靈牌所にも詣させたまふ。吉良若狹守義冬御太刀。松平式部大輔忠次御刀。安藤右京進重長御沓奉る。尾紀水三卿陪拜。其他孫參供奉例のとし。　安國殿へも參らせ給ひて。後方丈へ渡御あり。雪念菓子を獻ず。（日記。）〇廿五日大久保中野邊御鷹狩あり。作事奉行佐久間將監實勝別業にて御膳奉る。此日鴈鴨あまた得たまひて。御けしきよろこばしし。（日記。）〇廿六日今市御旅館修理の助役を。那須美濃守資重。太田原左兵衛政清。千本帶刀長勝。福原淡路資盛。太田原出雲政繼。岡本宮内義保。芦野民部資泰に仰せ遣られ。各先就封のいとま給ふ。（日記。）〇廿八日月次拜賀あり。伊勢石清水の符錄いただからせ給ふ。駿河寶臺院　住職を謝し奉る。使番多賀左近常長。書院番蒔田數馬助長房は因幡。使番駒木根長次郎政次。小姓組津田平左衛門正重は豐後より。各日付の事はてゝ歸謁す。松平筑前守光高襲封の後はじめて入部せしにより。御鷹鵜巻物つかはさる。よて書院番頭田中主殿頭吉官御使奉はり。松平陸奥守忠宗封内にて。伴天連を追捕せしよし聞え上ければ。御けしきうるはしく。鵜給ふとて書院番能勢小十郎賴隆御使奉はり。越前宰相忠昌病平愈したるよし聞召悦びおぼしめさるゝにより。書院番林丹波勝正御使奉り。共に暇給ふ。午後小石川より王子高田邊へ御狩あり。（日記。）〇晦日伊達遠江守秀宗封地伊豫國宇和島へ唐船漂着す。雜風にて久しく食物盡ければ。十一人餓死し七十九人上陸せしめしよし注進す。よて長崎奉行馬場三郎左衛門利重へその旨仰下され。例のごとく歸帆せしむべしと命ぜらる。（日記。）〇二月朔日日光久能御鏡御拜戴例のごとし。日光山よりは今年新に仰つかはされし御祈の御札奉る。毘沙門堂門跡公海はじめ。山門其他台宗の僧侶社人拜賀例のごとし。松平右衛門大夫正綱日光山より歸謁す。井伊掃部頭直孝小机の狩場にまかりしかば。御側中根壹岐守正盛御使命ぜられ魚物たまふ。夕かけて城外へならせたまふ。〇二日未後城外へならせらる。（日記。）〇三日尾紀水三卿へ松平伊豆守信綱御使し。このほど御茶宴に招かせらるべしといへども。はや歸館の時いたれば。速に鷹狩に赴き給ふべき旨仰つかはさる。午後城外へならせ給ふ。（紀伊記。日記。）〇四日　大宮へ御内書進らせ給ふ。又小姓組小十人組歩行の頭先手の頭をめして。この四月は日光山へ御參あるべきむね内々仰下さる。けふ尾紀水三卿は狩場におもむかる。また二丸にて能あり。（日記。紀伊記。曾我日記。）〇五日松平出羽守直政。保科肥後守正之。松平式部大輔忠次。井伊靱負佐直滋。松平越中守定綱。酒井河内守忠清。松平和泉守乘壽。青山大藏少輔幸成。酒井備後守忠朝。安藤右京進重長。松平出雲守勝隆。

加藤民部大輔明利日光山御詣の供奉命ぜらる。毛利甲斐守秀元。有馬玄蕃頭豐氏も同じ時陪從命ぜられしかば。まうのぼりて査檢ありし後。駕籠の者の頭をめして。與夫等卑賤の身をわきまへず。たとへ他人もち來り授るといへども。御刀を請取し事不敬といふべし。嚴科に處せらるべしといへども。暫く寛宥せられ。追放すべしと命ぜらる。(日記。)〇九日品川へならせらる。(日記。)〇十日鍋島紀伊守元茂子飛驒直能。小笠原左衞門佐政信養子主膳貞信。井上淡路守庸名子和母助庸尾。船手頭小笠原安藝信盛が子彦大夫長佳。旗奉行松田六郎左衞門定勝四子六之助定綱。安代寄合座光寺助左衞門爲眞弟伊兵衞爲正。中奥小姓淺岡權三郎國孝弟七兵衞國政。持筒頭横田次郎兵衞述松弟又十郎直松初見の禮をとる。分部左京亮光信就封のいとまたまふ。午刻谷中にかりせさせ給ひ。盛應寺にて御膳奉る。(日記。曾我日記。)〇十一日尾紀水三郷狩場へ魚物つかはさる。尾張へは本多美作守忠相御使す。また右兵衞督光友朝臣。太。水戸へは加々爪甲斐守直澄。左衞門督常陸介光貞朝臣へは小姓組番頭加々爪甲斐守直澄。左衞門督光圀朝臣へは安藤伊賀守重元御使して。鴈二づゝつかはさる。又小松中納言利常卿へは小姓組番頭久世大和守廣之。立花宗茂入道立齋へは仙石大和守久隆御使し。その病をとはせ給ひ。葉子を賜ふ。又松平越後守光長。松平長門守秀就。松平相摸守光仲。松平新太郎光政。藤堂大學頭高次。松平安藝守光晟。松平

右衞門佐忠之。細川越中守忠利。松平阿波守忠英。鍋島信濃守勝茂へは使番をて菓子給ふ。未後牛込にならせられ。酒井讃岐守忠勝が別業にて御膳奉る。(日記。曾我日記。)〇十二日毛利甲斐守秀元。京極丹後守高廣。生駒壹岐守高俊。森内記長繼。有馬玄蕃頭豐氏。松平土佐守忠義。松平出羽守直政へ使番して菓子下さる。けふ赤坂溜谷中野邊へかりせさせ給ふ。(日記。曾我日記。)〇十三日内藤帶刀忠興。内藤兵部政晴。今市御旅館修理助役仰付られかしこへ赴により辭見し奉る。書院番組頭松平淡路守忠直子三七郎忠氏。小姓組與頭川口久助宗次子辰千代宗恒。歩行頭石野八兵衞門氏照子鍋之助氏任。近藤勘右衞門用清子傳九郎用弘。鎗松又四郎正尾子彌太郎正春。使番跡部刑部良保子賢之助良隆初見の禮をとる。三浦志摩守正次こたび日光山より還御の時。居城壬生御旅館に充られしをもて暇給ふ。深川隅田川邊へならせられ。小塚原の渡をこし給ひ。淺草の堀田加賀守正盛が別業によぎらせられ。夜に入て還御なる。(日記。曾我日記。)〇十五日御惡冒により。出仕の輩老臣に謁し退く。紀伊亞相きのふ狩場より歸られければ。まう登らるべしと雖も。御對面なり難ければ。登營延滯あるべき旨。松平伊豆守信綱もて仰遣はさる。又松平出羽守勝隆居宅失火せしにより。目付山崎權八郎正信巡視に遣はさる。(日記。紀伊記。)〇十六日松平越後守光長狩場の暇下され鷹を賜ふ。奥平美作守忠昌宇都宮の居城。こたび御旅館に宛らるゝにより就封の暇給ふ。又日光山參向公卿の館伴仰付らる。陽明家は中川内膳正久盛。竹内門跡は稻葉民部少輔一通。妙法院門跡は伊東大和守祐久。青蓮院門跡は有馬左衞門佐直澄。阿野大納言實顯卿は相良壹岐守頼寛。四三條前内府實條公。菊亭右大將經季卿は内藤豐前守信照乙。此日紀伊亞相より鴈三隻捧げらる。未後本城構造所御親巡あり。夜中幸若舞御覽ず。(日記。紀伊記。)〇十七日東叡山御宮御參あるべき旨。兼日仰出されしが。雨によりて御參なし。よて其事を小姓組番頭加々爪甲斐守直澄もて。山に仰遣はさる。(日記。)〇十八日尾紀水三郷狩場より歸謁せらる。歩行頭能勢市十郎頼永宇治採茶の御使命ぜられ暇たまふ。書院番能勢小十郎頼隆仙臺の御使はて、歸謁す。午後高田邊御鷹狩あり。(日記。)〇廿日富士見櫓の番奉りし奥平美作守忠昌就封により。牧野右馬允忠成是にかはらしめらる。申刻城外へならせらる。(日記。)〇廿一日千壽邊御鷹狩あり。(日記。)〇廿四日三緣山　靈廟へ酒井讃岐守忠勝代參す。未後より紅葉山御宮へ御參ありて西城へ成らせらる。(日記。)〇廿五日小松中納言利常卿病愈てまうのぼり。歳首の拜賀す。作事奉行牧野織部成常養子數馬成喬初見し奉る。使番安部次郎兵衞正成子彌太郎信成。大番組頭長非五右衞門吉次二子金十郎古忠。河野庄大夫照貞弟庄八郎通親めし出され近習を命ぜらる。松平長門守

秀就。松平新太郎光政。松平相摸守光仲。細川越中守忠利。松平阿波守忠英。京極丹後守高廣。鍋島信濃守勝茂。松平安藝守光晟。松平土佐守忠義。松平右衞門佐忠之へ使番以て菓子賜ふ。未後淺草千壽邊へ御鷹狩あり。(日記。)〇廿六日小松中納言利常卿。松平出羽守直政。毛利甲斐守秀元。有馬玄番頭豊氏。藤堂大學頭高次。生駒宮岐守高俊。森内記長繼。立花宗茂入道立齋へ使番もて菓子賜ふ。中納言利常卿證人交代あり。去年召出されたる武川芦田の徒四十三人。采邑慶來給ふ。未刻高田邊御放鷹あり。大友屋敷によぎらせらる。(日記。曾我日記。)〇廿七日中野邊放鷹御遊あり。こたび門跡井公卿木曾路參向によて。橋梁以下おろかならず沙汰すべき旨。領主代官等へも奉書を下さる。(日記。)〇廿八日月次拜賀例の如し。飯沼弘經寺文宗。川越蓮馨寺住產。江戸崎大念寺昔熙。岩槻淨國寺万寶住職を謝し奉る。曹院晉林丹波勝正越前の御使はて、歸り謁す。午刻柳生但馬守宗矩別業にならせらる。細川越中守忠利陪從して鷹を賜ふ。(日記。曾我日記。)〇晦日品川御離館にならせられ。内田信濃守正信御茶を獻ず。東海寺林中にて宴を開かせらる。先に加賀へ御使せし曹院晉頭田中主殿頭吉官歸り。今朝ならせ給ふ御道に出て拜し奉る。(日記。曾我日記。)〇三月朔日御不例により。登營の殿宰臣に謁し退く。午後酒井讃岐守忠勝が別業にならせらる。(紀伊記。日記。)〇二日淺草瓦燒屋敷より火起り。堀田加賀守正盛が別業に及ぶ。よて小納戸安西甚兵衞元眞を遣はさる。(日記。)〇三日桃節例の如し。松平越後守光長。井伊掃部頭直孝狩塲よりかへり來り。鴈一双づゝ奉る。曹院晉頭田中主殿頭吉官拜謁し。松平筑前守光高御返詞聞え上奉る。板倉周防守重宗二子主馬助重形初見の禮をとる。此日尾紀水三頭御茶を給ふ。毛利甲斐守秀元。井伊掃部頭直孝相伴せしめられ。酒井讃岐守忠勝。靑山大藏少輔幸成伺候す。折から御庭の櫻花盛なれば。宴はてゝこの人々に花を見せしめたまふ。(日記。紀伊記。)〇五日諸老臣をめして面命あり。又九鬼式部隆季。谷大學頭衞政。大和國高取城在番命ぜらる。(日記。)〇六日千壽邊御鷹狩あり。(日記。)〇七日諸老臣をめして面命のむねあり。また紀伊亞相養生のため。狩塲に赴かんとなこほる。一きは御けしき麗しく。その請を許したまふ。午刻中野邊御狩ありて。作事奉行佐久間將監實勝が別業にて御膳奉る。筑前國東蓮寺領主黒田市正高政養子万吉之勝に。遺領四萬石を繼しめらる。この高政は元の筑前守長政の四男なり。母は　神祖の御養女。(實は保科彈正忠正直女桑姫。)元和元年五月朔日母に隨ひ。二條城にまう登り　神祖に初見し奉る。時に四歳。九年十月父が遺領の内四万石を分ち賜ひ。筑前國東蓮寺に住す。寛永三年八月十九日叙爵して東市正と稱し。十五年春島原の城賊に向ひ攻落してかへり。十六年十一月十三日廿八歳にて卒

下黒田高政

上二條城成一役之制

したり。けふ二條成役の大番頭に御黒印を下さる。文に曰。番士等万事法令を守り。組頭頭指揮する事は。聊も違背ある可らず。喧嘩口論これを制禁す。もしさる事あらば。其地にあり合せし輩より治むべし。事になるべきを見ながら棄置べからず。荷擔の徒は其科本人より重かるべし。たとひ何事ありといふとも。城外に出べからずとなり。又下知狀には番士の外他と會合すべからず。直所に兵械并に己が得ものを備置べし。番士等供給一切停禁たるべし。されど番頭にて饗する時は。二汁三菜の外は肴吸物も無用たるべし。酒は三盃にかぎり。大盃は禁止たるべしとなり。(日記。紀伊記。藩翰譜。寛政重修譜。令條記。)〇八日左衞門督光圀朝臣まうのぼり。父黄門病中しばゝ御尋問の御使下されしを謝せらる。庶人堀谷彌七郎を鹽所頭神谷又五郎正重に召預らる。これは鹽を砂糖とあやまりて供御せるをもてなり。(日記。)〇九日高家吉良上野介義弼京の御使命ぜられいとまたまふ。　大宮へ御手書を參らせらる。曹院番佐々權兵衞長次薩州より歸謁す。大番頭内藤石見守信盛季千傳九郎信通。徒頭曾我太郎右衞門包助子友之助助政。御膳奉行永田四郎三郎直時子三四郎直政。天野六右衞門康世子右衞門四郎康利。大久保喜六郎忠正子龜之助忠次初見の禮をとる。其他大番の士初見六人。(日記。)〇十日阿部對馬守重次井宮城越前守和甫今市小屋劃檢點命ぜられ暇給ふ。これは各所改換あるによてなり。紀伊亞相狩塲より使もて鴈をさゝげらる。来後關口より御船をうかべて。角太河へならせ給ふ。(日記。曾我日記。)〇十一日厩生より品川へならせらる。きふ紀伊亞相大宮狩塲へ。小姓組番頭加々爪甲斐守直澄御使して。魚物をくらせ給ふ。(日記。紀伊記。)〇十二日高田にならせらる。(日記。)〇十三日千壽邊御鷹狩ありて鴈鴨を得給ひ。またせこども猪一頭を追出しければ。供奉の輩とりまき火をかけてとらへ得たり。(日記。)〇十四日内藤伊勢守信光。松平備中守忠宣。植村右衞門佐家貞。松平主膳助助忠昭。島居石見守忠頼。有馬出雲守豊長。水野出雲守成貞。關兵部少輔氏盛。山内豊前守一唯。戸田淡路守氏經。酒井下總守忠正。井上淡路守庸名。こたび日光山において被物の役命ぜらる。(日記。)〇十五日月次拜賀例のとし。黒田万吉之勝國封を謝して初見し奉る。加藤式部少輔明成。佐竹修理大夫義隆。伊達遠江守秀宗。島津万壽忠高。丹羽左京亮光重。南部山城守重直。松浦肥前守鎭信。毛利市三郎高倫。松平相摸守光仲證人の交代あり。諏訪源十郎賴增小姓組にいる。(日記。寛政重修譜。)〇十六日紀伊亞相狩塲よりかへりまう登らる。紀邸へ小姓組番頭久世大和守廣之御使し。狩塲にありて氣色平快のよし聞召。悦ばせ給ふ旨仰つかはさる。午刻柳生但馬守宗矩の別業にならせ給ふ。(日記。紀伊記。)〇十七日紅葉山　御宮へ酒井讃岐守忠勝代參す。井伊掃部頭直孝日

光山供奉命ぜられ馬を給ふ。(日記。)〇十八日御側中根壹岐守正盛日光山へ御使につかはさる。(日記。)〇十九日日光山御道御旅館御憩息所の間に。また御憩息所一づゝを設らるゝなもて。目付兼松彌五左衛門正直檢點につかはさる。この日書院番に入者廿一人。小姓組にいるもの十六人。日光供奉の翌年役人數の事。少老指揮して目付よりつたふ。但し祿秩乏しき布司等。定制のとくなし得がたきとあらば。同僚相議して其さま聞え上べしとなり。(日記。)〇廿日關兵部少輔氏盛。書院番筧尾平八郎久成駿河久能山　御宮修理奉行仰付らる。けふ大番に入もの十五人。午後酒井讃岐守忠勝が別業にならせ給ふ。鞭打及乘馬あり。(日記。曾我日記。)〇廿一日大僧正天海が東叡の本坊にならせらる。(日記。)〇廿三日內田信濃守正信日光山御使につかはさる。井伊掃部頭直孝に御側中根壹岐守正盛御使して菓子を給ふ。(日記。)〇廿四日三綠山　靈剛へ酒井讃岐守忠勝代參す。(日記。)〇廿五日東本願寺門跡光從參向により。高家吉良若狹守義冬御使して慰勞せらる。(日記。)〇廿六日半禮へならせられ。雉子雲雀鶉をからせらる。供奉の輩みな御前へ召て御酒を給ふ。尾紀水三卿に御使して。けふからせられたる鶉をつかはされ。井伊掃部頭直孝へも給ふ。(日記。曾我日記。)〇廿七日諸老臣面命の旨あり。本城擔造經營所を御みづから巡視し給ふ。松平越後守光長。松平筑前守光高。松平右京頼重日光山供奉命ぜらる。(日記。)〇廿八日松平筑前守光高にとゞめ。參觀拜賀するもの十二人。光高は來國俊の刀。本多內記政勝は正俊の刀を献ず。これは家つぎし後初ての參觀なればなり。又松平下總守忠明は轉封の後初ての參觀なれば。則宗の刀をさゝぐ。午後小松中納言利常卿の別業にならせ給ふ。毛利甲斐守秀元。井伊掃部頭直孝陪從す。直孝はこの所にて別業の地恩賜の命あり。還御の後黃門さうのぼり謝し奉らんとせしを。病後ゆへ抑留し給へば。筑前守光高淡路守利次まうのぼり謝し奉る。(日記。)〇廿九日尾張右兵衛督光友朝臣。紀伊常陸介光貞朝臣ともに參議右近衛權中將に任ぜられ。水戸左衛門督光圀朝臣は右近衛權中將に任ぜらる。午後堀田加賀守正盛別業にならせらる。(日記。)〇晦日諸老臣を召て。こたび日光山御參の御道中并に今市にての法令仰いだされ。老臣より諸物頭へ傳ふ。其文にいふ。供奉のとき脇道すべからず。御旅館にて喧嘩口論の時。兼て定られしごとく。其番限にはからふべし。市中にてあらば。其地にありあはせしもの汝沙に及べし。猥に馳あつまるべからず。御旅館に失火ある時。有司の外出令すべからず。供奉中人返しの事停禁す。もし申旨あらば。還御の後沙汰に及ぶべし。されど重科の徒はこの限にあらざれば。奉行人に告て裁斷をうくべし。若御のとき下馬してのち。列をみだすべからず。并に定外の翟御旅館に供奉すべからず。目付并番頭諸行人の事はいふまでもなし。たとひいかやうの人申斷るといふとも。法令違犯すべからず。猥輩ものは科の輕重にしたがひて即せらるべし。小荷駄馬は右方を通すべし。但し山坂にては山にそひて通すべし。諸器財入交べからず。押買押賣停禁たるべし。みだりに竹木を伐とるべからず。田圃に馬を放ち證べからず。右の件々科の輕重にしたがひ措置せらるべし。もし目付番頭諸奉行人見聞しながら。すてをかば曲事たるべし。その他は下知狀にのするものなりとぞ。又下知狀には。御旅館にて閑靜ならびに失火のとき。酒井讃岐守忠勝。堀田加賀守正盛。松平伊豆守信綱。阿部對馬守重次。三浦志摩守正次。杤木民部少輔稙綱及び昵近の外はまうのぼるべからず。其他は旅宿にありて指揮をまつべし。御宿城にて喧嘩口論火災のとき。その所にありあはせし輩は。表門にても裏門にても。便よからん所より曠地へ出て指揮を待べし。御旅館火災のときは。伺公のともがらの乘馬を最寄の口々まで引よせなくべし。御旅館の外前後にあるともがら。一切會集すべからず。その所にありて指揮を待べし。御旅館接近の地に火おこらば。防火の事は領主に命ずべし。されど大目付加々爪民部少輔忠澄井に目付使番の中非番の輩。まかりいで、指揮すべし。今市小屋において失火せしめば。其小屋かぎりに消防すべし。市中は一町かぎりに撲滅し。小屋より一切馳あつまるべからず。松平式部大輔忠次。安藤右京進重長は防火の事命下をかるれば。其旨守るべし。御旅館失火のときはありあはせし老臣に伺ひてはからふべし。但し民部少輔稙綱井目付使番の中非番の輩。式部大輔忠次。右京進重長にはかり指揮すべし。今市にて官事ありてめさるゝか。あるは出仕の輩の外は。宿所にありて火をいましむべしとなり。また令せらるゝは。宿賃は定のとくたるべし。自他の宿牌剝とるべからず。晴日騎馬の中に雨具をもたしむべからず。されど笠はくるしからず。御旅館并御憩息所にて指揮なくしては。襲膝を用ゆべからず。供奉のとき騎馬中に持鎗壹本の外。他の器械を入べからず。着御のとき下馬せずして旅舍に乘入べからずとなり。又銃袋に猩々緋及び羅紗用ゆべからず。鞘黑械金銀箔の紋無用たるべし。虎豹猩虎の鞍韉用ゆべからず。羅紗押懸綿手綱も同ト。歩行若黨并に小者中間の衣服。常制のとくたるべし。乘懸馬端圓華美を盡すべからず。馬衣は木綿の外無用たるべし。金銀懸斗付用ゆべからずとなり。高倉中納言永慶卿も。この御參により參府ありしかば。使番酒田玄番頭定正もて慰勞せらる。この日內藤伊賀守忠重參覲す。(日記。柳營禁令。)〇四月朔日拜賀例の如し。尾張宰相光友朝臣。紀伊宰相光貞朝臣。水戸中將光圀朝臣ともに太刀馬資金獻ト。昇進を謝せらる。越前宰相忠昌はじめ參覲十一人。この日松平右京頼重從四位下侍從に叙任し大夫になる。(日記。)

下依日光社參發供奉法度

上江戸城修築成而移徙

○二日　大宮へ御内奏進せらるゝ。青蓮院門跡尊純法親王參向ありしかば。高家吉良若狹守義冬慰勞の御使す。(日記。)○三日東本願寺門跡光從銀百枚。袷十。太刀目錄。新門光瑛卷物二十。金十兩。太刀目錄獻上。ともに拜謁し。新門定婚の御ゆるし蒙り。且京にて宅地給はりしを謝す。小池坊伊正秀筆二束一卷に。符錄そへて獻じ。長谷寺御造營を謝し奉る。黒田甲斐守長興はじめ。參覲十五人。神保左京茂明。米津內藏助田盛。甲府在番にさゝれいとま給ふ。書院小姓組番頭。小十人頭。歩行頭を御前にめして。日光山供奉中の法令嚴に所勵に示し守らしむべし。もし違犯の徒ありて日付より聞え上げ。官長の聽容たるべき旨面命せらる。未後富田へならせられ鞭打あり。(日記。曾我日記。)○四日二丸にて猿樂あり。大僧正天海宴を給ふ。この日四三條前內大臣實條公。廣橋右大將兼胤卿。阿野大納言實顯卿參向ありければ。高家吉良上野介義弼慰勞の御使す。(日記。)○五日本城搆造成功によりて。今日御移徙あり。巳刻に御馬印幷投鞘の鎗十柄御先にまいり。遠侍の前にならび立り。鎗奉行安藤治右衞門正弼。富永主膳正重吉伺候す。時に白小袖半袴をめし。吉良若狹守義冬御刀の役し。二丸より本城に渡御あり。白木書院にて尊純大名拜謁し。黒木書院にて助役の望拜謁し勞詞をたまふ。上段につかせたまひ。小姓組番頭久世大和守廣之獻斗を供御す。酒井讃岐守忠勝。松平伊豆守信綱。畑田加賀守正盛へ御手づから慰斗を賜る。高家吉良若狹守義冬日光山御使命ぜらる。杤木民部少輔種綱慰斗。書院番頭池田帶刀長賢御盃もちいで。また種綱御粥奉り。種綱御酌長賢御加して。御盃を讃岐守忠勝に給はり。又御盃御引渡し出て。井伊掃部頭直孝に御盃給はり。又御雜煮御盃いで。又鯨の吸物いて御銚子を納む。次に高砂の臺七五三の御膳吸物奉り。又吸物引替て三度畢り。御膳を撤して後菓子茶を供御す。次に黒木書院にて御更衣あり。水戸中納言賴房卿を召て。攝造助役の勞詞を仰出され。次に尾紀水三卿拜賀あり。慰斗をたまひ。兩壺相幷に中將及び松平右京大夫賴重。松平下總守忠明。保科肥後守正之拜賀し。又御更衣あり。かされて御盃いで丶加賀守正盛。伊豆守信綱に給はり。奥に入らせ給ふ。老臣。普請衆。近習諸番頭。物頭。及營中伺候の人々御祝の鯛井壺膳酒を給ふ。(日記。)○六日三家諸大名御移徙の拜賀あり。長の御禮めして。黒木書院に出まし。土井大炊頭利勝へ御盃給はり。火後の造營不日に落成ありて。御祕悦の旨仰下さる。御移徙の賀とて尾紀兩卿は屏風十双。梨地唐櫃十。臺子五飾づゝ。水邨よりは屏風五双。廣蓋十。臺子三飾。尾紀水三世子は褒賞さゝげらる。其他松平伊豫守忠昌梨地唐櫃十。松平越後守光長重箱五組。料理鍋二組。小松中納言利常卿長刀架一。松平筑前守光高梨地臺子二飾。屏風五双。松平陸奥守忠宗銀臺子一飾。屏風五双。松平新太郎光政梨地刀架二。屏風一双。袴二。上杉彈正大弼定勝屏風十。障子五本。松平薩摩守光久銀臺子二。梨地手水桶二。松平相摸守光仲手拭懸二。銀鉢十。佐竹修理大夫義隆盤銅二十。松平隱岐守定行屏風五双。梨地臺子。松平阿波守忠英梨地掛盤。屏風三枚。細川越中守忠利屏風五双。花氈廿枚。松平右衞門佐忠之屏風五双。黒田甲斐守長興炭斗五。黒田万吉之勝手拭掛二。松平出羽守直政梨地重箱五組。松平土佐守忠義銀盥。手拭懸。銀鉢五。森內記長繼梨地衣桁十。鍋三十。銀懸盤一。伊達遠江守秀宗屏風三双。京極丹後守高廣袴一。銀鉢五。宗對馬守義成毛氈十枚。毛利甲斐守秀元同廿枚。立花飛彈守忠茂刀架一。手拭懸一。織田出雲守高長錫切立十。松平大和守直基奉書紙廿束。松平土佐守直貞同廿束。松平右近大夫輝與毛氈廿枚。丹羽左京亮光重梨地盥。手拭懸各一。井伊掃部頭直孝銀銚子。銀提子。銀湯濟鉢。銀抄子各一。銀湯次二。保科肥後守正之被衣三。蒲團二。松平右京大夫賴重屏風三双。松平下總守忠明梨燈十間。酒井宮內大輔忠勝も同じ。松平式部大輔忠次銀盥一。袴二。奥平美作守忠昌火鉢。手水鉢各五。小笠原右近大夫忠眞屏風二双。松平越中守定綱吳服五。石川主殿頭忠總唐金手桶十。牧野右馬允忠成燭臺。手燭各十。戸田左門氏銕梨地手拭懸。同盥一。有馬中務大輔忠賴銀臺子一飾。水野美作守勝俊梨地衣桁二。南部山城守重直も同じ。本多能登守忠晴梨子盥。水野筆人正忠清銀切立二。燭臺十。內藤帶刀忠興梨地重箱二組。小笠原信濃守長次同刀架二。松平周防守康重盤銅五。松平丹波守康直梨地盥三組。松平和泉守乘壽塗手桶。松平因幡守忠雄銀切立二十。松平万介忠親調理の具一通。本多下總守俊次手桶五十。大久保加賀守忠職臺子一飾。眞田伊豆守信之蠟燭三百挺。溝口出雲守宣直盤銅五。京極六丸高直炭斗。十能各十。相馬大膳亮義胤梨地盥一組。松平若狹守康信臺十。秋田河內守俊季刀架。手拭架各一。戸澤右京亮政盛重箱三組。山崎甲斐守家治燭臺十。岡部美濃守宣勝刀架。梨地手拭架各一。京極刑部少輔高和燭臺。手燭各十。鍋島信濃守勝茂唐金の大小鉢十六。小笠原壹岐守忠知唐金盤銅五。脇坂淡路守安元手水鉢五。寺澤兵庫頭堅高椀五十具。淺野內匠頭長直小屏風一双。堀又七郎親昌錫鉢十。淺野因幡守長治梨地刀架十一。水谷伊勢守勝隆錫切立十。大高引合二束。中川內膳正久盛鍋。錫鉢。錫白鳥各五。松平淡路守利次銀重箱二組。津輕土佐守信義錫切立二十。錫鉢十。土岐山城守賴行錫切立十。三浦志摩守正次行燈二十。秋月長門守種春錫切立二十。織田左衞門佐長政錫十對。鵜井能登守玆政大錫五對。戸田因幡守忠能手桶五十。遠藤但馬守慶利稗二。織田因幡守信昌錫切立十。太田原左兵衞政清鍋十五。古田兵部少輔重恒銀鉢二十。內藤兵部政晴錫鉢十。島津万壽丸忠高臺盤十。毛利市三郎高尙錫切立十。秋元越中守富朝唐金火鉢五。松平石見守輝澄梨地盥箱

二組。青木甲斐守貢兼壓盞一。伊東大和守祐久小屏風一双。高木善次郎正弘錫切立十。永下左兵衛俊治壓盞十。阿部備中守正次大錫五對。永井信濃守尚政臺子三副。内藤伊賀守忠重手水盥一組。井上河内守正利。水野監物忠善行燈各廿。松平出雲守勝隆錫重箱三組。水野備後守元綱鍋五。松平右衛門大夫正綱盤銅五。山口但馬守弘隆錫切立十。諏訪出雲守忠恒刀架一。分部與三兵衛嘉治錫切立二十。内藤豊前守信照梨地刀架二。立花民部種長錫白鳥十。片桐半之丞爲元鍋十。木下淡路守利當錫切立十。屋代越中守忠正も同ㇾ。建部内匠政長巻五十本。高力攝津守忠房手水盥一組。桑山修理亮一玄錫鉢十。三宅大膳亮庶盛壺十。巻十五本。佐久間權之助勝豊錫鉢五。西尾丹後守忠琵十枚。一柳藏人直頼錫切立十。池田内藏助重政。伊東喜太郎長治。錫湯器各十。毛利日向守就隆刀架一。阿部市正正能錫五對。遠山久大夫友貞行燈十。森川半彌重政御二。小笠原主膳貞信湯次。土井大炊頭利勝錫鉢五。銀重箱一組。酒井讃岐守忠勝置圖燵裡一。酒井河内守忠清衝立障子二。堀田加賀守正盛銀臺子一飾。松平伊豆守信綱塗桶五十。火鉢五。阿部豊後守忠秋小屏風二双。疋筒一。阿部對馬守重次臺子天目一通。廣蓋二。金森出雲守重頼手桶五十。織田修理亮長種巻二十本。小出與平次有宗同卅本。新庄越前守直好毛琵十枚。大村丹後純信。内田信濃守正信も同ㇾ。井上筑後守政重。柳生但馬守宗矩。加々爪甲斐守直澄各五枚。稻葉美濃守正則卅枚。稻垣攝津守重綱間鍋十。土方彦三郎雄次十。四郷孫六郎延員錫鉢十。稻葉淡路守紀通火鉢二。土屋民部少輔利直行澄二十。北條久太郎氏宗壓盞二十。加藤内藏助明友手拭懸二。片桐石見守貞昌錫湯次。松平市正重直盤銅。京極右近高佐壓盞十。戸川土佐守正安錫切立十。織田上野介信勝壓盞。錫鉢各十。松平美作守定房基衆戯盤各一面。松平主殿頭忠房圍指十。植村出羽守家政塗手桶五十。松平右近大夫輝與梨地刀架一。鳥居主膳正忠春盤銅三。板倉主水佑重矩銅巻錫切立十。松平太郎八重正盤銅二。平岡石見守頼資錫鉢十五。青山大膳亮幸利塗手桶五十。相良壹岐守頼寛伽羅一斤。谷大學頭衛政。土方雄高錫切立各十。日根野織部正吉明壓盞二十。岩城但馬守宣隆。溝口金十郎政勝錫切立各十六。郷長五郎政勝壓盞十。市橋下總守長政錫鉢十。堀七郎五郎直時錫鉢十。錫切立十五。島孫平太盛次大錫十。稻葉能登守信通廣蓋二。九鬼大和久隆壓盞十。一柳丹後守直重錫鉢間鍋各十。久留島丹波守通巻錫切立十。松平飛彈守利治燭臺十。本多勘右衛門政長手桶百。杉原吉兵衛重長蠟燭心切。心入各十。吉田隼人正信重錫鉢十。有馬藏人康純梨地手拭懸二。仙石越前守政俊手水盥。丹羽勘助氏定壓盞。本多飛彈守成重卒書紙十束。松平山城守忠國挾箱二。眞田内記信政蠟燭二百挺。井伊兵部少輔直好錫鉢十五。九鬼式部隆季鍋十。菅沼織部正定房盤銅五。堀三右衛門直景給

蓮十枚。堀大學直輝錫鉢十。永井日向守直清壓盞二十。小堀遠江守政一書棚十。酒井万千代忠能手桶百。掻器百。皆川山城守隆庸錫鉢五。堀越中守利長錫切立。朽木民部少輔稙綱天鷲絨圍座十。安藤右京進重長壓盞十。巻五十本。秋野内匠頭信成大皿百。茶碗百。板倉周防守重宗銅水風呂一組。心切。手次各十。松平伊賀守忠晴壓盞十。太田備中守資宗大行燈五。巻五十本。壓盞二十。北條出羽守氏重壓盞十献ず。本多伊勢守忠利も品々献ㇾ上。

太刀目錄もて拜謁あり。土井大炊頭利勝。阿部豊後守忠秋。松平隱岐守定行。小笠原右近大夫忠眞。本多内記政勝。水野美作守勝俊。牧野右馬允忠成。水野隼人正忠清。石川主殿頭忠總。松平山城守忠國。留守居牧野内匠頭信成。松平大隅守重則。酒井和泉守忠吉。杉浦内藏允正友。大目付井上筑後守政重。目付兼松弥五右衛門正直。花房勘右衛門正盛。町奉行神尾備前守元勝。朝倉仁左衛門在頭。日光山御參の間留守を仰付られ。條約を下さる。次に町奉行島田幽也利正も召て拜謁す。(日記。)〇十二日

卜奉る。(日記。紀伊記。君臣言行錄。)〇七日大僧正天海　神

祀御緣起を持參して御覽にそなふ。(日記。)〇八日。こたび日光

壺二十。北條出羽守氏重壓盞十献ず。本多伊勢守忠利も品々献

平伊賀守忠晴壓盞十。太田備中守資宗大行燈五。巻五十本。

百。茶碗百。板倉周防守重宗銅水風呂一組。心切。手次各十。松

座十。安藤右京進重長壓盞十。巻五十本。秋野内匠頭信成大皿

隆庸錫鉢五。堀越中守利長錫切立。朽木民部少輔稙綱天鷲絨圍

江守政一書棚十。酒井万千代忠能手桶百。掻器百。皆川山城守

蓮十枚。堀大學直輝錫鉢十。永井日向守直清壓盞二十。小堀遠

太刀目錄もて拜謁あり。土井大炊頭利勝。阿部豊後守忠秋。松平隱岐守定行。小笠原右近大夫忠眞。本多内記政勝。水野美作守勝俊。牧野右馬允忠成。水野隼人正忠清。石川主殿頭忠總。松平山城守忠國。留守居牧野内匠頭信成。松平大隅守重則。酒井和泉守忠吉。杉浦内藏允正友。大目付井上筑後守政重。目付兼松弥五右衛門正直。花房勘右衛門正盛。町奉行神尾備前守元勝。朝倉仁左衛門在頭。日光山御參の間留守を仰付られ。條約を下さる。次に町奉行島田幽也利正も召て拜謁す。(日記。)〇十二日明日日光山御發輿によりて。三條山　蘿蔔に詣させ給ふ。諸大名はまうのぼり老臣に謁す。今日留守命ぜられし輩へ御黒印を下され。又町奉行神尾備前守元勝。朝倉仁左衛門在重へは府内市街の條約を授らる。また小十人頭歩行頭をもめして。御參供奉の間もし斬に處する罪あるものも。しかり置べしと面命あり。こたびもし火災あらば。天樹院御方へは留守居伊丹康勝入道順齋。千代姫御方へは目付永井監物白元。大姫御方へは書院番天方主馬俱通。中丸御方へは書院番組頭松平淡路守忠直はせ參り。本城へ供奉すべしと命ぜられ。巡夜の輩へもとさる。此日堀田加賀守正盛の別業にならせらる。(日記。)〇十一日四三條前内府實條公。菊亭右大將經季卿。阿野大納言實顯卿引見あり。　内。　院。　大宮よりの進らせられ物例の如し。攝家。親王。門跡。内侍の使者賀物例にかはらず。高倉右衛門佐永敦も中納言永慶卿井西三條宰相中將實教卿。高倉右衛門佐永敦も

り。精勤すればとて。ことさら糠米二百俵給ふ。（日記。曾我日記。）○十三日午刻御發輿あり。平柳錫杖寺にて晝餉奉り。この夜岩槻の城にやどらせ給ふ。城主阿部對馬守重次輕服によて拜謁せず。（日記。）○十四日巳刻岩槻城御發輿あり。幸手にて晝のおもの奉り。この夜古河城にやどらせらる。城主土井大炊頭利勝は江府の留守たれば。長子遠江守利隆むかへ進らせ饗し奉る。大炊頭利勝に銀五百枚。時服二十。遠江守利隆に時服二十給ふ。利勝の賜物は利隆かはりて拜受す。利勝獻物は金二十枚。らんけい二十巻。利隆は羅紗十間。金馬代奉る。利隆に御盃下され。友成の御刀を給ふ。利勝より奉る來國光のわきざしな。これも利隆かはりてさゝげ奉る。家司二人も時服羽織下さる。千代姫大姫の御方々より御使ありて。御けしきうかゞはる。その使へはみな時服さづけらる。この日幸手の御道にて。先手頭井戸新右衞門直弘が若黨。不慮に御輿前にはしりいでしかば。供奉の輩おしとらふ。すでに斬に處せらるべしといへども。御參の折からなれば一等を減じて其主にあづけらる。（日記。）○十五日古河城を御發駕ありて。小山石橋兩驛に御やすらひ。宇都宮城にとゞまらせ給ふ。城主奥平美作守忠昌饗し奉る。左文字の御刀井馬一疋時服廿給ひ。こたび日光山修理つかふまつりし家司等十三人へ。時服羽織を下さる。けふは御さうとなれば。忠昌に御盃賜はらず。（日記。家譜。）○十六日宇都宮

上家光爲日光社參發江戸

下日光山祭禮

出羽守直政。毛利甲斐守秀元。有馬玄蕃頭豐氏伺候して拜覽す。午刻大僧正天海は御迎のため　御宮に參る。轅なり。けふの奉幣使は清閑寺宰相共綱卿。宣命使は五條宰相爲適卿なり。このほど石鳥居より御旅所までの左右に辻固あり。　神輿のさま白丁三百人。御榊をもつ。次に鳥冑きて手に鉾をもちたるもの百人二行につらなる。次に職事の神官一人。赤き假面をかけ。これも鳥兜きて鉾をもつ。次に獅子二疋。神人六人。次に留吹の神人一人。次に田樂七人。次に神樂の神人五人。白張きたり。次に八乙女。次に三綱。騎馬。白丁六人從ふ。次に社人四騎。白丁廿四人したがふ。次に神馬三疋。白丁舍人六人。次に別當一人。布衣侍したがふ。次に銃五十挺。二行に列る。これを持もの羽織にくゝり袴を着す。次に弓五十挺。鎗五十本。及金の具足きたる者百人。二行に列す。次に兒十二人。次に假面五十人。騎持四人。御太刀持一騎。白丁六人從ふ。次に御旗持一騎。供人上に同じ。次に鉾八柄。白丁五十人これをもつ。次に鉾三柄。白丁十八人にてもつ。次に御輿丁五人。次御幣の神人黄狩衣きて持。次に太鼓。鉦鼓。枕木持。つぎに猿のさましたるもの三十人。三行につらなる。つぎに獅子頭六人。次に獅子太鼓。鉦鼓。次に伶倫五十人。次に御本輿。鳥帽子着六十人從ふ。　御輿の前に松平右衞門大夫正綱。秋元但馬守泰朝かちにて供奉す。次に屑衣着三十人。次に榊原內記照久轅にのりて

ふ。酒井讃岐守忠勝御裾の役す。其他みなきのふのごし。御座の右の後御宮にては左の方のおましにつかせたまへば。御座の右の後に花筵をとりて。吉良上野介義弼侍ふ。御後の庇に非伊勒頁佐直滋は御太刀。吉良若狹守義冬は御刀もちてあり。堀田加賀守正盛。松平伊豆守信綱侍ふ。御次に尾紀水三卿并松平越後守光長。松平筑前守光高伺候し。其後に非伊掃部頭直孝。松平下總守忠明。毛利甲斐守秀元。松平出羽守直政。有馬玄蕃頭豊氏。松平越中守定綱侍る。右の方には近衛前關白はじめ公卿着座あり。

御神前は左に竹内門跡良恕法親王。梨本門跡慈胤法親王。竹内新門良倫法親王着座せられ。右に妙法院門跡堯然法親王。寺蓮院門跡尊純法親王。毘沙門堂門跡公海着し。御導師大僧正天海は左方に右むきてあり。尊勝院慈性。上乘院行盛僧正。最敦院晃海。本實成院胤海。双嚴院豪伝。竹林坊重順の兩僧正。最後に大僧正天海。奥にのりて參堂あり。ときに　禁中より御使あり。御神前は大僧正天海。奥にのりて參堂あり。ときに　禁中より御使あり。

御神前にむかひて座し。一山の僧綱凡僧は右方に左にむかひてあり。殿上人は花筵の役なればみな後に座す。ときに大僧正梵唄を唱へ。伶倫樂を奏し。御法會例のごとく畢り。被物は大僧正へ二重づゝ三度。前關白立てかづけらる。其他の門跡及僧綱は。公卿みな立てかづけらる。これよりさきしばらく休幕のうちに入せたまひ。被物畢て後衆僧みな退出てふたゝび出まし。家重の御太刀。鞍馬三疋進らせ給ひ御拜あり。大僧正階を奉り。竹林坊重順御酌とりて。神酒いたゝかせ給ひ還御な

浦志摩守正次。杤木民部少輔秭綱。内田信濃守正信。御側中根壹岐守正盛。小出越中守尹貞。徒頭岡田淡路守重治。小納戸宮崎備前守時重。小姓板倉市正重大は瑞籬の下に候し。右衛門大夫正綱。但馬守泰朝は御塔の後にあり。其他供奉の諸大夫は藥師堂の前にとゞまり。布衣の侍は瑞籬の外につらなり。烏帽子着は其後にあり。事はてゝかへらせ給ひ。未刻また參らせ給ふ。こたびは近習の輩のみ供奉し。大僧正天海及竹林坊のみかしこに候せり。(日記。紀年錄。)〇十九日　御本宮にて法華曼陀羅供行はる。諸門跡あらかじめ　御宮にまいらせ。近衛前關白信尋公を始め。四三條前内大臣實條公。今出川右大將經季卿。阿野前大納言實顯卿。滋野井中納言季吉卿。勸修寺中納言經廣卿。三條宰相中將實敦卿等着座の公卿各束帶なり。殿上人は中御門右大弁宣順。柳原右少弁資行。七條中將隆修。樋口少將信康。倉橋左馬助泰吉。竹内極藏俊治。押小路新藏人以永も階上に伺候し。外記官務已下地下の官人は庭砌にあり。すべて御導師は大僧正天海。奥にのりて參堂あり。ときに　禁廷の御願經使飛鳥井三位雅章卿は阿彌陀經。(知恩院門跡良純法親王筆。)仙洞使岩倉中將具起は般若心經。(竹内門跡良恕法親王筆。)大宮使梅園中將實清は普門品。(妙法院門跡堯然法親王筆。)みな金紙につゝみ柳筥にのせしを案上にさゝげ。拜せずしてしりぞき緣上に座す。ときに御束帶にて參らせ給ふ。かくて御旅館にて。前關白はじめ公卿門跡御對面あり。關白より花びら奉らる。次に竹門。妙門。堤門。竹新門。菅門。皆花びら進らせらる。次に兩傳奏はじめ高倉。滋野井。勸修寺三黄門。清閑寺。三條。五條三宰相。次に殿上人中御門。高倉。柳原。飛鳥井。岩倉。梅園。七條。樋口。倉橋。土御門。竹内。壬小路拜謁し。次に尊勝院僧正　花びらさゝげて拜謁す。次に上乘院僧正行盛も拜し奉る。次に尾紀水三卿。松平越後守光長。松平筑前守光高はじめ。在山の諸大名及那須の徒拜謁す。これは還御の御跡にとゞまり。山中篝火のとき心用ゆべき旨命ぜらるるためなり。みなまかでゝかされて寶塔その他御宮のあたり。こゝかしこ御巡視あり。この時　御宮邊の僧坊は毀ち去て。篝火の備となすべき旨面命ありしとぞ。また前關白へ吉良上野介義弼もて樽肴進らせられ。大僧正へは吉良若狹守義冬もて樽肴に菓子賜はり。又酒井讃岐守忠勝して。大僧正へ銀二千枚。毘沙門堂門跡へは五百枚つかはさる。(紀年錄。日記。)〇廿日卯刻山をおりさせ給ひ。今市の御旅館にて朝のおもの奉り。鹿沼驛にて非上河内守正利御膳を奉る。河内守正利御前へめして御盃下され。金廿枚。時服十。羽織を給はり。長子帶刀正任に時服六。羽織そへてたまはり。家司二人へ時服二。羽織一づつ下さる。正利より重助の刀。馬代金。綿百把。帶刀正任より太刀。馬代獻ず。實入島は下野の國にて古名勝の地なりとて。立より御遊覽あり。壬生の城へやどらせ給ふ。城主三浦志摩守正次嬰し奉り。金廿枚。時服二十給はり。家司に時服二。羽織を下され。正次より一文字の刀。綿二百把獻ず。この日山にては藥師堂曼荼羅供行はれ。酒井讃岐守忠勝惣奉行として沙汰す。諸門跡參堂。前關白已下着座例の如し。(日記。紀年錄。)〇廿一日卯刻壬生城御發駕のとき塀重門外にて。三浦志摩守正次が家司戸村惣右衛門拜し奉る。古河にてやすらはせ給ひ。土非遠江守利匡御膳を獻じ。この夜岩槻城にやどらせたまふ。御祭御法會事なくはて。悦思召るゝとて。供奉の物頭以上酒を給ふ。城主岡部對馬守重次には金三十枚。時服二十。父備中守正次に時服十給はり。重次より刀。(無銘。)綿二百把。馬代金獻ず。家司にも時服羽織を下さる。この日山にては法華五千部轉讀あり。又大僧正の請により。諸門跡夜中藥師堂にのぼられ。毘沙門堂門跡公海受戒灌頂せらる。(日記。紀年錄。)〇廿二日雨により岩槻城に御滯留あり。午後晴に屬しければ。城邊御遊覽ありて慈恩寺にいらせ給ひ。壁のおもの獻ず。寺のほとりにて御乘馬あり。又近臣額打を命ぜられ。黄昏に岩槻城にかへらせ給ふ。この日山には御旅館に諸門跡。公卿。殿上人。地下官人。其外僧綱凡僧まで饗應あり。七種の飲食を供す。また　御宮にて毘沙門堂公海。三醉耶戒灌頂あり。被物等皆武家の御沙汰にて行はる。この夜また前關白はじめ。月卿雲客　御宮に參り奉賀

上家光臨城

あり。又戒瀧の時着座の公卿より賓客已下まで。御旅館にて五々三の饗行はる。(日記。紀年錄。)〇廿三日つとめて岩槻城を立せ給ひ。未刻ばかりに御臨城あり。大手まで留守の尊第大名出迎へ拜謁し。黒木書院にて土井大炊頭利勝。町奉行島田利正。留守居荻野内匠頭信成。酒井和泉守忠吉。杉浦内藏允正友謁し奉り。しばらく御物語ありて奥にいらせ給へば。日局例のとく御膳を奉り供奉の人々にも饗行ふ。尾紀水三世子及諸大名まうのぼり。御臨城を賀せらる。山にはけふ法華五千部轉讀あり。廿一日の導讀に合して一万部とぞ聞えける。布施青帷三万三千貫なり。此日諸門跡　御宮參拜せらる。晩に及て。きのふ饗にもれし公卿を饗せらる。夜中公海金剛界授法あり。(日記。紀年錄。)〇廿四日三綠山　寶蘭に土井大炊頭利勝代參す。日光山にては猿樂七番ありて。孔方一千貫纏頭せらる。公海また胎金兩部附法合行す。(日記。紀年錄。)〇廿五日黒木書院に出まし。尾紀兩卿はじめ諸大名拜謁し。御臨城を賀し奉る。次に町奉行神尾備前守元勝。朝倉仁左衛門在重をめして。こたび御神忌によて大赦行ふべき旨面命あり。各國へも其令をくだされる。又醫員岡木玄琳介球。野間三齋成大。がはるゝ宿直すべしと仰付らる。山にてはけふも猿樂ありとぞ。(日記。紀年錄。)〇廿六日本城火後新造御移徙を賀せらる。勅使。院使。　大宮使參着あれば。高家吉良若狹守義冬もて慰勞せらる。(日記。)〇廿七日松平陸奥守忠宗はじめ。參覲拜謁するもの十四人。信濃美濃飛五人も同じ。水戸黄門は日光山のかへさに。松平右京大夫賴重下館の居城へ立よられ。けふ臨謁せらる。午刻三綠山。　寶蘭へ詣給ふ。(日記。)〇廿九日御移徙の賀として。進らせられたる　勅使。　院使引見あり。　勅使は中院大納言通村卿。　院使は藪中納言嗣良卿。各太刀目錄進らせられ。　大宮使六條前宰相中將有純卿金一枚まいらせられ。また三使よりも各太刀目錄巻物を獻ず。この日柳生但馬守宗矩が別業にならせられ。日くるゝまで御叙法をこゝろみたまふ。(日記。曾我日記。)

大猷院殿御實紀卷四十四　寛永十七年五月に始り七月に終る

〇五月朔日蒲節近ければ月次の拜賀なし。近衛前關白信尋公。西三條前内大臣實條公。菊亭前右大將經季卿。阿野前大納言實顯卿日光山より參若により。高家吉良上野介義弼御使し。圓滿院門跡常尊法親王へ吉良若狹守義冬。知恩院門跡良純法親王へ大澤右京亮基重御使す。此兩門跡は御法會にあづからずといへども。拜禮の爲日光山へ參られ。けふ府につかれしなり。

又曾院番高井作左衛門友清。小姓組柘植右衛門佐正直。三丸番屋井に平川口門及同番所修理奉行命ぜらる。(日記。紀年錄。)〇二日三家を始め端午時服獻ずると例の如し。けふ酒井讃岐守忠勝が別業へならせらる。猿樂五番あり。ばてゝ小松中納言利常卿小姓等の踊を御覽にそなふ。(日記。曾我日記。)〇三日竹内門跡良恕法親王。新門良尙法親王。梶井門跡慈胤法親王。妙法院門跡堯然法親王。青蓮院門跡尊純法親王。實相院門跡覺日光山より參着によて。吉良上野介義弼御使し慰勞せられ。高倉中納言永慶卿。勸修寺中納言經廣卿。三條宰相實教卿。飛鳥井中將雅章卿も同じく參着により。日付永井監物白元御使し。滋野井中納言季吉卿。清閑寺共綱卿。五條宰相爲適卿へ使す。番頭田玄蕃頭定正御使す。けふ紀伊邸より矢屏風を獻ぜらる。(日記。紀伊記。)〇四日大雨雷電。(日記。)〇五日公卿門跡引見あり。兩傳奏拜謁はてゝ。近衛前關白太刀目錄裕十さゝげられ拜謁あり。竹門妙門もおなじくさゝげられ。知門は太刀目錄。梶門は卷物三十。太刀目錄。寄門も同じ。竹新門は三束三卷。實門は毛氈二十枚。圓門も同じ。ともに太刀目錄そへて拜謁せらる。次に公卿殿上人みな拜謁し。若王子澄存。尊勝院慈性。智積院元壽の三僧正。四本願寺の使までみな拜し奉る。先年加恩給はりし五人の殿上人も謝し奉る。けふ公卿殿上人拜謁の間は。傳奏衆御前に伺候あるべき旨仰出さる。このとゞもはてゝ。三家井諸大名はじめ。端午の佳節を賀し奉る。この時紀伊亞相の亭に。近日臨祕あるべき旨仰出さる。(日記。)〇六日京よりの急脚遲引せるにより。歩行目付二人を諸驛につかはし査撿せしむ。(日記。)〇八日公卿門跡饗宴あり。猿樂高砂。田村。熊野。舟辨慶。百万。張良。祝言。狂言三番。鍋八撥。入間川。宗論なり。饗宴の間三家の方々へは酒井讃岐守忠勝御使して。今度のことかずくめてたく思召饗行はるれば。ゆるゝ觀樂あるべし。紀伊亞相には病後ゆへ。心まかせたるべき旨仰つかはさる。また例のごとく公卿の饗席にて。相伴命ぜらるべしといへども。かれこれ配慮煩しかるべければ。別席に於て饗せらるゝ旨を仰下さる。猿樂の徒に唐織時服要脚纏頭あり。芝居の市人にも酒莫給ふ。(日記。紀伊記。)〇九日近衛前關白はじめ。公卿殿上人歸洛の辭見あり。梶新門太刀目錄緞子さゝげ住職を謝せられ。飛鳥井三位雅章卿も太刀目錄もて。去年鞠道の御判物給はりしを謝し奉る。兩傳奏は該首の參向によりて。銀二百枚。綿百把づゝ。日光山御法會により銀五百枚。綿五百把づゝ。阿野大納言實顯卿銀三百枚。時服二十。滋野井中納言季吉卿。高倉中納言永慶卿。勸修寺中納言經廣卿銀三百枚づゝ。五條宰相爲適卿。清閑寺宰相共綱卿。四三條前宰相實教卿。三位雅章卿へ銀二百枚づゝ。中御門頭弁宣順銀二百枚。其他雲客八人百枚づつ。竹内極臈俊治。押小路新蔵人以永（五十枚づゝ。兩傳奏家

司へ廿枚づゝ。二條一條の使者冠工等銀十枚づゝ。御移徙の賀し。黙を結ぶものあらば。上命を請におよばず。すみやかに誅戮すべし。又けふ暇たまはる諸大名封地の遠近を考へ。道途の差支あらん樣にはかりあひて。明年四月廿日前後に參覲すべし。且家士及國民までも。驕奢の風習を嚴禁すべき旨つたへらる。伊勢慶光院大病により。醫員高木玄濟正長をつかはさる。この日申後城外へならせらる。庇邊にて水泳を御覽ず。けふ地震す。(日記。曾我日記。)〇十三日紀伊亞相父子御對面あり。明日其邸に臨駕しますが故なり。小松中納言利常卿。就封の辭見し馬を給ひ。松平越後守光長就封により。吉平の御刀并鷹二据たまふ。高家今川刑部大輔直房は伊勢山田の御使にさゝれ。使番眞田長兵衞幸政。小姓組仁賀保內膳昌政は豐後の目付代にさゝれともに暇給ふ。きふも地震あり。(日記。)〇十四日紀伊大納言賴宣卿の邸に臨駕あり。御半袴めされ。供奉の張みな長袴を着す。まづ數寄屋へならせらる。露地にて尾紀兩亞相。水戸黃門。紀伊宰相拜謁せられ。紀亞相父子は御先へまからる。茶室にて御相伴は尾水兩卿。松平筑前守光高。毛利甲斐守秀元。加藤式部少輔明成なり。御中立の時阿部豐後守忠秋御使して。亞相賴宣卿へゆる〳〵御やすらひあるべければ。卿も病後心やすく休息せらるべき旨仰つかはさる。後座の御茶はて長の御袴に改給ひ。書院へならせらる。亞相父子いて〻拜謁せらる。亞相へ國綱の太刀。時服二百。綿子。綵珍。緞子三百卷。

下僧約令

上葉天主教

銀三千枚。宰相へ末守の太刀。時服五十。銀千枚つかはされ。三獻の御祝あり。亞相御盃賜はる時。正宗の御刀。奈良屋貞宗の御脇指ひかせらる。この御盃かへし奉るとて。後弘の刀。和泉藤四郎の脇差を獻ぜらる。又御盃を宰相に給はる時。來國光の御わきざしをひかせられ。宰相その御盃かへし奉るとて。來國次の刀を獻ぜらる。この式はて〻大廣間に渡御なりて。けふ御先にまかり伺候したる井伊掃部頭直孝。松平下總守忠明等の普第大名拜謁し奉る。このとき亞相より正恒の太刀。金三百枚。金襴三十卷。綵珍百卷。綿千把。時服二百。紅白糸三百斤。宰相より長光の太刀。銀三百枚。猩々皮十間。羅紗十間獻ぜらる。水野淡路守重長はじめ家司等。太刀目錄さゝげ拜し奉り退き。淡路守重長は亞相より奉らる。鞍馬(小室)引いて〻。塀重門にて御旣別當諏訪部源二郎定吉に引渡す。かくて猿樂はじまる。翁。三番叟。加茂。八島。源氏供養。自然居士。祝言。狂言二番。煎物。萩大名なり。この中に酒井讃岐守忠勝うけ給はりて養珠院尼に銀三百枚。北方へ銀三百枚。卷物三十。息女のかたへ卷物百。姊女の方へ三十つかはされ。家人どもの祿は淡路守重長銀三百枚。時服十。その外二人の家司へ銀百枚。時服五つ。其外十一人へ銀五十枚。時服五づゝかづけられ。猿樂纏頭の時服要脚は亞相よりの沙汰なれば。其家司等これを役す。かされて書院へならせられ。蓬萊の盃七五三の饗膳を供御す

時。亞相出て七五三召上らるゝに及ばざる旨を聞え上て直におろし。ふたゝび常の御膳を供し御宴あり。このとき亞相の母堂北方より盃臺菓子奉られ。供奉の人々にも五々三の饗あり。かくて又大廣間に出まし。猿樂御覽ありて還御まし〳〵ければ。亞相父子引つゞきまうのぼり謝せらる。また春日局は紀邸に御使し。亞相をさら心いれ饗し奉られ。御心やすく歡ばせ給ふ旨をつたへられ。かつ此御旨表より御使もて。仰つかはさるべしといへども。猶こまかに思召を傳へられんとて。局をつかはされしとぞ聞えける。(日記。紀伊記。)〇十五日月次拜賀例のごとし。森內記長繼。立花左近將監忠茂は就封の暇給はるべしといへども。訴訟の事あるをもて。重て仰出さるべき旨傳へらる。大村丹後純信證人交替あり。朝會はて〻已刻酒井讃岐守忠勝が別業にならせられ。朝の御膳奉る。劔法鞭打あり。(日記。紀伊記。曾我日記。)〇十六日高原次郎右衞門直久來邑への暇給ふ。きふ二丸へならせらる。(日記。)〇十七日紅葉山　御宮へならせ給ふ。吉良若狹守義冬御刀の役す。尾紀水三卿陪拜せらる。國持普第大名供奉參例のごとし。醫員坂以策上洛の暇給ふ。　禁中此ほど醫官數少きゆへとぞ聞えし。きふ二丸に猿樂あり。(日記。)〇十八日品川へならせられ鞭打あり。紀邸へ阿部豐後守忠秋御使し。久しく滯府の勞を慰せられ。且日光御祭大儀とゝこほりなくはて。本城構造も成功し。御

移徙あり。其上とし頃心もちひられて。臨冦とさちの褻ども歟思ふとて。就封のいとま給へば。封地にてゆる〳〵養生あり。國政なも沙汰せらるべき旨仰遣はさる。(日記。曾我日記。紀伊記。)○十九日紀伊大納言頼宣卿就封の辭見せらる。三獻の御祝ありて盃給はり。饗三据。馬三匹つかはされ。家司等皆拜謁し褻せられ。時服羽織を下さる。醫員武田道安信重も亞相かづけらるべしと命ぜられ暇たまふ。(日記。)○廿日阿部豊後守忠秋御使して。東本願寺門跡光従歸洛のいとま給ふ。門跡光従銀三百枚。綿二百把。新門跡光儼銀百枚。時服三十。家司へも時服賜ひて歸洛の御ゆるしあり。關人入貢獻物若干あり。者臣を拜し銀二百枚。時服二十くだされ。けふ地震す。(日記。)○廿一日今度本城攅造不日に成功し。御惣の旨をつたへられ。その事にあづかりたる留守居伊丹康勝入道明齋。作事奉行佐久間將監實勝金廿枚づゝ。作事奉行船越三郎四郎永景。牧野織部正成常。八木勘十郎守直。勘定頭曾根源左衛門吉次金十枚づゝ。材木奉行美濃部與藤次茂勝。中根七左衛門貞次。永井清兵衛某。小姓組松平筑後守康盛。大番小川猪右衛門忠保。天野麥右衛門重利。石奉行石野六左衛門遠吉。書院番小出直之助吉成。大番下山五郎助勝盛。有賀半左衛門種親。添奉行大河内善左衛門政寛。細竹殘物奉行吉野作右衛門信安。小姓組加藤勝兵衛正方。大番濵田傳左衛門盛森。杉田六之助直昌。糸原甚左衛門重正。勘定山中喜兵衛信時。伊丹彦右衛門勝信。銅瓦奉行木部藤左衛門直巻。鐵奉行窪田小兵衛通正。代官大谷清兵衛定利。細工頭萩原長左衛門利久。一小宮山清四郎安次。代官田邊清右衛門安直。太田又右衛門安正。山田長右衛門直弘。廣敷番小池半左衛門義勝。金あるは三枚あるは貳枚たまひ。大工頭木原木工允義久銀百枚。鈴木兵九郎銀五十枚。その外諸工人へも銀若干かづけらる。又助役したる水戸中納言頼房卿。井伊掃部頭直孝。松平隆岐守定行。松平越中守定綱。松平主殿頭忠房。青山大藏少輔幸成。本多下總守俊次。松平美作守定房。松平能登守定政。木下淡路守利當。織田左衛門佐長政家司等へも時服羽織銀をたまふ。けふ堀田加賀守正盛別業にならせ給ひ猿樂あり。(日記。曾我日記。)○廿二日尾張宰相光友朝臣。紀伊宰相光貞朝臣。水戸中將光圀朝臣日光山參拜はてゝかへり謁せらる。紀伊老水野淡路守重良はじめ五人の家司共。光貞朝臣に陪して日光山より歸りければ。各暇の賜物かづけられ拜し奉る。亞相病氣平快し褻封ありて各悦たるべし。淡路事は幼弱より亞相の傳に侍て。容體をわきまへたれば。彌おこたらず心いれて。保護の事沙汰すべき旨面命あり。眞田伊豆守信之參覲し。加藤出羽守泰興子右馬助泰義。知久内藏助直政子伊助直明初見し奉る。(日記。紀伊記。)○廿三日こたび日光山大法會とゞこほらず遂行はれ。御所勞もやゝ快わたらせ給へば。かたがたの御歡

上關人入貢

下本多大千代卒以無嗣除封

上春日局上洛

上宇治橋姫嗣

上阿媽港船入津長崎遣加々原

て騎士ども〳〵くめして拜謁し褻給り。猩樂を見せしめらる。高砂。田村。野々宮。藤榮。羅城門。邯鄲。祝言なり。(日記。)○廿四日三條山　艮廟に酒井讃岐守忠勝代參す。けふ盛天のうへにいさゝか御不例によてなり。(日記。)○廿五日日光山　勅會の御謝使を立らる。高家吉良上野介義弼このこと命ぜられ暇給ふ。(日記。)○廿六日春日局を京につかはさる。よて　主上へ綿二百把。　院へもおなじ。　大宮へ金三千兩。晒布百疋。女二宮銀二百枚。綿百把。女三宮綸紗三十巻。女五宮へ廿巻。今宮へ縮珍三十巻。　内の上臈大納言の典侍。大典侍。長橋の局。大乳人へ銀三十枚づゝ。中務二十枚。惣女房へ二百枚。院の四條の局。京極。錦小路へ二十枚づゝ。脊式部。宮内卿へ十枚づゝ。惣女房へ百枚。　大宮の攝大納言局へ三十枚。新大納言へ二十枚。右衛門佐。大弐。小督。綾小路。宣旨。左京大夫へ二十枚づゝ。惣女房へ二百枚。女二。女三。女五宮の女房へ百枚。九條政所へ三百枚。局へ十枚。高松の後室へ二百枚。綿百把。北方の上臈右衛門佐十枚つゝ。小上臈。上野五枚づゝ。惣女房へ三十枚。九條の北方へ二百枚。綿百把。左京大夫。さ五上臈十枚づゝ。小上臈。きさいつみへ五枚づゝ。惣女房へ三十枚つかはさる。また伊勢の内宮宇治橋の邊に。故事のごとく鳥居井橋姫の祠御造營あるべしと。これも春日局參宮のついでに奉書を下さる。未剋酒井讃岐守忠勝が別業にならせらる。(日記。)○廿七日小石川へならせられ。蓼園にて御膳奉る。(日記。)○廿八日下總國榎本の領主本多犬千代歳わづかに五歳にて死したり。よて所領一万八千石收公せられ。榎本の地へは使番能勢治左衛門頼重。青院番内藤四郎左衛門正次をつかはされ。在番は松平式部大輔忠次に仰付らる。この犬千代は佐渡守正信が三子大隅守忠純が孫にて。六隅守政遂が長子なりしが。この月十三日卒せしかば家既にたゆべかりしを曾祖正信が勲労を思召。正信が二子加賀の家の老安房守政重が子帶刀政朝を。寛永十九年四月朔日に至り召出され。新に采邑五千石賜り。其祭を奉ぜしめらる。(日記。家譜。　是其家に傳ふる說なり。されど其月日は傳へざれば此所に係く。)此日地震あり。(日記。)○廿九日東海寺にならせられ御鉄術あそばさる。(日記。曾我日記。)○六月朔日月並拜賀例の如し。高倉中納言永慶卿も拜謁あり。松平和泉守乗壽子源次郎乗久初見し奉る。丹羽式部少輔氏信。遠山刑部少輔秀友。松平豊前守勝義大阪加番のいとま賜ふ。遠野内匠頭長直在封により。奉書もて仰下されしとぞ。本堂伊勢守茂親。菅谷喜八郎範重甲府在番はてゝ歸り謁す。留守牛井三位成忠。施藥院治部卿宗雅上洛の暇給ひ。奈須玄竹恒昌。吉田意安宗恪はかはるゞ宿直すべしと命ぜらる。(日記。)○二日酒井讃岐守忠勝が別業にならせ給ふ。小姓の騏乗馬せしめらる。先に嚴禁ありし阿媽港船こたび長崎の港に着岸せし旨。

忠澄野々山兼綱令查検之

井上政重之加封

地奉行馬場三郎左衛門利重より注進す。よてその事査検のため大目付加々爪民部少輔忠澄。目付野々山新兵衛兼綱をつかはさる。(日記。曾我日記。)○三日堀田加賀守正盛別業になをらせらる。小姓の輩水泳御覧あり。(日記。曾我日記。)○四日酒井讃岐守忠勝。松平伊豆守信綱。阿部豊後守忠秋。阿部對馬守重次。及大目付加々爪民部少輔忠澄。目付野々山新兵衛兼綱。御前に召て阿媽港船の事面命せらる。この日地震す。(日記。)○五日安藤彦四郎直政に。紀伊亜相旅中の起居とはせられんとて御使命ぜらる。長崎の御使けふ發程す。(日記。)○六日本城廂所に徒士一隊。二丸廂所に小十人組一隊づゝ宿直して。火番をつとめ。もしみだりなるものあらば。速に老臣へ訴ふべしと命ぜられ。數寄屋坊主六人も火番命ぜらる。(日記。)○七日大僧正天海日光山より歸詣し。御札并に小品五領奉る。松平右衛門大夫正綱も同じく山より歸り。御前に召て山中の事とはしめ給ふ。未後柳生但馬守宗矩別業にならせ給ひ。劍法試みたまふ。(日記。曾我日記。)○八日酒井讃岐守忠勝別業にならせられ。けふも擊劍あり。(日記。曾我日記。)○九日御側中根壹岐守正盛御使して。井伊掃頭部直孝が所勞をとはせ給ふ。(日記。)○十日大番杉浦長左衛門正吉奥方番頭になる。(日記。)○十一日日光山及曉々にて。公卿門跡饗應以下の事つかさどりし代官勘定等卅一人。時服羽織を賜ふ。(日記。)○十二日大目付井上筑後守政重六千石加恩ありて一万石になさる。毎年長崎につかはされ。かの地の政務をあつかふによてなり。また使番栢植平右衛門正時長崎の奉行を命ぜらる。知恩院門跡眞純法親王不例により。高家吉良若狭守義冬をして問せらる。夕かた城外より牛込邊にならせ給ふ。(日記。)○十三日こたび日光山に於て。大祭　勅會ともにことよく行はれしをほがせられ。大僧正天海。毘沙門堂門跡公海。井東海寺澤庵をめして饗せられ猿樂あり。高砂。經政。熊野。善界。船辨慶。靱負。狂言二番末廣がり。粟田口なり。高倉中納言永慶卿も同じく饗せらる。(日記。)○十四日松平伊豫守忠昌の生母清涼院尼所勞のよし聞召ければ。書院番頭中根大隅守正成してとはせ給ふ。(日記。)○十五日月次出仕の諸老臣に謁し退く。宗對馬守義成朝鮮の紫石硯二面。韓筆三十對。韓墨二十笏。照布三十端。馬一匹獻ず。また仙波　御宮正遷宮により。堀田加賀守正盛井高家吉良若狭守義冬をかしこにつかはされ。御太刀を進覧せしめらる。(日記。)○十六日小姓組番頭久世大和守廣之御側の勤を命ぜらる。嘉定例のごとし。(日記。)○十七日紅葉山　御宮に詣たまふ。今川刑部大輔直房御刀の役す。尾水雨卿陪拜。其外豫參供奉例のごとし。駿河國久能山　御宮修理の事を。寄合關兵部少輔氏盛。書院番荒尾平八郎久成に命ぜられいとまたまふ。また高田の御方所勞にわたらせたまふ。よて酒井讃岐守忠勝

上令船手頭每年巡視九州四國之諸港

下異國人阿媽港船其船貨物而宿船手及醫師等授醫文令歸國

に醫員岡本啓廸院諸品。澁江長竪氏胤。清水龜庵瑞室そへてつかはさる。この日午後地震す。(日記。)○十八日吉良上野介義彌京よりかへり。吉良若狭守義冬は仙波よりかへり謁す。淺野内匠頭長直大坂加番にさゝれ暇たまふ。其他井伊靱負佐直滋はじめ。就封のいとまたまふもの十人。醫員吉田盛方院淨元上洛の暇くだされ。又松平越後守光長封地へ奉書をはせて。高田御方大病のよしなれば。速に出府して看侍あるべきむね仰つかはさる。未後城外へならせ給ふ。(日記。)○十九日番頭へかれて仰くだされしを怠り。番帳にしるすべきを兩度もらせしとて殿責せらる。申後酒井讃岐守忠勝が別業にならせらる。(日記。)○廿一日加賀の老本多安房守政重國に赴くにより辭見し奉る。松平右衛門大夫正綱日光山より歸詣す。御みづから山中の事を問せらる。大番逸見左源太義持組頭になる。歩行頭能勢市十郎賴永宇治より歸り詣す。三家並に諸大名より。端午の時服を奉る。此日水戸中納言賴房卿の邸へならせられ。猿樂三番。風流五番あり。尾張大納言義直卿も陪遊せらる。(日記。曾我日記。)○廿二日船手頭の輩二人づゝ。每年九州四國の浦々巡視すべしと命ぜられ。まづ辰年は船手頭小濱久太郎嘉隆。間宮虎之助長澄。巳年は石川八左衛門政次。向井右衛門直正。午年は小濱彌十郎安隆。小笠原安藝信盛と配當して。かはるがはるまいるべしとなり。(日記。)○廿三日地震。(日記。)○廿四日紅葉山　御宮に詣たまふ。(日記。)○廿五日酒井讃岐守忠勝。松平伊豆守信綱。阿部豊後守忠秋。阿部對馬守重次。及大目付加々爪民部少輔忠澄。目付野々山新兵衛兼綱。御前に召て阿媽港船の事面命せらる。この日地震す。(日記。)○廿六日安藤彦四郎直政に。紀伊亜相旅中の起居とはせられんとて御使命ぜらる。長崎の御使けふ發程す。(日記。)○廿七日本城廂所に徒士一隊。二丸廂所に小十人組一隊づゝ宿直して。火番をつとめ。もしみだりなるものあらば。速に老臣へ訴ふべしと命ぜられ。數寄屋坊主六人も火番命ぜらる。(日記。)○廿八日大僧正天海日光山より歸詣し。御札并に小品五領奉る。松平右衛門大夫正綱も同じく山より歸り。御前に召て山中の事とはしめ給ふ。未後柳生但馬守宗矩別業にならせ給ひ。劍法試みたまふ。(日記。曾我日記。)○廿九日酒井讃岐守忠勝別業にならせられ。けふも擊劍あり。(日記。曾我日記。)○卅日御側中根壹岐守正盛御使して。井伊掃頭部直孝が所勞をとはせ給ふ。(日記。)○卅一日日光山及曉々にて。公卿門跡饗應以下の事つかさどりし代官勘定等卅一人。時服羽織を賜ふ。(日記。)○卅二日大目付井上筑後守政重六千石加恩ありて一万石になさる。毎年長崎につかはされ。かの地の政務をあつかふによてなり。また使番栢植平右衛門正時長崎の奉行を命ぜらる。知恩院門跡眞純法親王不例により。高家吉良若狭守義冬をして問せらる。夕かた城外より牛込邊にならせ給ふ。(日記。)○卅三日こたび日光山に於て。大祭　勅會ともにことよく行はれしをほがせられ。大僧正天海。毘沙門堂門跡公海。井東海寺澤庵をめして饗せられ猿樂あり。高砂。經政。熊野。善界。船辨慶。靱負。狂言二番末廣がり。粟田口なり。高倉中納言永慶卿も同じく饗せらる。(日記。)○卅四日松平伊豫守忠昌の生母清涼院尼所勞のよし聞召ければ。書院番頭中根大隅守正成してとはせ給ふ。(日記。)○十五日月次出仕の諸老臣に謁し退く。宗對馬守義成朝鮮の紫石硯二面。韓筆三十對。韓墨二十笏。照布三十端。馬一匹獻ず。また仙波　御宮正遷宮により。堀田加賀守正盛井高家吉良若狭守義冬をかしこにつかはされ。御太刀を進覧せしめらる。(日記。)○十六日小姓組番頭久世大和守廣之御側の勤を命ぜらる。嘉定例のごとし。(日記。)○十七日紅葉山　御宮に詣たまふ。今川刑部大輔直房御刀の役す。尾水雨卿陪拜。其外豫參供奉例のごとし。駿河國久能山　御宮修理の事を。寄合關兵部少輔氏盛。書院番荒尾平八郎久成に命ぜられいとまたまふ。また高田の御方所勞にわたらせたまふ。よて酒井讃岐守忠勝

葉山　雜廟に詣させ給ふ。尾水雨卿陪拜。其他豫參供奉例の如し。かくらせ給ひて後增上寺雪念一來一巻を獻し。御移徙を賀し奉る。雪念及伴僧等齋飯を下さる。(日記。)○廿五日廊生にならせられ。柳生但馬守宗矩が別業に立よらせ給ふ。(日記。曾我日記。)○廿六日立花宗茂入道立齋病臥により。堀三右衛門直景御使してとはせらる。千代姫君御乳母の父織田金左衛門順高采邑五百石給ふ。(日記。)○廿七日去年阿媽港船通商を禁ぜらるゝ所。今年また長崎の湊へ着船せしよし聞へければ。大日付加々爪民部少輔忠澄。日付野々山新兵衛兼綱をかの地につかはして。これを査検せしめられしに。全く國禁を違犯して着岸したるにより。この月十六日乘船の蠻人七十四人のうち。六十一人をかしこにて梟首せしめ。船井荷物はことごとく焼捨しめ。圖者井船子共十三人一命をたすけ。別船にのせてかしこへ追返し。この子細をかの國人に告しらしむる旨。民部少輔忠澄。新兵衛兼綱より注進す。ばた阿媽港にわたされし諭文にいふ。それ政を施し民を安ずるをもて治國の本とす。文を脩め遠きを懐くるは人主の德なり。本朝慶長の始に及で。　神祖天下を統御ましまし。文武兼備ほり寛厳相濟ひ。四夷入覲來歎せずといふものなしとて。市舶司を肥前長崎港に立られしより以來。通商互市のもの往來絡繹たり。然るに蠢爾たる阿媽港の徒。常に天主教を尊み。其邪法を本朝に廣めんとする非とし

下依阿媽港人來皆授鑑文于唐商

なかされたり。あるひは唐舶を雇ひ耶蘇の族を載せて。伴天連と號する者をしてこゝにいたらしむ。こは邪教をもて我民民をたばかり。ひそかに本邦を窺はんとするの志いちじるし。このゆへに　神祖怒らせ給ひ。邪徒をとらへてことごとく斬殺し。嚴に禁令を下され。其法を信ずるものは。畢三族に及ぼしめられき。これより後三朝の間。尤このやからを憎み。制禁ますます甚し。然るに阿媽港は猶事を通商によせ。かの伴天連を唐船の底に匿しのせ來り。微服して各國に潛行せしめ。此邪術をもて民俗を誣惑し。はた蠻舶にもひそかにその徒を隱し養ふ。かるがゆへに年々繫獄あるに大辟焚死せらるゝもの多し。然るに丁丑の冬かの邪徒肥前島原に蜂起し。しばしば邑里に入て。家屋を燒人民を害す。茲に急にやぶれざるの地に據り。其根を固くして枝葉をはびこらしめんとす。戊寅の春にいたり。凶賊やうやく亡滅し。斬戮せらるゝもの殆四万ばかりなり。しかれども我騎兵歩卒又退が爲に命を墜すもの少からず。蠻賊の頑尤重く。憎むべきの甚しきなり。よて去年使節を崎港に遣して。汝が國人向來本朝に來るべからず。もし再いたらば悉くその船中の人を誅して。子遺あるべからざる旨を聽されき。しかるに今度その殿旨をそむき。和平を請ものと僞りて。かされて此地に來る。されど官事監き事なければ。前令を變ずべからず。よて民部少輔忠澄等鈞命を奉ず其佗をしらず。敢てこれをゆるす事なし。乃その船をやぶり其徒をとらへ。曾長若干を梟首し市にとなへ。其餘少長となく皆誅戮す。但し船子および醫はそのつみ輕し。且汝が本國をして此事をしらしめむがために死罪をゆるし。別に小舟を造り放ちかへさしむ。凡阿媽港近隣の曾長等これを聞ものゝよろしく本朝の德を仰ぎ。武威の嚴なるを察すべきなり。又大目付井上筑後守政重をして。唐商に諭せしめられしは。近年阿媽港通商に託して。長崎に來舶し。ひそかに天主邪教を弘通して。民俗を迷はさんとす。しかるに國家聰明英武。すみやかにこれを察せられ制禁を嚴にし。もしかの邪教を信奉するもの發顯すれば。罪三族に及ぼしめらる。然るにあまかはの船中に。伴天連をかくしのせ來り。我民俗を誣惑する事絕ず。これがために去歲も更に嚴令を下され。阿媽港の來舶を禁絕せられ。もし再び至らば其船をこぼち。悉くその人を誅せらるべき旨諭せられき。しかるに蠻人我國禁をおかし。和儀を請ひ來るものと僞りてまた來りたり。よてかされて使節を崎港につかはされ。其徒七十人をとらへて皆梟首し。其船及器財を悉く打やぶり。これを海底にしづむ。これ汝等が近く目擊する所なり。今より後いよ〳〵我禁を守り。小船往來して通商互市盛なる時は。彼此の利たるべし。今阿媽港より來るもの既に其罪に服し。耶蘇の禁嚴厲にして來る事をゆるされず。しかれども蠻人猶邪教を弘通せんが爲に。妖僧邪師。あるは無髮となり。有髮となり。あるは唐服を着し。あるは我國の服飾をいつはり。ひそかに汝の舶中にかくれのりて來着し。民俗を惑はすもはかるべからず。しかりといへども猫眼兀鼻赤髮鵞舌。いかでかくるべけんや。且我國人彼國に至り。妖法を習ひし者あるべきも又しるべからず。彼國人等之をもて僞て我國人とし。あるは明人と名のりてのせ來るものあるべし。凡かくのごとくなれば。船中の老少悉く誅戮し。其舟を燒沈むべし。國の大禁を問て後にいるは。もと汝が國風にして。汝等必遵行すべき所なれば。愼んで我邦の嚴制を守り。蠻人にたばからるゝ事あるべからず。蠻夷重貼もて汝等に請託。ひそかに邪徒を船底にかくし來り。我海岸に放置き。僞りて其由り來る所をしらざるものとなすよし聞ゆ。もしはたしてさあらんには。すみやかに奉行所へうたへ出ば。彼が重貼よりも。若干增加して褒賜せらるべし。もし隱蔽して告ざる時は。必國法にまかせ火刑に處せらるべしとなり。(日記。靈教類典。)〇廿八日月次出仕の眾老臣に謁し退く。尾水兩邸へ御使もて雲雀をつかはさる。松平伊豫守忠昌。松平筑前守光高。松平陸奥守忠宗。松平薩摩守光久にも同じ。(日記。)〇廿九日名ぐ。(日記。)〇七日星夕拜賀例の如し。高倉中納言永慶卿踏歌の祓例のごとし。上杉彈正大弼定勝。松平相摸守光仲はじめ。御使もて雲雀下さるゝ大名八人。(日記。)◎この月十三日松前志摩守公廣が所領戸勝より龜田にいたるまで。道波のために打やぶられ。民家悉く漂沒す。士民井に蝦夷等五百餘人溺死す。同日內浦嶽もえ出て。灰煙虛空にみち。十四十五兩日の間すべて闇夜のごとしとぞ。(紀年錄。)〇七月朔日拜賀例のごとし。小姓組番頭安藤伊賀守重元紀伊國御使命ぜられ。使番堀三右衞門直景加賀國の御使にさゝれいとまたまふ。紀伊國へは巢鷹三つかはさる。松平能登守定政。丹羽勘助氏定。參覲の拜謁す。長崎奉行柘植平右衞門正時赴任により條約をわたされ官料二千俵給はり。かつ與力五騎。同心三十人屬せらるゝ旨面命を蒙る。また松平薩摩守光久證人交替あり。水戸黃門所勞により。小姓組番頭加々爪甲斐守直澄もてとはせられ。立花宗茂入道立齋へは。御使もて雲雀を給ふ。この日地震す。(日記。)〇三日高田の藥園にならせ給ひ。供奉の步行組をして。騰蹏をからしめらる。(日記。曾我日記。)〇四日田安口より赤坂邊までならせらる。(日記。)〇五日井伊掃部頭直孝。酒井讃岐守忠勝。堀田加賀守正盛。阿部豐後守忠秋。阿部對馬守重次。青山大藏少輔幸成。內藤伊賀守忠重。小堀遠江守政一なめされ饗膳をたまひ。また內園に於て宴を開かせらる。又水邸より新鮭を獻ぜらる。(日記。)〇六日三家はじめ例の家々より鯖料をさゝぐ。(日記。)〇七日星夕拜賀例の如し。高倉中納言永慶卿踏洛の暇くだされ。銀五十枚。時服そへてたまふ。この日本多能登守忠義はじめ參覲四人。奥平美作守忠昌は日光山御參により